

SB3035 (図版261) 時期; 切り合いから古代6期 組成比; 0:53:47:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数); A+B=0個 < D=1個

SB3036 (図版262) 時期; 古代6期 組成比; 0:68:32:0 糸切須恵器杯A内径平均6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数); A+B=1個 = D=1個

SB4008 (図版262)

時期; 古代7期後半 組成比; 0:24:73:0 糸切須恵器杯A内径平均; 5.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数); A+B=0個 < D=1個 1は墨書である。2は須恵器杯B VIで朱墨硯であり、質はBタイプと珍しく、SB4030出土の小片と接合関係にある。9は黑色土器Bの瓶類である。12は尾北産の灰釉陶器椀Aで篠岡4号窯式(S4-2)である。

SB4009 (図版262~263 PL56)

時期; 古代7期前半 組成比; 0:48:52:0 糸切須恵器杯A内径平均; 5.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数); A+B=11個 > D=1個 古代7期の標準資料である。軟質須恵器杯Aの1は灯明具1で内面全体がすすけ灯芯状のすすが内面口縁部付近に多数つく。3は灯明具2で内外面にすすが付着しているが油状に流れるようなつき方に特徴がある。23は黑色土器B椀で緑釉陶器の高台を模倣している。5には体部に穿孔がある。灰釉陶器の25は黒笹90号窯式(K90-2)である。黑色土器の比率が5割をこえるところに須恵器杯Aの質が激的にA・Bタイプに変わっていくことが知られる良好な資料である。

SB4010 時期; 古代6期 組成比; 0:100:0:0 遺物少。

SB4011 (図版263 PL57)

時期; 古代6期 組成比; 0:85:15:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数); A+B=0個 < D=10個 2・8は須恵器杯Aで墨書がみられる。

SB4012 (図版263)

時期; 古代8期前半 組成比; 0:39:59:1 5の土師器甕Cは頸部の上段にやや強めの調整が入り、下段は屈曲しないが「コ」の字の頸の形態に分類される。

SB4013 (図版263) 時期; 古代7期前後; 組成比; 0:0:100:0 遺物少。

SB4014 時期; 古代6期 組成比; 0:100:0:0 遺物少。

SB4015 時期; 切り合いから古代6期を含めそれより古い。組成比; 0:100:0:0 遺物少。

SB4016 時期; 切り合いから古代6期~8期 組成比; 0:100:0:0 遺物少。

SB4017 時期; 古代6期 組成比; 0:85:15:0 遺物少。

SB4018 時期; 古代6期~7期 組成比; 0:85:15:0 遺物少。

SB4019 (図版264) 時期; 古代6期 組成比; 0:89:11:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数); A+B=0個 < D=2個

SB4020 (図版264)

時期; 古代6期 組成比; 0:63:37:0 5には墨書がある。

SB4022 時期; 切り合いから古代6期も含めそれより古い。組成比; 0:100:0:0 遺物少。

SB4023 時期; 古代5期後半~8期 組成比; 0:14:86:0 遺物少。

SB4024 (図版264) 時期; 切り合いから古代6期 組成比; 0:38:62:0

SB4026 時期; 切り合いから6期も含めそれより古い。組成比; 0:43:57:0 遺物少。

SB4027 時期; 古代5期後半~8期 組成比; 0:83:17:0 遺物少。

SB4028 (図版264) 時期; 古代7期 組成比; 0:26:72:0 遺物少。

SB4030 (図版264 PL62)

時期；古代8期前半 組成比；0：19：73：2 糸切須恵器杯A内径平均；5.8cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=2個 > D=0個 6は灯明具1、5も灯明具1だが口縁部より流れるようにすずが付着している。9は赤色顔料？が微量だが内面口縁部付近に付着している。7は刻書である。12は灰白色の胎土で、明らかに在地のものとは異なる。10の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式（後半）、他に図化できないが小片で「黒笹14号 or 90号窯式」の灰釉陶器がある。

SB4031（図版264～265）

時期；古代6期 組成比；0：71：29：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=7個 7の須恵器杯Aの底部には糸切り痕が2重に重なっており珍しい。8の底部外面には貫通しない穴が穿たれている。

SB4032（図版265）

時期；古代7期 組成比；0：32：60：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.8cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=2個 > D=0個 5の灰釉陶器は内面のみ施釉で、重ね焼き痕があり、脚は三日月高台を呈し猿投の胎土をもつ。黒笹90号窯式（K90-1）である。遺物量は多くない遺構ではあるが、食膳具における黒色土器の重量比が6割の時にK90が出現していることを知る参考資料の一つとなる。

SB4033（図版265）

時期；古代6期 組成比；0：73：27：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.0cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=3個 2のへら切りの須恵器杯Aは掘方出土のものとも接合でき、さらにこの遺構は6期の住居を切っており混入と考える。

SB4035（図版265） 時期；古代6期 組成比；0：38：62：0 須恵器杯Aの質（推定個体数）；A+B=1個 < D=2個

SB4203（図版265）

時期；古代6期 組成比；14：67：18：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質（実測個体）；A+B=0個 < D=5個 掲載できなかったが掘方から須恵器杯A or 杯Bの灯明具1が出土している。

SB4204（図版265～266 PL62）

時期；古代5期～6期 組成比；7：67：26：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=7個 10の黒色土器Aは、須恵器杯BIVを模倣したもので内面は見込部も体部も横方向に磨いている。1の須恵器杯蓋Bは、天井部に糸切りの跡が残っている。11には刻書、7にはカマジルシが見られる。13は土師器甕Iで初現期のものである。破片資料からの推定復元のため、多少形が異なる可能性もある。

SB4205（図版266）

時期；古代1期後半 組成比；33：66：1：0 須恵器杯Aは全てへら切りであり、多量の須恵器杯蓋Bの中に1点口径の大きい須恵器杯蓋A（9）が入る。黒色土器A杯AIIの小片があるが混入である。6・13にはカマジルシがある。5は転用硯である。1は漆が付着している。

SB4206（図版266） 時期；古代8期前半 組成比；0：36：59：1 覆土に洪水砂をもつ。5の灰釉陶器は「光ヶ丘1号窯式」である。

SB4207（図版266）

時期；古代6期 組成比；0：66：34：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 < D=5個 古めの遺物が多少混ざっているが6期の住居を切っており、それより古くはならない。5にはへらガキが見られる。形態的には古い。

SB4208 (図版267)

時期；古代5～6期 組成比；4：80：15：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 4は古い様相を持った黒色土器A杯A Iである。この遺構の下にもう2軒、より古い住居が存在し、そこからの混入と考えられる。8は灯明具1。5・6には太めの棒状工具で沈線が引かれている。7は外来系の甕であろう。

SB4209 (図版267) 時期；古代6期 組成比；4：86：10：0

SB4210 時期；古代2期初頭～8期 遺物少。

SB4211 (図版267 PL56)

時期；古代6期 組成比；0：77：23：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 真下に位置する古代3期のSB4228をこわして作っているため、3～4期の遺物の混入が多く見られる。SB4228のものと思われる遺物はSB4228の図のほうへ提示した。

SB4212 時期；切り合いから古代3期も含めそれより古い。 組成比；0：100：0：0 遺物少。

SB4213 (図版267)

時期；古代6期 組成比；16：74：10：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個

SB4214 時期；古代1期後半 組成比；31：66：3：0 遺物少で図化できるほどの個体はないが、須恵器杯蓋Aの小片が2点、杯蓋Bの小片が3点みられる。へら切りの須恵器杯Aの小片も多い。

SB4215 (図版267) 時期；古代8期前半 覆土に洪水砂を持つ。土師器のようにも須恵器のようにも見える杯Aor碗の小片がある。遺物少。

SB4216 時期；不明 組成比；0：100：0：0 遺物少。

SB4217 (図版267)

時期；古代1期前半 組成比；82：17：0：0 古代1期前半の良好な資料である。非ロクロ土師器の杯はC類を主体とし(1・2・3)、口径の小さい退化形のA類(4)、L類(6)、さらに非常に弱く細い沈線の入ったE4類の退化形(5)からなる。須恵器も杯G(11)、杯A(10)がみられる。ともに初現期のものである。8は口縁部に2つ穿孔が見られる。1にはへらガキが見られる。

SB4218 (図版267)

時期；古代5期 組成比；0：71：29：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 図化できないがへら切りの須恵器杯Aの小片が5片あり、4期の可能性もあるが須恵器杯Aの形態、黒色土器A杯Aの形、黒色土器の比率等を考えると5期とみるのが妥当であろう。

SB4219 時期；切り合いから古代5期～6期も含めそれより古い。遺物少。

SB4220 時期；切り合いから古代4期も含めそれより古い。遺物少。

SB4221 (図版268) 時期；古代6期 組成比；4：67：29：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) A+B=0個 < D=1個 3は須恵器杯Aで内面に朱が付着しており朱墨硯である。

SB4222 (図版268) 時期；古代1期～4期 組成比；69：31：0：0

SB4223 (図版268) 時期；古代6期 組成比；6：77：17：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個

SB4224 (図版268)

時期；古代4期 組成比；0：100：0：0 糸切須恵器杯A内径平均；8.3cm 須恵器杯Aの質(実

測个体数) ; $A+B=0$ 個 < $D=3$ 個 須恵器杯 A は糸切りが2個体、へら切りが1個体である。

SB4225 時期; 切り合いから古代5期~6期も含めそれより古い。遺物少。

SB4226 (図版268) 時期; 古代5期~6期。

SB4227 時期; 古代6期 組成比; 72:28:0:0 遺物少。

SB4228 (図版268)

時期; 古代3期 組成比; 0:100:0:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 8.6cm 須恵器杯 A の質 (実測个体数) ; $A+B=0$ 個 < $D=2$ 個 上面はすべてを古代6期のSB4211に切られるため遺物は少ない。SB4211にはこの住居に属するであろうと思われる古手の遺物が混入として多く混じっている。参考資料として図化した。

SB4230 時期; 古代2期初頭~8期 遺物少。

SB4504 (図版268 PL45)

時期; 古代7期前半 組成比; 0:38:62:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.2cm 須恵器杯 A の質 (実測个体数) ; $A+B=4$ 個 > $D=1$ 個 古代7期前半の標準資料である。3は灯明具2、15は灯明具1、6は墨書である。黒色土器の比率が6割を越える段階で、須恵器の質 A・B タイプが D タイプを圧倒している良好な例である。

SB4505 (図版269)

a、bの2軒に分離できるが遺物として分離できたのはSB4505aの1~3の遺物である。a、bともにほぼ同時期のものと考えられるので一括して述べる。 時期; 古代7期前半 組成比; 0:43:55:0 須恵器杯 A の質 (推定个体数) $A+B=9$ 個 < $D=41$ 個 推定個体でみると須恵器杯 A の質は D タイプが多いが、SB4511(6期)を切るため、そこからの混ざり込みの可能性が高い。掘方は圧倒的に黒色土器の比率が高く、基本的に覆土も黒色土器の比率が高い土器組成を示すと考えられる。1は無施釉で黒笹90号窯式(K90-1)である。参考程度の扱いたが、K90出土時の黒色土器の組成比を知る例となる。

SB4506 (図版269) 時期; 古代8期前半 組成比; 0:30:49:16 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.2cm 須恵器杯 A の質 (実測个体数) ; $A+B=1$ 個 > $D=0$ 個

SB4507 時期; 古代6期~7期 組成比; 0:81:19:0 遺物少。

SB4508 (図版269) 時期; 古代6期~8期前半 組成比; 28:59:13:0 遺物少だが混ざりが多い。

SB4509 (図版269)

時期; 古代5期 組成比; 14:81:5:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 7.2cm 須恵器杯 A の質 (実測个体数) ; $A+B=0$ 個 < $D=2$ 個 図化しなかったがへら切りの須恵器杯 A の小片もあり、8世紀代の遺物が多く見られるが、2期のSB4521の多くを切っており、そこからの混入の可能性が考えられる。

SB4510 (図版269) 時期; 古代2期 組成比; 42:58:0:0

SB4511 (図版269)

時期; 古代6期 組成比; 3:49:48:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.4cm 須恵器杯 A の質 (実測个体数) ; $A+B=1$ 個 < $D=3$ 個 4、8には墨書がある。10の黒色土器 A 杯 A IIにはへらガキが見られるが、外面にもミガキが施されている。

SB4512 (図版269) 時期; 古代6期 組成比; 12:52:36:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 7.0cm 須恵器杯 A の質 (推定个体数+実測个体数) ; $A+B=0$ 個 < $D=5$ 個

SB4513 (図版269) 時期; 古代6期 組成比; 0:78:22:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.2cm 須恵器杯 A の質 (推定个体数+実測个体数) ; $A+B=0$ 個 < $D=4$ 個

SB4514 (図版269) 時期; 古代7期前半 組成比; 0:49:51:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.0cm

須恵器杯 A の質 (実測個体数) ; $A+B=1$ 個 $>$ $D=0$ 個

SB4515 時期; 古代5期後半~8期 組成比; 0:75:0:0 遺物少。

SB4516 (図版270 PL56)

時期; 切り合いから古代7期後半 組成比; 0:35:65:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 4.6cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数) ; $A+B=1$ 個 $>$ $D=0$ 個 1は灯明具2で内外にすすが付着しているが、その中に灯芯状にやや濃くすすが付着している部分がある。

SB4518 (図版270)

時期; 切り合いから古代7期 組成比; 0:80:20:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 5.5cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数) $A+B=3$ 個 $>$ $D=1$ 個 須恵器の比率が高いが、須恵器杯 A の小片は質が D タイプのものが多く、付近の5~6期の遺構から混ざりこんだ可能性が高い。1の須恵器杯 A の口縁部は3カ所つまんでゆがめてあり灰釉陶器の輪花を模倣したようにみえる。4にはカマジルシ、2には刻書がみられる。

SB4519 (図版270) 『弥生・古墳編』関係の遺構であるが、混入で畿内系の暗文杯が出土している(1)。

SB4521 (図版270) 時期; 古代2期 組成比; 0:100:0:0

SB4522 時期; 切り合いから古代6期も含めそれより古い。遺物少。

SB4802 (図版270) 時期; 古代2期 組成比; 26:74:0:0 須恵器杯 A は推定個体も含め7片あるが全てへら切りである。

SB4803 (図版270)

時期; 古代6~7期前半 組成比; 0:41:59:0 実測できないが須恵器杯 A の質は D タイプが多い。1は灯明具1、2の土師器甕 C の口縁部は「く」の字である。

SB4805 (図版270)

時期; 古代6期 組成比; 0:62:38:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.4cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数) ; $A+B=0$ 個 $<$ $D=3$ 個 5は須恵器杯蓋を模倣した黒色土器 A 蓋である。6には墨書がみられる。掲載できなかったが黒色土器 A 杯 A II の灯明具1がある。

SB4806 (図版271) 時期; 古代5期後半~8期 組成比; 0:89:11:0 糸切須恵器杯 A 内径平均; 6.2cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数) ; $A+B=0$ 個 $<$ $D=1$ 個

SB4807 時期; 切り合いから古代2期も含めそれより新しい。遺物少。

SB4808 (図版271) 時期; 切り合いから古代6期 組成比; 0:35:65:0 1は朱墨硯、2は黒色土器 B の杯 A で珍しい器種である。

SB4809 (図版271 PL62)

時期; 古代7期後半 組成比; 0:23:70:0 4には刻画がみられる。5の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式(後半)である。図化できないが緑釉陶器の小片が2片ある。

SB4810 時期; 切り合いから古代6期も含めそれより古い。遺物少。

SB4811 (図版271)

時期; 古代2期 組成比; 10:90:0:0 須恵器杯 A の質 (実測個体数) ; $A+B=0$ 個 $<$ $D=2$ 個 カマジルシのある4と土師器小甕 D の3は混入の可能性が高い。

SB4812 (図版271) 時期; 古代6期 組成比; 0:91:9:0 遺物少。

SB4813 時期; 古代1~2期 組成比; 87:13:0:0

SB4816 (図版271) 時期; 古代0~1期 組成比; 97:3:0:0

SB4817 (図版271) 時期; 古代2期前後 組成比; 15:85:0:0

SB4818 (図版271)

時期；古代6期 組成比；17：74：9：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) A+B=0個 < D=2個 図化できたものは内径値が大きめだが、図化できなかったものの中に内径の小さな須恵器の質Dタイプの杯Aが多くみられ、6期の住居を切るため6期の遺構である。

SB4819 (図版271)

時期；古代6期 組成比；0：41：59：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 灯明具1が2個みられる(4・6)。

SB4821 (図版271) 時期；古代6期 組成比；0：59：41：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB4824 (図版271) 時期；古代6期 組成比；0：87：13：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB4825 (図版271)

時期；古代6期 組成比；4：58：38：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) A+B=0個 < D=3個 1はSB4827と接合関係にある。4は墨書である。ただし、出土場所はこの住居のやや外側になるがこの遺構のものとして掲載した。

SB4826 (図版271) 時期；切り合いから古代6期も含めそれより古い。組成比；0：0：100：0

SB4827 (図版271) 時期；切り合いから古代6期も含めそれより古い。組成比；17：55：28：0

SB4829 (図版271) 時期；切り合いから古代0～1期も含めそれより古い。組成比；100：0：0：0

SB5003 (図版271) 時期；古代7期～8期 組成比；25：52：23：0 1の黒色土器A杯AIIの内面にはミガキがない。2は墨書である。

SB5004 (図版272)

時期；古代1期後半 SB5014(5世紀)の遺物が混じっており5世紀の遺物をぬいたものをSB5004としてある。5は転用硯であり、内外面に墨痕がみられる。また、カマジルシもある。4には内面見込部にヘラガキがありカマジルシとして分類した。

SB5005 (図版272)

時期；古代7期前半 組成比；0：59：41：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=3個 > D=1個 8は刻書、7は墨書で[真]の可能性ある。3は灯明具1、9にはカマジルシがあり掘方出土である。

SB5006 (図版272)

時期；古代6期 組成比；12：43：45：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 4は黒色土器A椀で、緑釉陶器の高台を模倣している。

SB5008 (図版272) 時期；古代6期 組成比；0：91：9：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB5012 (図版272 PL58)

時期；古代7期前半 組成比；11：29：54：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=4個 1の須恵器杯Aの質はDタイプとしたがBタイプに近い中間形である。[真]の墨書が3点みられる(7・8・10)。6は朱墨硯、14にはカマジルシがみられる。9の灰釉陶器は内外面自然釉がかかっており黒笹14号窯式(K14-2)である。

SB5013 (図版273 巻頭図版3)

時期；古代6期 組成比；3：85：12：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個

体数) ; A+B=0個 < D=5個 図化できなかったが京都洛北系でo類の緑釉陶器の椀 or 皿の小片が1片ある。

SB5017 (図版273) 時期; 古代5期 組成比; 28:67:5:0 1にはカマジルシがある。

SB5018 (図版273)

時期; 古代6期 組成比; 24:62:14:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=1個 2は須恵器甕Eである。

SB5019 (図版273) 時期; 古墳8期新相~古代2期

SB5020 (図版273) 時期; 切り合いから古代7期 1は墨書である。

SB5021 (図版273)

時期; 古代8期前半 組成比; 0:36:63:1 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=2個 < D=4個 13は土師器の杯A or 椀で床から出土している。土師器の食膳具はこの1片である。墨書が5点ある(4・6・10・12・16)。2は灯明具1である。15の灰釉陶器は狭縁の段皿で黒笹90号窯式(K90-2)、他に光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器も出土している。14の黒色土器A椀には図化していないが、外面にタール状のすずがついており、高台の割れた部分にも付着している。

SB5022 (図版274)

時期; 古代2期 古代2期と6期の遺物群に明瞭に分かれる。かまどの芯材には甕が2個使われており(10、もう1つは図化していないが土師器甕Bの胴下半) これと古手の一群の遺物(1・2)によりこの住居の年代を確定した。しかし、何らかの事情で混入した遺物群も貴重な資料が多かったため参考までに図化した(3・4・5・6・7・8)。6は墨書、3・4は刻書、8は黒色土器Aの高杯で珍しい器種である。5の灰釉陶器には内外面に自然釉がかかっており黒笹14号窯式(K14-2)である。

SB5023 (図版274)

時期; 古代6期 組成比; 11:85:4:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=3個 4は掘方出土で転用硯である。

SB5025 時期; 古代1期 組成比; 84:16:0:0 遺物少。

SB5026 (図版274) 時期; 古代6期 組成比; 0:61:39:0 2はカマジルシである。

SB5027 (図版274) 時期; 古代1期~5期後半

SB5028 (図版274) 時期; 古代4期 組成比; 10:79:10:0

SB5029 (図版274) 時期; 古代2期又は6期 組成比; 14:86:0:0

SB5030 (図版274) 時期; 古代2期 組成比; 33:67:0:0

SB5031 (図版275)

時期; 古代2期 組成比; 50:50:0:0 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=2個 須恵器杯Aの底部調整は、すべてへら切りである。7はカマジルシ、11は橙色の粘土が付着している。杯部を中心に全体的に付着しており、割れ口へも付着が見られる。20にはへらガキがみられる。掘方出土である。13は混入である。

SB5032 時期; 古墳7期~古代4期 組成比; 56:23:21:0 遺物少。

SB5033 (図版275)

時期; 古代5期 組成比; 0:100:0:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=2個 遺物数は多くないが、5期の資料が少ないため古代5期の標準資料の1つとして使っている。

SB5036 (図版276)

時期；切り合いから古代5期前後 組成比；31：43：26：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.0cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個 3のカマジルシはSB5012（7期）の混入の可能性が高い。

SB5037（図版276）

時期；古代5期 組成比；14：65：21：0 糸切須恵器杯A内径平均；8.6cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個 5、6の黒色土器A杯AII・杯AIの内面見込み部のミガキは、横方向に磨かれており通常のものとは違う。

SB5038（図版276）

時期；古代6期 組成比；0：40：60：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個 2は須恵器杯Gで混入である。

SB5040（図版276）

時期；古代5～6期 組成比；0：77：23：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個

SB5043 時期；古代5期後半～8期 遺物少。

SB5044（図版276）

時期；古代6期 組成比；30：31：39：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.6cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=4個 1は非クロ土師器杯C類でへらがきがみられる。混入であろう。

SB5045 時期；古代2期初頭～5期後半 遺物少。

SB5046（図版276）

時期；古代7期後半～8期前半 図化できなかったが狭縁の段皿の小片がみられる。遺物少。

SB5048（図版276） 時期；古代1期後半～2期 組成比；0：100：0：0

SB5049 時期；切り合いから古墳7期～古代2期 遺物少。

SB5052 時期；古代2期初頭～5期後半 遺物少。

SB5053（図版276～277）

時期；古代7期前半 組成比；（P1を含めて集計）0：45：55：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.6cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=5個 > D=0個 古代7期前半の標準資料である黒色土器の比が5割台の時に、須恵器の質A・Bタイプが圧倒的な量をしめることがわかる良好な資料である。1は灯明具2、6はすす付着土器であり、小さな割れ口を伴い、片面側に口縁部から流れるようなすすのつき方をしている。3は墨書、4にはへらがきがみられる。

SB5055（図版277 PL56）

時期；掘方；古代2期 覆土；古代6～7期（床面遺物の小片で判断）掘方には小片だが古代2期の遺物が多めにみられる。覆土の年代は、図化できなかったが床面から黒色土器A杯AIIの小片が出土しておりそれで決定した。

SB5056（図版277）

時期；古代7期前半 組成比；0：66：34：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=4個 > D=1個 3は墨書、5は墨痕の残る転用硯である。

SB5057（図版277） 時期；切り合いから古代6期 組成比；0：17：83：0 2は墨書、3はへらがきである。

SB5058 時期；切り合いから古代5期 遺物少。

SB5059（図版277 PL58）

時期；切り合いから古代5期 組成比；0：43：56：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.7cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個 3は墨書である。

SB5060（図版277） 時期；切り合いから古代1期 9世紀の遺物も含まれるが、1期と思われる遺物を抜きだして実測した。

SB5061（図版277） 時期；古代2期 組成比；24：76：0：0

SB5063（図版277）

時期；切り合いと少ない遺物から古代6期 組成比；3：88：9：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.0cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個

SB5064（図版278 PL45）

時期；古代7期前半 組成比；3：49：47：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=2個 > D=1個 5は[本]の墨書があるが、体部外面に対に一文字ずつそれぞれ正位と倒位で書かれており方向が異なっている。4は墨書。11は朱墨書であるが、掘方出土である。[赤]の可能性はある。1は内外面にすすが付着しており、特徴的な付き方をしている。

SB5065 時期；切り合いから古代2期初頭～6期 遺物少。

SB5068（図版278）

時期；古代6期 組成比；6：56：38：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=3個 4は灯明具1である。

SB5072（図版278）

時期；古代6期 組成比；0：47：52：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個 1層からは図化できないが小片で「黒笹90号窯式」の灰釉陶器杯Aも出土している。4は刻書で掘方出土である。

SB5073（図版278）

時期；古代6期 組成比；10：51：39：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個 墨書が3点（2・4・5）と刻書が1点（6）みられる。3は大型の須恵器高杯で、松本市下神遺跡等に類例がある。

SB5074 時期；切り合いと少ない遺物から古代6期 組成比；49：36：15：0 遺物少。

SB5079（図版278～279） 時期；古代2期 組成比；4：96：0：0 2にはカマジルシがある。

SB5080（図版279） 時期；古代2期 組成比；54：46：0：0 須恵器杯Aは全てヘラ切りである。

SB5083（図版279） 時期；古代6期 組成比；0：87：13：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個

SB5084 時期；古代6～7期 組成比；0：60：40：0 遺物少。

SB5085（図版279） 時期；古代7期後半 組成比；7：5：88：0 2は墨書である。

SB5090（図版279 PL56）

時期；古代1期 組成比；75：25：0：0 組成比で非クロコ土師器が高い点、さらに須恵器杯H（3）が見られる点は1期でも古めの要素であり、4の須恵器杯蓋Bは新しめの要素である。

SB5092（図版279～280 PL45・46・56）

時期；古代0期～1期前半前葉 組成比；99：1：0：0 この時期の良好な資料である。破片資料の中に須恵器杯Aがあるが、覆土1層出土であり混ざり込んだものと考えた。1・3・6は床、2・7・8はカマド付近、4はP1、5は掘方出土である。

SB5093（図版280）

時期；古代1期 組成比；72：28：0：0 3の須恵器杯蓋Aのかえりは下にしっかりと飛び出し、キリリとしたつくりである。つまみの形態も古い。2は非ロクロ土師器杯E4類で、内面に弱々しい沈線が痕跡程度に残っている。

SB5095 (図版280 PL58)

時期；古代6期 組成比；0：67：33：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 4は須恵器皿Aである。6は墨書、5はへらがきである。

SB5096 (図版280)

時期；古代1期前半 組成比；81：19：0：0 須恵器杯蓋Aはないが、須恵器杯Gが多い。いずれも口径は小さいものばかりである。1期前半の良好な資料である。

SB5101 (図版280) 時期；切り合いから古墳7期～古代2期 非ロクロ土師器の杯類にへらがきが見られる(1・2・3)。5世紀の遺物の混入の可能性もある。

SB5104 (図版280)

時期；古代4期 組成比；33：64：3：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=5個 遺物数は多くないが4期の良好な資料が少ないため、古代4期の標準資料の1つとして使っている。須恵器杯Aの推定個体まで含めた底部調整の内訳は、糸切り6個、静止糸切り1個(4)、へら切り7個である。

SB5106 (図版280) 時期；古代6期 組成比；0：74：26：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=2個

SB5109 (図版281)

時期；古代1期後半 組成比；61：39：0：0 須恵器杯蓋Aはないが、古代1期のSB5090に切られており、須恵器杯蓋Bが複数出土している。また、非ロクロ土師器杯L類(3)が出土し、食膳具に定める非ロクロ土師器の比率も高いため1期後半とした。

SB5114 (図版281)

時期；古代5～6期 組成比；0：78：22：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=2個 図化できなかったが、カマド付近から小片で3片の土師器甕Cが出土しているが、口縁部の形態は「コ」が2個体、「く」が1個体である。図化したものは、全てカマド付近からの出土である。

SB5119 (図版281)

時期；古代2期 2期と6～7期の遺物に分かれる。2軒の6期の住居に切られており、5の墨書はそこからの混入であろう。墨書以外の5期後半～8期の遺物を除いて図化した。

SB5120 (図版281) 時期；切り合いから古代6期 組成比；8：56：36：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB5123 (図版281) 時期；古代2期 組成比；17：72：11：0

SB5125 時期；切り合いと少ない遺物から古代1期～4期 組成比；0：100：0：0

SB5126 時期；古代6期 組成比；56：33：11：0 遺物少。

SB5127 時期；切り合いから古代1～2期 遺物少。

SB5128 時期；古代2～4期 遺物少。 組成比；0：100：0：0

SB5129 (図版281)

時期；古代5期 組成比；11：68：16：4 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 調査時の手違いによりSB5159の遺物も混ざりこんでしまってい

る。4は杯部内面がつるつるしており転用碗である。

SB5133 (図版282)

時期；古代2期 組成比；23：76：0：0 推定個体も含め須恵器杯Aの底部調整は全てへら切りである。産地不明でX類の緑釉陶器？の小片がトレンチから出土しているが、6期以降の混入である。

SB5134 (図版282 PL55)

時期；古代1期後半 組成比；38：62：0：0 須恵器杯蓋Aの出土はないが、非ロクロ土師器の比率がやや高めで、非ロクロ土師器杯L類や口径の小さい須恵器杯蓋Hが出土しているため1期後半とした。

SB5140 (図版282)

時期；古代1期後半～2期 組成比；0：100：0：0 図化できないが須恵器杯蓋Bの小片が2片、杯蓋Aの小片が1片みられる。2は短頸壺で外面に鉄釉がかかっており後出するものであろう。

SB5141 (図版282) 時期；古代7～8期 糸切須恵器杯A内径平均；4.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 > D=0個

SB5146 時期；切り合いから古代1期 遺物少。 組成比；53：47：0：0

SB5150 時期；切り合いから古代2期 遺物少。 組成比；67：33：0：0

SB5151 (図版282) 時期；古代2期 組成比；27：73：0：0

SB5153 時期；古墳6期以降 組成比；0：78：22：0 遺物少。

SB5155 時期；古代2期初頭～5期後半 組成比；47；53：0：0 遺物少。

SB5163 (図版282)

時期；古代4期～5期 組成比；23：45：32：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 3にはカマジルシがある。図化できなかったが、須恵器杯Aのへら切りの小片が1片ある。

SB5165 時期；古代2期 遺物少だが推定個体の須恵器杯Aの3片は全てへら切りである。

SB5171 (図版282)

時期；古代6期 組成比；0：67：33：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=6個 糸切須恵器杯Aの内径平均が高いが、近くに5期の住居が多くそこからの混入と考えたい。床面の遺物で見た時の糸切須恵器杯Aの内径値は推定個体も含めて小さく、6期の範囲内に入る。

SB5173 (図版282)

時期；古代6期 組成比；10：55：34：0 糸切須恵器杯A内径平均(推定個体で計測)；6.1cm 須恵器杯Aの質(推定個体数)；A+B=3個 < D=8個 図化できなかったが小片で「黒笹14号窯式」の灰釉陶器皿がある。3は土師器盤Aである。

SB5175 (図版283) 時期；古代6期 組成比；0：45：55：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 1は灯明具1、3は墨書である。

SB5176 (図版283)

時期；切り合いから古代1期 組成比；36：50：14：0 須恵器杯蓋Bなど5期後半～8期の遺物もみられるが、切り合いから矛盾するため何らかの遺構が検出できずに混ざったものと考えたい。

SB5177 (図版283) 時期；古代1期 組成比；90：10：0：0 須恵器杯蓋Bはみられず、杯蓋Aのみがみられ食膳具にしめる非ロクロ土師期の比率が多い。

SB5202 (図版283) 時期；古代6～7期 糸切須恵器杯A内径平均；5.6cm 須恵器杯Aの質(実測個

体数) ; A+B= 0 個 < D= 1 個

SB5211 (図版283) 時期; 古代0~1期前半前葉 1は立ち上がりの短い須恵器杯Hののった高杯である。

SB6002 (図版283) 時期; 古代7期後半 組成比; 0:16:83:0

SB6005 (図版283) 時期; 古代7期後半 組成比; 0:26:74:0 2には墨書がある。1は混入である。

SB6007 (図版283)

時期; 古代7期後半 組成比; 0:33:55:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B= 0 個 < D= 1 個 3の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式(後半)である。

SB6013 (図版284) 時期; 古代7期後半 組成比; 0:17:83:0 糸切須恵器杯A内径平均; 5.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B= 1 個 > D= 0 個

SB6014 (図版284) 時期; 古代7期後半 組成比; 0:7:93:0 2の黒色土器A杯AIIの内面には朱が付着しており朱墨硯である。

SB6015 時期; 古代6~7期 組成比; 18:31:51:0 遺物少。

SB6017 時期; 切り合いから古代7期後半~8期前半 遺物少。組成比; 17:83:0:0

SB6018 (図版284) 時期; 古代8期前半 組成比; 0:17:78:1 3は黒色土器A盤BIIである。

SB6021 (図版284) 時期; 古代6期 組成比; 22:78:0:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B= 0 個 < D= 1 個

SB6022 (図版284)

時期; 古代5期後半~8期 組成比; 72:5:23:0 いろいろな時期の遺物が混入している。P1から出土した1で時期決定をした。2は畿内系暗文杯で非ロクロによる成形で、掘方からの出土である。

SB6023 時期; 古代6~7期 組成比; 0:19:81:0 遺物少。

SB6025 (図版284)

時期; 古代1期前半 組成比; 97:3:0:0 非ロクロ土師器の比率がとても高い。図化できなかったが、須恵器杯Gの小片が2片ある。須恵器杯蓋Bの小片があるが、極小さい小片1片のため付近からの混入と考えた。

SB6026 (図版284) 時期; 切り合いから古代7期 組成比; (へら切りの須恵器杯Aを除いたもの) 0:31:69:0 遺物少。

SB6027 (図版284~285 PL46)

時期; 古代0~1期前半前葉 組成比; 99:1:0:0 2の高杯の杯部には、橙色の粘土状の付着物がある。3は須恵器杯Hだが、口径が小さい割に立ち上がり部が長くしっかりしている。当該期でも古相、場合によると古墳8期新相(7世紀初頭)の可能性もある。

SB6028 時期; 切り合いから古代7期前半 組成比; 0:50:50:0 遺物少。

SB6029 (図版285) 時期; 切り合いから古代1期~7期 組成比; 86:14:0:0 遺物少。

SB6030 時期; 切り合いから古代1期~7期 遺物少。 組成比; 100:0:0:0

SB6033 (図版285)

時期; 古代6期 組成比; 4:32:64:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B= 0 個 < D= 2 個 4には墨書がみられる。

SB6035 (図版285)

時期; 古代6期 組成比; 0:75:25:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.8cm 須恵器杯Aの質(実測

個体数) ; A+B=1個 < D=2個

SB6036 (図版285)

時期; 古代4期 組成比; 28:57:15:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=2個 推定個体まで含めた須恵器杯Aの底部調整の内訳はへら切り2個、糸切り4個、糸切り後周辺へら削り1個、静止糸切り1個である。

SB6038 (図版285~286)

時期; 古代5期 組成比; 0:56:44:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=5個 古代5期の標準資料である。14・18・19の土師器甕Cの口縁部上端には弱い調整が入っている。基本的には口縁は「く」の字だが「コ」へのさきがけとなろう。

SB6039 (図版286) 時期; 古墳8期新相~古代2期 組成比; 63:32:0:0

SB6040 (図版286) 時期; 古代2期 組成比; 65:35:0:0

SB6043 (図版286) 時期; 古代5~6期 組成比; 83:17:0:0 遺物少だが推定個体の糸切須恵器杯Aの内径値(7.1cm)と質(Dタイプ)から時期を判断した。

SB6044 (図版287) 時期; 古代7期後半 組成比; 17:0:83:0 1は体部穿孔土器で焼成後体部外面から1孔が穿たれている。

SB6046 (図版287) 時期; 古代6期 組成比; 0:100:0:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=1個

SB6049 (図版287) 時期; 古代0~1期 組成比; 100:0:0:0 2の非ロクロ土師器杯E4類の内面の沈線は、かなり形骸化している。

SB6052 (図版287) 時期; 古墳8期新相~古代2期初頭 組成比; 85:15:0:0

SB6053 (図版287 PL46)

時期; 古代2期 組成比; (5期後半~8期の遺物を除いたもの) 23:77:0:0 5期後半~8期の遺物の混入も見られる(4・6)。

SB6054 時期; 古代1期前半 組成比; 71:23:6:0 図化できない小片だが口径10cm以下の須恵器杯H、杯G、非ロクロ土師器杯L類が見られる。

SB6056 時期; 切り合いから古墳8期新相~古代2期初頭以前。組成比; 50:33:17:0

SB6059 (図版287~288) 時期; 古代7期後半 組成比; 0:11:89:0

SB6060 (図版288) 時期; 古墳8期新相~古代2期初頭 組成比; 94:3:3:0

SB6062 (図版288)

時期; 古代8期前半 組成比; 0:19:79:1 糸切須恵器杯A内径平均; 6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=1個 > D=0個 提示できなかったが黒色土器A杯AIIの内面にミガキがないものが1点ある。

SB6063 (図版288) 時期; 古代6期 組成比; 59:41:0:0 糸切須恵器杯A内径平均; 7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=1個 = D=1個

SB6064 (図版288) 時期; 古代2期 組成比; 54:46:0:0 3はカマジルシである。

SB6067 (図版288)

時期; 切り合いから古代2期前後 遺物は小片で5期後半~8期のものが多く見られるが、切り合いから2期前後に限定できる。1の須恵器杯Aは墨書で形態から6期前後のものである。

SB6069 (図版288~289) 時期; 古代1期後半 組成比; (明らかな混入を除外し集計) 77:23:0:0 3はへらガキ。

SB6071 (図版289) 時期；古代2～4期 組成比；23：77：0：0 糸切須恵器杯A内径平均7.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個

SB6074 (図版289 PL56)

時期；古代7期 組成比；0：34：63：0 糸切須恵器杯A内径平均6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 = D=1個 5・6には刻書がみられる。4・7は灯明具1である。3は墨書、8にはへらがキがある。

SB6076 (図版289) 時期；古代6期 組成比；21：62：17：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB6077 (図版289～290) 時期；古代7期後半 組成比；1：15：84：0 1は胎土も悪く、黒斑をもつ軟質須恵器であるが、底部はへら切りである。黒色土器A杯Aor碗の6・7は墨書である。

SB6081 (図版290) 時期；古代5期前後 組成比；10：40：50：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB6082 時期；切り合いと少ない遺物から古代7期～8期 組成比；50：47：0：0 遺物少。

SB6085 (図版290 巻頭図版3)

時期；古代8期前半 組成比；0：17：78：3 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 覆土に洪水砂をもつ。1は転用碗で内外面に墨がついている。断面にも墨の付いている部分がみられ、割れた状態で使用されていた可能性もある。この場合墨は初め内面で使い、それが断面を通して外面に回ったといえよう。7は灯明具1。猿投系でa-1類の緑釉陶器の段皿が2片みられる(8・10)。同一個体の可能性が高い。1片は掘方出土である。9はへらがキだがこれも掘方出土である。

SB6086 (図版290)

時期；古代5期 組成比；0：74：26：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=4個 古代5期の標準資料である。1は灯明具1、11は須恵器礎で刻画がみられる。SB6087にも同様のものがある。

SB6087 (図版290)

時期；古代5期 組成比；0：92：8：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=2個 土師器甕Cは、図化できないものもすべて口縁は「く」の字である。2は須恵器礎で刻画がみられる。SB6086にも同様のものがある。

SB6088 (図版291)

時期；古代4期 組成比；0：32：68：0 糸切須恵器杯A内径平均；8.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 図化できないものも含めると須恵器杯Aはへら切り1点、糸切り2点になる。黒色土器の比率が高いのは完形品のためである。

SB6089 時期；切り合いから古代4期 組成比；63：22：15：0 遺物少。

SB6091 (図版291) 時期；切り合いから古代6期 組成比；12：88：0：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=4個

SB6092 (図版291) 時期；古代6期 組成比；0：77：23：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

SB6094 (図版291) 時期；古代0～1期 組成比；72：28：0：0 須恵器杯Aが小片であるものの、1期のSB6117のほかまわりの全ての住居に切られる。

SB6095 (図版291) 時期；古代5期後半～8期 組成比；0：33：67：0

SB6097 (図版291) 時期；古代7～8期前半 組成比；0：50：46：3 図化できない土師器杯Aの小片が一片あるが、須恵器の可能性もある。

SB6099 (図版291 PL47)

時期；古代4期 組成比；18：62：19：0 糸切須恵器杯A内径平均；8.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=4個 遺物数は多くないが、4期の良好な資料が少ないため古代4期の標準資料の1つとして使っている。へら切りの須恵器杯Aは1点しかないが、糸切のものは内径が十分に大きい。かなり切られた住居であるためへら切り須恵器杯Aがなくなった可能性もある。4は内面にミガキがあり、黒色土器A杯AIIに分類される。独特な形をしているが初現期の形態の1つであろうか。

SB6100 (図版291) 時期；古代3期 組成比；22：66：12：0 図化できないが、小片で須恵器杯Aのへら切りが2点、糸切りが1点ある。1はへらがきである。

SB6101 (図版291)

時期；古代5期 組成比；8：73：19：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 5の黒色土器A杯AIIの内面にはミガキがない。混入の可能性もある。

SB6103 時期；古代7期 組成比；0：33：67：0 遺物少。

SB6104 (図版292)

時期；古代5期 組成比；16：70：14：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.0cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=6個 古代5期の標準資料である。いろいろな種類の甕がみられる。10・11は土師器甕C、8は土師器小型甕C、12は土師器甕I、9は土師器小型甕Dである。14は土師器甕Fだが混入であろう。

SB6105 (図版292)

時期；古代4期 組成比；19：66：15：0 須恵器杯Aの質(実測個体数) A+B=0個 < D=2個 遺物の混ざりが激しく図化したものの中には5期後半～8期の遺物の可能性のあるものもある。

SB6106 (PL47) 時期；切り合いから古墳8期新相～古代5期後半 組成比；16：45：39：0

SB6107 (図版292) 時期；古代6期 組成比；5：72：23：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個

SB6108 時期；古代6期 組成比；0：83：17：0 遺物少。

SB6110 時期；切り合いから古墳8期新相～古代2期 遺物少。

SB6111 (図版292)

時期；古代0期～1期前半前葉 組成比；94：6：0：0 非ロクロ土師器が主体であり、歴史時代的須恵器は伴わない。須恵器杯蓋H(5)と須恵器杯H(6)は口縁残存率1/8の状態からの推定復元であり、分量に多少の誤差が生じる可能性がある。

SB6112 (図版293) 時期；古代1～2期 組成比；54：46：0：0 1は非ロクロ土師器の椀？又は高杯？である。

SB6115 時期；切り合いから古墳8期～古代2期 組成比；60：40：0：0 遺物少。

SB6116 (図版293 PL47・48)

時期；古代5期 組成比；0：96：4：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=5個 古代5期の標準資料である。推定個体の中に1点だけ須恵器杯Aのへら切りの小片がある。

SB6117 (図版293) 時期；古代1期 組成比；62：31：6：0

SB6118 (図版293)

時期；古代7期 組成比；0：32：68：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.5cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=2個 > D=0個 1は灯明具1で、内面に付着したすすの部分に灯芯状に残る濃いすすの部分の確認される。6は灯明具2で、小さな割れ口が3つあり、その1つから外面に流れるようなタール状のこびりつきがみられる。5には墨書がみられる。図化できなかったが緑釉陶器が出土している。

SB6119 (図版294) 時期；古代0～1期 組成比；99：1：0：0 歴史時代的須恵器は1片も見られない。

SB6120 (図版294 巻頭図版3) 時期；古代6期 組成比；0：61：37：0 図化できなかったが京都洛北系でo類の緑釉陶器碗の小片が1片ある。

SB6121 時期；切り合いから古代5期後半～7期 組成比；66：0：34：0 遺物少。

SB6124 時期；切り合いから古代5期も含めそれより古い 遺物少。

SB6125 時期；切り合いから古代3期～4期 組成比；7：93：0：0 遺物少。

SB6126 時期；切り合いから古代1期 組成比；81：3：16：0 遺物少。

SB6127 (図版294) 時期；古代4期～5期 組成比；51：49：0：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.5cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個

SB6128 (図版294) 時期；古代1期 組成比；69：31：0：0

SB6132 時期；切り合いと少ない遺物から古代4期～5期 組成比；0：95：0：5 遺物少。

SB6133 (図版294) 時期；切り合いから古代5期 組成比；36：53：11：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.6cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個

SB7002 (図版294) 時期；古代1期～4期 0：100：0：0

(2) 畦畔 (SC) 出土土器**A. 更埴条里遺跡**

SC3 (図版294) 2は古墳前期。1は須恵器杯Aで質はDタイプ、内径は推定だが6.0cm前後。古代6～7期に多くみられるものである。

SC203 (図版294) 1は須恵器杯Hで法量から古代0～1期のものである。

(3) 溝・自然流路 (SD) 出土土器**A. 更埴条里遺跡**

SD1027 (図版297) 1は土師器杯Aで口径は11.9cm。検出状況も加味すると古代8期前半のものである。

SD1032 (図版297) 2の須恵器杯Aは質がCタイプであり、更に内面底径が6cm台であること、3～5は、非ロクロで、畿内系の土器であること等すべて古代6期の特徴を持つ。

SD1036 (図版297)

破片資料が多い。図化できなかった破片資料も含めて検討すると、黒色土器Aは11片で80g、須恵器杯Aが多く蓋はわずかだが12片で70g。質ではDタイプが11片、Cタイプが1片、明確な軟質須恵器がみられないことは6期的である。また、須恵器：黒色土器の重量比は47：53で6期末～7期前半的。全体的にみると6～7期前半の様相である。ただし、2の黒色土器A杯Aor碗は内面にミガキがなく、こういったタイプは8期によくみられるものである。

B. 屋代遺跡群

SD62 (図版298 PL62 巻頭図版3)

時期；8期前半 4は京都洛北系でo類の緑釉陶器である。5は田口昭二氏に見ていただいたところ、光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器で、見込部に魚の絵が焼成前にほられている。生産地でも見たことがないとのことであった。

SD7024=SD8020 組成比；19：81：0：0

SD7024 (図版306) SD8020と同一の溝である。

時期；古代3期～8期 組成比；19：81：0：0 下条堰の前身にあたる。層位的には第2水田対応層で6期末～7期前半に相当し、SD7030(第3水田対応層、2期)は層位的に下にある。開口期間の長い溝で、2期初頭～5期前半のものが非常に多い。5期後半～8期のものはわずかである。最下層には褐鉄鉱が沈着しており、掘りすぎは考えられないため、古代2期以前の遺物の混入は少ないと考える。2期初頭～5期前半の遺物の中には内面底径の大きな糸切の須恵器杯Aも多く、ヘラ切りの杯Aもそれより多いことから古代3期を中心とした参考資料となる。7は須恵器甕の頸部破片だが、内・外面に墨が塗られている。3の須恵器杯Aには腰部に手持ヘラケズリがみられる。

SD7025=SD8027

SD7025 (図版306 PL58) SD8027と同一で第2水田対応の自然流路である。

時期；古代6期末～7期前半 組成比；0：56：44：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=3個 < D=4個 『屋代遺跡群出土木簡』では「9世紀中頃」として報告してある。組成比や須恵器杯Aの質をみるかぎり、7期にごく近い6期という位置付けになる。6期末～7期前半としておく。より詳しくいうと9世紀第2四半期といえる。1は朱墨硯、内面全体に朱が付着するが特に見込部への付着が多い。墨書土器が多くみられる(9・11・12・13・14・15)。

SD8027 (図版306～307 PL48・53・60) SD7025と同一の遺構である。

掘りすぎで古代2期の自然流路のものも混じっている。時期的には最下層(4層)まで5期後半～8期の遺物が入っており、Dタイプの須恵器杯Aが多い。遺物群の中に明らかに内面底径の広い古手の糸切りの須恵器杯Aがある(35)。静止糸切りの須恵器杯Aも見られる。須恵器杯B(28・33・40)、甲斐型杯(26)も4期的である。4期の遺構は検出されていないが、遺物量の多さから見て明らかに何らかの遺構が存在した可能性が高い。20は尾北産の灰釉陶器で篠岡4号窯式(S4-2)である。

SD7030 (図版308～310 PL48・49・56)

時期；古代2期(第3水田対応層) 組成比；(各層一括した比)44：56：0：0 組成比(個体数比)12：88：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=24個 第3水田の洪水砂にパックされており第3水田対応層に属することは明確である。古代2期の標準資料である。須恵器杯Aはすべてヘラ切りで糸切りは1点もない。たちあがり部が外わんするものしないもの両者がみられる。須恵器杯BはB I、B II、B IV、B VIの4法量に分化している。カマジルシが7点みられる(7・23・30・36・55・57・72)。24は転用硯で内外面に墨痕がある。内面はつるつるしており、外面はつるつるでない。32も転用硯である。盤部内面に墨痕があり、つるつるしている。16も転用硯である。内面がつるつるしており墨痕が残っている。1には荒い暗文がみられる。75は土師器甕の小片で内面に刻書がみられる。51はヘラ切りの杯Aであるが黒斑がみられ軟質須恵器に分類される。内径は7.3cmである。19は須恵器杯蓋Aであるがかえりが非常にキリリとしており混入と考えた。50・57には墨書がみられる。57はカマジルシとセットとなっている。

SD7031 (図版310)

時期；古代2期 第3水田対応の遺構である。 組成比；0：100：0：0 2は転用硯で内面見込部

がつるつるしており墨痕がみられる。

SD7032=SD8028 3～5層 組成比；15：85：0：0 古代2期の標準資料である。

SD7032 (図版310～311) SD8028 3～5層と同一の自然流路である。

時期；古代2期(第3水田対応層) 組成比；3：97：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=5個 9は須恵器高杯であり転用硯である。杯内面がややつるつるしておりわずかに墨痕が残る。

SD8028 (図版311～312 PL56)

時期；1～2層はSD7028と同一、3～5層はSD7032と同一の自然流路である。土器のみで検討すると、1層は古代5期後半～8期、2層は6期前後、3～5層は2期である。3～5層は古代2期の標準資料となるため、その層位のもののみ記述する。3～5層の組成比は20：80：0：0である。カマジルシが多い(10・12・22・27・30・32・34・36)。10・39は転用硯である。もう1点図化できない小片だが、須恵器杯Bの転用硯がみられる。内面がつるつるしており墨痕がある。28にはへらがきがみられる。提示できなかったがへら切りの須恵器杯Aの小片で黒斑があるものがみられる。

SD7035(上層～下層) (図版312～313 PL49・50)

時期；古代1期末～2期初頭 組成比；53：47：0：0 第4水田対応の遺構である。遺物のありかたから「最下層」と「上層～下層」の2層に分けて考えている。「上層～下層」では「層名なし」でとりあげたものも含めている。須恵器杯蓋Aが2点出土しているが(図化したものは9のみ)、多量の「層名なし」で取り上げたものも含めているため、この層に属するか、あるいは最下層に属するか微妙である。須恵器杯蓋Aが、まさに消滅しようとする最後の段階に当たると考えられる。また、須恵器杯蓋Bは、破片資料も含めて30点出土しており、圧倒的な量を誇る。16層から「戊戌年(698年)」の紀年銘木簡が出土している。須恵器杯BはB I、B II、B IV、B Vの4法量に分化している。31は転用硯で盤内面がつるつるしており全面に墨痕が残っている。7は非クロ土師器杯C類で底部外面にへらがきがある。35もへらがきと分類したが、土師器甕Fの胴部外面にミガキによって文字が書かれている。43は口縁内面に墨で塗彩している。42は須恵器の甌であろう。

SD7035(最下層) (図版314 PL49・50)

時期；古代1期後半(1期末) 組成比；52：48：0：0 第4水田対応の遺構である。土器集中出土遺物は最下層に属する。須恵器杯蓋Aが5点みられ(図化したものは4点)、古代1期後半の土器組成を示す。カマジルシが3点(47・66・67)、へらがきが2点みられる(70・71)。

SD7036=SD8038 組成比；59：41：0：0

SD7036 (図版314～315 PL51) SD8038と同一の自然流路である。

時期；古代1期末～2期初頭 組成比；(各層一括した比) 33：67：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=4個 第4水田対応層の中でも下層に位置する。須恵器杯蓋Aは出土していないが層位的所見から1期末から存続という時間的位置づけが与えられる。19は三耳壺である。肩部に2個、体部下半に1個の耳を持つ。11はカマジルシ、4はへらがきである。18は土師器甕で、底部内面に沈線が引かれている。

SD8038 (図版315～316) SD7036と同一の自然流路である。組成比(各層を一括した比)；38：62：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=5個 カマジルシが3点みられる(25・34・35)。

SD7038 (図版316)

時期；古代1期末～2期初頭 組成比；(各層を一括した比) 40：60：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=7個 第4水田対応の遺構である。4は内面が黒色塗彩されている。15・

17・18はカマジルシである。10・18は共につるつるした面は持っていないものの、内外面に墨のようなものが付着している。転用硯であろうか。

SD7039=SD8040 組成比；27：73：0：0 第4水田対応層の良好な資料が出土している。

SD8040 (図版316～317) SD7039と同一の自然流路である。

時期；古代2期(2期初頭) 組成比；27：73：0：0 「七年」の記年銘木簡が出土しており、和銅七年(714年)に想定されている。同じ第4水田のSD7036を切っており、第4水田対応層の中でも新しい位置をしめるため2期初頭という位置付けになる。流速が早い流路で、下を巻き込んで流れたような荒い砂や大きな木が入っており混入を多めに含む可能性があり、更に須恵器杯蓋Aを組成に持たないSD7036を切っているという理由で23は混入と考えたい。5は須恵器杯Aで内面に黒色塗彩がみられる。18は転用硯であり杯部内面がつるつるしている。17は墨書である。

SD7042 (図版317～318)

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 73：27：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 SD7062の覆土にあたり、発掘所見から第5水田対応層の遺構である。18は混入であるが、古代1期後半の良好な資料が出土している。

SD7044=SD7047・SX7034 組成比；41：59：0：0 第4水田対応層の良好な資料が出土している。

SD7047 (図版319) SD7044とつながり、SX7034は溝内の施設である。

時期；古代1期後半(1期末) 組成比；(各層を一括した比) 41：59：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=16個 層位的には第4水田対応層でも古い方に位置付く。須恵器杯蓋Aが出土している(7)。9・42は外面に黒色塗彩がみられる。31の底部外面には、直径1cm程の朱?が付着している。30・34はカマジルシ、25はヘラガキである。26は須恵器杯Aでつるつるした面はないものの、内外に墨痕が見られる。転用硯であろうか。

SD7045=SD8032 4～16層

SD7045 (図版320 PL51)

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 60：40：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=5個 遺物は層名なし、上層、下層として取り上げられている。古代1期後半の良好な資料である。1は非ロクロ土師器杯C類で「甲」?のヘラガキが見られる。須恵器杯Aでは色の違いが顕著に見られる。4は青色、8は橙色、10は白色、19は灰色を呈する。

SD8032 (図版320～322)

SD7045と同一の溝である。中央ベルトセクションにかかるため細かく分層してある。1～3層は古代5期後半～8期。4～16層は第4水田対応(モミガラ層は15・16層に対応する。1期末～2期初頭)。17層以下は第5水田対応で1期後半である。第4水田対応層の組成比は77：23：0：0で、第5水田対応層の組成比は79：21：0：0である。P1には古墳8期新相～古代2期初頭の瓶類(2、平瓶)が出土している。また、P4出土の甕(6)も古墳8期新相～古代2期初頭以降のものである^(註7)。カマジルシが2点(26・32)、ヘラガキ(22)、30層以下出土の1は転用硯である。内面はつるつるしていないが墨痕がついている。45層出土の大甕(1)はP3・P4・P6とも接合関係にある。

SD7045=SD8032 17～44層 (図版321) 古代1期後半の資料が出土している。

各遺構の遺物の説明は前項参照。

SD7045=SD8032 45層・SX7036 (図版321～322) 古代1期前半の資料が出土している。

各遺構の遺物の説明は前項参照。

SD7046=SD8044 3層 組成比(SD8044 3～4層でのとりあげ遺物も含め集計)；89：11：0：0

SD7046 (図版322~323 PL51) SD8044 3層と同一の自然流路である。

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 89：11：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；
A+B=0個 < D=3個 第5水田対応層(新段階)の遺構である。古代1期後半の良好な資料である。
SD7048とSD7046の境では遺物が交錯している可能性が高い。4は口縁部に穿孔がみられる。12にはヘラ
ガキがある。39は転用硯である。

SD8044 (図版323~324 PL53) 1~2層はSD7048、SD7057と同一であり、3層はSD7046と同一
である。4~5層はSD7065、SD7067、SD8049と同一である。層名なしでとりあげられているものは、
便宜的に1~2層に対応する項のところに図を掲載してある。

時期；4~5層は古代1期前半 組成比；(4層・5層・下層を一括した比) 87：13：0：0 1~3層は古代
1期、4~5層は1期前半に属し、1期前半の良好な資料群が多い。図版328関係では43は朱墨硯、50に
は暗文がある。55の須恵器杯Bは初現期のもの。57の平瓶はSD8044の下から出土している。直接この遺
構のものとはいえないが参考資料となる。

SD7048=SD7057=SD8044 1~2層 組成比；71：29：0：0 古代1期後半の標準資料である。

SD7048 (図版323 PL51・56) SD7057、SD8044 1~2層と同一の遺構である。

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 73：27：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；
A+B=0個 < D=4個 第5水田対応層の遺構である。須恵器杯蓋Aと杯蓋Bが出土しており、1
期後半の良好な資料群である。13はカマジルシである。

SD8044 1~2層 (PL53)

説明はSD7046=SD8044 3層の項参照。

SD7049 (図版324 PL51)

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 73：27：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；
A+B=0個 < D=3個 第5水田対応層(新段階)に属し、須恵器杯蓋Bを伴うことから1期後半で
ある。層名のないものと最下層で遺物は取り上げられている。1期後半の良好な資料群である。1は非ロ
クロ土師器杯A類だが作りもよく大きいため混入の可能性も高い。須恵器杯Aの形態は扁平なもの(3)、
底部が飛び出たもの(11)等がみられる。

SD7051 (図版324~325 PL51・52・56)

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 49：51：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；
A+B=0個 < D=7個 第5水田対応層(新段階)の遺構である。層名のないものと上層(砂層も含
む)で遺物は取り上げられている。1期後半の良好な資料群である。須恵器杯A(6・7・9・10)の形態は
小さめで、厚く重いものがめだつ。須恵器杯BIV(11)は定形化していない。12は須恵器平瓶であり、頸
部外面の側面前方部に「カ」?のヘラガキがみられる。4には暗文がある。

SD7058 (図版325 PL52・56)

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 63：37：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；
A+B=0個 < D=6個 第5水田対応層(新段階)の遺構である。須恵器杯蓋Aと杯蓋Bが出土し
ており、1期後半の標準資料である。7・12・13・18には内外面に黒色塗彩がみられる。

SD7062・SX7037 組成比；73：27：0：0 古代1期後半の標準資料である。

SD7062 (図版326 PL52) SX7037はSD7062の湧水坑である。

時期；古代1期後半 組成比；(各層を一括した比) 73：27：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；
A+B=0個 < D=3個 第5水田対応層(新段階)の下層という位置付けになる遺構である。須恵器
杯蓋Aと杯蓋Bが共伴しており、古代1期後半の良好な資料群である。礎(12・13)には脚の付いたもの

と付いていないものがみられる。

SX7037 (図版326 PL54) SD7062と同一の遺構である。

時期；古代1期後半 組成比；72：28：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 須恵器杯蓋Aがやや多めに出土し須恵器杯蓋Bと共伴する。1期後半の良好な資料群である。27はヘラガキである。絵のようにみえる。18は内面に、22は外面にヘラガキがみられる。

SD7065=SD7067=SD8044 4～5層=SD8049 組成比；85：15：0：0 古代1期前半の標準資料である。

SD7065 (図版327～328 PL52・59) SD7067、SD8044 下層 4～5層、SD8049と同一の自然流路である。時期；古代1期前半 組成比；(各層を一括した比) 74：26：0：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 須恵器杯蓋は少ないが、須恵器杯Gが多めで、口径の小さくなった須恵器杯Hをとまなっている。須恵器杯蓋Bは組成になく、1期前半の良好な資料群である。4は朱墨硯である。須恵器杯Gとしたが、杯蓋Hの可能性もある。16は漆附着土器である。平瓶の外面に付着している。32は非クロコ土師器杯L類であり内面に「○」の墨書が見られる。墨書としては県内最古のものであろう。31は畿内系暗文土師器杯である。小片ながら体部内面に2段の斜放斜文とそれに重複するラセン文がみられる。

SD7067 (図版328) SD7065、SD8044 下層 4～5層、SD8049と同一の自然流路である。時期；古代1期前半 組成比；95：5：0：0 須恵器杯蓋A(39)が出土し、須恵器杯蓋Bの出土はみられない。

SD8044 4～5層 (図版328) SD7065、SD7067、SD8049と同一の自然流路である。説明はSD7046=SD8044 3層の項を参照。

SD8049 (図版328～329 PL53) SD7065、SD7067、SD8044 下層 4～5層と同一の自然流路である。時期；古代1期前半 組成比；91：9：0：0 口径の小さくなった須恵器杯Hが多めであり(67・71・72)、須恵器杯蓋Aはないものの杯G(66)や、杯A(65)の出土もみられ、1期前半の良好な資料群となる。

SD8021 (図版329～330 PL53・59)

時期；古代4期～7期(4～5期中心) 組成比；19：76：4：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=24個 SD8023と同一の溝であるが、それよりも層位的に上層に位置する。糸切須恵器杯Aが圧倒的に多く、内面の径も広いものが多い。ヘラ切りのものも少数存在する。小片で灰釉陶器の「黒笹14号窯式」、「黒笹90号窯式」、「光ヶ丘1号窯式」があるため時期幅をもたせたが4～5期の遺物が圧倒的に多い。6の墨書は体部外面にそって側位ではほぼ4/5周文字が書かれていたと思われるが、文字の部分が意識的に破壊されはがされている。22・23・25も墨書だが文字の書き出しの形や方位が6に似ている。11はカマジルンである。20は漆附着土器である。

SD8041 (図版330～331)

4層から須恵器杯H(18)が出ており、口径は12.8cmである。法量からは古墳8期に相当するが、小片1片のため時期については何とも言えない。また、それより上層に当たる1層～3層は、出土遺物から1期に相当する。1～2層は須恵器杯蓋B(4)が出土していることから、1期でも後半に属する。3～4層の手づくね土器(10～17)は底部に木の葉痕を持つ。10には墨書が見られる。5層、6層は遺物が少なく、7層以下からは1点のみだが非クロコ土師器杯E1類(19)の出土が見られる。

(4) 土坑(SK) 出土土器

A. 屋代遺跡群

SK4139 (図版334 巻頭図版3) 時期；古代5期後半～8期 1は京都洛北系でo類の緑釉陶器で、平定の底部を人為的に打ち欠き円盤状にしてある。外面は被熱しているためかやや赤みをおび変色している。焼成前にへらでえがいた円弧状のへらがキもみられる。

SK4622 (図版335)

時期；須恵器杯Aはすべてへら切りだが、外わん傾向のものがなく、また、2期の他の遺構ではほとんどみられないヒダスキをもつ例が多いため(3・4・5・12)、古代2期末～3期と幅をもたせて考える。組成比；0：72：28：0 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=4個 3の須恵器杯Aはへら切りだが、内径が6.2cmと小さい例である。1・8はロクロを使用しており黒色土器Aに分類される。初現期のものである。ミガキの方向は一般のものとは異なり規則性が窺えない。また8は4の須恵器鉢Dと形が似ており、金属器を模倣対象とした可能性がある。12にはカマジルシがある。

SK6204 (図版337)

時期；古代8期前半 組成比；6：14：78：1 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 > D=0個 土師器鉢B(9・12)がみられる。

SK8016 (図版338 PL60)

1の須恵器杯BIIの体部外面には[+]が漆でかかっている。たちあがり部が外わんしており、高台径も広く、平面接地で、形態的には古代2期前後のものだが、検出状況からこの遺構は古代6期のものである。混ざり込んだものであろう。

(5) 礎石建物跡(ST)出土土器

A. 屋代遺跡群

ST3001～ST3005 (図版339～341 PL54・56・62)

時期；古代8期前半 洪水砂を除去した段階で検出されている。遺物は上面、盛土、溝(雨落溝)、層名なしのものにわけて提示してある。食膳具の主体は黒色土器A・Bであり、続いて軟質須恵器が伴い、さらにほとんど全てからわずかであるが土師器の食膳具が検出されている。また、東濃と尾北のハケぬりを中心にした灰釉陶器のともなう場合も多く、8期前半の様相を示す。特筆すべき遺物のみ記述する。

ST3001…盛土では[本]の刻書をもつ皿(16)、タール状のこびりつきのある灯明専用器(20)が出土している。17は黒色土器A盤BIIである。溝から出土の24も灯明具1である。灰釉陶器では、19は尾北産で篠岡4号窯式(S4-2)、13は光ヶ丘1号窯式、28も光ヶ丘1号窯式(前半)、6は大原2号窯式の可能性がある。

ST3002…盛土から刻書[由?](16)、溝から灯明具1(20)が出土している。灰釉陶器では、上面の6は尾北産で篠岡4号窯式、他に光ヶ丘1号窯式の椀Aがある。盛土では17がなまやけに近いが光ヶ丘1号窯式(後半)、他に尾北産の篠岡4号窯式の椀Aがある。

ST3003…盛土出土の11は底部外面が転用硯、内面が朱墨硯である。灰釉陶器の6は猿投産で黒笹90号窯式である。

ST3004…盛土から[由?]の墨書(8)が出土している。灰釉陶器の5は無施釉で光ヶ丘1号窯式の段皿である。

ST3005…溝から出土の7は黒色土器Aの杯Aor椀で暗文がある。灰釉陶器の9は尾北産で篠岡4号窯式(S4-2)である。

(6) 水田関連包含層出土土器

A. 更埴条里遺跡

IV層出土土器 (図版344)

A・B・C・E地区から出土がみられる。A地区-1、C地区-1、E地区-2は須恵器杯Aであり内面底径の平均値は5.5cm、須恵器の質からみるとBタイプが2点、Cタイプが1点ある。硬質のDタイプの須恵器杯Aがみられないことから古代7期のものであろう。A地区-2の土師器杯Aは古代8期か又はそれ以降のもの。B地区-1は5期後半～8期の長頸壺、E地区-1は古代1期の非ロクロ土師器杯L類である。IV層からは古代1期、7期、8期の遺物がみられている。

IV-1層出土土器 (図版344)

古代1期後半～5期前半の遺物はE地区-2、G地区-1・2、H地区-1である。F地区-1は古代1期の非ロクロ土師器杯L類。糸切り底の須恵器杯Aの内面底径の平均は6.0cm、質からみるとAタイプ2個、Bタイプ2個、Cタイプ3個、Dタイプ1個で軟質須恵器が多く古代7期の様相となる。Cタイプが多めなのは6期的な様相でもある。また、H地区-2は土師器杯Aで古代8期かそれ以降のもの。F地区-7とH地区-5の灰釉陶器もほぼ同様のものといえよう。したがってIV-1層の遺物は古代1期、1期後半～5期前半、6期、7期、8期又はそれ以降といった年代の遺物である。

V層出土土器 (図版344)

A地区-3、C地区-3は5世紀代。C地区1・2は5世紀～古代2期にみられるタイプで時期の限定がむずかしい。2点みられる須恵器杯Aは(A地区-1、B地区-1)内面底径も小さく質もBタイプのものであり古代7期のものであろう。

V-KA-1層出土土器 (図版344)

須恵器杯Aは4点みられる。内面底径の平均値は5.8cm、質からみるとAタイプが1個、Bタイプが3個であり、土師器の食膳具がないことから古代7期の様相となる。6の土器は古墳前期のものか。

V層とV-KA-1層を合わせて考えた場合、軟質須恵器(須恵器の質A・Bタイプ)が多く、黒色土器があまりみられない点が指摘でき、遺物量は少ないながらも、古代7期の中でもより古めの時間的位置を示すと考えられる。

以上で土器の説明を終えるが、齋藤孝正氏にみていただいた灰釉陶器については一覧表の提示をしなかったため、いままで触れてこなかったものについてのみ触れる。屋代遺跡群のSCでは、SC2-4(SC2の4番の遺物をさす、以下同じ)は、猿投産、三足盤で黒笹90号窯式(K90-2)。SC5-2は、尾北産、篠岡4号窯式(S4-2)。SC11-6は、光ヶ丘1号窯式(後半)。SC146-2は猿投産、黒笹14号窯式(K14-2)、SC219-1は光ヶ丘1号窯式(後半)。SC3122-4は丸石2号窯式でこれは混入である。更埴条里遺跡のSDでは、SD906-4は黒笹90号窯式(K90-2)ただし東濃の北丘7号窯の段階(光ヶ丘1号窯式前半)と区別がつかない。屋代遺跡群のSDでは、SD22-9は光ヶ丘1号窯式(後半)。SD28-2は黒笹90号窯式(K90-2)。SD75-2は黒笹90号窯式(K90-2)。SD273-8は光ヶ丘1号窯式(前半)。SD275-1は光ヶ丘1号窯式(前半)。SD287-8は土が独特で光ヶ丘1号窯式または黒笹90号窯式(K90-2)。SD288-1は光ヶ丘1号窯式(後半)。SD2432-1は光ヶ丘1号窯式(後半)。SD2433-9は光ヶ丘1号窯式。東濃ではこのとっくりがたの瓶類は少ない。SD4514-3は黒笹90号窯式(K90-2)。SD4515-2は尾北産、篠岡4号窯式(S4-2)。釉が白っぽく、黄色っぽい胎土をもつ。口縁付近の青白色糸の白濁も尾北産の特徴である。SD8012-1は黒笹14号窯式(K14-2)。以下は全て屋代遺跡群の遺構である。SK3067-3は光ヶ丘1号窯式。SQ3003-1は尾北産、篠岡4号窯式(S4-2)。SX2は光ヶ丘1号窯式である。

註1 ロクロ調整でへら磨きがなされている破片で、黒色のものと、まったく黒色でないものがピタリと接合することがまれにみられる。これは、土中において何らかの原因により黒色がとんでしまったことに起因するものであろう。したがって、ミガキがなされているものは本来的に黒色処理がなされていたと考えてこのように分類した。また、そのように考えることが編年上より明確な見通しを得られると考えたことにもよる。

2 図24・25に示した土器の出土遺構は以下のとおりである。

表18 古代の土器 器種分類表 出土遺構

1	SB6094	16	ST8新	31	SB64	46	SB6118	61	SD8044	76	SK5148
2	屋代⑥区弥生・古墳編	17	SB9073	32	SC8002~8003	47	SK6204	62	SD2456	77	SD3243
3	SD8044	18	SD7035	33	SB51	48	SX13	63	SD8040	78	SD7065
4	SD8039	19	SB4223	34	SB41	49	SB6046	64	SD8032	79	SB6069
5	SB4217	20	SD8044	35	SB9050	50	SB9078	65	SD7030	80	SB5092
6	SB4510	21	SD7030	36	SD22	51	SD7035	66	屋代③区平安水田面	81	SB9067
7	SD7065	22	SD7035	37	SD22	52	SB8032 4~16層	67	SD7062	82	SB3006
8	SB6025	23	馬口II 8号住	38	SB9050	53	SB6027	68	SD8044の下	83	SB3008
9	SB6069	24	SB3016	39	SB9050	54	SB6038	69	SD7030	84	SB9046
10	SB5109	25	SB4009	40	SB47	55	SB5079	70	SD8023	85	SD22
11	SB4009	26	SB4504	41	SB56	56	SB57	71	SD7030		
12	SB5033	27	SB9050	42	SB9043	57	屋地II Y4号住	72	SX7037		
13	SD8049	28	SB54	43	SB6007	58	屋地II Y4号住	73	SD7035		
14	SD8049	29	SB54	44	SB8	59	SB6104	74	SD8044		
15	SD8040	30	SK9431	45	SX2	60	SB4516	75	SD7030		

3 各遺構の出土土器組成表については、フロッピーディスクにまとめ検索しやすいようにした。

4 土器の個体数の集計法については、長野県埋蔵文化財センターが高速道篠ノ井遺跡で用いた方法を採用した。

5 紙数の制約で全ての実測図を掲載できなかった遺構もあるため、図版に示された図で統計値を計算した値と本項で記載した統計値とが多少異なる場合がある。この場合、実測できたすべての個体を統計処理の対象とした本項の統計値のほうが、より正確な統計値に近いということになる。

6 年代の限定ができづらい遺構出土土器の年代表記は時期幅の広い表記となっているが、おおむね以下のような年代を表している。古墳8期新相～古代2期初頭はおおむね7世紀、古代2期初頭～5期前半はおおむね8世紀、古代5期後半～8期はおおむね9世紀。

7 Pの出土遺物については、長野県考古学会古墳部会の方々から助言をいただいた。

引用・参考文献

原 明芳 1989 「吉田川西遺跡における食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書3 吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター

小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書4 総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター

更埴市教育委員会 1987 『屋代遺跡群馬口遺跡II—長野県屋代高等学校体育館建設に伴う発掘調査—』

長野市教育委員会 1990 『屋地遺跡II—国補中小河川蛭川改修事業地点』

第2節 墨書・刻書土器

ここで対象とするものは墨書土器、刻書土器、篋書土器等であるが、これらの定義は、吉田川西遺跡の報告に順じる(金原1989)^(註1)。また、ここで取り上げた文字関係資料は、すべて国立歴史民俗博物館教授の平川 南氏に鑑定していただいた。

1 墨書土器

屋代遺跡群・更埴条里遺跡で出土した墨書土器は186点(屋代遺跡群150点、更埴条里遺跡36点)である(表19)。これをもとに墨書土器の分析を行った結果が図28である。図28は時期幅のあるものや混入は除外して確実なデータのみで分析したため、各項目によってデータ数が異なっている。

最古の例はSD7065(図版328-32 PL59)であり、古代1期前半のものである。県内最古と思われる。時期別推移は、出現期から古代5期にかけては少なく、6期から急増する。量的に多いのは6期～8期前半にかけてであり、8期後半以降は激減し、ほとんどみられなくなってしまう。書かれる土器の種類と器種との関係では、一般の食膳具に書かれる場合が多く、黒色土器A、須恵器(含、軟質須恵器)の杯Aに書かれる例が最も多い。書かれる部位では、体部外面へ書かれる場合が非常に多い。方向は正位に書かれることが一番多く、次いで倒位、横位の順となる。文字数では単字句での記載例が多い。特殊な例としては、SD8021(図版329-6 PL59)は、体部外面に横位←^(註2)で、ほぼ一周墨書されており、墨書部分が故意に打ちかかれはがされている。SD7025出土[一生](図版306-9 PL58)は、則天文字の[人]である。SB3031出土の[八代](図版260-4・10 PL57)は「やしろ」と読み、遺跡名の「屋代」と同じ読みとなる。

2 刻書土器・篋書土器

屋代遺跡群・更埴条里遺跡で出土した刻書土器・篋書土器は60点(屋代遺跡群50点、更埴条里遺跡10点)である(表20)。これをもとに分析を行った結果が図28である。図28のデータ数については墨書土器と同様である。

刻書されるものの方が篋書されるものよりもはるかに多い。時期的な推移については墨書土器と同様の傾向がうかがえる。但し、『弥生・古墳編』で報告例があるように篋書については、多くはないが既に古墳時代からみられている。土器の種類については墨書と違い黒色土器Bに記される場合が多い。黒色土器Bは内外両面が黒いため墨書では表記できないためであろう。器種別にみた場合も墨書と比べ皿類が極端に多い。これも黒色土器Bに皿類が多いためであろう。部位では体部外面が一番多いが、墨書に比べ体部内面、底部外面に書かれる比率が高い。これも皿類が多いためと思われる。方向と出土場所および文字数については、刻書の場合、墨書とほぼ同じ傾向といえる。

刻書土器・篋書土器の筆順について 刻書土器・篋書土器には文字の筆順に切り合いが確認できる例があり、筆順を知ることができるものが18例ある。以下に筆順が確かめられた例をあげる。[由]に書き順の正しくない例が多い。

〈筆順が正しい例〉

- ・SB6074-5 [内] ・SB52-8 [太] ・SB71-3 [午] ・I区IV層(図版347-5) [赤]
- ・SB54-13 [吉] ・SB57-4 [太] ・SB76-4 [太] ・VII区IV-1層(図版346-5) [石丁]

〈筆順が正しくない例〉

- ①SB3016-20 [由] ⑤ SB9002-12 [冨]
 ②SB124-6 [由] ⑥ SB59-2 [金] ⑨ SK3262-2
 ③ST3002-16 [由] ⑦ SD90-5 [井] ⑩VIII区IV-1層(図版346-2) [太]
 ④SK9907-1 [由] ⑧ ST3001-16 [本] 具体例を以下にしめす(図27)。

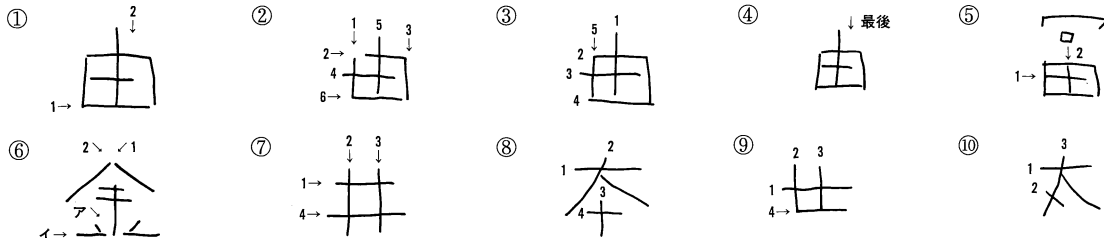


図27 刻書土器・篋書土器の筆順(正しくない例)

3 複数出土例がある文字関係資料について

同一の内容の文字が複数出土しているものについて、まとめたものが図30、図31である。

- ① [冨] ……更埴条里遺跡の5期にみられ始め、6期に多くみられる。墨書と刻書がみられる。更埴条里遺跡K地区に分布の中心をもつ。
- ② [Ⅱ] ……更埴条里遺跡の6期に集中的にみられ、前後の時期の出土はない。SB9059に集中する傾向がある。また、屋代遺跡群でも1例同一文字の出土がみられる。墨書のみみられ、須恵器杯Aのみに限られている。更埴条里遺跡K地区に分布の中心をもつ。
- ③ [由] ……屋代遺跡群で6期からみられはじめ、8期前半までみられる。8期前半が量的には多く、複数遺構からみられ、その時期には更埴条里遺跡でも同文字の出土がみられる。墨書、刻書がみられる。屋代遺跡群③a区に分布の中心をもつ。
- ④ [赤] ……屋代遺跡群で6期前後から8期前後までみられる。墨書、刻書、朱墨書にみられる。土器の種類も黒色土器A、黒色土器B、須恵器、灰釉陶器と多く、器種も皿B、杯A、椀Aと多様である。また、更埴条里遺跡では[大山]と記されたものがみられる。これは、篆書体で[赤]を表しており、多様な文字の種類、多様な文字の書き方、さらに、多様な土器と器種に書かれた文字ということがいえる。屋代遺跡群⑤区～⑥区に分布の中心をもつ。
- ⑤ [真] ……屋代遺跡群で6期にみられはじめ、7期前半に多くみられる。墨書と刻書でかかれている。分布の中心は⑤区である。
- ⑥ [本] ……屋代遺跡群で6期末～7期前半にみられはじめ、7期に多くみられ、8期前半にも出土例がみられる。墨書、刻書がみられる。分布の中心は⑤区～⑥区である。
- ⑦ [太] ……屋代遺跡群で8期前半のみに多くみられる。墨書、刻書、篋書がみられる。分布の中心は①区である。
- ⑧ [井] ……7期と8期前半に屋代遺跡群で2点、更埴条里遺跡で1点みられるが、墨書、刻書、篋書とすべて違う。
- ⑨ [乙] ……6期前後から8期前半まで数は少ないものの屋代遺跡群でみられる。

複数出土例のある文字について、一定の傾向を知ることができる。1つは、特定の時期に集中する文字であり[冨][Ⅱ]は6期に、[真]は7期前半に、[太]は8期前半にそれぞれ集中する。そして、その

集中する地点も〔冨〕〔Ⅳ〕は更埴条里遺跡K地区、〔真〕は屋代遺跡群⑤区、〔太〕は屋代遺跡群①区であり、それぞれ分布が違っている。もう1つの特徴は、長い時期を通して継続する文字群があることである。〔由〕と〔乙〕は6期～8期前半にかけて、〔赤〕は6期前後～8期を前後する時期にかけて、さらに〔本〕は6期末～8期前半にみられる。出土例が少ないものの〔乙ム〕〔上〕〔大〕などもあげることができる。そしてこれらの分布の中心は〔由〕は屋代遺跡群③a区、〔乙〕は⑤区、〔赤〕と〔本〕は⑤～⑥区というように文字ごとによって変化がみられる。複数の土器に同一文字が書かれた例が最も多いのは屋代遺跡群⑤区～⑥区である。また、時期ごとにみても、6期には更埴条里遺跡K地区が〔冨〕〔Ⅳ〕、屋代遺跡群③区が〔由〕をもち、7期にはそれらは衰退し、かわって7期を中心にして屋代遺跡群⑤区と⑥区に〔赤〕、〔真〕、〔本〕、〔乙〕といった文字群が複数みられ、他の地区にはこういった状況がみられないためきわだって特異な地区となる。しかし8期前半には屋代遺跡群⑤区と⑥区には、複数出土する文字は衰退し、かわって①区で〔太〕、③a区で〔由〕が複数みられるようになる。時期ごとに文字の内容がかわり、そして地区もかわっていくという傾向をつかむことができる。屋代遺跡群、更埴条里遺跡の両方で出土するものは、〔Ⅳ〕(主体は更埴条里遺跡)〔由〕(主体は屋代遺跡群)〔赤〕(主体は屋代遺跡群)〔井〕〔是〕等がみられる。

註1 PLの掲載順は図版の順番と多少異なるところがあるので注意。

2 横位←とは、土器を正位でみた時、時計まわりの横方向に墨書されたものをさす。横位→とはその逆をさす。

引用・参考文献

金原 正 1989 「第4節 墨書土器」『中央道長野線埋蔵文化財報告書3 吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター

表19-(1) 墨書土器一覧表

更埴は更埴条里遺跡の略、屋代は屋代遺跡群の略

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時 期	土器の種類・器種	文字の読み	部位	方向	文字数	PL
1	230	4	更埴	SB9001 床	6期	須恵器杯 A	〔冨〕	体部外面	横位→		57-1
2	230	9	更埴	SB9002 カマド内	6期	黒色土器 A 杯 A II	〔冨〕	体部外面	正位	単字句	
3	231	3	更埴	SB9004 覆土中層	6期	軟質須恵器杯 A	〔冨〕	体部外面	横位←		
4	343	1	更埴	SB9015	15期への混入	須恵器杯 A	〔中〕	体部外面	正位		57-2
5	233	3	更埴	SB9036 床面	6期	須恵器杯 A	□	体部外面			
6	234	2	更埴	SB9043	8期前半	黒色土器 A 杯 Aor 碗	〔由〕	体部外面	正位		
7	236	16	更埴	SB9059 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔Ⅳ〕	体部外面		単字句	57-5
8	236	23	更埴	SB9059 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔Ⅳ〕	体部外面			
9	236	20	更埴	SB9059 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔Ⅳ〕	体部外面		単字句	57-3
10	236	13	更埴	SB9059 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔Ⅳ〕	体部外面			
11	236	4	更埴	SB9059 覆土中層	6期	須恵器杯 A	□	体部外面			
12	236	19	更埴	SB9059 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔Ⅳ〕	体部外面			
13	240	4	更埴	SB9072 床	7期前半	須恵器杯 A	〔大山〕 篆書の〔赤〕	体部外面	正位		57-4
14	240	16	更埴	SB9073 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔冨〕	体部外面	正位	単字句	
15	240	15	更埴	SB9073 覆土中層	6期	須恵器杯 A	〔冨〕	体部外面	正位		
16	240	28	更埴	SB9073 掘方	6期	須恵器杯 A	〔Ⅳ〕	体部外面		単字句 2 文字	
17	241	15	更埴	SB9077 床	6期	黒色土器 A 杯 A I	〔中中〕	体部外面	正位	単字句 2 文字	
18	297	4	更埴	SD974	6期	須恵器杯 A	〔政〕	体部外面	正位		
19	297	2	更埴	SD974	6期	須恵器杯 A	□□	体部外面		単字句? 2 文字?	
20	297	6	更埴	SD974	6期	黒色土器 A 杯 A II	□	体部外面	正位		
21	297	1	更埴	SD983	6期	須恵器杯 A	□	体部外面			

表20 刻書土器・篋書土器一覽表

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時 期	土器の種類・器種	文字の読み	部位	方向	文字数	遺物名	PL
1	230	10	更埴条里	SB9001 第2床面	6期	黒色土器BⅢB	□ [富カ]	体部外面	横位→		刻書	
2	230	12	更埴条里	SB9002 カマド脇	6期	黒色土器BⅢB	[富]	体部外面	横位→		刻書	61-4
3	231	6	更埴条里	SB9005	7期前半	黒色土器BⅢB	□ [中カ]	体部外面	倒位		刻書	
4	239	10	更埴条里	SB9071 カマド周辺	6～7期の2軒	黒色土器BⅢB	[坊]	体部内面と体部外面			刻書	
5	239	9	更埴条里	SB9071 床	6～7期の2軒	黒色土器BⅢB	[坊]	体部内面、体部外面、底部外面	体部外面は倒位	単字句3文字	刻書	61-6.7
6	297	3	更埴条里	SD974	6期	黒色土器BⅢ	[富]	体部外面	正位		刻書	
7	332	1	更埴条里	SK9907	8期前後	黒色土器A杯AⅡ	[由]	体部外面	正位	単字句	刻書	
8	343	4	更埴条里	K地区Ⅲ層	6～8期	黒色土器BⅢB	[富]	体部外面	横位→		刻書	61-5
9	249	13	屋代	SB54 カマド脇	8期前半	黒色土器BⅢB	[吉]	体部内面			刻書	
10	249	4	屋代	SB57	8期前半	黒色土器BⅢ	[太]	体部外面	正位		刻書	61-8
11	250	2	屋代	SB59 床	8期前半	黒色土器A杯AⅡ	[金]	体部外面	倒位	単字句	刻書	61-10
12	252	7	屋代	SB66 覆土	6～7期	黒色土器BⅢB	□	体部外面			刻書	
13	252	8	屋代	SB66	6～7期	黒色土器BⅢB	□	体部外面			刻書	
14	253	3	屋代	SB71 北カマド 掘方	8期前半	黒色土器BⅢB	[午]	体部内面見込部			刻書	
15	253	2	屋代	SB74	8期前半	黒色土器A杯AⅡ	□	体部外面			刻書	
16	254	4	屋代	SB76 床	8期前半	黒色土器BⅢB	[太]	体部外面と底部外面	体部外面は正位	単字句2文字以上	刻書	61-9
17	255	6	屋代	SB124 カマド周辺	7期前半	黒色土器BⅢB	[由]	体部外面			刻書	
18	256	5	屋代	SB3006	8期前半	黒色土器B杯AⅠ	□ [由カ]	体部外面			刻書	
19	259	20	屋代	SB3016	6期	黒色土器BⅢ	[由]	体部外面	正位		刻書	
20	264	7	屋代	SB4030 3層～4層	8期前半	黒色土器BⅢ	□	体部外面			刻書	
21	265	11	屋代	SB4204	5～6期	黒色土器BⅢB	[上]	体部外面	正位		刻書	
22	270	2	屋代	SB4518	切り合いから7期	黒色土器BⅢB	[井]	体部外面			刻書	
23	272	8	屋代	SB5005 2層	7期前半	黒色土器BⅢ	□ [乙カ] [ム]	体部外面	横位→	複字句	刻書	
24	274	3	屋代	SB5022	6期(2期のSBへの混入)	黒色土器BⅢ	□	体部外面			刻書	
25	274	4	屋代	SB5022	6期(2期のSBへの混入)	黒色土器BⅢ	□	体部外面			刻書	
26	278	6	屋代	SB5073 1層	6期	黒色土器BⅢB	□	体部外面			刻書	
27	289	6	屋代	SB6074 床 カマド脇壁際	7期	黒色土器A杯AⅡ	□	体部外面		単字句? 2文字?	刻書	
28	289	5	屋代	SB6074 床 カマド脇壁際	7期	黒色土器A杯AⅡ	[内]	体部外面	倒位	単字句2文字	刻書	
29	295	1	屋代	SC129	7～8期	黒色土器BⅢB	□	体部内面見込部			刻書	
30	295	2	屋代	SC129	7～8期	黒色土器BⅢB	□	体部内面			刻書	
31	298	5	屋代	SD22	8期前半	黒色土器BⅢB	[乙] □ [ムカ]	体部外面			刻書	
32	298	3	屋代	SD68	7～8期前半	黒色土器BⅢ	□	体部外面			刻書	
33	299	6	屋代	SD90	8期前半	黒色土器BⅢB	□	体部外面			刻書	
34	305	1	屋代	SD6012	6期前後	黒色土器BⅢ	□ [赤カ]	体部外面	横位←		刻書	
35	310	75	屋代	SD7030 I区 N2 最下層	2期(3水田)	土師器甕	□	胴部内面			刻書	
36	333	1	屋代	SK518	7～8期前半	黒色土器BⅢ	□	体部外面	正位		刻書	
37	334	2	屋代	SK3262	7期	黒色土器B碗	□	体部外面	正位		刻書	
38	336	1	屋代	SK5094 1層	6～7期	黒色土器BⅢB	□	体部外面			刻書	
39	340	16	屋代	ST3001 盛土	8期前半	黒色土器BⅢB	[本]	底部外面			刻書	
40	341	16	屋代	ST3002 盛土	8期前半	黒色土器BⅢB	[由]	底部内面見込部			刻書	
41	342	11	屋代	SX4 覆土	6～7期	黒色土器BⅢB	□	体部内面			刻書	
42	346	1	屋代	Ⅵ区 KE14 IV-1層 上面	5期後半～8期	黒色土器BⅢB	□	体部外面			刻書	
43	347	5	屋代	I区 IV層 上面	5期後半～8期	黒色土器BⅢB	[赤]	体部外面	正位		刻書	
44	347	5	屋代	I区 NS4 III-1層	5期後半～8期?	黒色土器A or B杯A or 碗	□ [真カ]	体部内面見込部			刻書	
45	347	3	屋代	I区 SK11 III-1層	5期後半～8期	黒色土器BⅢ	[真]	体部内面			刻書	
46	346	1	屋代	V区 S18、19 カクラン	7期後半～8期前半	黒色土器B杯AⅡ	□ [由カ]	体部内面見込部			刻書	
47	346	4	屋代	Ⅷ区 Q19 IV-1層	5期後半～8期	黒色土器BⅢB	□	体部内面			刻書	
48	346	5	屋代	Ⅷ区 S5 IV-1層 上面	5期後半～8期	黒色土器BⅢB	[石丁]	体部外面	横位←	複字句	刻書	
49	346	3	屋代	Ⅳ区 IV-1層 上面	不明	黒色土器A杯A or 碗	□ [吉カ]	体部外面	正位		刻書	
50	346	2	屋代	Ⅷ区 KF6 IV-1層 上面	5期後半～8期	黒色土器BⅢB	[太]	底部外面			刻書	
51	248	8	屋代	SB52 4層	8期前半	黒色土器BⅢB	[太]	底部外面			篋書	
52	271	4	屋代	SB4809 覆土 壁際	7期後半	黒色土器A杯AⅡ	□□	体部外面			篋書	
53	278	4	屋代	SB5072 掘方	6期	黒色土器BⅢB	[大]	底部外面			篋書	
54	299	5	屋代	SD90 Ⅷ区 T6	8期前半	黒色土器A杯AⅡ	[井]	体部外面	正位		篋書	
55	336	1	屋代	SK6140	2期初頭～8期	非クロ土師器杯	□	底部外面			篋書	
56	337	1	屋代	SK6410	5世紀～古代5期前半	非クロ土師器杯C類?	□	底部外面			篋書	

表21 朱墨書・漆書土器一覽表

No.	図版No.	掲載No.	遺物名	遺跡名	出土遺構	時 期	土器の種類・器種	文字の読み	部位	方向	文字数	PL	備 考
1	278	11	朱墨書	屋代	SB5064 掘方	7期前半	黒色土器BⅢB	□ [赤カ]	体部外面	正位			
2	292	5	朱墨書	屋代	SB6105	4期	黒色土器A杯A or 碗	□	体部外面				5期後半～8期の混入?
3	338	1	漆書	屋代	SK8016	層位から6期	須恵器杯BⅡ	[+]	体部外面		単字句	61-3	記号

遺跡名 項目	全体(屋代遺跡群・更埴条里遺跡)	屋代遺跡群	更埴条里遺跡
総点数	186	150	36
時期別 推移			
土器の 種類	<p>黒色土器A 88点 47%</p> <p>須恵器 87点 46%</p> <p>灰袖陶器 4点 2%</p> <p>軟質須恵器 4点 2%</p> <p>その他 3点 2%</p>	<p>黒色土器A 79点 53%</p> <p>須恵器 63点 42%</p> <p>灰袖陶器 4点 3%</p> <p>軟質須恵器 2点 1%</p> <p>その他 2点 1%</p>	<p>黒色土器A 9点 25%</p> <p>須恵器 24点 67%</p> <p>その他 1点 3%</p> <p>軟質須恵器 2点 5%</p>
器種別 割合	<p>杯 A 122点 65%</p> <p>杯A or 碗 30点 16%</p> <p>杯A or 杯B 20点 11%</p> <p>その他 14点 8%</p>	<p>杯 A 92点 62%</p> <p>杯A or 碗 26点 17%</p> <p>杯A or 杯B 18点 12%</p> <p>その他 14点 9%</p>	<p>杯 A 30点 83%</p> <p>杯A or 碗 4点 11%</p> <p>杯A or 杯B 2点 6%</p>
文字の 種類	<ul style="list-style-type: none"> ・〔V〕は更埴条里遺跡に多いが屋代遺跡群にも1点みられる ・〔由〕は屋代遺跡群に多いが更埴条里遺跡にも1点みられる ・〔是〕は屋代遺跡群に2点、更埴条里遺跡にも2点みられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔乙〕…7点 ・〔三田〕…2点 ・〔上〕…2点 ・〔丈〕…2点 ・〔真〕…3点 ・〔赤〕…4点 ・〔太〕…3点 ・〔丈〕…2点 ・〔ハ〕…2点 ・〔八代〕…2点 ・〔本〕…11点 ・〔由〕…5点 ・〔乱〕…2点 その他 ・〔一生〕…1点 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔V〕…7点 ・〔富〕…9点 その他 ・〔大山〕…1点
部位	<p>体部外面 172点 92%</p> <p>底部外面 14点 7%</p> <p>体部内面 1点 0.5%</p> <p>2ヶ所にかかれていた例があるため総数は187点になる</p>	<p>体部外面 136点 91%</p> <p>底部外面 14点 9%</p> <p>体部内面 1点 0.6%</p>	<p>体部外面 36点 100%</p>
方向	<p>正位 58点 53%</p> <p>倒位 27点 25%</p> <p>横位 14点 13%</p> <p>横位→7点 6%</p> <p>横位←4点 3%</p> <p>その他3点 3%</p>	<p>正位 40点 46%</p> <p>倒位 26点 30%</p> <p>横位 12点 14%</p> <p>横位→6点 7%</p> <p>横位←6点 7%</p> <p>その他3点 3%</p>	<p>正位 18点 82%</p> <p>横位 2点 9%</p> <p>横位→1点 4.5%</p> <p>倒位1点 4.5%</p>
出土場所	<p>SB 82点 44%</p> <p>SD 51点 27%</p> <p>包含層 31点 17%</p> <p>SK 11点 6%</p> <p>その他11点 6%</p>	<p>SB 64点 43%</p> <p>SD 46点 31%</p> <p>包含層 26点 17%</p> <p>その他13点 9%</p>	<p>SB 18点 50%</p> <p>SD 5点 14%</p> <p>包含層 5点 14%</p> <p>SK 5点 14%</p> <p>その他3点 8%</p>
文字数	<p>単字句 29点 63%</p> <p>単字句 2文字 6点 13%</p> <p>複字句 9点 20%</p> <p>単字句2文字以上2点 4%</p>	<p>単字句 21点 60%</p> <p>単字句 2文字 4点 11%</p> <p>複字句 8点 23%</p> <p>単字句2文字以上2点 6%</p>	<p>単字句 8点 73%</p> <p>単字句 2文字 2点 18%</p> <p>複字句1点 9%</p>

図28 墨書土器の諸特徴の分析

遺跡名	全体(屋代遺跡群・更埴条里遺跡)	屋代遺跡群	更埴条里遺跡																					
項目	全体(屋代遺跡群・更埴条里遺跡)	屋代遺跡群	更埴条里遺跡																					
総点数	60 (刻書54・篋書6)	50 (刻書44・篋書6)	10 (刻書10)																					
時期別推移	<p>数</p> <p>計14 計8 計6 計7</p> <p>1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 15 時期</p> <p>□…篋書 ■…刻書</p>	<p>数</p> <p>計14 計7 計4 計3</p> <p>1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 15 時期</p> <p>□…篋書 ■…刻書</p>	<p>数</p> <p>計1 計1 計1 計1</p> <p>1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 15 時期</p> <p>□…篋書 ■…刻書</p>																					
土器の種類	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>黑色土器B 2点 33%</td> <td>黑色土器A 2点 33%</td> <td>非ロクロ土器 2点 33%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td colspan="2">黑色土器B 44点 81%</td> <td>黑色土器A土師器 8点 15% 2点 4%</td> </tr> </table>	篋書	黑色土器B 2点 33%	黑色土器A 2点 33%	非ロクロ土器 2点 33%	刻書	黑色土器B 44点 81%		黑色土器A土師器 8点 15% 2点 4%	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>黑色土器B 2点 33%</td> <td>黑色土器A 2点 33%</td> <td>非ロクロ土器 2点 33%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td colspan="2">黑色土器B 36点 81%</td> <td>黑色土器A 6点 14%</td> </tr> </table> <p>土師器 2点 5%</p>	篋書	黑色土器B 2点 33%	黑色土器A 2点 33%	非ロクロ土器 2点 33%	刻書	黑色土器B 36点 81%		黑色土器A 6点 14%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>黑色土器B 8点 80%</td> <td>黑色土器A 2点 20%</td> </tr> </table>	刻書	黑色土器B 8点 80%	黑色土器A 2点 20%		
篋書	黑色土器B 2点 33%	黑色土器A 2点 33%	非ロクロ土器 2点 33%																					
刻書	黑色土器B 44点 81%		黑色土器A土師器 8点 15% 2点 4%																					
篋書	黑色土器B 2点 33%	黑色土器A 2点 33%	非ロクロ土器 2点 33%																					
刻書	黑色土器B 36点 81%		黑色土器A 6点 14%																					
刻書	黑色土器B 8点 80%	黑色土器A 2点 20%																						
器種別割合	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>皿B 2点 33%</td> <td>杯A 2点 33%</td> <td>杯 2点 33%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>皿B 29点 54%</td> <td>皿 12点 22%</td> <td>杯A 8点 15% 1点 2% 1点 2%</td> </tr> </table> <p>杯Aor 1点 2% 杯 3点 5% 碗 1点 2% 甕 1点 2%</p>	篋書	皿B 2点 33%	杯A 2点 33%	杯 2点 33%	刻書	皿B 29点 54%	皿 12点 22%	杯A 8点 15% 1点 2% 1点 2%	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>皿B 2点 33%</td> <td>杯A 2点 33%</td> <td>杯 2点 33%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>皿B 22点 50%</td> <td>皿 11点 25%</td> <td>杯A 7点 16% 1点 2% 1点 2%</td> </tr> </table> <p>杯Aor 2点 5% 碗 2点 5% 甕 1点 2% 甕 1点 2%</p>	篋書	皿B 2点 33%	杯A 2点 33%	杯 2点 33%	刻書	皿B 22点 50%	皿 11点 25%	杯A 7点 16% 1点 2% 1点 2%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>皿B 7点 70%</td> <td>皿 1点 10%</td> <td>杯A 1点 10%</td> </tr> </table> <p>杯Aor 碗 1点 10%</p>	刻書	皿B 7点 70%	皿 1点 10%	杯A 1点 10%	
篋書	皿B 2点 33%	杯A 2点 33%	杯 2点 33%																					
刻書	皿B 29点 54%	皿 12点 22%	杯A 8点 15% 1点 2% 1点 2%																					
篋書	皿B 2点 33%	杯A 2点 33%	杯 2点 33%																					
刻書	皿B 22点 50%	皿 11点 25%	杯A 7点 16% 1点 2% 1点 2%																					
刻書	皿B 7点 70%	皿 1点 10%	杯A 1点 10%																					
文字の種類	<p>・〔由〕は屋代遺跡群に多いが 更埴条里遺跡にも1点ある</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・〔乙ム〕…2点 ・〔太〕…2点 ・〔吉〕…2点 ・〔由〕…2点 ・〔真〕…2点 ・〔井〕…2点 (1点篋書) ・〔赤〕…2点 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔坊〕…2点 ・〔富〕…4点 																					
部位	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>体部外面 2点 33%</td> <td>底部外面 4点 67%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>体部外面 38点 66%</td> <td>体部内面 13点 22% 1点 2% 1点 2%</td> </tr> </table> <p>底部外面4点7% その他3点5%</p>	篋書	体部外面 2点 33%	底部外面 4点 67%	刻書	体部外面 38点 66%	体部内面 13点 22% 1点 2% 1点 2%	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>体部外面 2点 33%</td> <td>底部外面 4点 67%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>体部外面 29点 64%</td> <td>体部内面 10点 22% 1点 2% 1点 2%</td> </tr> </table> <p>底部外面3点7% その他3点7%</p>	篋書	体部外面 2点 33%	底部外面 4点 67%	刻書	体部外面 29点 64%	体部内面 10点 22% 1点 2% 1点 2%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>体部外面 9点 69%</td> <td>体部内面 3点 23%</td> <td>底部外面 1点 8%</td> </tr> </table>	刻書	体部外面 9点 69%	体部内面 3点 23%	底部外面 1点 8%					
篋書	体部外面 2点 33%	底部外面 4点 67%																						
刻書	体部外面 38点 66%	体部内面 13点 22% 1点 2% 1点 2%																						
篋書	体部外面 2点 33%	底部外面 4点 67%																						
刻書	体部外面 29点 64%	体部内面 10点 22% 1点 2% 1点 2%																						
刻書	体部外面 9点 69%	体部内面 3点 23%	底部外面 1点 8%																					
方向	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td colspan="3">正位 1点 100%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>正位 10点 50%</td> <td>横位 4点 20% 2点 10%</td> <td>倒位 4点 20%</td> </tr> </table>	篋書	正位 1点 100%			刻書	正位 10点 50%	横位 4点 20% 2点 10%	倒位 4点 20%	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td colspan="3">正位 1点 100%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>正位 8点 62%</td> <td>横位 2点 15% 1点 8%</td> <td>倒位 2点 15%</td> </tr> </table>	篋書	正位 1点 100%			刻書	正位 8点 62%	横位 2点 15% 1点 8%	倒位 2点 15%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>正位 2点 29%</td> <td>横位→ 3点 42%</td> <td>倒位 2点 29%</td> </tr> </table>	刻書	正位 2点 29%	横位→ 3点 42%	倒位 2点 29%	
篋書	正位 1点 100%																							
刻書	正位 10点 50%	横位 4点 20% 2点 10%	倒位 4点 20%																					
篋書	正位 1点 100%																							
刻書	正位 8点 62%	横位 2点 15% 1点 8%	倒位 2点 15%																					
刻書	正位 2点 29%	横位→ 3点 42%	倒位 2点 29%																					
出土場所	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>SB 3点 50%</td> <td>SK 2点 33%</td> <td>SD 1点 17%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>SB 28点 52%</td> <td>包含層 11点 20% 6点 11% 1点 2% 1点 2%</td> <td>SD 6点 11% 1点 2% 1点 2% 1点 2%</td> </tr> </table> <p>SK4点7% SC2点4% ST2点4% SX1点2%</p>	篋書	SB 3点 50%	SK 2点 33%	SD 1点 17%	刻書	SB 28点 52%	包含層 11点 20% 6点 11% 1点 2% 1点 2%	SD 6点 11% 1点 2% 1点 2% 1点 2%	<table border="1"> <tr> <td>篋書</td> <td>SB 3点 50%</td> <td>SK 2点 33%</td> <td>SD 1点 17%</td> </tr> <tr> <td>刻書</td> <td>SB 21点 48%</td> <td>包含層 10点 23% 5点 11% 1点 2% 1点 2%</td> <td>SD 5点 11% 1点 2% 1点 2% 1点 2%</td> </tr> </table> <p>SK3点7% SC2点4.5% ST2点4.5% SX1点2%</p>	篋書	SB 3点 50%	SK 2点 33%	SD 1点 17%	刻書	SB 21点 48%	包含層 10点 23% 5点 11% 1点 2% 1点 2%	SD 5点 11% 1点 2% 1点 2% 1点 2%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>SB 7点 70%</td> <td>包含層 1点 10%</td> <td>SD 1点 10%</td> <td>SK 1点 10%</td> </tr> </table>	刻書	SB 7点 70%	包含層 1点 10%	SD 1点 10%	SK 1点 10%
篋書	SB 3点 50%	SK 2点 33%	SD 1点 17%																					
刻書	SB 28点 52%	包含層 11点 20% 6点 11% 1点 2% 1点 2%	SD 6点 11% 1点 2% 1点 2% 1点 2%																					
篋書	SB 3点 50%	SK 2点 33%	SD 1点 17%																					
刻書	SB 21点 48%	包含層 10点 23% 5点 11% 1点 2% 1点 2%	SD 5点 11% 1点 2% 1点 2% 1点 2%																					
刻書	SB 7点 70%	包含層 1点 10%	SD 1点 10%	SK 1点 10%																				
文字数	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>単字句 2点 29%</td> <td>単字句 2文字 1点 14% 1点 14%</td> <td>単字句 3文字 1点 14%</td> <td>複字句 2点 29%</td> </tr> </table>	刻書	単字句 2点 29%	単字句 2文字 1点 14% 1点 14%	単字句 3文字 1点 14%	複字句 2点 29%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>単字句 1点 20%</td> <td>単字句 2文字 1点 20%</td> <td>単字句 2文字以上 1点 20%</td> <td>複字句 2点 40%</td> </tr> </table>	刻書	単字句 1点 20%	単字句 2文字 1点 20%	単字句 2文字以上 1点 20%	複字句 2点 40%	<table border="1"> <tr> <td>刻書</td> <td>単字句 1点 50%</td> <td>単字句 3文字 1点 50%</td> </tr> </table>	刻書	単字句 1点 50%	単字句 3文字 1点 50%								
刻書	単字句 2点 29%	単字句 2文字 1点 14% 1点 14%	単字句 3文字 1点 14%	複字句 2点 29%																				
刻書	単字句 1点 20%	単字句 2文字 1点 20%	単字句 2文字以上 1点 20%	複字句 2点 40%																				
刻書	単字句 1点 50%	単字句 3文字 1点 50%																						

図29 刻書土器・篋書土器の諸特徴の分析

○は墨書 □は刻書 ○は銘書 ○は朱墨書をさす。

文字	時代	古代5期以前		古代6期		古代7期		古代8期前半	古代8期後半以降	その他 8世紀～9世紀
		7期前半	7期後半	7期前半	7期後半					
富	更 埴 条 里	5期 (SK9435-1) 須杯A	(SB9002-12) 黒BⅢB (SD974-3) 黒BⅢ (SB9002-9) 黒A杯AⅡ (SB9073-16) 須杯A (SB9073-15) 須杯A		6～7期 (ST923-1) 黒A杯AⅠ					8c～9c (K地区Ⅷ012トレンチ) 須杯Aor杯B (図版343-2)
		5期 (SK9435-2) 須杯A	(SB9001-4) 須杯A (SB9004-3) 須杯A		6～8期 (K地区Ⅲ層) 黒BⅢB (図版343-4)					
M	更 埴 条 里		(SB4011-8) 須杯A							
			(SB9073掘方28) 須杯A (SB9059-13) 須杯A (SB9059-16) 須杯A (SB9059-19) 須杯A (SB9059-20) 須杯A (SB9059-23) 須杯A (K地区Ⅳa-1層) 須杯A (図版343-1)							
由 or 由 カ	屋 代 更 埴		(SB3016-20) 黒BⅢ (SB3016-6) 須杯A (SB3016-21) 黒A杯Aor椀	(SB124-6) 黒BⅢB (SB3014-11) 黒A杯AⅡ		(ST3004盛土-8) 須杯Aor杯B (SC11-1) 須杯A (SB3006-5) (ST3002盛土-16) 黒BⅢB 黒B杯AⅠ				9c (ST3001の下) 黒A杯AⅡ (図版346-1)
					7期後半～8期前半 (5区カタケ) 黒B杯AⅡ (図版346-1)		8期前後 (SB9043-2) 黒A杯Aor椀 (SK9907-1) 黒A杯AⅡ			
赤 or 赤 カ (天山)	屋 代 更	6期前後 (SD 6012-1)	黒BⅢ	(SB5064-11) 黒BⅢB	7期～8期 (SD 6004-1) 黒A杯AⅡ 7期後半～9期 (Ⅶ区Ⅲ-2層) 灰釉椀A (図版346-1)					9c (Ⅰ区Ⅳ層) 黒BⅢB (図版347-5)
			6期末～7期前半 (SD 7025-12) 黒AⅢB (SD 7025-13) 黒AⅢB		[大山] (SB9072-4) 須杯A					
真 or 真 カ	屋 代		(SB5073-2) 黒A杯Aor椀	(SB5012-7) 黒A杯Aor椀 (SB5012-10) 黒A杯Aor椀 (SB5012-8) 黒A杯Aor椀 (SB5005-7) 黒A杯Aor椀 (SB5056-3) 黒A杯AⅡ						9c (Ⅰ区Ⅲ-1層) 黒BⅢ (図版347-3) (Ⅰ区Ⅲ-1層) 黒A杯Aor椀 (図版347-2)
				(SB5053-3) 黒A杯AⅡ (SB6077-6) (SB5064-4) 須杯A 黒A杯Aor椀 (SB5064-5) 黒A杯AⅡ		(ST3001盛土-16) 黒BⅢB				2期への9Cの混入 (SA7001-1) 須杯A 2期のSBへの6期前後の混入 [乙本] (SB5119-5) 須杯A 9c (Ⅰ区) 黒A杯A (図版347-2) (Ⅰ区4c層) 黒A杯AⅡ (図版347-3)
太	屋 代	切り合いから5期 (SB5059-3) 黒A杯AⅡ				(SB52-8) 黒BⅢB (SB54-3) 黒A杯AⅡ (SB57-4) 黒BⅢ (SB75-5) 灰釉椀A (SB76-4) 黒BⅢB				9c (Ⅶ区Ⅳ-1層) (図版346-2)
		6期前後 (Ⅶ区Ⅳ-1層) 須杯A (図版346-1)		(SB5005-8) 黒BⅢ		(SD22-5) 黒BⅢB				
上	屋 代	5期～6期 (SB4204-11) 黒BⅢB	(SB4011-2) 須杯A	(SB4504-6) 須杯A						
			(SB5072掘方4) 黒BⅢB	(SB5085-2) 黒A杯Aor椀	[大]or[文] (SB5021-10) 黒A杯Aor椀					9c (Ⅰ区) 黒A杯AⅠ (図版347-3) (Ⅰ区) 黒A杯AⅠ (図版347-6)
井	屋 代 更 埴			切り合いから7期 (SB4518-2) 黒BⅢB		(SD90-5) 黒A杯AⅡ				
						(SK9930-5) 黒A杯Aor椀				
是 or 是 カ	屋 代 更 埴					(SD3243-1) 黒A杯AⅡ (SD3243-2) 黒A杯AⅡ				
						[是カ]or[足カ] (K地区) 須杯A (図版343-2)				
乙	屋 代	6期前後 (Ⅰ区Ⅳ層) 須杯A (図版347-1)		7期 (SB6118-5) 黒A杯AⅡ (SB6077-7) 黒A杯Aor椀		[乙1寺] (3a区第一水田前) 黒A杯AⅡ (図版345-1)				2期のSBへの 切り合いから5期 6期前後の混入 前後 (7期の混入?) [乙本] (SB5036-2) (SB5119-5) 黒A杯Aor椀 須杯A
			(SB3031-4) 須杯A (SB3031-10) 須杯A							

凡例 (SB9002-12) 黒BⅢBとは刻書でSB9002の12番の土器をさす。黒BⅢBとは土器の種類と器種をさす。黒は黒色土器の略、須は須恵器の略
8C～9Cは古代2期～8期、9Cは古代5期後半～8期をさす

図30 複数出土の文字とその出土遺構および器種

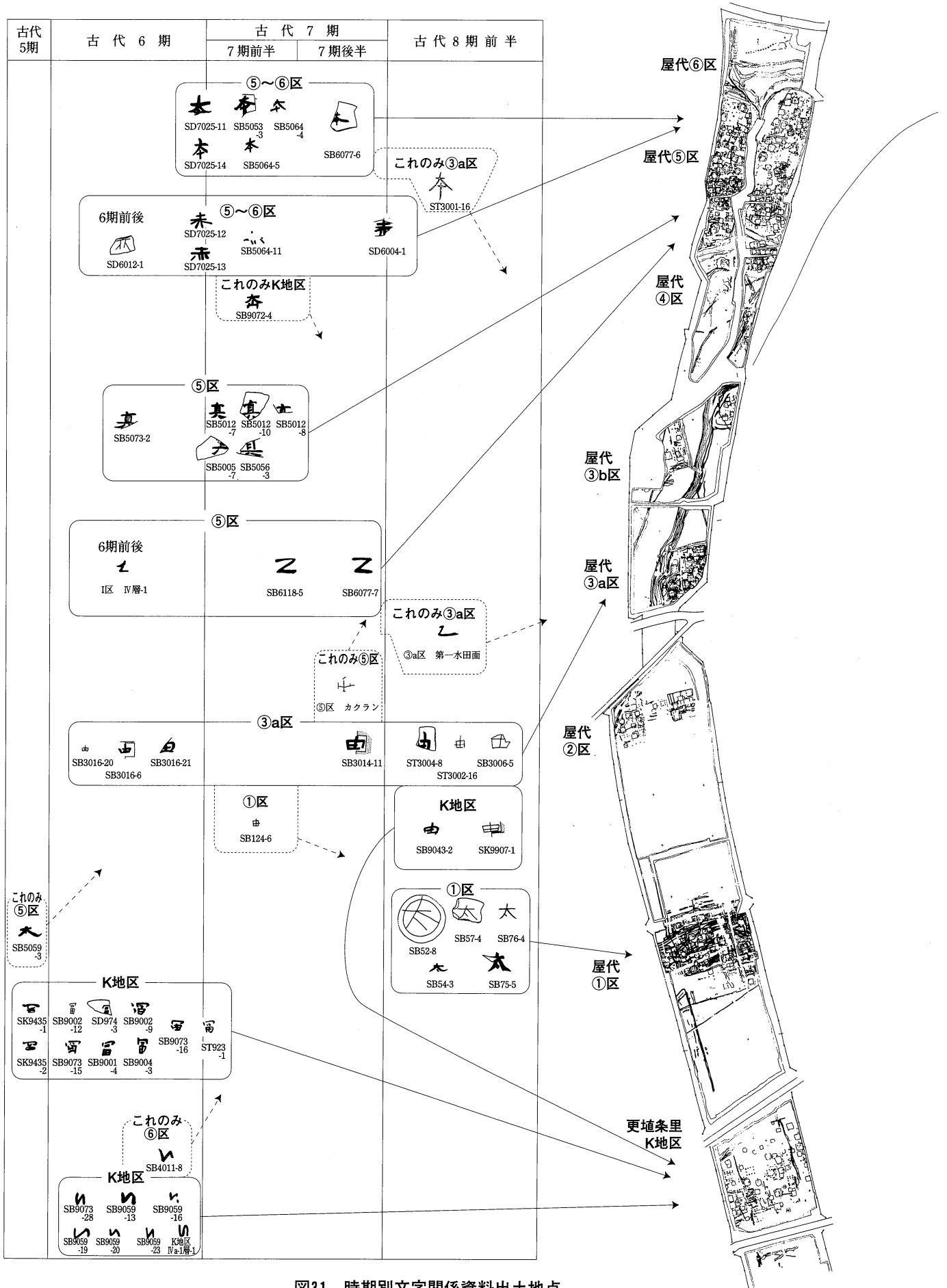


図31 時期別文字関係資料出土地点

第3節 土製品^(註1)

1 瓦塔 (図版348 1~6 表22 PL55)

瓦塔は8片の出土がみられる。すべて屋代遺跡群④区からの出土で土師質である。数が少ないため層位、出土遺構から『中・近世編』関係になる例も含めて資料化した(表22)。部位等の観察は出河裕典氏に指導を受けた。

表22 瓦塔一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時 期	土器質	PL	備 考
1	348	3	屋代	④c区 III-1層~IV-1層	2期初頭~8期	土師質	55-1	屋蓋 四隅先端部 隅木の先端に風鐸孔あり 黒斑あり
2	348	4	屋代	④c区 III-1層~IV-1層	2期初頭~8期	土師質		屋蓋中央円孔~地覆の部分 黒斑あり
3	348	5	屋代	④c区 III-1層~IV-1層	2期初頭~8期	土師質		屋蓋先端部 黒斑あり
4	348	2	屋代	④c区 III-1層~IV-1層	2期初頭~8期	土師質		軸部破片?
5	348	6	屋代	④c区 III-1層~IV-1層	2期初頭~8期	土師質	55-2.3	屋蓋 四隅先端部 降棟欠損 磨耗顕著 黒斑あり
6	348	1	屋代	SB4031	6期	土師質		屋蓋 瓦部分 継目3個以上
7			屋代	SD4504	13期~中世	土師質		瓦塔? 図不掲載
8			屋代	SK4003	中世への混入	土師質		図不掲載

2 布目瓦 (図版348~349 表23)

『古代1編』関連の遺構から出土した布目瓦は26例である(表23)。最古の例はSD7030最下層から出土した3例であり、第3水田対応層に属し古代2期のものである。包含層やカクランからの出土も多いが、8世紀代と9世紀代の遺構からも出土している。SD7030例を上原真人氏に鑑定していただいたところ、7世紀代までさかのぼる可能性があるとのことであった。屋代遺跡群の近くの布目瓦の出土例としては雨宮廃寺跡のものが知られる。

表23 布目瓦一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時 期	PL
1	348	15	屋代	SB4218	5期	
2	348	20	屋代	SB4230	2期初頭~8期	
3	348	16	屋代	SB6035	6期	
4	348	17	屋代	SB6062	8期前半	
5			屋代	SB6102	3~4期	
6	349	26	屋代	SD3267	2期初頭~5期前半?	56-30
7	348	19	屋代	SD7030 最下層	2期(3水田)	
8	349	21	屋代	SD7030 最下層	2期(3水田)	
9	349	22	屋代	SD7030 最下層	2期(3水田)	
10	349	23	屋代	SD8021	4~7期(4~5期中心)	
11	349	25	屋代	SK1148	8期前半	
12	349	24	屋代	SQ5003	6期	
13	349	29	屋代	ST3001 上面	8期前半	
14	348	14	更埴条里	X区 KH15 IV-1層	不明	
15	348	13	更埴条里	X区 KH15 III層	不明	
16	349	30	屋代	④d区 III-2層 上面	8期以前	
17	349	27	屋代	④d区 IV-1層	8期以前	
18	349	28	屋代	V区 Y9 III-2層	8期以前	
19	349	31	屋代	②b区 カクラン	不明	
20	349	32	屋代	⑤b区 トレンチ IV-Y5-1層	8期以前	
21	349	33	屋代	②f区 カクラン	不明	
22	349	34	屋代	②f区 カクラン	不明	
23	349	37	屋代	V区 XQ19 III-2層	8期以前	
24	349	38	屋代	⑤a区 IV-1層上面	8期以前	
25	349	35	屋代	V区 Y I15 III-2層	8期以前	
26	349	36	屋代	I区 XF14	不明	

3 硯

(1) 円面硯 (図版348 7~9 表24 PL55)

屋代遺跡群で3例の出土がみられる。SB6053出土例はSB6101、SB6127、SB6128とも接合し、上面に中央へむかってななめに貫通する穴をもつ。筆立て用か。⑤b区出土例は底面に朱墨が付着しており朱墨硯としても使われている。

(2) 温硯 (図版348 10~11 表24 PL55)

屋代遺跡群で2例の出土がみられる(SB6106・SD8049)。SB6106出土例は、陸の部分はつつるしており、海の部分はしっかりした溝になっている。胴部に一孔が穿たれ、内面は中空になっており、柄の部分は欠損している。SD8049出土例は、底部の破片で割れ口に一孔が穿たれた跡が残る。丸子町勝負沢遺跡、

表24 硯一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺物名	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	PL	備考・特徴
1	348	9	円面硯	屋代	SB6053	2期 5期後半～8期の混入あり	須恵器	55-9	SB6101.SB6127.SB6128と接合
2	348	8	円面硯	屋代	SD8021	4～7期 (4～5期中心)	須恵器		
3	348	7	円面硯(朱墨硯)	屋代	㊦b区 S8 カクラン	2期初頭～8期	須恵器		朱墨硯兼ねる
4	348	10	温硯	屋代	SB6106	切り合いから古墳8期新相～古代5期後半	須恵器	55-4	
5	348	11	温硯	屋代	SD8049	1期前半 (5水田)	須恵器		底部のみ
6	245	6	朱墨硯	屋代	SB39 カマド周辺	8期前半	黒色土器B皿B		底部の高台内面に朱墨付着
7	262	2	朱墨硯	屋代	SB4008 1層.4層	7期後半	須恵器杯B VI		内面に朱墨付着、S B 4030と接合
8	268	3	朱墨硯	屋代	SB4221	6期	須恵器杯A		内面に朱墨付着
9	271	1	朱墨硯	屋代	SB4808	切り合いから6期	須恵器杯A		内面に朱墨
10	272	6	朱墨硯	屋代	SB5012	7期前半	須恵器杯A		内面に朱墨
11	284	2	朱墨硯	屋代	SB6014	7期後半	黒色土器A杯A II		朱か鑑定必要、内面に朱
12	242	3	朱墨硯	更埴条里	SB9080	7期	須恵器杯A		内面に朱墨
13	305	2	朱墨硯	屋代	SD6012	6期前後	須恵器杯A		内面に朱
14	327	4	朱墨硯	屋代	SD7065	1期前半 (5水田)	須恵器杯G		内面に朱墨
15	328	43	朱墨硯	屋代	SD8044	1期	須恵器杯A	53-3	内面に朱、口縁にむけて筆を絞った跡あり
16	333	2	朱墨硯	屋代	SK1069	6期	須恵器杯A		内面に朱
17	338	1	朱墨硯	屋代	SK6462	5～6期	須恵器杯A		内面に朱、灯明具2も兼ねる
18	341	11	朱墨硯	屋代	ST3003 盛土	8期前半	灰釉陶器椀 or 皿		内面朱墨硯 外面転用硯
19	343	1	朱墨硯	更埴条里	K地区 カクラン		灰釉陶器椀A		底部外面に朱墨
20	343	7	朱墨硯	更埴条里	K地区 III層	7期後半～9期	灰釉陶器椀A		内面見込み部に朱
21	346	4	朱墨硯	屋代	IV区 IV-1層	5期後半～8期	黒色土器B椀 or 皿B		底部外面に朱
22	347	2	朱墨硯	屋代	I区 O12 III-1層 VI-Y5-1層	1～4期	須恵器杯A		内面に朱
23	347	6	朱墨硯	屋代	I区 S18 III-1層	5期後半～8期	灰釉陶器丸皿 K14		底部外面に朱
24	347	4	朱墨硯	屋代	I区 N S4 III-1層	5期後半～8期	須恵器杯A		内面に朱
25	319	31	朱墨硯?	屋代	SD7047	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯A		底部外面に直径1cm程の朱?が付着
26	230	1	転用硯	屋代	SA7001	2期への5期後半～8期の混入	須恵器杯A		内面見込部がつるつるしている 墨書も兼ねる
27	266	5	転用硯	屋代	SB4205	1期後半	須恵器高盤		内面見込み部転用
28	272	5	転用硯	屋代	SB5004	1期後半	須恵器杯B II		内外面に墨痕
29	274	4	転用硯	屋代	SB5023 掘方	6期	須恵器杯A		内面見込み部転用
30	277	5	転用硯	屋代	SB5056	7期前半	須恵器杯A		すった面はない。墨痕が残る
31	281	4	転用硯	屋代	SB5129	5期のSBへの2期前後の混入	須恵器高盤		杯部内面がつるつるしている
32	290	1	転用硯	屋代	SB6085	8期前半	須恵器杯A		内外面断面にも墨 削状態で使用の可能性あり
33	308	24	転用硯	屋代	SD7030	2期 (3水田)	須恵器杯B II		内外面に墨痕、内はつるつる、外はつるつるなし
34	308	32	転用硯	屋代	SD7030	2期 (3水田)	須恵器高盤		盤部内面に墨痕、つるつるしている
35	308	16	転用硯	屋代	SD7030	2期 (3水田)	須恵器杯B II		内面がつるつるしている、墨痕もある
36	310	2	転用硯	屋代	SD7031	2期	須恵器杯B IV		内面見込部がつるつるして黒痕あり
37	311	9	転用硯	屋代	SD7032	2期 (3水田)	須恵器高杯		杯内面がややつるつるしており、僅かに黒痕
39	313	31	転用硯	屋代	SD7035	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器高盤		盤内面がつるつるしており、全面に墨痕残る
40	323	39	転用硯	屋代	SD7046 下層	1期後半 (5水田)	須恵器杯B II		内面に墨付着、内面がつるつるしている
41	311	10	転用硯	屋代	SD8028 3層	2期 (3水田)	須恵器杯B II		内面に黒痕、つるつるしている
42			転用硯	屋代	SD8028 4層	2期 (3水田)	須恵器杯B		内面に黒痕、つるつるしている 実測不能
43	312	39	転用硯	屋代	SD8028 5層	2期 (3水田)	須恵器高盤		内面に黒痕、つるつるしている
44	321	1	転用硯	屋代	SD8032 30層以下	1期後半	須恵器杯蓋B		蓋部内面に黒痕、つるつるなし
45	317	18	転用硯	屋代	SD8040	2期 (2期初頭、4水田)	須恵器高杯		杯部内面がつるつるしている
46	346	1	転用硯	屋代	5水田	1期後半 (5水田)	須恵器杯A		内面つるつる、墨痕
47	346	1	転用硯	屋代	VII区	5期後半～8期	須恵器杯A		内面つるつる墨痕 底部再利用も兼ねる
48	348	12	転用硯	屋代	I区 NO11 III層	不明	須恵器甕胴部破片	54-7	内面つるつる
49	316	10	転用硯?	屋代	SD7038	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯A		つるつるはしていないが、内外面に墨?
50	316	18	転用硯?	屋代	SD7038	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯B II		つるつるしているが、内外面に墨?
51	319	26	転用硯?	屋代	SD7047	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯A		つるつるした面なし、内外に墨痕、実測不能

松本市岡田町遺跡等に類例がみられる。

(3) 朱墨硯 (表24 図32-1 図32-2 図32-3)

『古代1編』関係では屋代遺跡群で19例、更埴条里遺跡で3例の出土がみられる(表24)。時期別にみた推移は図32-1のようであり古代9期以降もわずかに出土例はみられる。土器の種類でみると須恵器が多く、器種別にみると杯Aが最も多く、ついで椀・皿類の順となる(図32-2・図32-3)。

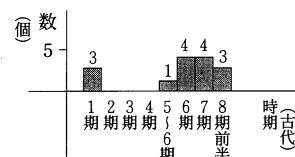


図32-1 朱墨硯 時期別推移

須恵器	灰釉陶器	黒色土器
14点 63%	5点 23%	AorB 3点14%

図32-2 朱墨硯 土器の種類

杯A	椀・皿類	その他
12点 54%	7点 32%	3点14%

図32-3 朱墨硯 器種別割合

図32 朱墨硯の諸特徴の分析

『古代1編』関係では屋代遺跡群で25例みられる(表24)。朱墨硯に転用されているものは朱墨硯の項に入れた。墨痕の残るもの、つるつるしているもので判断した。時期別にみた推移は図33-1のようであり、1期後半～2期にかけて多くみられる。土器の種類でみると須恵器のみにみられ(古代9期以降は灰釉陶器のみのようである)、器種別にみると杯A、杯Bが多い。高盤、高杯も一定量みられる(図33-2・図33-3)。珍

しい例としては図版348-12 (PL54) で、屋代遺跡群出土で、須恵器の甕の胴部破片を転用している。割れ口は丸く丁寧に調整してあり、内面が研磨によりつるつるしている。

4 土 錘 (図版349~351 表25 図34 PL56)

『古代1編』関連で、時期が特定できる出土状況を示したものは127点(屋代遺跡群124点、更埴条里遺跡3点)である。その他包含層出土のものは84点である(屋代遺跡群72点、更埴条里遺跡12点)。表25には図化できたもののみ示した。完形例のみ計測値を掲載してある。時期ごとにみられる量的変化は、図34に示したとおりである。欠損のものも含め、時期の特定できるもので資料化した。古墳時代以来出土例がみられ、古代6期以降急増し、特に8期前半の出土量は目をみはるものがある。同一遺構から複数出土する例も多いが、単独での出土例も多い。土器の種類では土師質が圧倒的で、まれに須恵質のものがみられる。

5 紡錘車 (図版351~352 表26 図35~36)

『古代1編』に関連する時期の紡錘車の出土例は、石製品、滑石製品、鉄製品も含めて61例確認できる。そのうち土製に関するものの概要を表26に示した。時期別の個数の変化は、古代0期では確認できなかったが、古代1期前半から8期前半までほぼまんべんなく出土例がみられ、墨書土器や灯明具のような、ある時期に爆発的に増加するといった傾向は見られない(図35)。また、時期別に材質の変化をおうと古代3~4期頃までは滑石製、石製、土製が主体を占めるが、古代5期から鉄製がみられ始め、以後、鉄製品の占める割合が高くなっている(図36)。

6 その他の土製品 (図版352 6~15 表27 PL55~56)

上記以外の土製品は表27に示したとおりである。ガラス小玉の鋳型(図版352-144 PL55)の説明については玉関係遺物の項参照。図版352-136の獣脚は更埴条里遺跡K地区III層出土で『中・近世編』対象だが類例が

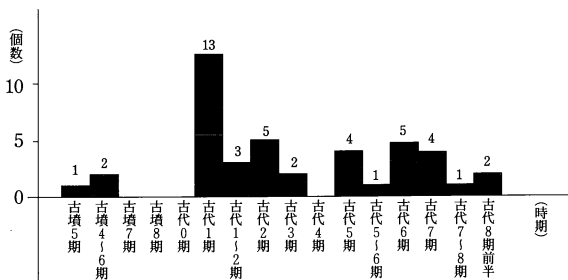


図35 紡錘車の消長

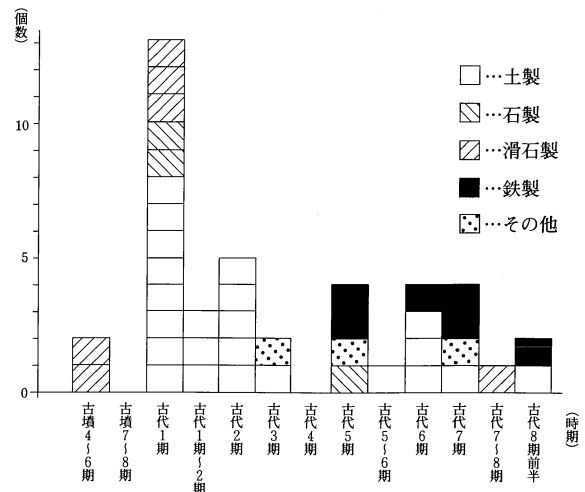


図36 紡錘車の時期的材質変化

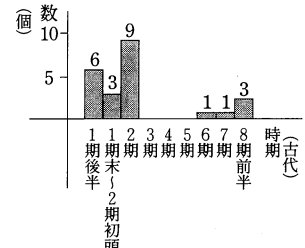


図33-1 転用硯 時期別推移

須 恵 器	
25点	100%

図33-2 転用硯 土器の種類

杯 A	杯 B	高盤	高杯	その他
8点 31%	9点 35%	5点 19%	3点 12%	1点 3%

図33-3 転用硯 器種別変化

図33 転用硯の諸特徴の分析

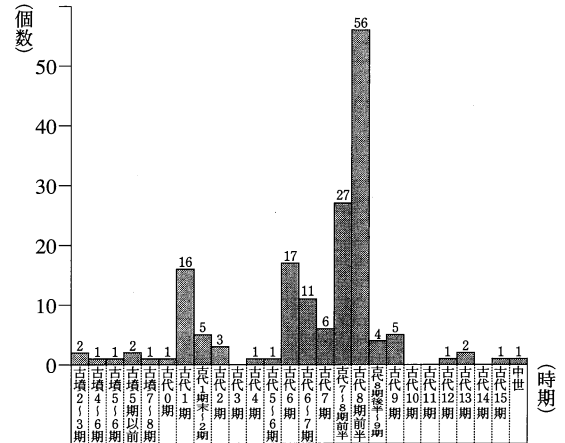


図34 土錘の消長

第3節 土製品

表25 土錘一覧表

重量はg、長さはcm

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構・層位	時 期	重量	長さ	最大幅	最小幅	土器質	PL	備考・特徴
1	349	39	更埴条里	SB9001	6期	39.3	5.2	3	1.8	土師質	56-16	
2	349	40	更埴条里	SK9129	7～8期					土師質		
3	349	41	屋代	SB47	8期前半	55.4	4.8	3.2	2.4	土師質	56-17	
4	349	42	屋代	SB55 1層	8期前半	42.5	6.6	2.6	1.4	土師質	56-13	
5	349	43	屋代	SB57	8期前半	48.5	4.7	2.5	1.7	土師質		
6	349	44	屋代	SB57	8期前半	28.8	4.7	2.5	1.7	土師質		
7	349	45	屋代	SB74a	8期前半	54.8	5.3	3	2	土師質		
8	349	46	屋代	SB125	切り合いから6期	38	7.1	2.5	1.1	土師質	56-9	
9	349	47	屋代	SB3006 覆土上層	8期前半	125.3	7.1	4	3	土師質	56-19	
10	349	48	屋代	SB3006	8期前半	111	6.9	3.6	2.2	土師質		
11	349	49	屋代	SB3006	8期前半	116.5	7.4	3.6	3.1	土師質		
12	349	50	屋代	SB3008	8期前半	82.1	8.4	3.3	1.5	土師質		
13	349	51	屋代	SB3015 カマド	8期前半	45.5	7.3	2.9	1.8	土師質	56-14	
14	349	52	屋代	SB3029	7期前半					土師質	56-11	
15	349	53	屋代	SB4009	7期前半					土師質	56-12	
16	349	54	屋代	SB4211 覆土上層	6期(3～4期の可能性あり)	51.4	8	2.9	1.6	須恵質	56-10	
17	350	55	屋代	SB4516	切り合いから7期後半	74	7.2	3.1	2.2	土師質	56-18	
18	350	56	屋代	SB5040 トレンチ	5～6期					土師質		
19	350	57	屋代	SB5046 掘方	7期後半～8期前半	50.4	8.2	2.6	0.8	土師質		
20	350	58	屋代	SB5055 掘方	掘方出土は2期、覆土は6期	60.2	7.5	2.7	1.1	土師質	56-8	
21	350	59	屋代	SB5090	1期	70.1	9.8	3	1.1	土師質	56-3	
22	350	60	屋代	SB5092 床	0期	60.6	8.3	2.7	1.2	土師質	56-2	全面磨き
23	350	61	屋代	SB6025	1期前半					土師質		全面磨き
24	350	62	屋代	SB6036	4期					土師質		
25	350	63	屋代	SB6074	7期	4.7	3.8	1.1	0.8	土師質	56-28	
26	350	64	屋代	SB6091	切り合いから6期					土師質		
27	350	65	屋代	SC5	7期後半～8期	3.8	3.1	1.1	4	土師質	56-27	
28	350	66	屋代	SC6	7期	4	3.2	1.1	0.5	土師質	56-29	
29	350	67	屋代	SC219	7～8期					土師質		
30	350	68	屋代	SC7002	8期以前	63.8	9.1	2.8	1.9	土師質		第1水田対応
31	350	69	屋代	SD58	8期前半	56	6.1	3.1	1.7	土師質		
32	350	70	屋代	SD62	8期前半	30.7	5.9	2.4	1.7	土師質		
33	350	71	屋代	SD126 上層	8期前半	44.8	5.8	3.1	2.2	土師質		
34	350	72	屋代	SD126	8期前半	43.8	6.8	2.6	2	土師質		
35	350	73	屋代	SD126	8期前半	54.2	6	3.1	1.5	土師質		
36	350	74	屋代	SD126	8期前半					土師質	56-26	
37	350	75	屋代	SD126	8期前半	71.4	7.4	3.1	1.5	土師質		
38	350	76	屋代	SD272	7～8期前半	72.1	7.4	3.2	1.9	土師質		
39	350	77	屋代	SD273	7期後半～8期前半	60	7.9	2.8	1.8	土師質		
40	350	78	屋代	SD280	7～8期前半	103.1	9	3.3	1.5	土師質		SD281も含む
41	350	79	屋代	SD287	8期前半	39.7	7	2.3	1	土師質		
42	350	80	屋代	SD288	7～8期	63.4	7.7	2.9	1.7	土師質		
43	350	81	屋代	SD2253-SD2254	6期前後	146.5	5.6	4.5	4.1	土師質	56-25	
44	350	82	屋代	SD2432	7期後半～8期前半	50.2	6.8	2.9	1.7	須恵質		Bタイプの須恵器
45	350	83	屋代	SD4515	7期後半～8期前半	60.6	6.3	3.3	2.2	土師質		
46	350	84	屋代	SD4516	8期前半	85.4	6.1	3.8	2.3	土師質	56-21	
47	350	85	屋代	SD4516	8期前半	85.5	6.3	3.4	1.6	土師質		
48	350	86	屋代	SD4531	5期後半～8期?		6.6	2.4	1.9	土師質		
49	350	87	屋代	SD4532	6期					土師質		
50	350	88	屋代	SD4532	6期	61.3	6.2	2.8	2.1	土師質	56-15	
51	350	89	屋代	SD7025	6期末～7期前半	62.3	7.3	3.1	2.2	須恵質		S D7026も含む
52	350	90	屋代	SD7030	2期(3水田)	26	5.3	2.1	1.2	土師質	56-7	
53	350	91	屋代	SD7030 最下層	2期(3水田)					土師質	56-6	
54	350	92	屋代	SD7036 トレンチ	1期末～2期初頭(4水田)	19.8	4.6	2	1	土師質		
55	350	93	屋代	SD7048	1期後半(5水田)	28.8	6.4	2.1	0.7	土師質	56-5	
56	350	94	屋代	SD7051	1期後半(5水田)	26.1	7.9	1.7	0.9	土師質		
57	350	95	屋代	SD7051	1期後半(5水田)	29.1	7.9	2	0.6	土師質	56-22	
58	350	96	屋代	SD7058	1期後半(5水田)	23.2	6.2	1.8	0.8	土師質	56-4	
59	350	97	屋代	SD7068	古墳5～6期(古相)	25	5.7	2.3	0.8	土師質	56-1	『弥生・古墳編』報告漏
60	350	98	屋代	SD8028 5層	2期(3水田)	194.3	6.5	4.8	3.2	土師質	56-24	
61	350	99	屋代	SK1147	8期前半	67.7	8.3	3.1	1.1	土師質		
62	350	100	屋代	SK4226	2期初頭～5期前半	17.2	6	1.5	0.7	土師質		
63	350	101	屋代	SQ3001	7期後半～8期前半	75.3	8.3	3.1	1.7	土師質		
64	350	102	屋代	SQ3001	7期後半～8期前半					土師質		
65	351	103	屋代	ST107	6～7期	115	8.3	3.5	1.7	土師質		
66	351	104	屋代	ST3001 東溝	8期前半	43	5.6	2.7	2.4	土師質		
67	351	105	屋代	ST3002 IV-1層上面	8期前半	101.3	7	3.7	2.9	土師質		
68	351	106	屋代	ST3005	8期前半	121.9	7.2	3.9	3	土師質	56-20	
69	351	107	屋代	SX4	6～7期	25.1	4.4	2.7	1.7	土師質		
70	351	108	屋代	SX4	6～7期	134	9.3	3.7	1.9	土師質		
71	351	109	屋代	SX4	6～7期	73.5	8.7	2.9	1.4	土師質		
72	351	110	屋代	SX4	6～7期	75.5	8	3.3	1.8	土師質		
73	351	111	屋代	SX4	6～7期	59.5	7.2	3	1.8	土師質		
74	351	112	屋代	SX7035	検出面から1期前半					土師質		
75	351	113	屋代	第4水田	1期末～2期初頭(4水田)	26.6	7.7	1.8	0.9	土師質		
76	351	114	屋代	第4水田	1期末～2期初頭(4水田)	28.9	8.7	1.8	0.9	土師質	56-23	

表26 紡錘車一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時期	最大厚	最大径	最小径	孔径	重量	土器質	備考
1	360	7	更埴条里	SB9001	6期	0.2	5.5	5.5	0.5	9	鉄製	上先端部一部欠
2	352	133	屋代	SB4207	6期	1.0	7.0	6.2	0.9	44.6	須恵質	杯底部転用
3	351	127	屋代	SB4220	4期も含めそれより古い	3.6	7.9	4.8	1	220	土師質	
4	351	128	屋代	SB4228 床	3期	4.9	6.8	4.7	0.8	280	土師質	
5	361	64	屋代	SB4809	7期後半	0.5	5.8	5.4	0.6	17.4	鉄製	軸の一部を欠
6	352	134	屋代	SB5004 床下	1期後半	0.8	7.6	6.1	0.9	38.7	須恵質	杯底部転用
7	362	67	屋代	SB5005	7期前半	1.2	5	4.3	0.6	39.2	鉄製	軸部は一部を残し欠
8	353	21	屋代	SB5036	切り合いから5期前後	0.8	5.2	5.2	0.9	19.5	石製	円板状
9	362	77	屋代	SB5037 床面	5期	0.4	5.1	5.1	0.4	15.9	鉄製	軸先端部欠
10	351	115	屋代	SB5090 覆土下層	1期	2.6	4.3	2.3	0.8	40.5	土師質	
11	351	116	屋代	SB5090 覆土下層	1期	2.0	3.5	2.2	0.6	19	土師質	
12	353	22	屋代	SB5090	1期	1.6	4.1	2.6	1	8.8	滑石	1/2欠損、鋸歯文
13	353	23	屋代	SB5090	1期	1.9	3.8	2	0.5	27.1	滑石	一部欠け、丁寧な削り
14	351	118	屋代	SB5114	5～6期	2.4	0.5	0.4	0.7	22.7	土師質	1/2欠損
15	351	125	屋代	SB6053 カマド前	2期	3.7	5.5	3.6	1.1	98.5	土師質	
16	351	124	屋代	SB6053 カマド脇	2期	2.8	4.6	3.7	0.8	60.3	土師質	焦げあり
17	351	126	屋代	SB6053 覆土下層	2期	2.8	6.9	3.8	0.8	125	土師質	
18	362	93	屋代	SB6062	8期前半	0.6	4.5	4.1	0.5	21.3	鉄製	軸部は一部を残し欠
19	354	27	屋代	SB6082 床	7～8期	1.1	4.3	2.8	0.7	9.5	滑石	1/2欠損
20	351	123	屋代	SB6107	6期	2.4	4.0	3.7	0.7	32.5	土師質	平筒状
21	352	130	屋代	SB6112 P3	1～2期	3.9	6.8	4.7	1.3	202	須恵質	轆轤齧で痕あり
22	354	28	屋代	SB6120	6期	0.8	5.8	—	0.8	25	土製	円板状
23	352	132	屋代	SD4516 I区 V20	8期前半	2.0	8.0	7.7	1.6	171.4	土師質	
24	351	129	屋代	SD7029 3～4層	2期	3.5	6.1	5.2	0.9	81.6	土師質	約1/2欠損
25	351	117	屋代	SD7030 下層	2期(3水田)	2.6	—	4.8	0.8	35.9	須恵質	1/2強欠損
26	351	120	屋代	SD7035 I区 I18 底部	1期後半(1期末、4水田)	1.4	4.2	3.9	0.4	18.5	土師質	円板状、一部磨耗
27	351	121	屋代	SD7035 ベルト中	1期末～2期初頭(4水田)	2.9	4.0	3.8	0.5	23.6	土師質	1/2欠損
28	355	42	屋代	SD7049 I 117	1期後半(5水田)	2.6	4	2.8	0.6	19.1	石製	1/2欠損
29	352	131	屋代	SD8021	4～7期(4～5期中心)	1.9	4.9	—	0.8	22.2	土師質	算盤玉状
30	351	119	屋代	SD8032 3層	5期後半～8期	4.0	6.5	5.0	0.6	57.3	土師質	約2/3欠損
31	351	122	屋代	SD8032 39層	1期後半	2.7	4.4	3.9	0.8	60	土師質	
32	363	125	更埴条里	SK9435	5期	1.1	6.3	6.1	1	35.9	鉄製	軸部は一部を残し欠
33	363	128	屋代	SK417	5期後半～8期	—	—	—	—	0.9	鉄製	先端鉤部
34	356	61	屋代	平安盛土中		2	4.2	3	0.8	46.1	滑石	

2例あるため、ここに掲載した。図版352で、137は土製の支脚の可能性が高い。139・140は匙型の土製品である。141～143は似たような形状をしているが、142は孔は貫通しており、141は途中まで細い孔が穿たれ、143(PL56)はくびれが強いが孔はない。用途は不明である。

表27 その他の土製品一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺物名	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類	PL	備考・特徴
1	352	135	獣脚	更埴条里	K地区 X KF18 IV-KK-1b層		土師器		
2	352	136	獣脚	更埴条里	K地区 III層		土師器		
3	352	138	獣脚	屋代	I区 OK地区 I～II層		須恵器		
4	352	139	匙型土製品	屋代	㊟a区 IV層上面		土師器		
5	352	140	匙型土製品	屋代	IV地区 H2.H7		土師器		
6	352	137	筒形土製品	屋代	SD7035	1期末～2期初頭	土師器		カマドの支脚か
7	352	141	小型土製品	屋代	I区 N25 IV-Y5-1層		土師器		貫通しない孔 20.2g
8	352	142	小型土製品	屋代	SB6025	1期前半	土師器		貫通する孔 17.7g 2分の1欠損
9	352	143	小型土製品	屋代	SD8021	4～7期(4～5期中心)	土師器	56-31	52.5g

註1 PLの掲載順は、図版の順番と多少異なるところがあるので注意。

引用・参考文献

五十嵐幹雄 1984 「温硯考」『上田・小県』小県上田教育会

松本市教育委員会 1993 『松本市二反田遺跡 松本市岡田町遺跡』

第4節 石器・石製品

1 概要 (図版353～356)

IV-1層上面、およびIV・V層中で検出された遺構から出土した石器・石製品(玉類を除く)は424点に及ぶ。ここでは、明らかに混入品と判断される石鏃などは含めていない。また、屋代遺跡群④～⑥区では古墳、古代、中世の遺構検出が同一面となる地点があった。そのため、層位的にも形態的にも分離が不可能だった資料については本編に含めた。円礫、扁平礫、楕円礫、角礫などの搬入礫も多く認められたが、地区毎に採取基準が異なっており統計的な処理に難があるため取り上げなかった。

古代では、砥石、石臼の増加が顕著である。また、竪穴住居壁際床面上に楕円礫が集中して出土する例が増加する。遺構出土の資料については表28に掲載した。

2 各器種の属性

A. 石 錘

狩猟、漁撈関係の石製品は、鉄製や土製に変化している。石錘としたものは、扁平な楕円礫の両側縁に打ち欠きが施されている石製品である。この時期に属する例は5点である。長さ9cm弱、重さ160～260gのI類、と長さ6cm前後、重さ50g前後のII類に分かれる可能性があるが、資料が少なすぎるため明確ではない。図版353-12に図示した例はII類に属す。片側縁は自然の窪みを利用している。

この時期、漁撈関係の錘には主として土錘が利用されている(第5章3節)。I類とした石錘はこれらの土錘よりはるかに重く、道具の違いによる漁業形態が異なっていた可能性がある。石錘はその後も量は少ないが、古代後半から中世にかけて若干増加傾向にある。

B. 磨石・凹石・敲石

する、たたくなどの作業を想定できる資料を集成した。磨石、凹石の分類は、最も頻繁な用法に基づき類別した。敲石としたものは棒状礫の先端に敲き痕のあるものに限定した。また、磨痕のある軽石は軽石製品の項にまとめた。この時期に特徴的に存在する石臼については次項に記載する。

総数59点である。磨石は51点で、このうち敲きによる浅い凹みを有する例は8点である。凹石は5点、敲石は3点を数える。

C. 石 臼

比較的大型の円礫の一面あるいは両面に深い凹みを形成する例を石臼とした。凹石に比べ長さ10cm以上の大型品が大半で、小型の例でも凹みが深くなっている。34点が見つかった。屋代遺跡群④～⑥区集落とその北側の溝・流路内からの出土が圧倒的に多く、このほかでは、更埴条里遺跡K地区集落で1点見つかったにすぎない。また、時期的には古代1～2期に19点、3～5期に1点ずつ、7～8期前半に8点であり、古代1～2期に集中する傾向が認められる。

石臼は平面の長幅比がほぼ1:1から1:1.5の間にまとまる(図37)。大きさには、9.1×4.8cmの小型品から24.5×24.3cmの大型品までバラツキがある。凹みは凹石に比較して深くなるが、10cmを

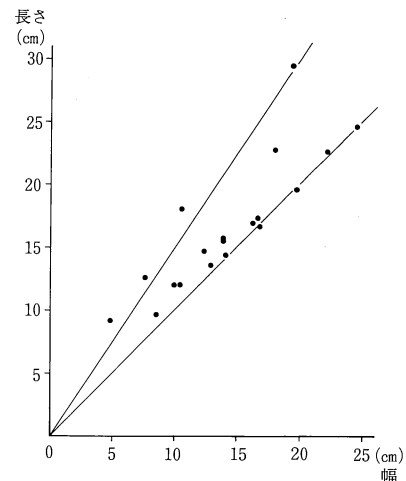


図37 石臼の法量相関グラフ

超える場合は少なく、凹みがある程度まで達すると裏面を利用している。

D. みがき石

こする、みがくなどの作業が想定できる資料である。礫表面に擦痕や線状痕が確認できる。線状痕が不明瞭な玉石を含め114点を採取した。7 cm以下、平均3～4 cmと小型で、扁平な楕円礫が大半を占める。

E. 台石

する、たたく（つぶす）などの作業の台として、置かれて使用されたと考えられる資料を台石とした。12点確認されている。鍛冶関連遺構の可能性を持つSB74から2点見つかっている。このほか、鍛冶関連では金床石の破片が出土している（第2章第4節）。

また、SK5176例（図版356-52）は表面にテカリがあり、皮革製品などの加工に利用した可能性も想定される。

F. 砥石

鉄製品などを研ぐ作業が想定できる資料で、142点が出土した。弥生・古墳時代に比較して飛躍的に増加する。竪穴住居跡出土点数を見ると、1～3期までは屋代遺跡群④～⑥区集落で少数認められる程度である。5期に竪穴住居数が増加するのに伴って砥石も増加に転じ、6期以降急増する。

石材は砂岩、頁岩、凝灰岩で、わずかに軽石が加わる^(註)。軽石についてはI. 軽石製品に含めた。完形品は少ないが、砂岩に大型品が多く、頁岩や凝灰岩に小型品が多い（図38）。『弥生・古墳編』の大型（13cm以上）・中型（9～13cm）・小型（9 cm以下）の基準はほぼ適応できる。ただし、中型品がやや大きくなる傾向が見える。

形状は、凝灰岩製では成形加工がなされ形の整った例が多く、紐を通すために1穴のある例（図版355-46ほか）も認められる。大型品には河原石をそのまま用いた例が存在する。

刃物痕の見られる石製品 このほか、砥石、あるいは砥石以外の石製品などに刃物痕が付く例が増加する。砥石以外では、軽石製品（図版354-26）、石臼（図版355-39ほか）、閃緑岩製の礎石？（図版355-49）などあらゆる石を利用している。砥石や軽石に見られる刃物痕は筋が細く、浅い例が多い。これに対し、石臼や礎

石？などを利用した場合には太く、深い痕跡が認められる。対象とした刃物の違いによる差と考えられる。

G. 紡錘車

この時期の紡錘車は石製のほか、鉄製、土製、土器片製、鹿角製など多様になる。全点数は61点であり、そのうち石製は17点である。

形状は断面台形になるものと長方形になるもの、細長い楕円形をなすものに分類できる。大きさは、上辺径3.5～5.8cm、平均4.7cm、重さは18～64 g、平均41.5 gである。他の素材に比べ重いものが多くなっている。重量比は土製紡錘車の項に記載した（表26）。

線刻の施された例が屋代遺跡群⑤区 SB5090（図版353-22）から出土している。更埴条里遺跡K地区 SB9003（図版353-2）では鉄製の軸部が付いた状態で見つかっている。また、特筆すべき例では、破損した後に全面に漆を塗布した例が屋代遺跡群⑥区 SD7046（図版355-41）から出土しており（第7章4節参照）、絹糸によると思われる緊縛痕が漆面に付着している。

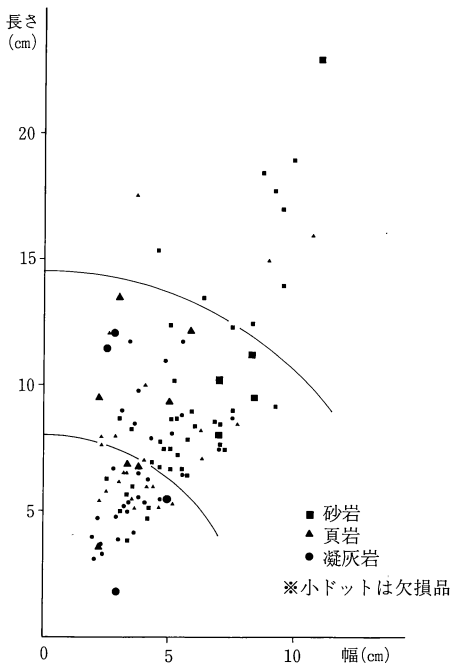


図38 砥石の法量相関グラフ

H. 「いわゆる薦編石」の可能性を持つ礫

長さ10cm前後の楕円礫のうち、竪穴住居床面の特定な位置に集中して出土した礫を「いわゆる薦編石」の可能性を持つ石錘ととらえ、計測値をグラフ化した(図39)。出土状況を図示した例は、SB4220(図版138)、SB5031(図版141)の2例である。

これらの礫には加工は認められない。形状は楕円形を呈するものが大半である。大きさは、長さ約8~15cmに収まるものが大半を占める。重量は60g~860gとバラツキが大きいが、6グループぐらいのまとまりを形成しそうである。屋代遺跡群②区SB121では、100g以下のものだけがまとまって出土している。

I. 軽石製品

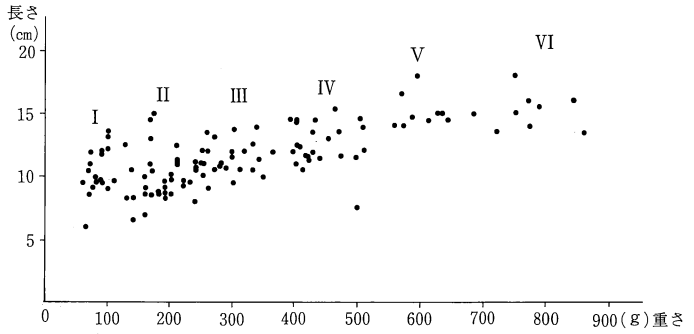
軽石製品は79点を採取した。用途は多岐にわたっており、石臼(図版353-5)、磨石(図版354-26)、紡錘車?(図版353-13)、表裏面に計4ヵ所の穿孔が見られる用途不明品(図版355-45)などがある。最も多い例は磨面のあるもので、74点を数える。軽石の加工しやすさを利用し、曲面を磨面とした例が認められる(図版353-17)。

J. 石帯

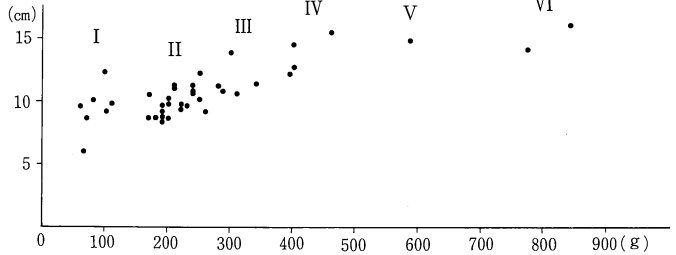
屋代遺跡群①区SB37(8期前半)より3点まとまって出土している。一辺3.7~3.9cm、厚さ0.8cm、重さ27~29gを測る。ほぼ同時期のSB 8からは、青銅製飾板(図版359-2)が出土している。

註 石材の鑑定については砥石にのみ限定し、市川桂子がおこなった。

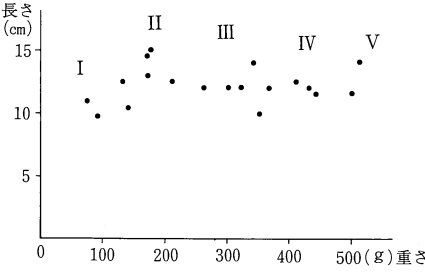
A. 全資料



B. SB5031壁際集中



C. SB4220壁際集中



D. SB121壁際集中

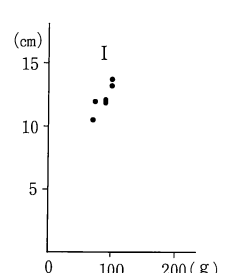


図39 楕円礫(いわゆる薦編石)の法量相關グラフ

表28-(1) 遺構別石器・石製品一覧表 1

更埴条里遺跡

遺構記号	遺構番号	遺構時期	石錘	石臼	磨石	凹石	敲石	台石	砥石	みがき石	軽石製品	紡錘車	その他	合計
SB	9001	6							1					1
SB	9003	7後		1								1		2
SB	9009	7						1						1
SB	9036	6						2						2
SB	9059	6						4						4
SB	9067	8前		1										1
SB	9069	6						3						3

遺構記号	遺構番号	遺構時期	石錘	石臼	磨石	凹石	敲石	台石	砥石	みがき石	軽石製品	紡錘車	その他	合計
SB	9071	6~7		1						1				2
SB	9072	6~7			2									2
SC	1	8前								1				1
SC	902	8前								1				1
SC	1002	8前								1				1
SD	1022	6?								2				2
SK	9287										1			1

※ ゴシック体は図版に掲載した資料

第5節 玉関係遺物

1 概要

屋代遺跡群の玉類の出土数は900点を超える。しかし多くは遺構に伴わない包含層や、住居跡の覆土の出土であり、所属する時期を明確にできない。その内確実に古墳時代の遺構に伴うものについては『弥生・古墳編』において報告を行った（長野県埋蔵文化財センター1998）。『古代1編』では、古墳時代の遺構に伴わなかった器種である双孔円板、大型の白玉を主に掲載した。また、ガラス玉はガラス玉鋳型の存在に関わって成分分析を行ったため、全点掲載した。なお、⑥区の湧水に関連する祭祀遺構に伴うものは器種を網羅する形で取り上げた。

2 各製品の説明

A. 石製模造品（図版357・358、PL65）

双孔円板（1・2・6・25・44）古墳時代特有の石製模造品のひとつである。屋代遺跡群では6点出土し、内5点は遺構に伴うが、古墳編の対象となる6世紀後半までの遺構からは出土していない。25・44は古代1期、2は2期、1は6期に属する。

勾玉模造品（17・69）古墳期のもとはやや雰囲気異なるが勾玉模造品の系譜を引くものと考えた。いずれも⑥区の祭祀に関わる湧水坑の出土で、1期に属する。

なお、15は下半が欠損して全容は不明だが、SD7035湧水坑付近の出土で祭祀に関わる石製品である可能性が高い。

B. 勾玉・子持勾玉（図版357・358、PL65）

81は8期前半に属する礎石建物であるS T 3003（図版156）の盛土中で出土した。80のガラス玉も同様な出土状況を示しており、両者とも建物造営に関わる儀礼的な意味合いで、基礎となる盛土に含められた可能性が高い。

78は⑥区の1期前半に属する自然流路SD7067から出土した子持勾玉である。断面は楕円形で、頭尾の先端部がわずかに水平にカットされている。背部の子勾玉は根本で連結する。脇部はこれと比べると独立した感がある。子持勾玉の分類と編年には諸説あり、大平茂氏がそれらをまとめ、自説を提示している（大平1989）。これらを参考にすると、7世紀代の例はかなり扁平となり、78とは形状が大きく異なる。

やはり古墳中期の例と似た形状をもつようだ。遺構の年代観とは合わないため、混入品の可能性がある。しかし、⑥区では古墳中期から古代にかけて連続と祭祀遺構が確認されており、祭祀行為の中で伝世されてきたと考えることもできるだろう。

C. 白玉（図版357・358、PL65）

玉類の中で最も出土量の多いのが白玉である。古墳時代の遺構から出土した白玉については、直径を基準にして時代的な傾向を示した（宮島1998）。屋代遺跡群の場合、直径4～5mmをピークとし、古墳6期以降に6mmを超えるものが目立つようになる。5、8～11、13、77は全て古代0期以降の遺構から出土した直径1cmを超える大型のもので、7世紀以降の白玉にみられる特徴といえる。8～10、13は滑石製でやや粗雑な作りであるが、5・11・77は胴部が太鼓状に張り出す精製品でやや傾向が異なる。77は滑石製だが5と11の素材は不明で、あるいは特殊な製法によるものかもしれない。

しかし、7世紀以降の白玉の全てが大型化するわけではなく、⑥区の祭祀遺構と考えられる湧水坑や湧水

溝中から出土した白玉のほとんどは古墳時代のものと変わらない直径である。胴部に稜線をもつものや、非常に扁平なもの、さらに18のように直径が2.5mmという非常に小型のものも存在する。このように古代においては、古墳時代の伝統をひく大きさと形状をもつ白玉と古代特有の大型の白玉が混在していたことがわかる。ただその用法が同一であったかどうかは今後の検討課題である。

D. ガラス玉、ガラス玉鑄型 (図版352、PL65)

古代のガラス玉は包含層出土で、時期の特定ができないものがほとんどであるが、3・7・12・14は2期以前に属し、80は8期前半と時代が下る。それ以外は包含層の出土で時期の特定はできない。古墳時代のものも含めガラス玉の成分組成については第7章第3節にその結果を示した。ガラス玉自体の出土数は少ないが、注目されるのはガラス玉の鑄型の存在である。鑄型については土製品144として図を示した。なお、鑄型中の付着物は分析の結果ソーダ石灰ガラスであることがわかり、144がガラス玉を造るための鑄型であったことがこれで判明した。鑄型中のガラスは99としてPL65に示した。

鑄型は土製で、欠損部が多いが側面が一部残存している。表面には直径4.5～5mm、深さ3.5mmほどの円孔が配列する。どの円孔にも中央に1mm弱の小孔があり、裏面に貫通しているものもある。ガラスはこの小孔内に流入した状態で付着していた。側面と円孔の配列がややカーブしている点から、実際は円盤状のものであった可能性が高い。1期後半に属するSB5134から出土した。

小孔にごく細い棒状のものを差し込み、溶かしたガラスを流し込んだものと思われる。岩本圭輔氏は鑄型によるガラス玉製作の実験を行い、小孔には水で溶いた粘土をつけた針金のようなものを立てガラス玉の孔が残るようにする点。埴埴からガラスをとりべにとって、一滴ずつ鑄型の円孔に落とすのは不可能で、埴埴に直接針金などを入れてガラスを落とすしかない点などが明らかにされている(岩本1991)。

ガラス玉鑄型についての考察で清水眞一氏は(清水1992)、奈良県上之宮遺跡、谷遺跡ショブ地区、布留遺跡柚之内木堂方、四条大田中遺跡、大阪府讃良郡条里遺構の5例をあげている。これに飛鳥池遺跡の例(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1991)が加わる。形状はいずれも屋代遺跡群のものと類似し、布留遺跡以外は7～8世紀代に属し、時代も近接する。ただいずれも畿内を中心とする遺跡であり、長野県のような東国で発見された例は希であると思われる。

このように鑄型が存在することは、周辺でガラス玉が生産されていた可能性を示し、特に四条大田中遺跡と飛鳥池遺跡は官衙や寺院に関わる工房の存在が指摘されている。屋代遺跡群の場合は竪穴住居跡の出土であり、何らかの事情で廃棄されたものと考えられる。1期後半以降は木簡の出土量も増加し、官衙の施設の存在も指摘されている時期にあたる。10号木簡にみられる「布手」の記載や⑥区で出土した、木材加工に関わる大量の削屑とともに、周辺に工房が存在していた可能性を示す重要な資料といえる。

E. 玉関係石材 (PL66)

玉の素材となりうると考えられる石100～123を写真によって掲載した。出土したのは⑤区の住居跡、土坑、⑥区の湧水関連の遺構が主で、玉類が多量に出土した地区と一致する。石英、めのうの出土が目立ち、玉生産の素材として持ち込まれた可能性を示唆する。ただ、更埴条里遺跡の古墳4期に属する溝から、めのう製の勾玉が出土したほかは、これらを素材とした製品は出土していない点に問題が残る。しかし4は石英をカットした未製品と思われることから、周辺で加工が行われた可能性がある。

引用・参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生・古墳時代編』
 大平 茂 1989 「子持勾玉年代考」『古文化談叢 第21集』九州古文化研究会
 宮島義和 1998 「玉類・石製模造品」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生・古墳時代編』長野県埋蔵文化財センター

岩本圭輔 1991 「ガラスの工房」『飛鳥の工房』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館

清水眞一 1992 「ガラス小玉鑄型についての一考察」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1991 『飛鳥の工房』

表29 屋代遺跡群石製模造品、鑄型中ガラス計測表

図版番号	写真図版	報告番号	器種	地区	⑥区遺構群	遺構	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	時期
358	65	81	勾玉	③a		ST3003・盛土	8.8	11	6.4	2	2.37	滑石	8期前半
357	65	17	勾玉模造品	⑥b	SD7045=SD8032・SX7036	SD8032 P6	55.3	18	10	6.3	13.88	凝灰岩	1期前半
358	65	69	勾玉模造品	⑥a	SD7062・SX7037	SX7037	40	23	5.4	1.5	8.96	滑石	1期後半
358	65	78	子持勾玉	⑥a	SD7065=SD7067=SD8044 4,5層=SD8049	SD7067	91.2	48	34	5	158.22	滑石	1期前半
357	65	15	石製模造品	⑥a		SD7035	(37.0)	30.8	5	2.8	10.62		1期末～2期初頭
357	65	1	双孔円板	④d		SB4511	22	20	4.4	1.1・1.4	3.38	滑石	6期
357	65	2	双孔円板	④g		SB4811	32	29.5	3.6	1.9・1.9	6.59	滑石	2期
357	65	6	双孔円板	⑤b		SB5090	21.6	17	3.1	1.2・1.1	2.02	滑石	1期
357	65	25	双孔円板	⑥a	SD7045=SD8032・SX7036	SX7036	14	11	2.3	1.4・-	0.56	滑石	1期前半
358	65	44	双孔円板	⑥a		SD7058	17	15	2.5	1.5・1.6	1.32	滑石	1期後半
358	65	99	鑄型中ガラス	⑤b		SB5134	3	1	0.01			ソダ石灰ガラス	1期後半

表30- (1) 屋代遺跡群白玉、管玉、丸玉計測表

図版番号	写真図版	報告番号	器種	地区	⑥区遺構群	遺構	層	高さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	時期
357	65	5	白玉	⑤b		SB5037	1層	8.3	10	3.4	1.36	不明	5期
357	65	8	白玉	⑤a		SB6035		7.5	12.4	2.4	2.06	滑石	6期
357	65	9	白玉	⑤a		SB6040		8.9	12.2	2.2	2.14	滑石	2期
357	65	10	白玉	⑤a		SB6040		7	12	2.45	1.36	滑石	2期
357	65	11	白玉	⑤a		SB6053		9	11	2.6	1.56	不明	2期
357	65	13	白玉	⑤a		SB6119		7.9	13	2.8	1.96	滑石	0期～1期
357	65	16	白玉	⑥b	SD7045=SD8032・SX7036	SD8032 P5		2.7	5.5	1.6	0.11	滑石	1期前半
357	65	18	白玉	⑥b		SD8032	45層	1.4	2.5	0.3	0.01	滑石	1期前半
357	65	19	白玉	⑥b		SD8032	45層	2.3	4.5	0.8	0.06	滑石	1期前半
357	65	20	白玉	⑥b		SD8032	45層	2.5	4	0.87	0.05	滑石	1期前半
357	65	21	白玉	⑥b		SD8032	45層	2	4.9	0.8	0.05	滑石	1期前半
357	65	22	白玉	⑥b		SD8032	45層	3	4.2	0.8	0.09	滑石	1期前半
357	65	23	白玉	⑥b		SD8032	45層	3	5	1.7	0.12	滑石	1期前半
357	65	24	白玉	⑥b		SD8032	45層	1.3	4.8	1.3	0.05	滑石	1期前半
357	65	29	白玉	⑥a		SX7036		2	3.1	0.9	0.04	滑石	1期前半
357	65	30	白玉	⑥a		SX7036		1.7	3.8	1.2	0.04	滑石	1期前半
357	65	31	白玉	⑥a		SX7036		2.8	3.5	0.7	0.06	滑石	1期前半
357	65	32	白玉	⑥a		SX7036		2.5	4	1	0.11	滑石	1期前半
357	65	33	白玉	⑥a		SX7036		1.5	3.9	1.4	0.04	滑石	1期前半
357	65	34	白玉	⑥a		SX7036		2.9	3.9	1.4	0.08	滑石	1期前半
357	65	35	白玉	⑥a		SX7036		1.2	4	1.6	0.06	滑石	1期前半
357	65	36	白玉	⑥a		SX7036		2.6	4.8	0.55	0.07	滑石	1期前半
357	65	37	白玉	⑥a		SX7036		3	4	1.2	0.1	滑石	1期前半
357	65	38	白玉	⑥a		SX7036		2.8	4.8	1.3	0.12	滑石	1期前半
357	65	39	白玉	⑥a		SX7036		2.2	5.1	1.2	0.11	滑石	1期前半
357	65	40	白玉	⑥a		SX7036		3.2	4.9	1.95	0.14	滑石	1期前半
357	65	41	白玉	⑥a		SX7036		3.9	5	1.2	0.18	滑石	1期前半
357	65	42	白玉	⑥a		SX7036		2.5	5.1	1.4	0.15	滑石	1期前半
357	65	43	白玉	⑥a		SX7036		7.1	8.5	2.5	0.95	滑石	1期前半
358	65	45	白玉	⑥a		SD7058		1.8	3.9	1	0.06	滑石	1期後半
358	65	46	白玉	⑥a		SD7058		2	4.3	1	0.09	滑石	1期後半
358	65	47	白玉	⑥a		SD7058		2.8	4.5	1	0.12	滑石	1期後半
358	65	48	白玉	⑥a		SD7058		1.8	5.9	2	0.13	滑石	1期後半
358	65	49	白玉	⑥a		SD7058		3.3	6.2	2.2	0.21	滑石	1期後半
358	65	50	白玉	⑥a		SD7058		3.5	6.7	2.1	0.33	滑石	1期後半
358	65	53	白玉	⑥a	SD7062・SX7037	SD7062		3	6	1.3	0.15	滑石	1期後半
358	65	54	白玉	⑥a		SD7062		2.7	4.5	1.5	0.07	滑石	1期後半
358	65	55	白玉	⑥a		SD7062		4	5.9	1.3	0.16	滑石	1期後半
358	65	56	白玉	⑥a		SD7062		3.3	5.4	1.4	0.12	滑石	1期後半
358	65	57	白玉	⑥a		SD7062		5	7	1.5	0.37	滑石	1期後半
358	65	60	白玉	⑥a		SX7037		2.2	3.2	0.6	0.03	滑石	1期後半
358	65	61	白玉	⑥a		SX7037		4.2	5	1.3	0.17	滑石	1期後半

表30- (2) 屋代遺跡群白玉、管玉、丸玉計測表

図版番号	写真図版	報告番号	器種	地区	⑥区遺構群	遺構	層	高さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	時期
358	65	63	白玉	⑥a	SD7065=SD7067=SD8044 4, 5層=SD8049	SX7037		2	3.9	0.9	0.04	滑石	1期後半
358	65	64	白玉	⑥a		SX7037		2	4.9	1.3	0.05	滑石	1期後半
358	65	65	白玉	⑥a		SX7037		3	6.2	2	0.18	滑石	1期後半
358	65	66	白玉	⑥a		SX7037		4.1	6	1.8	0.19	滑石	1期後半
358	65	67	白玉	⑥a		SX7037		3.1	7.1	2.5	0.18	滑石	1期後半
358	65	70	白玉	⑥a		SD7067		1.6	3.7	0.7	0.06	滑石	1期前半
358	65	71	白玉	⑥a		SD7067		2.6	4	0.6	0.06	滑石	1期前半
358	65	72	白玉	⑥a		SD7067		2.4	4.3	1.1	0.09	滑石	1期前半
358	65	73	白玉	⑥a		SD7067		3.5	6	2	0.2	滑石	1期前半
358	65	74	白玉	⑥a		SD7067		1.2	6	1.9	0.08	滑石	1期前半
358	65	75	白玉	⑥a		SD7067		4.1	6	2.4	0.25	滑石	1期前半
358	65	76	白玉	⑥a		SD7067		4	6.8	2	0.41	滑石	1期前半
358	65	77	白玉	⑥a		SD7067		7.5	13	1.7	1.03	滑石	1期前半
358	65	84	白玉	⑥a		SX7035		2.5	4.4	1.25	0.11	滑石	1期前半
358	65	85	白玉	⑥a	SX7035		2.8	4.3	1.7	0.13	滑石	1期前半	
358	65	86	白玉	⑥a	SX7035		4	5.4	1.4	0.18	滑石	1期前半	
358	65	87	白玉	⑥a	SX7035		3.5	5.8	1.8	0.18	滑石	1期前半	
358	65	88	白玉	⑥a	SX7035		1	6.8	2.2	0.08	滑石	1期前半	
358	65	89	白玉	⑥a	SX7035		1.2	6	2.1	0.07	滑石	1期前半	
358	65	26	管玉	⑥a	SD7045=SD8032・SX7036	SX7036		14	4.8	1.8	0.58	滑石	1期前半
358	65	51	管玉	⑥a	SD7062・SX7037	SD7062		15.3	3	1	0.28	グリーンタフ	1期後半
358	65	52	管玉	⑥a	SD7062	SD7062		10.4	3.8	1.1	0.25	滑石	1期後半
358	65	82	管玉	⑥a	SX7035	SX7035		24.5	8.8	2.9	3.56	滑石	1期前半
358	65	83	管玉	⑥a	SX7035	SX7035		11.5	3.9	1.2	0.29	グリーンタフ	1期前半
357	65	27	丸玉	⑥a	SD7045=SD8032	SX7036		5.8	6.9	1.1	0.33	土製	1期前半
357	65	28	丸玉	⑥a	SX7036	SX7036		9.5	9.1	0.4	0.94	土製	1期前半
358	65	58	丸玉	⑥a	SD7062・SX7037	SD7062		17	18	2.7	5.81	土製	1期後半
358	65	59	丸玉	⑥a	SD7062	SD7062		9	9.8	1.5	0.81	土製	1期後半
358	65	68	丸玉	⑥a	SX7037	SX7037		10	12.4	2.2	1.31	土製	1期後半
357	65	4	未製品	⑤b		SB5030		5.7	5.7		0.25	水晶	2期

表31 屋代遺跡群ガラス玉計測表

図版番号	写真図版	報告番号	器種	地区	遺構(層位)	高さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	時期
357	65	3	ガラス玉	⑤b	SB5004	2.5	3.4	0.6	0.05		さえた青緑	1期後半
357	65	7	ガラス玉	⑤a	SB6004	3.3	4.7	0.6	0.13	ソーダ石灰ガラス	さえた緑みの青	古墳4~8期以降
357	65	12	ガラス玉	⑤a	SB6054	2	3	0.6	0.03		明るい緑みの青	1期前半
357	65	14	ガラス玉	⑥a	SD7029	3.2	5.1	1.3	0.09	ソーダ石灰ガラス	くすんだ青緑	2期
358	65	79	ガラス玉	⑤b	SK5054	4	4.2	0.8	0.13	カリ石灰ガラス	色鮮やかな緑みの青	8期前半
358	65	80	ガラス玉	⑤a	ST3002盛土	4.2	3.8	1.1	0.03	ソーダ石灰ガラス	くすんだ青緑	
358	65	90	ガラス玉	⑤b	IV層	3	3.4	0.6	0.04	ソーダ石灰ガラス	灰色がかかった青緑	
358	65	91	ガラス玉	⑤b	IV層	3.4	4.6	1.2	0.1		鮮やかな青緑	
358	65	92	ガラス玉	⑤b	IV層	4.4	5	1.9	0.14	ソーダ石灰ガラス	くすんだ青緑	
358	65	93	ガラス玉	⑤b	IV層	6.1	8	1.3	0.53		黒っぽい青	
358	65	94	ガラス玉	⑤b	IV層	5	7.4	1.8	0.41	カリ石灰ガラス	黒っぽい青	
358	65	95	ガラス玉	⑤b	不明	2.1	3	0.3	0.02	カリ石灰ガラス	鮮やかな緑みの青	
358	65	96	ガラス玉	⑤b	不明	4.3	3.4	0.8	0.05	カリ石灰ガラス	鮮やかな緑みの青	
358	65	97	ガラス玉	⑤b	不明	2.9	4	1.1	0.07	カリ石灰ガラス	くすんだ青緑	
358	65	98	ガラス玉	⑤b	不明	7.2	7	2.1	0.31	カリ石灰ガラス	鮮やかな青緑	

表32 屋代遺跡群玉関係石材計測表

写真図版	報告番号	地区	⑥区遺構群	遺構	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	時期	写真図版	報告番号	地区	遺構	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	時期
66	100	⑤b		SB5021	20	14.5	11	3.6	石英	8期前半	66	113	⑤b	SK5175	21	14	9	2.1	めのう	9世紀
66	101	⑤b		SB5036	51	12	8	8.8	石英	5期前後	66	114	⑤a	SK6462	29	21	19	10.4	石英	5~6期
66	102	⑤b		SD5064	54	20	15.5	29.2	めのう	7期前半	66	115	⑤a	SK6462	31	24	7	5.5	玉髓	5~6期
66	103	⑤b		SD3262	32	26	18	12.4	めのう	6期	66	116	⑤b	SK8011	25	11	9.5	4.2	石英	古墳の可能性あり
66	104	④c		SD4209	54	40	26	63	めのう	2~8期	66	117	①f	IV層	43.5	21	20	17.1	石英	
66	105	⑤b		SD5012	18	15	9	3.2	石英	9世紀	66	118	⑤b	IV層	62	47	30	83.7	めのう	
66	106	⑥a		SD7035	32	30.5	20	22.5	めのう	1期末~2期初頭	66	119	⑤b	IV層	17	15	8	3.1	石英	
66	107	⑥a	SD7045=SD8032	SX7036	21	19.5	11.5	6.9	めのう	1期前半	66	120	⑤b	IV層	40.5	25	20	26.7	めのう	
66	108	⑥a	・SX7036	SX7036	19	11	6.5	1.4	石英	1期前半	66	121		IV層	47.5	24	14	14.9	石英	
66	109	⑥a		SX7036	21	20	13	6.4	石英	1期前半	66	122	⑤b	IV層	34.5	14	9.5	3.7	石英	
66	110	⑥a	SD7062・SX7037	SX7037	21	8	5	0.9	石英	1期後半	66	123	④d	不明	42	16	13	9.2	水晶	
66	111	⑥a	SD7065=SD7067=	SD7067	34	23.5	10.6	18.3	石英	1期前半										
66	112	⑥a	SD8044 4, 5層=SD8049	SD7067	32	29	16	11	めのう	1期前半										

第6節 金属製品および鉄生産関連遺物 (図359~367 PL67~71)

1 概要

本報告書の時期に該当する調査面から出土した金属製品は銅・青銅製品18点、鉄製品417点である。地区別に、遺構内と包含層 (IV層、IV層上面) における出土数の概要を表33に示し、遺構別出土点数は項の末尾の表38に一括した。鉄生産関連遺物は鉄滓、羽口溶解物の出土総重量27,338.6g、羽口5,689.2g、炉壁4,296.3gであり、表34はその内訳である。

表33 金属製品地区別出土点数

出土位置 遺跡記号・地区名	遺構内	包含層		地区出土総数
		IV層	IV層上面	
BKS-A~J地区	1	6	2	9
BKS-K地区	34(2)	15		49(2)
BYS-①区	72(1)	17	6	95(1)
BYS-②区	17	14	11	42
BYS-③a区	17	3	2	22
BYS-③b区	20	4		24
BYS-④~⑥区	154(12)	37(3)	3	194(15)
出土位置別総数	315(15)	96(3)	24	435(18)

() 内は銅・青銅製品内数

表34 鉄生産関連遺物出土量 (地区別、遺物別)

単位：g

遺物種類 地区名	鉄 滓 系				粘 土 系		
	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	地区別総重量	羽口	炉壁
BKS-A~J		529.0		4.7	533.7		71.0
SKS-K	48.1	1,886.2	88.1	353.2	2,375.6	1,363.3	567.5
BYS-①	543.4	3,450.2	141.3	825.3	4,960.2	1,145.0	737.2
BYS-②	100.1	1,285.0		31.5	1,416.6		
BYS-③a	170.2	663.8		101.0	935.0	151.1	511.6
BYS-③b	30.5	571.5		33.5	635.5		
BYS-④~⑥	498.8	10,525.2	4,393.5	1,064.5	16,482.0	3,029.8	2,409.0
遺物別総重量	1,391.1	18,910.9	4,622.9	2,413.7	27,338.6	5,689.2	4,296.3

2 銅・青銅製品 (図359)

全18点の出土概要を表35とした。屋代遺跡群④~⑥区が15点と多く、⑥a区SDより帯金具2、鈴、鞆尻金具1点ずつが出土している。

表35 銅・青銅製品一覧表 (地区別、時期別)

時期 (層位) 地区名	1期後半	2期	6期	6~7期	8期前半	不明	包含層 (IV層)
BKS-K地区				不明(1)	不明(16)		
BYS-①区					板状品(2)		
BYS-④~⑥区	鞆尻(12) 鈴(13)	環(4) 鋌(5) 刀吊手(6) 鎌(7) 帯金具(10)	不明(3) (9)	帯金具(11) 飾り金具(15)		飾り板(14)	目釘(17) 不明(18) 耳環(19)

A. 帯金具 (10・11・18)

10は巡方。裏面四隅に、留め金状小突起を具備する。11は丸軛。下端に長方形の飾り穴があき、四隅に小孔が穿たれている。18は丸軛の下端部に形状が似ているが不明である。

B. 銅 鈴 (13)

鈴の内部に珠も遺存するが、計測出来ないため図では省いた (第7章第2節2、393頁に成分分析)。

C. 鞆尻金具 (12)

鉄地に銅を張った鞆尻の飾り金具である。銅張りの残存する部分はスクリーン・ドーンで示した。内部

に木質部が遺存している。

D. 耳環 (19)

銅の丸棒を環状に加工し、金を被せている。

E. 銅鏃 (7)

有茎の三角形式で、身部側縁は下方に向かい直線的に開き、腸袂（わたえぐり）を備え、茎も1.5cmで身部と同じ長さを持つ。

F. 目釘状品 (17)

断面四角、頭部は図示しなかったが、方形に凸曲面状に叩いて延ばしている。下端部には両側に小孔状凹部がある。

G. 銅鏡 (8)

14期に比定されるSB4201より出土した。本来『古代2、中・近世編』に記載すべき資料であり、詳細にわたる報告はそれに委ねるが、銅鈴とともに成分分析を行った（第7章2節）関係上、図のみを本報告書に掲載した。口縁部は外側にかなり肥厚し、胴部は垂直に近く立ち上がり、口径は推定値23.4cmを測る大型資料である。

3 鉄製品 (図359～365)

総数は417点で、器種別に出土数量を示し、出土地区と時期に分けてを表36とした。以下、器種別にその特徴を記す。

A. 斧 (120)

1点出土した。長さ9.7cm、幅4.2cm、厚さ0.4cm、重量44.2gを測る、先端刃部が一部剝離し、袋部上端1/5程度を欠損する比較的完形に近い有袋鉄斧である。

B. 鋤鍬先

4点出土した。

〔分類〕

方形鋤鍬先 (118) 『古墳編』(註)に掲載した方形鋤鍬先より一回り大型である。県内におけるこの種の鋤鍬先は弥生後期に出現して、6世紀に消滅するという(臼居1997)。これからすると、約1世紀近く時期が下がることになる。当時まだ使用されていたものか、混入と考えることが妥当なのか不明である。遺存状態は良好である。

U字型鋤鍬先 (97・112・142) 97は左耳上端部の長さ7.0cmを残す。残存部下端の幅2.8cmに対し、上端幅は1.3cmと先細りしている耳部の形状に特徴があり小型の感じ。県内では7世紀中葉以降、集落跡で出土するようになると言われる「U型 I A類」に似る(野村1990)。142も左耳上端部7.9cmを残す。耳部幅が上下ほぼ一定である点から通常のU字型を思わせる資料であり、かなり腐食が進んでいるものの、数回にわたり折り返し鍛打しつつ強度を加えていった様子を窺わせる。112は袋部の深さは刃先部1.7cm、耳部0.7cmを測り、内縁形はU字と「L」状の中間で「II C類」(野村1990)に類似する完形資料である。

C. 鎌

28点で、出土地点は遺構内18点、包含層10点である。遺存状態は完存6点、基部ならびに下半身部が残存するもの12点、先端部ならびに上半身のもの7点、破片3点である。表37として観察表、また、図42に時期別、地区別の出土状況をグラフで示した。K地区、④～⑥区を中心に、時期的に平均し、包含層(④～⑥区に集中)での出土が多い。以下その形態上の特徴点を、刃先の湾曲形状に基づいて二大別した。

〔分類〕

I 刃先が基部から上端部近くまで直線に近い弧状に伸び、先端に近くなって湾曲するタイプ(9・58)。9は身部長20.5cmと出土資料中最長であり、58は装着角度が直角に近く98°、身部長は14.2cmと平均的である。

II 刃部が基部付近より先端部に向かって、弓形に大きく湾曲するタイプ(10・131)。10は装着角度は107°と低いものの、深く湾曲し、131は身部長15.5cm、装着角度は資料中最大の122°である。

III 上記両者の中間的形態。

〔特徴〕

図40は上記資料の刃部の装着角度と、湾曲形状を図化し、重ね合わせたものである。6期の20cmを超え、直線的で湾曲の少ない鎌(9・58)から、15cm前後で深く湾曲するもの(10・131)へと変遷していく様子が垣間見られる。図上に点線で示した資料185は装着角度も鋭く、最も深く湾曲している。②区包含層IV層上面、平安水田面での出土であり、時期は特定できないが、本報告書で扱う最も新しい面から見いだされているという点は象徴的である。大ぶりのものに加え15cm前後のものが増え、基部が鋭角化し、それに伴い基部装着部の折り返しをその上半分に限定する点、また、身部湾曲が深化するという傾向は、8～9世紀に稲の根刈りの必要からもたらされたものと指摘されている(原1989、鶴間1985)。更埴条里遺跡、屋代遺跡群周辺において、9世紀半ばから後半を迎える時期に、農業生産形態の変容につれて鎌が多様化し、機能的にも発展していく様子を示す資料ということになろうか。もう一点、基部(柄の装着部分)に見られる特徴についてであるが、基部が遺存する17点の内、基部全体を折り返すもの4点(96・130・152・177)、上半分に限定して折り返すもの13点である。前者4点中の2点は包含層(IV層)であり、その時期は特定できないが、他の2点のうち96は4期に比定されるSB6099出土で、130は6～7期のSK3276という、28点の中では比較的古い時期に属する。上記のように、刃部が直線的に伸び、その先端部が湾曲し、同時に柄装着基部全体を折り返す形態は古代の早い時期の特徴とされている。さらに、その折り返す方向であるが、8点が左方向、9点が右方向に折り返している。管見の限り、左方向への折り返しが多いように思われるが、本遺跡の今回の資料では、左右の折り返しがほぼ半々であり、むしろ右へのものが1点多いという特徴が見られる。

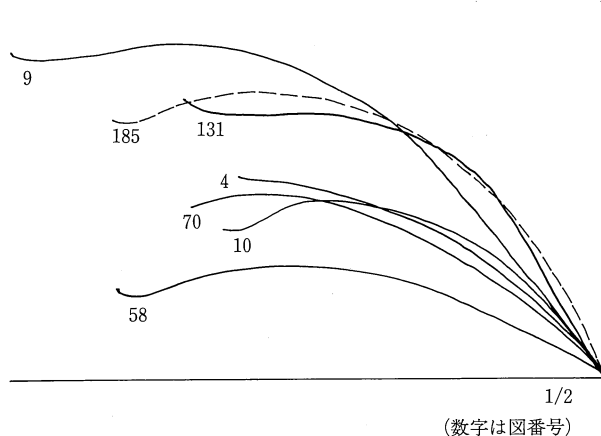


図40 鎌の装着角度と刃先湾曲曲線

D. 紡錘車

当該期出土は7点である(なお、石製・土製を合わせ61点が確認されている)。以下、紡輪の特徴により大別した。

〔分類〕

I 紡輪の断面型が凸レンズ状を呈し、重量感のあるもの(67・125)。

67 紡輪：断面凸レンズ状、最大径5.0cm、最大厚さ1.2cm。紡軸径0.4cm。

125 紡輪：断面凸レンズ状、最大径6.5cm、最大厚さ1.1cm。紡軸径0.5～0.9cm。

II 紡輪断面型が平板状で、比較的軽量のもの(7・64・93)。

7 紡輪：断面平板状、最大径5.5cm、最大厚さ0.1cm。紡軸径0.3～0.4cm。

64 紡輪：断面平板状、最大径5.9cm、最大厚さ0.4cm。紡軸径0.3～0.7cm。

93 紡輪：断面平板状でやや外湾、最大径4.6cm、最大厚さ0.5cm。紡軸径0.5cm。

Ⅲ II類に近い中間型 (77)

77 紡輪：断面は薄い凸レンズ状、最大径5.2cm、最大厚さ0.4cm。紡輪径0.3～0.5cm。

輪部を欠く1点128は鉤状の先端部のみの資料。鉤（フック）部は小首を傾けるように、約40°反っている。

〔特徴〕

石製、土製を含め時期が特定できる37点を図41にした。1～2期と、5期以降の二つのグループに分かれ特徴が見られる。8世紀前半（2期）から中頃までは土製が主流を占め、重量80gを超える例も多い。

それに対して、8世紀末（5期）から9世紀を迎えると土製が減少し、鉄製が出現する。重量もほぼ60g以内で、鉄製品はその内さらに軽量の部分を占め、紡輪の厚さも1cmを超える2点を除き、数mmである。鉄製紡錘車間にも差違が見られ、石製、土製を含めるとかなり大きな相違が認められる。多様な作業状況を想像させる資料である。

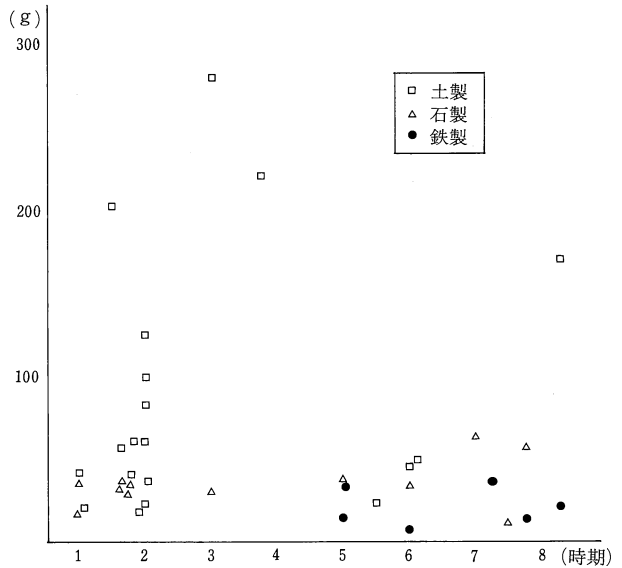


図41 紡錘車の時期別、材質別重量比較

E. 苧引金具

当該期からは6点出土している。

〔分類〕

I 薄手で、横幅が長く、両端装着部の短いもの (48・186)。48は9.5cmと横長で、両端木質柄装着部の高さは2.1cmと短い。186はさらに横長で11.9cm、刃部の高さ（幅）は2.0cm以上と長い割合に、両側装着部は短く、ずんぐりしている。両者とも比較的薄手である。

II 厚手で、横幅が短く、両端装着部の長いもの (63・155)。63は幅8.7cm、高さ4.2cm、155は幅7.8cm、高さ3.8cmである。

169は、燧金具の可能性もある。端部は渦巻き状を呈し、左端部は欠損している。

F. 刀子

最も多く106点出土した。しかし、完存するものは10点余りで、断片が多い。しかも研ぎ減りが著しく、その極端なものは117や153のごとく、鋤（はばき）元近くにまで及んでいる。したがって、細分する方法は避けて、比較的原型を留めていると考えられる、鋤元、関（まち）部分の形態に基づき大別整理した。図42に時期別、地区別の出土概要をグラフで示した。

〔分類〕

I 棟側にのみ目立って関が認められるもの。その典型は1で、この資料もそうであるが、刃部側にも関らしきものの認められる資料が多い。このタイプは25・31・69・95・98・106・113など最も数が多い。

II 22・26のように両関になるタイプ。30・32・35・53・81・82・175など数が多い。

III 刃部側に目立って関が認められるもの。57・72・129など。

IV 関あっても僅かで、身部、茎部が連続しているもの。2・20・57など。

V その他、全体が反り身のもの (13・90・98)、剃刀状のもの (5・188) など実に複雑である。以上、研ぎ減りなどによって、かなり形が変わっているはずであり、整理上の便宜的分類にすぎないが、こうして見ただけでも、その用途により使い分けがなされていたものか、その多様性が顕著である。

G. 鍬

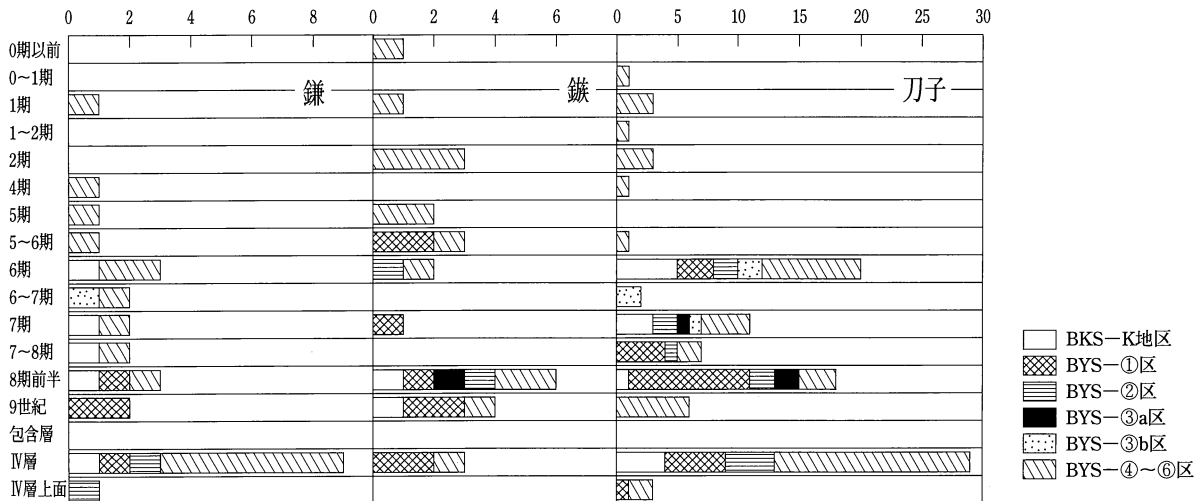


図42 鎌・鏃・刀子出土状況 (地区別、時期別)

遺存するのは茎部のみで、他の器種との識別が難しいものを省き26点である。遺構別ではSB13点、SK4点、SD2点、SC、SF、ST、SX各1、包含層 (IV層) より2点。概要は図42にグラフ化した。

〔分類〕

圭頭鑿式箭 (156) 古墳時代からの形式といわれ、身部小さく、無篋被 (のかずき)、長茎が特徴だが、この資料は途中で折れている。

柳葉式 (104・143) 104は篋被部が長く、茎部下を欠く。143は身部上半のみ残存。以上2点であるが、12も逆刺 (かえし) の残存形状からここに含まれるかもしれない。

三角形式 最も多く6点出土。29は深い腸袂 (わたえぐり) を持ち、切先、逆刺が鋭く、長茎の完形品。114は切先は前者に似るが、腸袂は浅く、基部を欠く。159は29に似るが、切先、逆刺ともに丸みがあり、長茎部先端を欠く。55は159にさらに丸みを持たせ、小型にした感じ。134はこの両者の腸袂がなくなった形状で、篋被部以下を失う。92は関部に段差があり、二重逆刺状を呈している。出土資料中、比較的古い段階の、2期に属すSB6040より出土している。

片刃箭式 (54・137) 古墳時代から続く形式といわれ (津野1990)、篋被部が長い。古墳6期のSB6048より似通った資料^(註)が出土している。

H. 釘

101点出土した。遺構別に見ると、SB32点、SK23、SD8、ST3、SC・SX各2、SF1点。包含層ではIV層18、IV層上面より10点である。他の器種がSBに多いのに比し、SB以外の遺構や包含層からも多く出土しているという傾向が見える。鍛造工程を示し、完形に近いものは20点に満たない。その全てを図化した。すべて断面四角に鍛打成形し、上部に打ち込みによる切れ込みを入れ、その部分を折り返して頭部としている。特徴的な2点を記す。

91は図のように、断面四角に鍛造した棒状の材の頭部を叩いて、四方に向かって円形に押し広げて、飾り釘状にしている。軸部断面0.5cm角、傘状頭部の直径1.5cmを測る。もう1点139は0.4cmの軸部先端を叩いて、約1.0cmの方形傘状に延ばしている。

I. 不明品・その他

130点を超えるが、特徴的な資料を以下に列挙する。

小刀 6 目釘が一部遺存する。腐食、劣化がかなり進んではいるが、完形直刀である。

鑿状金具 61・102 両者ともに破損、消耗度が高く、刃部付近以外は欠損している。

鑢鉋状金具 40・149 40は長さ5.8cm、149は3.4cmと小型で、刃先部を残し他は消失している。

錐状金具 14・124

工具柄 184 一応、工具柄としたものの、40cmを超える長い不明遺物である。軸断面形は円形、先端が鉤状に丸まり、下端部は何かを装着するようなソケット状を呈する。

鑢子（毛抜き状金具） 110 先端中央部が上方に丸く突起し、下がるにつれて両脚部が狭まる形状。

鉤具（かこ、バックル状金具） 151 両内側に深さ約0.2cmの挿入穴が抉られている。

鉤針 71 上部に糸を通す丸い穴が遺存する。湾曲が始まる部分で折れている。断面0.3cm。

註 1998 「鉄製品・鉄生産関連遺物」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』一弥生・古墳時代編一（財）長野県埋蔵文化財センター

引用参考文献

白居直之 1997 「木製品の解説」『石川条里遺跡』第3分冊（財）長野県埋蔵文化財センター

津野 仁 1990 「古代中世の鉄鑢」『物質文化』54 物質文化研究会

鶴間正昭 1985 「武蔵国における鉄鑢の形式分類とその編年的予察」『法政考古学』第10集記念論文集

野村一寿 1990 「鉄製鋏・鋤先」『総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター

原 明芳 1989 「金属製品と鍛冶資料」『吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター

表38-1) 金属製品遺構別出土点数

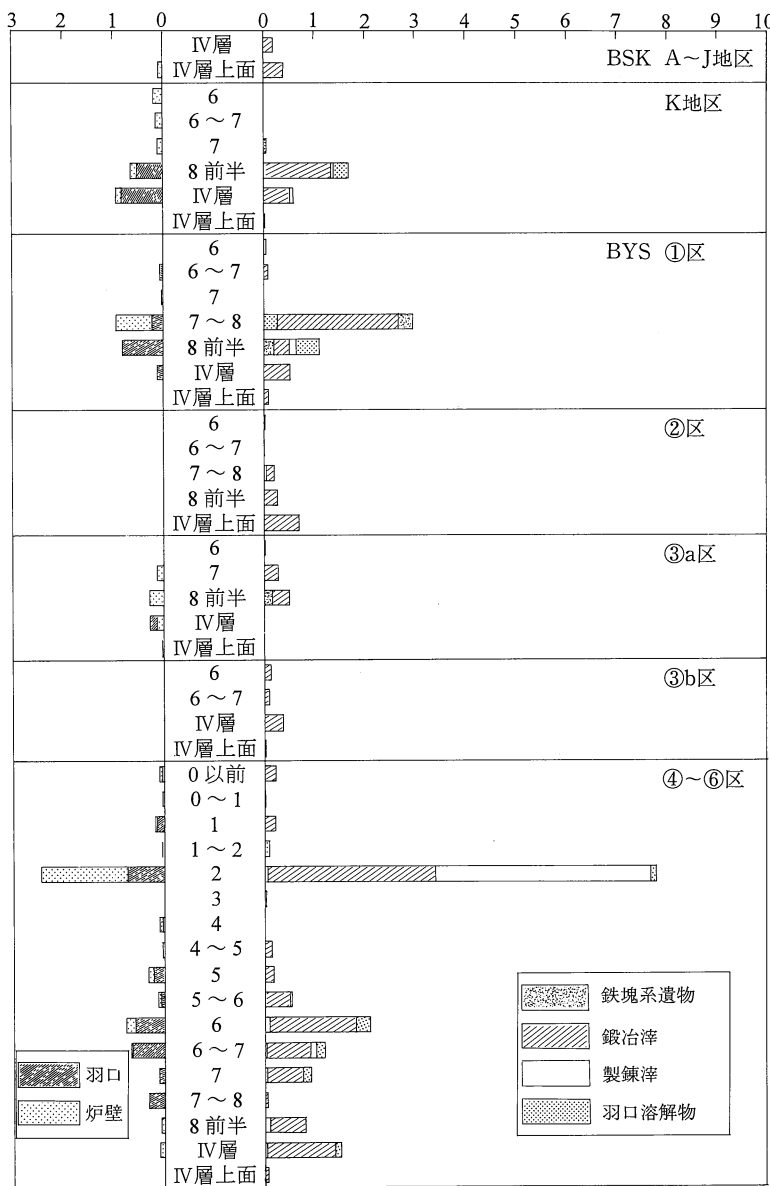
器種遺構	銅青銅製品	鎌	鋤鋏先	紡錘車	芋引金具	刀子	釘	鋸	その他	不明品	器種遺構名	銅青銅製品	鎌	鋤鋏先	紡錘車	芋引金具	刀子	釘	鋸	その他	不明品
SB9001				1		1			小刀1		SB69							1	1		1
SB9002		1									SB73						1				
SB9003		1		1		2				1	SB110						1				
SB9004							1				SB111						1				
SB9005						1					SB112						1				
SB9023						1				1	SB114							1			1
SB9043		1									SB119						1				
SB9050							1	1			SB120										1
SB9059						1					SB128						1				
SB9067										1	SB129										1
SB9069						1					SB131							1			
SB9071	1										SB3006										1
SB9072										1	SB3009							1		鑢鉋1	
SB9073						1			錐 1		SB3013						1				
SB9078							1				SB3015						1	1			
SB9080										1	SB3018							1			
SB9085						1				3	SB3019										1
SB9086		1									SB3029						1	1			
SB8	1						3	3			SB3030						1				
SB37		1									SB3032										1
SB39						1	1				SB3035						1				
SB41						1	1	1		2	SB4008					1	1	1		錐状金具1	1
SB47										2	SB4009							1			1
SB51								1		1	SB4012						1		1		
SB52							1		鋳物1		SB4021	1									
SB53						2				1	SB4026									1	
SB55							1			1	SB4029							1			
SB63						2				1	SB4030							2	1		
SB65										1	SB4031						1				
SB66							1			1	SB4203		1								1

4 鉄生産関連遺物

本報告書の時期に該当する製錬作業や鍛冶作業（精練鍛冶、鍛錬鍛冶）に伴って排出される遺物の出土状況を記載した。次いで、発掘時に採取した土より検出された鍛造剥片と粒状滓を表39に示し、鍛冶関連遺構の遺物出土状況を記した。また、鍛冶関連遺構より出土した遺物の構成図（図47）を作成し、成分分析を実施した資料に関する金属学的調査用考古観察表（表42）とともに掲載した。

A. 地区別、時期別出土状況

表41に地区別、時期別の出土重量を示し、簡略に図43、44とした。図44で円グラフの大小により地区間の鉄滓出土重量の多少を比較した。2期に該当するSB5061埋土より集中的に出土した製錬関係の遺物以外は、そのほとんどは鍛冶関係のものである。時期別に見られる特徴は図45とした。



(時期・包含層層位)

図43 鉄生産関連遺物出土状況
(地区別、時期別)

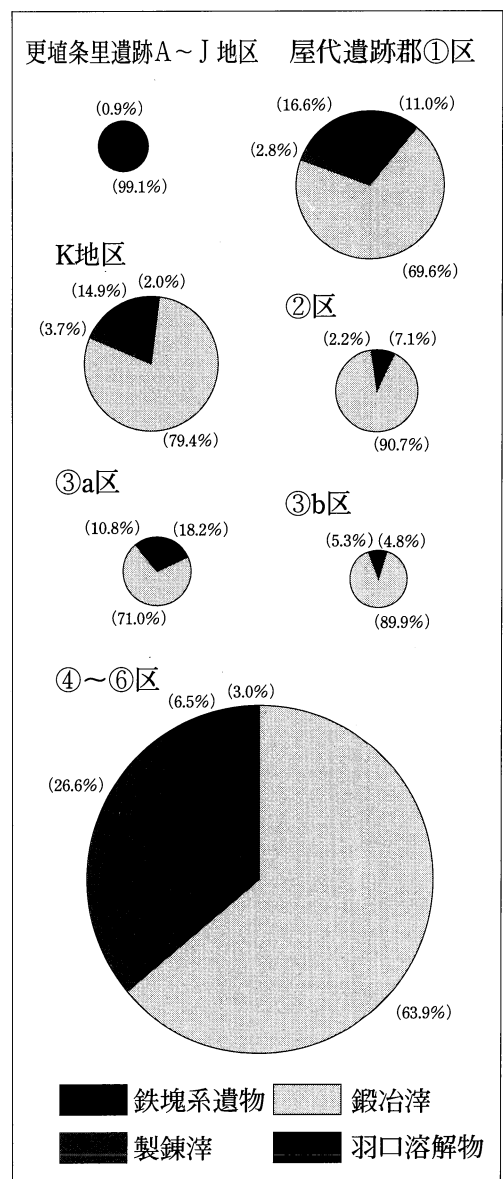


図44 出土鉄滓地区別重量比

また、屋代遺跡群④～⑥区は古墳時代に引き続き全期間にわたって出土が見られるが、鍛冶遺構の存在する2、6～7期にピークを持つ。更埴条里遺跡K地区は6期に出現し、鍛冶遺構が検出された8期前半がピークをなし、屋代遺跡群①区も鍛冶遺構群が存する7～8期前半にピークを迎える。

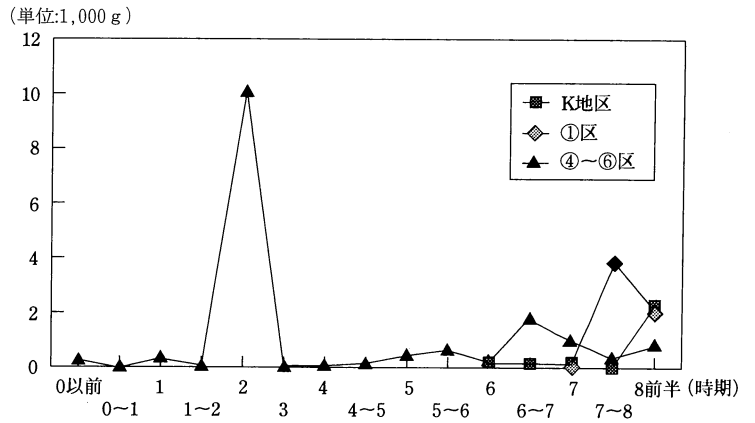


図45 3地区鉄生産関連遺物出土推移

B. 鍛造剥片、粒状滓

発掘調査時に採取したサンプル土より検出された鍛冶関連微細遺物の状況を表39とした。検出方法は採取土を水洗、乾燥させた後、工業用磁石（ピックアップ式）に磁着させ、篩にかけ、大きさ別に5段階に分類（①類7.1mm以上、②4.1～7.0 ③2.1～4.0 ④1.6～2.0 ⑤1.1～1.5 ⑥0.5～1.0 ⑦0.4mm以下）した。表はその合計である。

表39 鍛造剥片・粒状滓等検出結果

検出遺物		採取土重量(g)	磁着物重量(g)	割合(%)	砂鉄・鍛造剥片(⑦類)		粒状滓			鍛造剥片		鉄滓片			
遺構名	採取地点				重量(g)	割合(%)	重量(g)	割合(%)	重量(g)	割合(%)	個数	重量(g)	割合(%)	個数	重量(g)
ST918	SF901	—	28.64	—	1.11	—	0.05	—	7	0.24	—	186	27.24	—	1,200
〃	SK9931	—	184.05	—	0.27	—	0.11	—	6	0.37	—	382	183.30	—	900
SK470	1層	32,900	8.80	0.03	7.52	0.02	—	—	11	0.16	—	180	1.12	—	102
〃	2層	13,000	5.92	0.05	3.56	0.03	—	—	10	0.09	—	207	2.27	0.02	286
〃	3層	9,800	10.09	0.10	9.19	0.09	—	—	6	0.16	—	301	0.74	0.01	275
〃	埋土	31,600	16.90	0.05	11.58	0.04	—	—	15	0.14	—	85	5.18	0.02	181
SK533	〃	30,500	11.05	0.04	10.41	0.03	—	—	19	0.07	—	140	0.57	—	225
SK534	〃	16,800	0.73	—	0.64	—	—	—	5	0.06	—	26	0.03	—	35
SK535	〃	24,500	166.55	0.68	45.15	0.18	0.82	—	495	13.03	0.05	16,992	107.55	0.44	3,956
SK536	〃	32,600	14.94	0.05	14.26	0.04	—	—	13	0.15	—	342	0.53	—	101
SK537	〃	9,800	7.08	0.07	5.56	0.06	—	—	38	0.14	—	221	1.38	0.01	107
SK538	〃	20,200	31.47	0.16	19.93	0.10	—	—	352	3.56	0.02	14,068	7.98	0.04	2,226
SK539	〃	15,600	19.93	0.13	17.56	0.11	—	—	104	0.85	0.01	2,285	1.52	0.01	337
SK540	〃	2,400	4.01	0.17	3.78	0.16	—	—	52	0.08	—	257	0.15	0.01	57
SK541	〃	7,400	9.61	0.13	8.61	0.12	—	—	26	0.18	—	306	0.82	0.01	114
SK542	〃	13,500	11.58	0.09	9.34	0.07	—	—	80	0.29	—	548	1.95	0.01	269
SK543	〃	16,100	45.91	0.29	18.56	0.12	—	—	351	6.72	0.04	15,027	20.63	0.13	6,828
SK544	〃	11,600	5.88	0.05	5.42	0.05	—	—	16	0.22	—	448	0.24	—	94
SF8	トレンチ上	5,600	9.17	0.16	5.57	0.10	—	—	121	1.24	0.02	6,200	2.36	0.04	3,933
〃	トレンチ中	5,200	6.49	0.12	2.46	0.05	—	—	60	0.19	—	190	3.84	0.07	357
〃	トレンチ下	6,200	2.14	0.03	1.23	0.02	—	—	16	0.10	—	218	0.81	0.01	332
〃	炭化物層	6,200	41.64	0.67	17.01	0.27	0.10	—	410	14.03	0.23	16,729	10.50	0.17	4,229
〃	焼土層	3,200	17.46	0.55	5.48	0.17	—	—	589	1.13	0.04	11,100	10.85	0.34	15,676
〃	3層	25,600	99.86	0.39	19.50	0.08	—	—	439	20.40	0.08	19,293	58.70	0.23	26,262
SF10	埋土	8,900	9.43	0.11	5.00	0.06	—	—	223	0.91	0.01	2,882	3.52	0.04	770
SF11	〃	5,500	4.49	0.08	4.18	0.08	—	—	3	—	—	18	0.31	0.01	550
SF12	〃	35,200	367.11	1.04	62.52	0.18	8.22	0.02	1,786	82.04	0.23	41,513	214.33	0.61	25,599
SB74	〃	23,900	7.53	0.03	7.38	0.03	—	—	—	0.02	—	14	0.13	—	46
SB75	炭化物層	2,000	3.02	0.15	2.60	0.13	—	—	—	0.01	—	42	0.01	—	15
SB3006	〃	8,900	1.11	0.01	0.99	0.01	—	—	—	—	—	30	0.12	—	72
SB5013	炭化物 Pit	1,700	1.68	0.10	1.62	0.01	—	—	—	0.01	—	29	0.05	—	100
SB5021	床土坑1-1	9,600	4.93	0.05	3.45	0.04	—	—	—	—	—	3	1.39	0.01	—
〃	床土坑1-2	3,200	2.30	0.07	1.58	0.05	—	—	—	—	—	—	0.68	0.02	—
〃	炭化物集中2	7,600	2.01	0.03	1.05	0.01	—	—	—	—	—	—	0.76	0.01	—
〃	炭化物集中3	17,900	4.76	0.03	2.77	0.02	—	—	—	—	—	2	1.87	0.01	—
SB5061	埋土	—	4.78	—	1.05	—	—	—	67	1.25	—	3,755	2.48	—	1,844
〃	鍛冶炉横 Pit	5,200	59.06	1.14	17.36	0.33	0.20	—	78	12.34	0.23	32,429	29.16	0.56	12,958
SB6058	Pit.	600	0.06	0.01	0.06	0.01	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK4622	埋土	5,700	0.17	—	0.10	—	—	—	—	—	—	—	0.07	—	58
SK4847	埋土	15,200	137.26	0.90	28.48	0.19	0.65	—	2,316	40.69	0.27	55,783	67.43	0.44	16,277
〃	羽口下	4,100	7.68	0.19	1.74	0.04	—	—	154	1.04	0.03	1,349	4.90	0.12	4,605

割合(%)：採取土重量に占める割合

C. 鍛冶関連遺構の鉄生産関連遺物 (図版366・367 PL70・71)

表40に鍛冶関連遺構の遺物出土量を示した。末尾に掲載した構成図の作成、分析遺物の選択とその分析部分の選定にあたっては穴澤義功氏の指導を受け、それらの肉眼観察・計測・実測は埋文センターで実施した。なお、構成図に使用した資料中、化学分析を実施していない資料を「鉄生産関連遺物観察表(表45)」とした。

表40 鍛冶関連遺構遺物出土量

出土遺物 遺構名	鉄塊系遺物	椀形鍛冶滓	鍛冶滓	鉄滓	羽口	羽口溶解物	炉壁	製錬滓	鍛造剥片	粒状滓
ST918 (SF901)	30.6(3)	127.1(4)	735.0(-)	193.7(-)	500.0(5)	416.7(-)		51.2(1)	0.61	0.16
ST7.9.15 (SK470.533- 544.SF9-13)	187.7(12)	911.9(13)	619.7(-)		99.0(10)	11.3(3)	664.2(-)		9.64	145.94
SB74			12.9(2)			6.6(2)				0.02
SB76		23.9(1)			523.6(1)					
SX9			72.2(4)		45.6(2)	447.8(-)				
SB3006		49.7(1)					21.4(2)			
SB5037			1.7(1)		163.8(1)		29.4(3)			
SB4823 (ピット1)		70.7(1)	63.5(8)							
SB5056						7.3(5)				
SB5061	69.1(6)	352.0(5)	2,249.7(-)	98.9(4)	83.6(2)	20.4(3)	747.3(-)	4,577.9(-)	0.20	13.59
SK4847	16.2(2)	286.2(2)	305.2(-)		89.3(6)	58.3(-)	33.2(1)		0.65	41.73

単位：g () 内個数

更埴条里遺跡K地区 ST918 (SF901) 椀形鍛冶滓は一般的に、精練段階の前半期から鍛錬鍛冶の段階に進むにつれて、滓は大型から小型になり、緻密さを増し、木炭痕や気孔が不明瞭になるとされる^(註)。本遺構の椀形鍛冶滓はこの様相を示すものがほとんどである。鍛造剥片は小型で薄い6類が7~8割以上を占める。分析資料中の椀形鍛冶滓に精練系とされるものが一点含まれること等を勘案して、本遺構は精練鍛冶工程から鍛錬鍛冶工程のうち、比較的に進んだ鍛打作業を実施していたものと思われる。

屋代遺跡群①区 ST7・9・15付属鍛冶施設 椀形鍛冶滓は進んだ鍛冶工程の様相を示す資料がほとんどである。鍛造剥片も薄手で、銀灰色に輝く資料が出土割合の少ない遺構でも7割を超す。以下、特徴点を記す。炉壁は鍛冶炉のものである。SF8より石片、鍛冶滓片、粘土系溶解物、鍛造剥片、スサ等多くの遺物を巻き込んだ、大型で重量感のある再結合滓が重量計1kg近く出土している(46・47・48)。鉄生産関連遺物の種類や出土重量の比較的多いSK470で、なぜか鍛造剥片、粒状滓が微少である。炭化物2点の同定結果は、SK470の1点はコナラ属コナラ亜属クヌギ節、SK535の1点はクリである。

屋代遺跡群①区 SB74・76 (図版・表に未掲載)

椀形鍛冶滓 1点。SB76出土。4.2×(2.5)×2.5cm、23.9g、磁着度2。内部はオリーブ黒色。周囲にスサを含む黄~褐色の錆が付着。滓端部破片。

鍛冶滓 2点(SB74)。① 3.0×2.7×1.2、10.6g、磁着度2。地は黒色、表面は黄褐色錆。鍛造剥片付着。② 豆粒大、鉄塊系遺物状。割れ目より黒錆吹き出す。1.5×1.2×1.0、2.1g、磁着度4。

羽口 SB76出土(図版中に出土地点、図46に実測図を示す)。長さ10.5、外径7.7、口径2.3cm。雲母片、スサ混入。先端上半分割れ落ち。割れた後も使用されたためか、一部溶融。溶融部分、発泡部分、青灰色還元部分と順次観察できる。ほか羽口溶解物片、炉壁片出土。

鍛造剥片 採取サンプル土より僅かな数量が検出されている(表39)。

屋代遺跡群①区 SX9 (図版・表に未掲載)

羽口片 3点。①、先端下部に近いガラス質化、発泡部分破片。

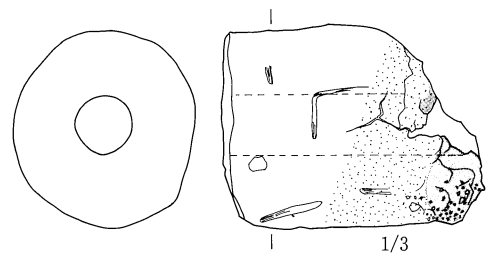


図46 SB76出土羽口実測図

1/5周遺存。推定口径2.3cm。②、先端部に近い黒色発泡部分。推定口径2.4cm。③、SB53出土。先端部片。

鍛冶滓（粘土溶解物状） 5.6×3.6～3.0×2.6cm、44.9～7.7g。磁着度3～2。ほか、羽口溶解物片。

屋代遺跡群④ a 区 SB3006 出土点数、種類ともに少ない。炉状遺構内採取土より鍛造剥片が若干検出されている（表39）。

屋代遺跡群④ f 区 SB4823（ピット1）（図版、表に未掲載）

椀形鍛冶滓 2点。①、6.3×5.4×3.8、70.7g、磁着度4。破面1。地は暗緑灰色。全面褐色、黒褐色の錆、重量感。炭、鍛造剥片混入。②、17.3g。小型だが①と同様。

鍛冶滓 2.6～6.8gの小型3点。径4mm程の鍛造剥片が付着したのものもある。

羽口片 先端溶解部破片。羽口溶解物 5.4×3.1cm 1点。小破片2点。

屋代遺跡群④ f 区 SK4847 椀形鍛冶滓は進んだ鍛冶工程を示すのである。羽口は装着角度が浅く、先端下部にメタル・チェッカーでH反応を示す鍛冶滓が付着。鍛造剥片・粒状滓は土坑内の埋土、また構成図66の羽口下の採取土より多量に検出された。ほとんどは薄く、青灰色で光沢があり、一部赤褐色のものも混じる。

屋代遺跡群⑤ b 区 SB5061 竪穴建物跡床面で検出された遺物はなく、製錬滓を含めすべては埋土中の出土である。製錬滓に加え、精錬系、鍛錬系の遺物も含まれ多様である。流出孔（溝）滓は様態の異なる滓を構成図に組み入れた。炉壁も多様な工程を示唆する資料を選んだ。鍛造剥片、粒状滓のほとんどは鍛冶炉横の付属ピット中より検出されたものであるが、一部は建物理土中の遺物を洗浄する際に得られたものである。埋土には相当量の鍛造剥片が混入していたものと思われる。

註 津野 仁 1996 「鍛冶遺構」『金山遺跡IV』（本文編）（財）栃木県文化振興事業団

表41 鉄生産関連遺物地区・時期別出土量

遺構内出土

単位：g

地区	遺物種類 時期	鉄				合計	粘土系	
		鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物		羽口	炉壁
K地区	6期						9.7	159.8
	6~7期						15.1	114.0
	7期				57.7	57.7		81.9
	8期前半	30.5	1,307.6	51.2	291.2	1,680.5	519.8	115.1
	計	30.5	1,307.6	51.2	348.9	1,738.2	544.6	470.8
①区	6期	8.7	49.5		0.1	58.3		
	6~7期		98.6			98.6	49.9	
	7期				8.5	8.5	4.1	
	7~8期	283.6	2,396.3		289.3	2,969.2	210.0	717.7
	8期前半	225.0	296.1	128.7	488.7	1,138.5	784.9	13.3
	9C		22.9		27.0	49.9		
	計	517.3	2,863.4	128.7	813.6	4,323.0	1,048.9	731.0
②区	6期		19.4		9.4	28.8		
	6~7期		21.5			21.5		
	7~8期	92.2	112.5		22.1	226.8		
	8期前半	7.9	280.0			287.9		
	9C		133.0			133.0		
	計	100.1	566.4		31.5	698.0		
③a区	6期				18.6	18.6		
	7期		262.0		22.5	284.5		117.4
	8期前半	170.2	339.2			509.4	12.0	257.3
	9C		62.6		59.9	122.5		
	計	170.2	663.8		101.0	935.0	12.0	374.7
③b区	6期	30.5	108.9			139.4		
	6~7期		75.9		25.3	101.2		
	計	30.5	184.8		25.3	240.6		
④~⑥区	0期以前		197.6		37.4	235.0	23.9	51.2
	0~1期		16.7		0.3	17.0	8.5	16.3
	1期		201.5		33.1	234.6	131.1	38.2
	1~2期		7.7		65.6	73.3		23.8
	2期	69.1	3,336.6	4,274.2	123.6	7,803.5	730.8	1,654.3
	3期		28.5			28.5		
	4期						24.6	59.9
	4~5期		148.0		2.2	150.2	27.0	
	5期		161.9		0.3	162.2	213.2	106.8
	5~6期		480.9		58.1	539.0	62.8	51.7
	6期	97.6	1,703.5		277.7	2,078.8	572.2	194.0
	6~7期	16.2	886.0	119.3	146.0	1,167.5	642.1	33.2
	7期	37.8	717.4		160.6	915.8	106.8	
	7~8期		56.0		10.5	66.5	314.5	
	8期前半	110.9	682.0		14.3	807.2	20.5	38.0
	8C		9.8		7.4	17.2	13.8	6.7
	9C	44.1	181.4		8.8	234.3	38.4	16.6
不明	81.1	286.2			367.3	91.2	35.7	
	計	456.8	9,101.7	4,393.5	945.9	14,897.9	3,021.4	2,326.4

包含層出土

層位	地区	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	合計	羽口	炉壁
IV層	A~J地区		195.0			195.0		
	K地区	17.6	545.3	36.9	4.3	604.1	818.7	96.7
	①区	15.5	510.7			526.2	96.1	6.2
	③a区						139.1	131.0
	③b区		367.5		8.2	375.7		
	④~⑥区	42.0	1,355.0		118.6	1,515.6	8.4	82.6
IV層上面	A~J地区		334.0		4.7	338.7		71.0
	K地区		33.3			33.3		
	①区	10.6	76.1	12.6	11.7	111.0		
	②区		718.6			718.6		
	③a区							5.9
	③b区		19.2			19.2		
④~⑥区		68.5			68.5			
合計		85.7	4,223.2	49.5	147.5	4,505.9	1,062.3	393.4

遺構出土総重量	22,832.7	4,626.9	3,902.9
包含層出土重量	4,505.9	1,062.3	393.4
出土総重量	27,338.6	5,689.2	4,296.3











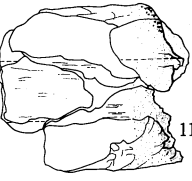


































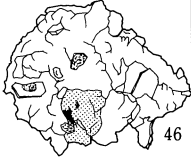




























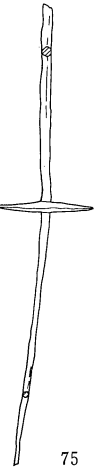



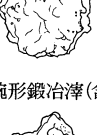











ST918(SF901)	SK470	ST7(SF8)	SK4847	SB5061
椭圆形鍛冶滓 (含鉄)  1 椭圆形鍛冶滓  2  3  4  5  6 鉄塊系遺物  7  8 羽口  9  10  11 羽口溶解物  12 金床石 (破片)  13 鍛造剥片  14 鉄器  15  16  17	椭圆形鍛冶滓 (含鉄)  18 椭圆形鍛冶滓  19  20  21 鉄塊系遺物  22  23  24  25 炉壁 (鍛冶炉)  26  27 ST9 ? (SK535) 椭圆形鍛冶滓 (含鉄)  28  29  30 鉄塊系遺物 (錆化)  31  32 羽口  33  34 炉壁 (鍛冶炉)  35 金床石 (破片)  36 鉄製品 (釘)  37 ST7(SK536) 鉄製品  38 ST9(SK538) 炉壁 (鍛冶炉)  39  40 ST15(SK543) 炉壁 (鍛冶炉)  41  42	椭圆形鍛冶滓  43  44  45 再結合滓  46  47  48 炉壁 (鍛冶炉)  49  50 鑄造剥片 粒状滓  51  52 ST15(SF12) 椭圆形鍛冶滓 (含鉄)  53  54 鉄塊系遺物  55 炉壁  56  57  58 SB3006 椭圆形鍛冶滓  59 鉄製品  60	椭圆形鍛冶滓  61  62  63 鉄塊系遺物  64 羽口  65  66  67  68  69 青銅製品  70 鑄造剥片 粒状滓  71  72 SB5037 羽口  73 鉄製品  74  75	炉内滓 (炉底塊) 76 77 78 炉内滓 (精錬?) 79 80 81 炉内滓 (特殊) 82 製鍊滓 (流出孔(溝)滓) 83 84 85 86 87 88 椭圆形鍛冶滓  89  90  91  92 椭圆形鍛冶滓 (含鉄)  93  94 鉄塊系遺物 (錆化)  95  96  97 炉壁 (製鍊炉)  98 炉壁 (?)  99 炉壁 (鍛冶炉)  100 鉄製品  101 鑄造剥片 粒状滓  102  103

図47 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 鉄生産関連遺物構成図

表42- (1) 金属学的調査用考古観察表

資料番号 1 総番号95-70 (構成図番号 8)										資料番号 2 総番号95-71 (構成図番号 1)																															
出土状況		出土位置		更埴条里 S F 901		時期		古代 8 期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況		出土位置		更埴条里 S F 901		時期		古代 8 期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理																				
遺物種類		鉄塊系遺物									遺物種類		椀形鍛冶滓(含鉄)																												
遺物データ	法	長径 1.7cm		遺存度	現状	磁着度	4	破面数	0	メタル度	M(◎)	厚さ 1.0cm	重量 2.3g	色調	表: 黄赤褐色		地: 不明		断面樹脂処理	遺物データ	法	長径 4.5cm		遺存度	ほぼ完形	磁着度	4	破面数	0	メタル度	M(◎)	厚さ 3.2cm	重量 2.5cm	重量 44.1g	色調	表: 黄赤褐色		地: 不明		断面樹脂処理	
		表: 黄赤褐色													地: 不明		表: 黄赤褐色					地: 不明																			
観察所見 (平面形と概観)	小型で、いびつな大豆状。全体酸化土砂に覆われ、特殊金属探知機にM反応、鉄塊が主体の個体と推定。										観察所見 (平面形と概観)	重量感ある。酸化土砂に覆われ、放射割れ部分から黒錆が吹き出す。特殊金属探知機でM反応。																													
(色調)	酸化土砂付着のため、黄赤褐色。										(表面状況)	1cm大の木炭が残っている部分が4カ所。放射割れ4カ所程。																													
(表面状況)	僅かに凹凸があるが、比較的滑らか。僅かに炭痕らしき跡。										分析部分	長軸端部1/2を直線状に切断して、メタル部を中心に用いる。																													
分析部分	全量を使用して、そのメタル部分を分析に用いる。										備考	どの操業工程での産出か不明だが、金属鉄の小塊が内部に存在する可能性が高い、要アルコール洗浄。																													
備考	要、アルコール洗浄。																																								
																																									
1/2										1/3																															
資料番号 3 総番号95-72 (構成図番号 17)										資料番号 4 総番号95-73 (構成図番号 2)																															
出土状況		出土位置		更埴条里 S F 901		時期		古代 8 期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況		出土位置		更埴条里 S F 901		時期		古代 8 期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理																				
遺物種類		鉄製品(釘)									遺物種類		椀形鍛冶滓																												
遺物データ	法	長径 4.2cm		遺存度	破片(先端部)	磁着度	6	破面数	(1)	メタル度	L(●)	短径 (0.5)cm	厚さ (0.3)cm	重量 6.4g	色調	表: 暗赤褐色		地: 不明		断面樹脂処理	遺物データ	法	長径 4.8cm		遺存度	破片(1/2遺存)	磁着度	2	短径 4.4cm	破面数	1	メタル度	なし	厚さ 2.2cm	重量 51.2g	色調	表: 暗赤褐色		地: 黒褐色		断面樹脂処理
		表: 暗赤褐色														地: 不明		表: 暗赤褐色					地: 黒褐色																		
観察所見 (平面形と概観)	鍛造釘の先端部破片。酸化土砂に厚く覆われ、先端部分のみ錆化(劣化)部が露出。その部分は断面が5×3mmの長方形を成し、使用時の影響か、やや湾曲。										観察所見 (平面形と概観)	小型で軽量の滓の1/2を遺存する破片。表面の暗褐色酸化部分は操業当時のもの。その後の酸化状況はあまり見られない。																													
(色調)	黒錆のため暗赤褐色から黒色。										(表面状況)	長軸一端に17×12mmの気孔。その付近に木炭痕も確認。																													
(表面状況)	錆による剥離のため使用時(製作時)の面は全く残存しないが、断面は鍛造により長方形であることは確実。										(下面状況)	全体に顆粒状突起。長軸一端に小木炭痕。																													
分析部分	長軸端部2/3を直線状に切断して、中核部のメタル部分を用いる。										(側面状況)	ほぼ水平で、底面の状況が続く。上面から下方への垂れはあまりない。																													
備考	鍛打状況が観察された場合は、厚み方向に縦断するようなマイクロ組織写真の撮影も実施して欲しい。要アルコール洗浄。										(破面状況)	長軸の一端が短軸方向に欠損。内部は表面に似て、一部に3mm程の気孔。																													
											分析部分	長軸端部1/2を直線状に切断して、滓部を用いる。																													
											備考	鍛練鍛冶工程で排出された滓と推測される。要アルコール洗浄。																													
																																									
1/2										1/3																															

表42- (2) 金属学的調査用考古観察表

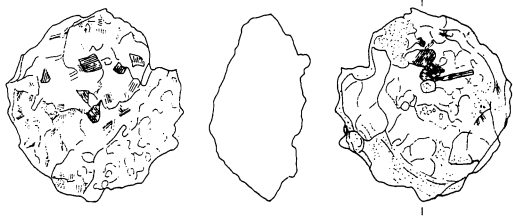
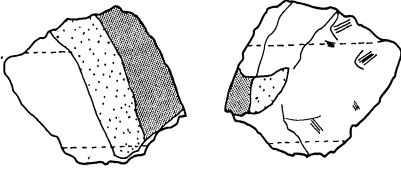
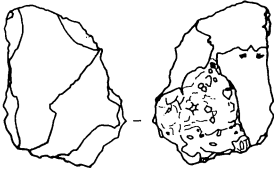

資料番号 5 総番号95-74 (構成図番号 3)										資料番号 6 総番号95-75 (構成図番号 9)															
出土状況		出土位置		更埴条里 S F901		時期		古代8期前半		成分分析		組織写真		X線回折		E P M A		X線透過		硬度		耐火度			
遺物種類		楕形鍛冶滓								分析項目		断面樹脂処理													
遺物データ	法	長径	7.6cm	遺存度	ほぼ完形	磁着度	7			遺物データ	法	先端外径	- cm	遺存度	先端部破片(全周)	径の	外径-%			分析項目	断面樹脂処理				
		短径	6.9cm	破面数	1(剥落面)	メタル	なし					# 口径	(2.6)cm			径の	外径-%								
		厚さ	3.6cm	色調	表:暗赤褐色 地:黒褐色							基部外径	- cm	使用回数	不明	使用角度	不明								
		重量	195.6g											# 口径	- cm										
														現存長	4.8 cm	磁着度	2	メタル	なし						
観察所見	ほぼ円形の完形品。厚みと重量感。表面酸化。										鍛冶羽口先端部破片。口径の推定計測値以外計測不能。														
(平面形と概観)											(平面形と概観)														
(表面状況)	短軸一端の剥落部付近以外はほぼ平坦。1 cm大の突起と3~10mm程の木炭痕散在。										(胎土状況)														
(下面状況)	3/4の部分には木炭痕密に付着。残りは顆粒状突起。										スサと2 mm前後の白色粒子を含み、焼成のため黄褐色を呈し軟質。														
(側面状況)	やや垂直気味に立ち上がり、下面同様の木炭痕付着。										(表面状況)														
分析部分	長軸端部1/4を直線状に切断して、滓部を用いる。										先端から輪側へ、暗緑灰色ガラス化部分、1~3 mm程の気孔伴う暗紫色に酸化した溶解部分、青灰色に被熱変化した部分の順に観察できる。穿孔部の内面遺存は僅かであるが、被熱の影響順は外面と同じ。														
備考	鍛錬鍛冶工程で排出された滓と推定。要アルコール洗浄。										先端部と輪側部を選択使用して、ガラス質部分、胎土部分を分析する。														
																									
1/3										1/2															
資料番号 7 総番号95-76 (構成図番号 14)										資料番号 18 総番号96-06 (構成図番号 78)															
出土状況		出土位置		更埴条里 S F901		時期		古代8期前半		成分分析		組織写真		X線回折		E P M A		X線透過		硬度		耐火度			
遺物種類		鍛造剥片								分析項目		断面樹脂処理													
遺物データ	法	長径	下記	遺存度	-	磁着度	-			遺物データ	法	長径	6.3cm	遺存度	破片	磁着度	7			分析項目	断面樹脂処理				
		短径	計測表	破面数	-	メタル	-					短径	4.8cm	破面数	7	メタル	なし								
		厚さ	参照	色調	表:光沢のない黒色 地:-							厚さ	4.6cm	色調	表:灰褐色 地:灰オリーブ色										
		重量												重量	166.1g										
観察所見	登録番号 大きさ(mm) 厚さ(mm) 磁着度 色調										観察所見														
(平面形と概観)											(平面形と概観)														
(表面状況)	表裏面ともにほぼ平坦で滑らか。										丸い底面1面を残し他は破面。厚い個体。鍛冶滓とは限定できない。全体形は大型個体か。														
(下面状況)											(下面状況)														
(破面状況)	樹脂に縦に埋め込んでその断面を顕微鏡で検討すること。										全体に丸く、細かに起伏。その間に木炭痕、3 mm程の礫付着。														
分析部分											(破面状況)														
備考											1 cm程の気泡あるが、全体に緻密。色調などから均質な様相が観察できる。														
											中央部分の安定した箇所を分析して欲しい。														
											このSB5061内からは鍛冶滓とともに製錬滓の流出滓も認められている点(総番号96-07)もあり、この個体の排出段階を知りたい。														
																									
1/3										1/3															

表42- (3) 金属学的調査用考古観察表

資料番号 19 総番号96-07 (構成図番号 83)										資料番号 20 総番号96-08 (構成図番号 102)													
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 S B5061		時期		古代 2 期		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況		出土位置		屋代遺跡群 S B5061		時期		古代 2 期		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理		
遺物種類		製錬滓 (流出孔 (溝) 滓)									遺物種類		鍛造剥片 ⑤類 (1.1~1.5mm)										
遺物データ		法		長径 6.7cm		遺存度		破片		磁着度 3		短径 4.8cm		破面数		3		メタル度		なし		遺物データ	
		量		厚さ 2.6cm		重量 140.6g		色調		表: 黄灰色 地: 赤黒色		厚さ 2.6cm		重量 0.42g		色調		表: - 地: -					
<p>観察所見 (平面形と概観) 製錬炉の滓排出溝で固まった滓。表面に流出した状態のまま凝固。 (色調) 断面は表面と同様の部分と、赤黒色に酸化変色部分がある。滑らかなだが、溶解時に表面に浮いた気泡がはじけたまま凝固。 (表面状況) 流出溝面に2~10cm程の角礫や炉壁片を無数に噛む。その形状から、流出溝は底部は平坦、側面はやや丸みを持たせていたと推定。 (側面状況) 礫を噛んだ部分までを溝の側面とすると、側面高は2.0cm以上か。 (破面状況) 基部(炉)方向に1面、向かって左側面に1面に垂直に近い破面。その様相から、溝内で凝固した滓を人為的に割り取った作業も想定できる。 分析部分 長軸端部1/4を直線状に切断して、混入物の少ない滓部分を分析する。</p>										<p>観察所見 (平面形と概観) 鍛錬鍛冶工程で、鉄材を鍛打した時に飛び散った鍛造剥片。発掘調査時の採取土を水洗・乾燥後、工業用磁石(ピックアップ式)で磁着させた資料。篩にかけ7段階に分類したうちの5段階(1.1~1.5mm)の大きさの資料の集合。 (色調) 黒褐色でやや光沢を持つ資料と、暗赤褐色に酸化した資料が混じり合う。 (表面状況) 面の滑らかな資料が多い。 (下面状況) 鉄材から剥がされた工程からか、ザラザラに波打った状態の資料がある。 分析部分 樹脂に縦に埋め込んで、その断面を顕微鏡で検討すること。</p>													
 <p>1/3</p>																							
資料番号 21 総番号96-09 (構成図番号 103)										資料番号 22 総番号96-10 (構成図番号 93)													
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 S B5061		時期		古代 2 期		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況		出土位置		屋代遺跡群 S B5061		時期		古代 2 期		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理		
遺物種類		粒状滓 ⑤段階 (1.1~1.5mm)									遺物種類		碗形鍛冶滓 (含鉄)										
遺物データ		法		長径 - cm		遺存度		破片		磁着度 -		短径 - cm		破面数		-		メタル度		-		遺物データ	
		量		厚さ - cm		重量 - g		色調		表: - 地: -		長径 5.1cm		遺存度		ほぼ完形		磁着度		8		短径 4.6cm	
				厚さ - cm		重量 - g		色調		表: 暗赤灰色 地: 不明		短径 4.6cm		破面数		0		メタル度		H(○)		厚さ 1.4cm	
				重量 - g		色調		表: 暗赤灰色 地: 不明				重量 47.9g		色調		表: 暗赤灰色 地: 不明						断面樹脂処理	
<p>観察所見 (平面形と概観) ほぼ球形を呈する粒状滓5点。精錬鍛冶段階で排出された資料と考える。発掘調査時の採取土を資料20(96-08)と同様の方法で選別分類したうちの⑤段階(1.1~1.5mm)資料の集合。 (色調) やや光沢のある黒褐色。 (表面状況) 滑らかな形状。亜球形。 分析部分 樹脂に埋め込んで、最大径の断面を顕微鏡で検討すること。</p>										<p>観察所見 (平面形と概観) 小型で重量感。中央部分に黒錆が吹き出し、4本の放射割れ。メタル度H反応。中央部分に金属鉄を含有する個体。 (色調) 黄褐色の酸化鉄が付着。 (表面状況) 中央が窪む皿状。側縁部には厚く土砂が付着。 (側面状況) 緩やかな丸みを持つ碗状。2~5mmの木炭痕が無数に付着。鍛造剥片も1点認められる。 分析部分 酸化土砂の付着が多い。ほぼ水平。 X線透過写真で確認後、出来る限り金属鉄の遺存する部分を分析する。 備考 鍛錬鍛冶工程で排出された滓と考えられる。</p>													
 <p>1/3</p>										 <p>1/3</p>													

表42- (4) 金属学的調査用考古観察表

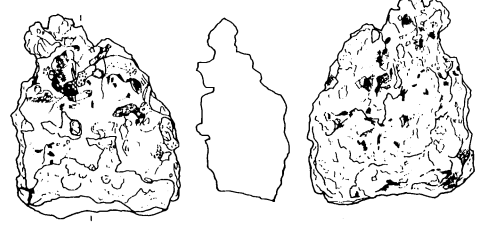

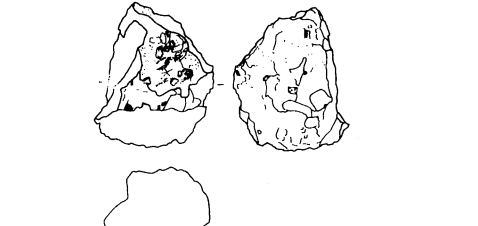
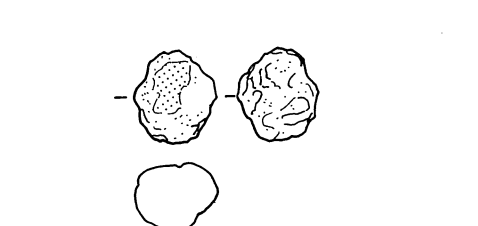
資料番号 23 総番号96-11 (構成図番号 94)										資料番号 24 総番号96-12 (構成図番号 89)														
出土状況		出土位置 屋代遺跡群 S B5061 時期 古代2期				分析項目	成分分析		組織写真		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理			
遺物種類	法	長径	短径	厚さ	重量		遺存度	破面数	磁着度	メタル度	H(○)	遺物種類	法	長径	短径	厚さ	重量	遺存度	破面数	磁着度	メタル度	硬度	耐火度	断面樹脂処理
遺物データ		10.9cm	8.8cm	4.5cm	466.7g	2/3	1	8		H(○)			5.5cm	4.1cm	1.8cm	39.4g	完形?	0	7					
観察所見	(平面形と概観)	平面は楕円形。長軸一端割れ落ち。大型で重量感。メタル度はH反応で金属鉄の存在が確認される。										(平面形と概観)	小型で、楕円形に近い不整形。凹凸に富む。											
	(表面状況)	平坦だが、5~15mmの木炭痕が多量に残り、その部分は大きく窪む。										(表面状況)	表面は酸化傾向のため極暗赤褐色。地色は光沢のある黒褐色。											
	(下面状況)	やや強い丸みを持つ楕形。小型の10mm以下の多量の木炭痕付着のため、ザラザラした質感。										(表面状況)	中央部がやや膨らみ、端部が窪む。酸化土砂や2~3mmの木炭痕が見られる。											
	(側面状況)	下面と同様。										(下面状況)	浅い楕状。木炭痕などの影響か、緩やかに起伏。酸化土砂は少ないが、滓自体酸化傾向。											
	(破面状況)	鋭利な割れ面ではなく、破面側縁部は丸み。割れた後さらに被熱溶解したか。										(側面状況)	最大径部分は水平。滓は上方から下方へやや垂下。											
	分析部分	X線透過により金属鉄の遺存状態を確認後、できる限り金属鉄部分を分析する。										分析部分	比較的安定した中央部分を分析して欲しい。											
	備考	鍛冶工程のどの段階で排出された滓か検討したい。										備考	小型である点から、鍛錬鍛冶工程で排出された滓と考える。											
																								
1/4										1/3														
資料番号 25 総番号96-13 (構成図番号 90)										資料番号 26 総番号96-14 (構成図番号 95)														
出土状況		出土位置 屋代遺跡群 S B5061 時期 古代2期				分析項目	成分分析		組織写真		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理			
遺物種類	法	長径	短径	厚さ	重量		遺存度	破片(中央付近)	磁着度	メタル度	なし	遺物種類	法	長径	短径	厚さ	重量	遺存度	破面数	磁着度	メタル度	硬度	耐火度	断面樹脂処理
遺物データ		7.6cm	6.3cm	3.8cm	237.3g		5	8			鉄塊系遺物(銹化)		2.5cm	2.3cm	1.7cm	9.5g		4						
観察所見	(平面形と概観)	大型、厚みと重量感。側面はほとんど割り取られ。破面部分も含め酸化土砂も付着。										(平面形と概観)	小型、重量感。酸化土砂に覆われ実体つかめない。磁着度4、メタル度もなしと低反応だが、銹化した含鉄資料と考えたい。											
	(色調)	表面は酸化気味で紫黒色。内面はやや光沢。										(色調)	酸化土砂は黄褐色である。											
	(表面状況)	楕状で中央が窪み酸化土砂付着。5~10mm程の木炭痕。ザラザラした質感。										(全体状況)	酸化土砂が厚く本体を覆って凝結。黒錆状の吹き出しや細かな放射割れも観察できることから、金属鉄を含有した個体が銹化の進行に伴い、その金属鉄も消滅していったものと考えられる。破面は観察されない。											
	(下面状況)	中央突出部以外、浅い楕状。2mm程の木炭痕、角礫付着。										分析部分	X線透過により、その内部を検討し、酸化土砂の影響の少ない鉄塊部や滓部分を分析する。											
	(側面状況)	側面全体が5面程に割れ。人為的なものか。内面は気泡少なく緻密。酸化土砂も付着。長軸端部1/2を直線状に切断して、滓部分を分析する。										備考	鍛冶工程で排出された鉄塊系遺物と考える。											
	備考	この遺構内からは製錬滓も出土しているため、製錬滓(炉内滓)の可能性も残る。																						
																								
1/4										1/2														

表42- (5) 金属学的調査用考古観察表

資料番号 27 総番号96-15 (構成図番号 99)											資料番号 28 総番号96-16 (構成図番号 71)														
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SB5061	時期	古代 2 期		分 析 項 目	成分分析		組織写真		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理		
遺物種類		炉 壁 (二次被熱)		遺存度	磁着度		4		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理						
遺物データ	法	長径 7.3cm		破面数	4 面程		メタル		なし	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理	遺物データ	法	鍛造剥片 ⑤段階 (1.1~1.5mm)		破面数	メタル		なし	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理
		短径 4.0cm			—											—			—						
		厚さ 2.7cm		色 調		表: 鈍い黄橙色		地: 黒灰色																	
		重量 59.0g		色 調		表: —		地: —																	
<p>観察所見 (平面形と概観) 破片のため炉の全体形はつかめないが、横長に細長く割れ落ち、この高さずつ炉材を輪積みしたことが分かる。内部はその焼成温度が低かったためやや黒っぽい。 (色 調) 2~10cm程の角礫、5cm程に切ったササ混入。 (胎土状況) 風化が著しく、使用時の表面とはいえないが、横方向にやや丸みを持つ点から、円形炉の体部の一片か。ササも露出。 (外面状況) 外面同様やや丸みを持つ。ササ、角礫ともに露出。 (内面状況) 上下の破面ともに内面に向かい傾斜。この面が輪積みの接続面とすれば、土器成形と同様に粘土紐を輪積みするとき、外面は上方に撫で上げ、内面は下方に撫で下げたと考えられる。 (破面状況) 比較的稳定した部分での組織分析と耐火度分析をする。胎土や形状から、長野市清水製鉄遺跡や松原遺跡で検出された、製錬段階の円形炉の体部と同様ではないかと考える。</p>											<p>観察所見 (平面形と概観) 鍛錬鍛冶工程で鉄材を鍛打した際、飛び散った鍛造剥片。調査時の採取土を資料20 (96-08) と同様の方法で選別した内の⑤段階 (1.1~1.5mm) のものである。 (色 調) やや光沢を持つ青灰色と、錆化した暗赤褐色、光沢のない黒褐色など多様な色調を示すが、光沢のある青灰色が多い。 (上面状況) 光沢のある個体は滑らかで、錆化した個体はざらついている。 (下面状況) 細かく波打つもの、気泡が見られるものなど鉄材から急激に剥がされた状況を示す。 (分析部分) 幾つかの個体を樹脂に埋め込んで、その断面を顕微鏡で観察する。</p>														
 <p style="text-align: center;">1/3</p>											 <p style="text-align: center;">1/3</p>														
資料番号 29 総番号96-17 (構成図番号 72)											資料番号 30 総番号96-18 (構成図番号 61)														
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK4847	時期	古代 6~7 期		分 析 項 目	成分分析		組織写真		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理		
遺物種類		粒 状 滓 ③段階 (2.1~4.0mm)		遺存度	磁着度		3		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理						
遺物データ	法	長径 — cm		破面数	—		メタル		なし	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理	遺物データ	法	腕形鍛冶滓		破面数	メタル		なし	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理
		短径 — cm			—											—									
		厚さ — cm		色 調		表: —		地: —																	
		重量 — g		色 調		表: 青黒色		地: 青黒色																	
<p>観察所見 (平面形と概観) 精錬鍛冶段階で排出されたと考えられる粒状滓 (所謂湯玉)。調査時の採取土を資料番号20 (96-08) と同様の方法で選別したうち、比較的大型の③段階 (2.1~4.0mm) の資料。 (色 調) あまり光沢はない。ほとんどが暗青灰色。一部表面が錆化して暗赤褐色に変色した個体もある。 (表面状況) 滑らかで、球形。一部涙滴状に小突起を伴うものもある。気泡が観察できる個体もある。 (内面状況) 割れた個体から内部を観察すると、スポンジ状に気泡が集合。 (分析部分) 幾つかの個体を樹脂に埋め込んで、その最大径の断面を顕微鏡で検討すること。</p>											<p>観察所見 (平面形と概観) 中型破片。端部欠損、中央部はほとんど残る。ゴツゴツした起伏を持ち、木炭痕や酸化土砂の付着顕著。 (色 調) 表面は光沢のない青黒色、内面はガラス質で、光沢のある青黒色。底面部分は赤褐色。 (表面状況) 平坦に近い。滓内の気泡により1~2cmの瘤状隆起。端部には酸化土砂が付着、そこには2~5mm程の木炭痕も認められる。 (下面状況) 端部に2cm程の隆起した滓があるが、全体的には浅い皿状。木炭が入り込み起伏に富む。赤褐色に酸化した状態で3~10mmの木炭痕が全体を覆う。 (側面状況) 上面からの滓の垂れは見られない。 (破面状況) 大きく2面が、小さく1面が割れている。内面は1mm以下~1cm程の気泡がスポンジ状に集まる。性質はガラス質。中央付近で酸化土砂などの影響の少ない滓部分を分析する。 (分析部分) 外見上の特徴から、鍛冶工程の腕形鍛冶滓と理解できる。</p>														
 <p style="text-align: center;">1/3</p>											 <p style="text-align: center;">1/3</p>														

表42- (6) 金属学的調査用考古観察表


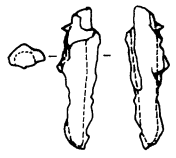
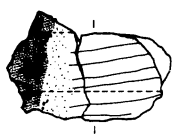
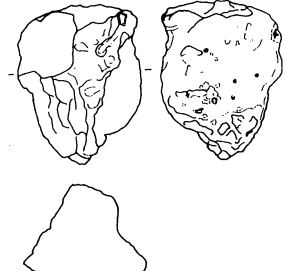
資料番号 31 総番号96-19 (構成図番号 64)										資料番号 32 総番号96-20 (構成図番号 68)																									
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK4847		時期		古代6~7期		成分分析		出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK4847		時期		古代6~7期		成分分析													
遺物種類		鉄塊系遺物								組織写真		遺物種類		鉄製品(釘?)								組織写真													
遺物データ	法	量	長径 3.1cm		遺存度 3/4		磁着度 6		分析項目	X線回折	E P M A	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理	法	量	長径 5.8cm		遺存度 3/4		磁着度 8		分析項目	X線回折	E P M A	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理					
			短径 2.0cm		破面数 1~3		メタル度 L(●)											破面数 3~4		メタル度 L(●)															
		厚さ 1.3cm		色調		表:明黄褐色		地:極暗赤褐色																											
観察所見		(平面形と概観)		楕円球状の小型個体。酸化土砂に覆われ、放射割れが進み表面まで黒錆が吹き出すものや、放射割れの結果割れ取られている部分もある。かなり錆化、劣化が進行しているが、メタル度はL反応と高反応。																															
(表面状況)				酸化土砂附着により全体に表面がゴツゴツしている。内面に対する肉眼観察では鍛打成形された状況は読みとれず、鍛冶炉内で溶解した金属鉄を多く含む資料、所謂鉄塊系遺物と判断する。																															
分析部分				X線透過によって内部の金属鉄の残存状況を確認した後、金属鉄部分を分析する。																															
																																			
1/2										1/3																									
資料番号 33 総番号96-21 (構成図番号 65)										資料番号 34 総番号96-22 (構成図番号 18)																									
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK4847		時期		古代6~7期		成分分析		出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK470		時期		古代8期前半		成分分析													
遺物種類		羽口								組織写真		遺物種類		椀形鍛冶滓(含鉄)								組織写真													
遺物データ	法	量	先端外径 7.5cm		遺存度		先端部 (1/6周)		径の絞り度		外徑-% 口径-%		分析項目	X線回折	E P M A	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理	法	量	長径 8.4cm		遺存度 1/3		磁着度 8		分析項目	X線回折	E P M A	X線透過	硬度	耐火度	断面樹脂処理	
			基部外径 - cm		使用回数		不明		使用角度		不明											短径 6.6cm		破面数 2		メタル度 H(○)									
		現存長 6.5cm		重量 60.5g		磁着度 4		メタル度		なし																									
観察所見		(平面形と概観)		全周の1/6程が残る輪羽口の先端部破片。先端部は溶解した状態で、実際炉で使用した状況を示す。																															
(胎土状況)				比較的均質で、0.1~1mm程の長石が全体に含有、僅かに細かなスサが見られる。焼成は良好。成形方法は外面が長軸方向にヘラナデの痕が見られ、内面も方向は不明ながらナデ調整。																															
(表面状況)				先端部が溶解してガラス質に変質し、基部に向かって一部溶解の始まりつつある部分、青灰色に還元気味である部分と変化している。全体に二次被熱により変色。																															
分析部分				二次被熱の影響の少ない部分を用いて、成分分析及耐火度試験を行う。																															
備考				屋代遺跡群では、羽口や炉壁をある程度分析資料に取り上げている。よってこの個体以外のデータとの比較も行いたい。																															
																																			
1/3										1/4																									

表42- (7) 金属学的調査用考古観察表

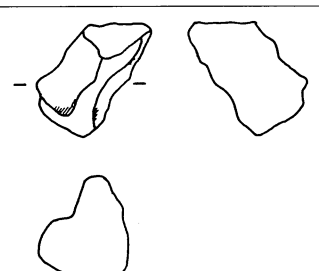
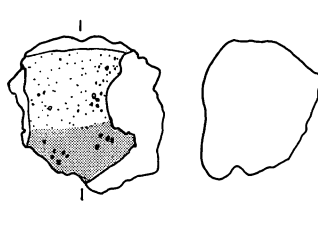
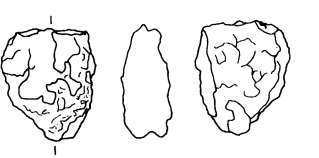

資料番号 35 総番号96-23 (構成図番号 24)										資料番号 36 総番号96-24 (構成図番号 26)															
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK470		時期		古代8期前半		成分分析		組織写真		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理	
遺物種類		羽 口								○		○		○		○		○		○		○		○	
遺物データ		法		先端外径 - cm		遺存度		ごく小片		径の		外徑-%		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理	
		量		# 口径 - cm		使用回数		不明		使用角度		不明		破面数		4		メタル度		なし		色調		表: 灰~黄褐色	
				# 口径 - cm		使用回数		不明		使用角度		不明		破面数		4		メタル度		なし		色調		表: 灰~黄褐色	
				現身長4.1cm		重量14.7g		色調		3		メタル度		なし											
観察所見		(平面形と概観)		轆羽口の体部のごく小片。外面の一部が残るのみで、他は欠損と消耗が著しい。																					
		(胎土状況)		緻密で均質。1~3mmの小礫をごく僅か含む。焼成も良好。																					
		(表面状況)		やや摩耗しているが、ナデ調整。																					
分析部分				少量の個体であるため、全量を使って、成分分析と耐火度試験を行う。																					
備考																									
																									
1/2										1/2															
資料番号 37 総番号96-25 (構成図番号 28)										資料番号 38 総番号96-26 (構成図番号 31)															
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SK535		時期		8期前半		成分分析		組織写真		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理	
遺物種類		椀形鍛冶滓 (含鉄)								○		○		○		○		○		○		○		○	
遺物データ		法		長径 4.6cm		遺存度		2/3		磁着度		8		X線回折		E PMA		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理	
		量		短径 3.9cm		破面数		2		メタル度		なし		破面数		不明		メタル度		なし		色調		表: 鈍い黄褐色	
				厚さ 1.7cm		色調		表: 暗赤灰色		地: 暗赤灰色				色調		表: 鈍い黄褐色		地: 不明							
				重量 45.9g																					
観察所見		(平面形と概観)		小型、平面不整な楕円形。端部を2箇所欠損。																					
		(色調)		全体的に暗赤灰色に酸化。																					
		(表面状況)		平坦で、一部窪み部分。そこには酸化鉄が多く付着。木炭の抜け痕とも考えられる。																					
		(下面状況)		やや浅い椀状、中央付近を中心に円形の窪み。粉末木炭が酸化して付着。																					
		(側面状況)		上面から下面に向かって面的に傾斜。全体に細かな起伏。																					
		(破面状況)		端部と中央部に破面。内部は中央に空洞化目立つが、比較的緻密。																					
分析部分				長軸端部1/2を直線状に切断して、酸化部分の影響の少ない滓部分を分析する。																					
備考				鍛冶段階の滓である。さらに細かな段階(精練鍛冶か鍛錬鍛冶か)まで分析して欲しい。																					
																									
1/3										1/3															

表42- (8) 金属学的調査用考古観察表



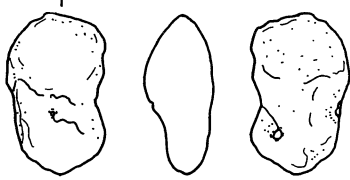
資料番号 39 総番号96-27 (構成図番号 32)										資料番号 40 総番号96-28 (構成図番号 33)																	
出土状況		出土位置				屋代遺跡群 S K535		時期		古代8期前半		成分分析		組織写真		X線回折		E P M A		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理	
遺物種類		鉄塊系遺物(錆化)										○		○		○		○		○		○		○		○	
遺物データ		法		遺存度		破片		磁着度		8		項目		項目		項目		項目		項目		項目		項目		項目	
		長径 1.8cm																									
		短径 1.8cm		破面数		1		メタル度		H(○)																	
		厚さ 1.2cm		色調		表: 明褐色		地: 暗赤色																			
		重量 5.5g																									
観察所見		小型だが重量感。放射割れから一部が欠損。内部は黒錆が見られ、メタル度もH反応。																									
(平面形と概観)																											
(全体状況)		表面は酸化が進み、当時の形状を示していない。大きな亀裂により剥落した部分から内部を観察すると、黒錆と赤錆が進行して、かなり劣化が進行。																									
分析部分		少量の個体であるため、金属鉄部分を全量分析する。																									
備考		どの段階で選別された鉄塊系遺物であるか分析して欲しい。																									
										観察所見																	
										(平面形と概観)																	
										鑢羽口の体部破片。体部外面の剥離状小片。一部青灰色に変色しつつあるところが見られる。少なくとも1回は使用したと考えられる。																	
										(胎土状況)																	
										長石を僅かに含み、全体に均質。焼成も良好。																	
										(表面状況)																	
										ナデ調整が施されている。小片のため詳細不明。																	
										分析部分																	
										全量を用いて、成分分析と耐火度試験を行う。																	
										備考																	
										当遺跡の他の羽口や炉壁片とのデータ比較を行う。																	
																											
										1/2																	
資料番号 41 総番号96-29 (構成図番号 39)										資料番号 42 鍵番号96-30 (構成図番号 42)																	
出土状況		出土位置				屋代遺跡群 S K538		時期		古代8期前半		成分分析		組織写真		X線回折		E P M A		X線透過		硬度		耐火度		断面樹脂処理	
遺物種類		炉壁(鍛冶炉)										○		○		○		○		○		○		○		○	
遺物データ		法		遺存度		体部片		磁着度		3		項目		項目		項目		項目		項目		項目		項目		項目	
		長径 6.1cm																									
		短径 4.7cm		破面数		不明		メタル度		なし																	
		厚さ 1.8cm		色調		表: 鈍い黄褐色		地: 黒灰色																			
		重量 36.6g																									
観察所見		摩耗が進み劣化した破片。個体形状より円形炉と推定。比較的薄く、二次被熱の影響も強くないことから、炉の上部近くのものと考えられる。																									
(平面形と概観)																											
(色調)		内部は黒っぽく、二次被熱の結果とともに、炉を作成する際の焼成状態が悪く、内部まで充分熱が回らなかった状況を示すとも考えられる。																									
(胎土状況)		均質で緻密だが、軟質で脆い。																									
(全体状況)		横長の破片。炉の製作時に粘土紐を輪積み成形した境目で割れたものと考えられる。外面はナデ調整、内面は剥離、摩耗。																									
分析部分		安定した部分を用い、成分分析と耐火度試験を行う。																									
備考		当遺構出土の鉄滓は何れも鍛冶滓であり、この炉壁も鍛冶炉片と考える。																									
										観察所見																	
										(平面形と概観)																	
										摩耗が進み、角が取れ、扁平な楕円形を呈す。被熱の影響が強いから非常に軟質。																	
										(胎土状況)																	
										均質で緻密だが、軟質で脆い。																	
										(全体状況)																	
										表面はナデ調整、内面は摩耗して丸みを帯びる。																	
										分析部分																	
										全量を用い、成分分析と耐火度試験を行う。																	
										備考																	
										資料96-29同様、鍛冶炉の破片と考える。																	
																											
										1/3																	
																											
										1/2																	

表42- (9) 金属学的調査用考古観察表

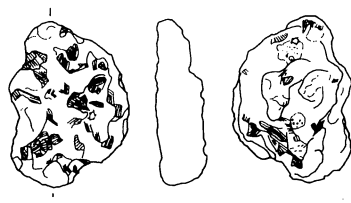
資料番号 43 総番号96-31 (構成図番号 51)										資料番号 44 総番号96-32 (構成図番号 52)													
出土状況		出土位置		屋代遺跡群SK8炭化物層		時期		古代8期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況		出土位置		屋代遺跡群SF8炭化物層		時期		古代8期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理		
遺物種類		鍛造剥片		③段階 (2.1~4.0mm)							遺物種類		粒状滓		④段階 (1.6~2.0mm)								
遺物データ	法	長径	— cm	遺存度	—	磁着度	—	破面数	—	メタル度	—	重量	1.09 g	色調	表: —		地: —	重量	0.04 g	色調	表: —		地: —
		短径	— cm	破面数	—	メタル度	—								破面数	—					メタル度	—	
<p>観察所見 (平面形と概観) 鍛錬鍛冶工程で鉄材を鍛打した時に飛び散った鍛造剥片。発掘調査時の採取土を資料番号20 (96-08) と同様の方法で分類したうちの③段階 (2.1~4.0mm) 資料の集合。</p> <p>(色調) 黒褐色から暗青灰色で光沢を持つものと、黒褐色で光沢のないものが混じり合う。</p> <p>(表面状況) 滑らかな面を持つ資料が多い。</p> <p>(下面状況) ザラザラに波打った状態の資料がある。</p> <p>分析部分 樹脂に縦に埋め込んで、その断面を顕微鏡で検討すること。</p>											<p>観察所見 (平面形と概観) ほぼ球形を呈する粒状滓。精錬鍛冶段階で排出された資料と考える。発掘調査時の採取土を資料20 (96-06) と同様の方法を用い分類したうちの④段階 (1.6~2.0mm) 資料の集合。</p> <p>(色調) やや光沢のある黒褐色。</p> <p>(表面状況) 滑らかな亜球形。一部涙滴状に小突起のあるものもある。</p> <p>分析部分 樹脂に埋め込んで、最大径の断面を顕微鏡で検討すること。</p>												
資料番号 45 総番号96-33 (構成図番号 43)										資料番号 46 鍵番号96-34 (構成図番号 50)													
出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SF 8		時期		古代8期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況		出土位置		屋代遺跡群 SF 8		時期		古代8期前半		成分分析 組織写真 X線回折 E P M A X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理		
遺物種類		碗形鍛冶滓									遺物種類		炉壁 (鍛冶炉)										
遺物データ	法	長径	6.4cm	遺存度	完形	磁着度	6	破面数	0	メタル度	なし	重量	36.6 g	色調	表: 暗赤褐色		地: 不明	重量	79.6 g	色調	表: 灰白色		地: 鈍い橙色
		短径	4.2cm	破面数	0	メタル度	なし								破面数	4					メタル度	なし	
<p>観察所見 (平面形と概観) 薄く小型。上下両面とも平ら。滓の垂れる方向で上下を理解した。</p> <p>(表面状況) 全面に5~10mm程の木炭痕が酸化状態で密に重複し付着。</p> <p>(下面状況) 中央が木炭の抜けた痕やや窪む。表面ほどではないが木炭痕が目立つ。</p> <p>分析部分 中央部分を直線状に切断して、滓部分を分析する。</p> <p>備考 進んだ鍛冶段階で排出された資料と考える。</p>											<p>観察所見 (平面形と概観) 炉壁の外側の破片。摩耗が激しい。平面は横長の不整な長方形で、炉製作時に粘土紐を積み上げていった状況を示していると考え。</p> <p>(色調) 内面付近は二次被熱により、灰白色に還元。粘土に細砂とスサを混ぜている。焼成は悪く、脆い。</p> <p>(胎土状況) ハケ状の工具で横ナデ調整。</p> <p>(内面状況) 二次被熱により部分的に滓状に溶解、細かく発泡状態。</p> <p>(外面状況) 板状で、ほぼ垂直に近い状態に積み上げている。</p> <p>(破面状況) 上下の破面は内側に傾くように割れている。これは粘土紐の接合を土器同様、内面ナデ下げ外面ナデ上げ技法によることを示すと考える。</p> <p>分析部分 二次被熱の影響の少ない部分を用いる。</p> <p>備考 他の出土遺物も勘案し、この炉壁も鍛冶炉のものと考え。</p>												
																							
1/3										1/3													

表42- (10) 金属学的調査用考古観察表

資料番号 47 総番号96-35 (構成図番号 55)					資料番号 48 総番号96-36 (構成図番号 56)							
出土状況	出土位置 屋代遺跡群 SF12 時期 古代7期?				成分分析 組織写真 X線回折 E PMA X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	出土状況	出土位置 屋代遺跡群 SF12 時期 古代7期?				成分分析 組織写真 X線回折 E PMA X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理	
遺物種類	鉄塊系遺物					遺物種類	炉壁					
遺物データ	法 量	長径 1.4cm	遺存度	不明	磁着度	6	法 量	長径 4.6cm	遺存度	破片	磁着度	3
		短径 1.3cm	破面数	不明	メタル度	L(●)		短径 3.9cm	破面数	不明	メタル度	なし
		厚さ 1.2cm	色調 表:黄褐色 地:不明				厚さ 1.8cm	色調 表:オリブ褐色 地:灰褐色				
重量 3.8g						重量 8.5g						
観察所見 (平面形と概観)	付着酸化土砂のため内面は観察できないが、メタル度はL反応と高く、金属鉄をかなり多く含んでいると考える。				観察所見 (平面形と概観)	炉壁様の粘土が被熱して溶解しつつある滓。						
(全体状況)	重量感。ややゴツゴツしている。酸化土砂とともに5mm程の木炭痕。				(色調)	一部酸化土砂付着部分は赤褐色。						
(上面状況)					(上面状況)	溶解部分を上面とした。緩やかに起伏し、無数に1mm前後の細かな気孔。						
(下面状況)					(下面状況)	炉壁様の粘土材がまだ溶解しないで残る。部分的に青灰色に還元。						
(側面状況)					(側面状況)	下面の粘土材が上面のように溶解し変容していく様子が、中央部で面的に観察できる。						
分析部分	全量を用い、金属鉄部分を分析する。				分析部分	滓部分を選んで分析する。						
備考	どの段階で作られた遺物か、鍛造の有無を含め分析して欲しい。				備考	鍛冶炉に伴う滓と推測される。						
												
1/2					1/2							
資料番号 49 総番号96-37 (構成図番号 57)												
出土状況	出土位置 屋代遺跡群 SF12 時期 古代7期?				成分分析 組織写真 X線回折 E PMA X線透過 硬度 耐火度 断面樹脂処理							
遺物種類	炉壁											
遺物データ	法 量	長径 4.7cm	遺存度	体部破片	磁着度	4						
		短径 4.3cm	破面数	5	メタル度	なし						
		厚さ 2.0cm	色調 表:明黄褐色 地:黒灰色									
重量 38.0cm												
観察所見 (平面形と概観)	粘土が被熱し板状に固まった個体。											
(胎土状況)	比較的緻密。粘土と細粒砂を混ぜ合わせたものか。焼成悪く脆い。											
(外面状況)	摩耗して観察できない。											
(内面状況)	丁寧にナデ調整。緩やかな起伏を持つ。											
(側面状況)	板状であり、炉の形は円形より方形をイメージし易い。											
(破面状況)	上下の破面は滑らかであり、炉構築時の粘土紐の積み上げ接着部分を示しているかもしれない。											
分析部分	長軸端部1/2を直線状に切断して、その炉材を分析する。											
備考	この遺構は鍛冶炉跡と考えるが、この炉壁がその構築材かどうかは不明。											
												
1/2												

表45- (1) 鉄生産関連遺物観察表 (構成図使用遺物)

(単位: cm, g)

構成図番号 総(分析)番号	図番号	写真番号	遺物名称	仮地区	出土遺 構出土	長軸・短軸・厚さ 重量	メタル度 磁着度	色調(表面) 色調(地)	観察所見・備考
1 95-71		70-1	椀形鍛冶滓(含鉄)	K X T-3	SF901 鍛冶炉	4.5×3.2×2.5 44.1	M(◎) 4		金属学的調査用考古観察表参照
2 95-73		70-2	椀形鍛冶滓	K X T-3	SF901 鍛冶炉	4.8×4.4×2.2 51.2	2		金属学的調査用考古観察表参照
3 95-74		70-3	椀形鍛冶滓	K X T-3	SF901 鍛冶炉	7.6×6.9×3.6 195.6	7		金属学的調査用考古観察表参照
4	366-1	70-4	椀形鍛冶滓	K X T-3	SF901 鍛冶炉	5.3×4.1×2.2 36.0	4	暗褐色 灰褐色	全面金属質。細かな皺状に凝固。3箇所破面。滓側縁部。
5	366-2	70-5	椀形鍛冶滓	K X T-3	SF901 鍛冶炉	5.0×3.6×2.2 34.6	4	赤褐色 灰褐色	小型で重量感。下部割り取られ直線の破面。底面はオリープ黒色でガラス質化した滓が付着。滓側縁部。
6	366-3	70-6	椀形鍛冶滓	K X T-3	SF901 鍛冶炉	3.8×3.4×1.5 19.7	8	黄褐色 不明	鉄滓や砂礫を包み込み表面は顆粒状に突起、鍛造剥片状の鉄片を巻き込む。破面なし。
7	366-4	70-7	鉄塊系遺物	K X T-3	SF901 鍛冶炉	1.5×1.3×1.1 3.1	H(○) 4	褐色 不明	豆粒状で質量感。鍛造剥片をかなり含む。特殊金属探知器にH反応。
8 95-70		70-8	鉄塊系遺物	K X T-3	SF901 鍛冶炉	1.7×1.0×0.9 2.3	M(◎) 4		金属学的調査用考古観察表参照
9 95-75		70-9	羽口	K X T-3	SF901 鍛冶炉	4.8×-×- 35.0	2		金属学的調査用考古観察表参照
10	366-5	70-10	羽口	K X T-3	SF901 南側土 坑	4.9×4.5×2.5 41.4	5	- -	外面は青灰色に還元、端部は顕著に溶解しガラス質化。内部は軸方向に多くのスサ。長石、礫も混入。先端部側面破片。
11	366-6	70-11	羽口	K X T-3	SF901 鍛冶炉	外径(88)口径(32) 380.3	5	- -	3片に割れている。外面は青灰色に還元、ガラス質化した先端下部。残存度3/4。スサ、礫、1cm程の長石も混入。
12	366-7	70-12	羽口溶解物	K X T-3	SF901 鍛冶炉	4.5×4.3×1.6 18.3	3	灰オリープ 不明	高熱を受け滴状に落下し、急速に冷却された感じ。所々透明、明黄褐色にガラス化。混入物不明。
13	366-8	70-13	金床石(破片)	K X T-3	SF901 南側土 坑	- 88.3	3	灰黄色 黄灰色	鍛打剥離による石片。剥離面は光沢。鍛打方向を窺わせるリング状痕跡が見える。材は珪晶より安山岩(閃緑岩)か。鍛冶滓付着。
14 95-76		70-14	鍛造剥片	K X T-3	SF901 鍛冶炉	-	-	-	金属学的調査用考古観察表参照
18 96-22		70-18	椀形鍛冶滓(含鉄)	1g VII KH-19.20	SK470	8.6×6.6×5.1 305.0	H(○) 8		金属学的調査用考古観察表参照
19	366-9	70-19	椀形鍛冶滓	1g VII KH-19.20	SK470	5.6×4.7×3.5 112.4	4	明黄褐色 不明	全体黄褐色の錆、スサ(繊維痕)に覆われ破面不明。表面に粘土溶解物付着。緻密で重量感。
20	366-10	70-20	椀形鍛冶滓	1g VII KH-19.20	SK470	5.0×3.6×1.5 31.1	2	明黄褐色 黒褐色	下部直線の破面。緻密で重量感。滓の扁平な側端部。混入物不明。
21	366-11	70-21	椀形鍛冶滓	1g VII KH-19.20	SK470	5.1×3.5×1.2 23.9	3	明黄褐色 不明	重量感。小型独立した扁平な滓。全面に酸化土砂、繊維痕が付着。
22	366-12	70-22	鉄塊系遺物	1g VII KH-19.20	SK470	5.1×2.0×1.6 6.6	H(○) 6	暗赤褐色 不明	小型で丸み。特殊金属探知器に部分H反応。所々繊維状の光沢ある結晶様の付着物。
23	366-13	70-23	羽口	1g VII KH-19.20	SK470	3.7×2.0×- 12.2	3	- -	オリープ灰色に気泡を伴いガラス質化した先端部小破片。内径部の壁面一部残存。スサ、砂礫を混入。
24 96-23		70-24	羽口	1g VII KH-19.20	SK470	3.1×3.0×- 14.7	3		金属学的調査用考古観察表参照
25	366-14	70-25	羽口	1g VII KH-19.20	SK470	5.0×4.6×18.6 24.5	3	- -	外面に青灰色に二次還元した部分がある。先端付近身部か。内部に礫、土器状片、鉄滓状片混入。
26 96-24		70-26	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-19.20	SK470	4.2×4.2×3.1 37.6	3		金属学的考古観察表参照
27	366-15	70-27	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-19.20	SK470	2.8×2.5×2.6 14.8	3	灰褐色 橙色	横長に細長く輪積みした炉材が割れ落ちた、最上面小片。何かを受たかのように湾曲。スサ、礫混入。
28 96-25		70-28	椀形鍛冶滓(含鉄)	1g VII KH-15	SK535	4.6×3.9×1.7 45.9	H(○) 8		金属学的調査用考古観察表参照
29	366-16	70-29	椀形鍛冶滓(含鉄)	1g VII KH-15	SK535	3.7×1.8×1.5 8.6	H(○) 6	黄褐色 黒褐色	全体黄褐色の錆に覆われ、一部黒褐色の内部が覗く。特殊金属探知器に部分H反応。独立した小型の滓。
30	366-17	70-30	椀形鍛冶滓(含鉄)	1g VII KH-15	SK535	3.7×2.5×1.7 9.0	H(○) 6	黄褐色 暗褐色	特殊金属探知器に部分H反応。小型。小空洞を持ち、角状に突起。鍛造剥片を付着。
31 96-26		70-31	鉄塊系遺物(錆化)	1g VII KH-15	SK535	5.2×3.4×2.0 44.3	H(○) 7		金属学的調査用考古観察表参照
32 96-27		70-32	鉄塊系遺物(錆化)	1g VII KH-15	SK535	1.8×1.8×1.2 5.5	H(○) 8		金属学的調査用考古観察表参照
33 96-28		70-33	羽口	1g VII KH-15	SK535	2.7×1.7×4.3 4.3			金属学的調査用考古観察表参照
34	366-18	70-34	羽口	1g VII KH-15	SK535	3.5×2.8×1.3 9.5	2	- -	外面は青灰色に還元。端部発泡、膨張。先端下方側面部破片。細礫、長石混入。

表45- (2) 鉄生産関連遺物観察表 (構成図使用遺物)

(単位: cm, g)

構成図番号 総(分析)番号	図番号	写真番号	遺物名称	仮地区	出土遺 構出土	長軸・短軸・厚さ 重量	メタル度 磁着度	色調(表面) 色調(地)	観察所見・備考
35	366-19	70-35	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-15	SK535	3.2×1.6×1.5 7.5	1	鈍い黄褐色 灰白色	粘土を輪積み状に張り付けた状況を推定させる上縁部破片。縁部は内湾し、小型円形炉を思わせる。壁面は強熱を受け発泡、ガラス質化し垂下。スサ、細礫混入。
36	366-20	70-36	金床石(破片)	1g VII KH-15	SK535	2.5×1.9×2.0 8.4	1	— —	採取サンプル土中より検出した鍛打の際剥離した破片の一つ。表面に銹化物付着。火成岩(閃緑岩?)か。
39	96-29	70-39	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-22	SK538	6.1×4.7×1.8 36.6	1		金属学的調査用考古観察表参照
40	366-21	70-40	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-22	SK538	4.1×2.4×3.2 23.9	3	灰オリーブ 鈍い橙色	上面に上るにつれ黒色。強く被熱。灰を被っていることより上縁部か。細礫、スサ混入。
41	366-22	70-41	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-22	SK543	4.1×2.3×4.6 25.6	2	灰色 暗褐色	被熱の影響が強いため全体に軟質で摩耗。丸み。上面にガラス化した溶解物が鉛状に薄く付着。
42	96-30	70-42	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-22	SK543	×2.7×1.8 14.1	3		金属学的調査用考古観察表参照
43	96-33	70-43	椀形鍛冶滓	1g VII KH-17	SF8	6.4×4.2×1.7 36.6	6		金属学的調査用考古観察表参照
44	366-23	70-44	椀形鍛冶滓	1g VII KH-17	SF8	7.4×6.4×3.4 121.6	4	鈍い黄褐色 不明	底面に多量の炭、スサ、顆粒状突起物付着。表面はテーブル状でスサも僅かに付着。重量感。破面なし。
45	366-24	70-45	椀形鍛冶滓	1g VII KH-17	SF8	×4.2×2.3 33.3	3	黄褐色 黒褐色	錆に覆われ、片側破面。スサを付着し、重量感。
46	366-25	70-46	再結合滓	1g VII KH-17	SF8	10.0×8.5×4.8 267.3	6	黄褐色 黄褐色	多量の金床石片と、鍛冶滓片、羽口溶解物、鍛造剥片、スサ等を結合した、炉底大型滓。
47	366-26	70-47	再結合滓	1g VII KH-17	SF8	9.1×5.3×5.2 329.9	5	黄褐色 黄褐色	No.46に比し、スサの付着少なく、鍛冶細片、鍛造剥片の量が多く緊密で、重量感。
48	366-27	70-48	再結合滓	1g VII KH-17	SF8	7.9×6.9×2.2 121.2	4	暗黄褐色 暗黄褐色	No.46・47と同様であるが、大きな石片と粘土系溶解物を結合した炉底縁辺部の滓。
49	366-28	70-49	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-17	SF8	4.6×2.8×2.4 19.7	2	灰白色 鈍い褐色	輪積みされた壁面の一部が剥げ落ちた感じ。被熱で塊状に焼けしめる。壁面は鉛色に焼け、垂下。
50	96-34	70-50	炉壁(鍛冶炉)	1g VII KH-17	SF8	8.5×5.6×2.7 79.6	3		金属学的調査用考古観察表参照
51	96-31	70-51	鍛造剥片	1g VII KH-17	SF8	—	—	—	金属学的調査用考古観察表参照
52	96-32	70-52	粒状滓	1g VII KH-17	SF8	—	—	—	金属学的調査用考古観察表参照
53	366-29	70-53	椀形鍛冶滓(含鉄)	1g VII KH-18.19	SF12	3.3×2.8×1.7 23.2	H(○) 6	黄赤褐色 黒褐色	黄赤褐色の錆が付着。特殊金属探知器に部分H反応。数箇所の突起部と窪みがあり、底面に鍛造剥片が付着。
54	366-30	70-54	椀形鍛冶滓(含鉄)	1g VII KH-18.19	SF12	×1.8×2.0 14.3	H(○) 3	鈍い黄褐色 黒褐色	地は黒褐色。全面に薄く酸化土砂付着。底面一部赤錆化、鍛造剥片認められる。
55	96-35	366-31	鉄塊系遺物	1g VII KH-18.19	SF12	1.4×1.3×1.2 3.8	L(●) 6		金属学的調査用考古観察表参照
56	96-36	70-56	炉壁(溶融)	1g VII KH-18.19	SF12	4.6×3.9×1.8 8.5	3		金属学的調査用考古観察表参照
57	96-37	70-57	炉壁	1g VII KH-18.19	SF12	4.7×4.3×2.0 38.0	4		金属学的調査用考古観察表参照
58	366-32	70-58	炉壁	1g VII KH-18.19	SF12	6.2×4.0×2.1 55.2	附着鍛冶滓: H(○) 3	鈍い黄褐色 明褐色	輪積みされた壁面の一部が小レンガ状に剥落。壁面は緩く内湾し一部に特殊金属探知器にH反応を示す金属溶解物付着。砂礫混入。
59	366-33	70-59	椀形鍛冶滓	3a	SB3006	5.0×4.4×2.2 49.7	9	鈍い黄褐色 黒褐色	扁平な滓で酸化土砂付着。両側破面。緻密で重量感。鍛造剥片が認められる。
61	96-18	71-61	椀形鍛冶滓	4f I R-22	SK4847	5.3×6.9×2.4 92.8	3		金属学的調査用考古観察表参照
62	367-34	71-62	椀形鍛冶滓	4f I R-22	SK4847	6.9×5.7×2.0 71.2	H(○) 7	極暗褐色 極暗褐色	2辺が割り取られる。スサとともに鍛造剥片が層状に凝固、結晶体化。特殊金属探知器がH反応。
63	367-35	71-63	椀形鍛冶滓	4f I R-22	SK4847	4.7×3.3×2.0 32.2	3	鈍い赤褐色 灰色	扁平で緩い凹凸。中央で割り取られている。地は灰色金属色。緻密で重量感。鍛造剥片が認められる。
64	96-19	367-36	鉄塊系遺物	4f I R-22	SK4847	3.1×2.0×1.3 8.1	L(●) 6		金属学的調査用考古観察表参照
65	96-21	71-65	羽口	4f I R-22	SK4847	外径:7.5 口径:2.4 60.5	4		金属学的調査用考古観察表参照
66	367-37	71-66	羽口	4f I R-22	SK4847 脇取上 No.2	外径:6.9 口径:2.0 使用角度10.5°450.9g	H(○) 5	— —	先端部、身部を完全に遺存。先端部は全体溶解、特殊金属探知器がH反応を示す鍛冶滓付着。

表45- (3) 鉄生産関連遺物観察表 (構成図使用遺物)

(単位: cm, g)

構成図番号 総(分析)番号	図番号	写真番号	遺物名称	仮地区	出土遺 構出土	長軸・短軸・厚さ 重量	メタル度 磁着度	色調(表面) 色調(地)	観察所見・備考
67	367-38	71-67	羽口	4f R-22	SK4847	外径(5.7) 口径: 2.1 30.3	4	— —	先端部の約1/4周を遺存。強被熱で発泡、ガラス質化、最先端部は銹色、又は黒色。芯材を先端に向かって引き抜いた状況が見える。
71	96-16	71-71	鍛造刺片	4f R-22	SK4847	—	—	—	金属学的調査用考古観察表参照
72	96-17	71-72	粒状滓	4f R-22	SK4847	—	—	—	金属学的調査用考古観察表参照
73	367-39	71-73	羽口	4f I	SB5037 床面下	外径: 5.8 口径: (3.0) 163.8	3	— —	先端部から身部にかけて1/2周近くを遺存。床下出土4片の接合体。黒色ガラス化部分、発泡部分、青灰色還元部分と観察出来る羽口下面部。大型礫も混入。
76	367-40	71-76	炉内滓 (炉底塊ノ縁)	5b S-18	SB5061	10.8×9.0×6.3 804.0	H(O) 7	暗褐色 黒褐色	粘土片、溶解物、植物様異物、土砂等を多量に溶着。大型で重量感。2辺が縦に直角に欠落。
77	367-41	71-77	炉内滓(炉底塊)	5b S-18	SB5061	7.1×6.5×3.5 216.8	H(O) 8	鈍い赤褐色 赤褐色	粘土、粘土溶解物、土砂等を巻き込み、小空洞散在。表面赤錆化、緻密で重量感。縦に2辺が欠落。
78	96-06	71-78	炉内滓(炉底塊)	5b S-18	SB5061	6.3×4.8×4.6 166.3	7	—	金属学的調査用考古観察表参照
79	367-42	71-79	炉内滓(精練?)	5b S-18	SB5061	6.8×6.5×3.8 133.6	3	灰黄褐色 鈍い褐色	無数に気孔。重量感。底部に土砂や流動滓を付着。
80	367-43	71-80	炉内滓(精練?)	5b S-18	SB5061	5.2×5.2×3.0 102.9	5	オリーブ黒 色灰色	地は金属的光沢。気孔状の小穴に富み、凹凸あり、重い。底面は土砂、粘土片、スサが付着。暗赤褐色に錆化。
81	367-44	71-81	炉内滓(精練?)	5b S-18	SB5061	6.9×5.2×3.8 110.5	6	黒褐色 黒褐色	表面は剥片状スサを巻き込み、ゴツゴツ流動状。底は土砂、粘土片、スサ付着。全体黒褐色に錆化。縁辺部薄手滓。
82	367-45	71-82	炉内滓(特殊)	5b S-18	SB5061	5.3×3.3×1.4 21.9	2	暗灰色 暗灰色	極めて薄い、滓の縁辺部。中央部で切断したような直線の破面。黒色金属が全面細かく結晶状に突起、鉱石の結晶体状。
83	96-07	71-83	製錬滓(流出孔 (溝)滓)	5b S-18	SB5061	6.7×4.8×2.6 140.6	3	—	金属学的調査用考古観察表参照
84	367-46	71-84	製錬滓(流出孔 (溝)滓)	5b S-18	SB5061	4.4×3.3×1.6 42.6	2	赤黒色 オリーブ黒色	製錬炉外に流出しながら酸化し、表面は赤黒色。地は光沢。流動先端部破片。
85	367-47	71-85	製錬滓(流出孔 (溝)滓)	5b S-18	SB5061	8.1×4.4×3.7 126.7	3	暗赤灰色 オリーブ黒色	二段階の流動状態を観察できる破片。異物の混じって細気泡のある部分と、平滑で艶のある部分が対照的。
86	367-48	71-86	製錬滓(流出孔 (溝)滓)	5b S-18	SB5061	7.9×6.2×2.6 100.3	4	黒褐色 黄灰色	粘性が強く階段状に折り重なり、流出する状況が認められる。気泡も大きく、表面にも礫が付着。地も灰色一色ではなく、錆化部分を伴う。
87	367-49	71-87	製錬滓 (流出孔(溝)滓)	5b S-18	SB5061	5.2×4.6×4.1 102.6	4	黒褐色 オリーブ黒色	流出に伴い、溝の側縁部から中央部にかけて階段状に数条に流動状況が認められる。
88	367-50	71-88	製錬滓(流出孔 (溝)滓)	5b S-18	SB5061	6.1×5.6×2.4 103.8	4	黒褐色 オリーブ黒色	先端部分に向かって縦長に層状に6筋流出している。階段状になる程ではないが、粘性が認められる。
89	96-12	71-89	椀形鍛冶滓	5b S-18	SB5061	5.5×4.1×1.8 39.4	7	—	金属学的調査用考古観察表参照
90	96-13	71-90	椀形鍛冶滓	5b S-18	SB5061	7.6×6.3×3.8 237.3	8	—	金属学的調査用考古観察表参照
91	367-51	71-91	椀形鍛冶滓	5b S-18	SB5061	6.2×5.3×2.5 94.9	5	暗赤灰色 灰色	表面は激しく突起する部分、クレーター状凹所等複雑。2辺でL字状に破面。スサ、鍛造刺片等かなり混入。底辺には土砂、礫、粘土片かなり付着。
92	367-52	71-92	椀形鍛冶滓	5b S-18	SB5061	5.1×3.9×2.0 49.4	4	暗赤褐色 灰色	表面は平坦。全面顆粒状に突起、気孔も。一部黄褐色の錆付着。底面は固く黒錆化し、スサが混入。
93	96-10	71-93	椀形鍛冶滓(含鉄)	5b S-18	SB5061	5.1×4.6×1.4 47.9	H(O) 8	—	金属学調査用の考古観察表参照
94	96-11	71-94	椀形鍛冶滓(含鉄)	5b S-18	SB5061	10.9×8.8×4.5 466.7	H(O) 8	—	金属学調査用の考古観察表参照
95	96-14	71-95	鉄塊系遺物(錆化)	5b S-18	SB5061	2.5×2.3×1.7 9.5	4	—	金属学調査用の考古観察表参照
96	367-53	71-96	鉄塊系遺物(錆化)	5b S-18	SB5061	4.2×2.8×2.0 37.4	H(O) 9	黒褐色 暗赤褐色	金属鉄の遺存を示す亀裂。一部剥落。特殊金属探知器でH反応。全面にスサ。表面に鍛造刺片。
97	367-54	71-97	鉄塊系遺物(錆化)	5b S-18	SB5061	3.0×2.5×2.2 19.9	H(O) 5	赤褐色 不明	小型で放射割れ。特殊金属探知器でH反応。全面に礫や土砂を巻き込み黄褐色に酸化。一部黒錆化。
98	367-55	71-98	炉壁(製錬炉)	5b S-18	SB5061	8.8×5.0×4.0 165.1	3	青灰色 鈍い橙色	炉の上縁部。5~10mmの礫を混入。壁面は一部、赤灰色に変色。円形炉を示唆するか内湾。長い植物痕跡。
99	96-15	71-99	炉壁(?二次被熱)	5b S-18	SB5061	7.3×4.0×2.7 59.0	4	—	金属学調査用の考古観察表参照
100	367-56	71-100	炉壁(鍛冶炉)	5b S-18	SB5061	8.1×3.2×2.5 84.4	3	明褐色灰色 鈍い橙色	強い被熱で脆弱。壁面は発泡、全面明黄褐色から灰色にガラス質化。縦横に内湾する点から炉底に続く部分か。
102	96-08	71-102	鍛造刺片	5b S-18	SB5061	—	—	—	金属学的調査用考古観察表参照
103	96-09	71-103	粒状滓	5b S-18	SB5061	—	—	—	金属学的調査用考古観察表参照

第7節 古代の木質遺物

更埴条里遺跡・屋代遺跡群では、特に屋代⑥区を中心に多量の木質遺物が出土した。ここでいう「木質遺物」とは大きく以下のように分けられる。

1. 木製遺物……木材を加工し、その目的の形状に到達したと思われるもの。以後「木製品」と呼ぶ。なお、木材を加工した製品とは異なるが、ヒョウタンの果実を加工した容器、植物繊維を縄状にしたものもここに含めて報告する。
2. 木製品製作過程の遺物……木材を製品に加工していく過程で発生するもの。材、材の残り、削屑などで以後木製品とは区別し、屑と総称する。
3. 自然木……立木、流木など、特に加工がみられない芯持ちの木

本節では1と2について別項にしてとりあげる。図版の掲載はSD、SK、SXの番号順および包含層の順に行い、遺物集中廃棄(SQ)はそれが属する遺構の中を含める。複数のSDが同一の遺構となる場合はその遺構群名を記し、その中で個々の遺構順に掲載する。3は第6章第4節において資料として扱うこととするが、表50に抽出した100点中、同定できた96点の樹種を示した。

1 木製品 (図版368~427、PL72~86)

(1) 木製品の分類

分類項目は基本的に奈良国立文化財研究所編『木器集成図録—近畿古代編』(1984)および『木器集成図録—近畿原始編』(1993)に準ずる器種名を使用した^(註1)。ただし、「祭祀具」という分類項目は使用せず、それに該当する馬形をはじめとした、ある種の動物や道具などを形作ったと考えられるものについては「木形」という分類項目を設けた。それは「祭祀具」という範疇が非常に広く、また曖昧な部分が多いからである。祭祀において使用された木製品と捉えると、農工具や容器にもその可能性があり得る。逆に祭祀具以外に用途を持たない木製品と捉えるとその判断基準が難しく、さらに「祭祀具」の範囲を狭める結果にもなる。よって分類の段階では、その製品の形状から「木形」という大きな範疇に入れ、それが祭祀具であるのか、あるいは別な用途を持つかについてはその出土状況や類例から改めて判断することとする。また、木製品の内の多くを占める、用途が不明なものについては「その他」に含め、雑具、部材のほかに〇〇状木製品のように形状の特徴を名称に付したものがある。以下分類項目を記す。

1. 木形 斎串、動物形(人形、馬形、鳥形、蛇形)、農工具形(鎌形、犁形、墨壺形、釘形、鋤柄形)、武器形(刀形、鋌形)、その他(舟形、琴形、琴柱形、陽物形)
2. 農工具 鎌柄、斧柄、刀子柄、鋤身、田下駄、木錘、杵、横槌、網針、舞錐
3. 容器 曲物(底板)、削物(槽、皿、杯)、挽物(盤、皿)、栓、瓢箪容器
4. 紡織具 糸卷(栴、総かけ)、布卷具、経糸卷具
5. 服飾具 横櫛、竖櫛、下駄
6. 武器・馬具 弓、鐙
7. 建築部材 垂木、井戸枠、橋脚、その他
8. その他 独楽、火鑽板、水門、木樋、木札状木製品、棒状木製品、串状木製品、穿孔板、雑具、部材

(2) 木製品の解説

1. 木形

木形の分類に含めたものの観点は以下の通りである。

- ・人や動物を形作ったもの、あるいはそのように見えるもの。
- ・本来は木とは異なる素材で作られる製品を形作ったもの、あるいはそのように見えるもの。
- ・本来の大きさより小型に作ったもの、あるいはそのように見えるもの。

屋代遺跡群の木形は形状と出土状況からみて、その多くは祭祀具として使用されたものと思われる。

以下屋代遺跡群の木形について解説をしていきたい。

① 斎串

祭祀具である斎串の報告例は、短冊状の板の上端を圭頭状、下端を剣先状に加工したものを主とする。中には若干異なるものもみられるが、ほぼ全国的に同一形状の木製品が存在する点は注目される。現段階では不明だが、この形のベースとなったものが存在した可能性が高い。よって分類は木形に含めた。ただ、荷札木簡等にも同じ形をもつものがみられ、単純にこの形状を斎串 (= 祭祀具) 特有のものとして捉えるのは問題がある。しかし、出土状況からみても祭祀具として使用される場合が圧倒的だったことは事実である。よって本稿では、祭祀具の集中廃棄 (SQ) に伴うものを斎串と捉え、その形状や加工の特徴点を基準として SQ 以外で出土したものについての判断を行った。

以下、各部位の加工の状況についての解説を行う。

A 上端の形状

圭頭状に加工されるものの多くは、正三角形に近い角度となる。しかし以下のように角度が極端になるものが認められる。

1 圭頭部切り落としの角度が特に鈍角のもの (175~177、237、238、262、263、265、440、441、765~767、771~773、777など)

2 圭頭部切り落としの角度が特に鋭角のもの (106、107、123、124、472、473、643~647など)

また以下のように、上端が圭頭状とならないものも見受けられる。

3 斜めに切り落としたもの (786~790)

4 台形状となるもの (129~131、525、526、902~904など)

B 下端の形状

下端を剣先状に加工する場合、多くは左右を滑らかな曲線状に削るが、以下のような特徴的な削りを施すものもある。

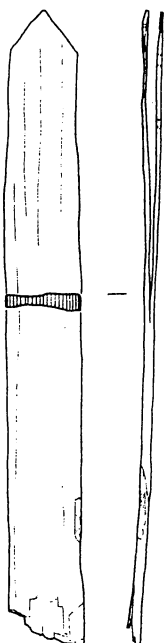
1 側部中程から特に角度をつけて左右を削るもの (52、53、472、478、479、495~497、527、529)

C 上端木口の加工

木口に対しては、成形に関わる加工以外に、下記のような加工を施すものがある。

1 ほぼ並行に刃物を入れ割れ目をつけたもの (54~56、126、127、262~264、275、640、696、828など)

当初斎串を縦に割裂いて作る技法を示すものとも考えた。しかし、必ず途中で刃物を止めている点、木口に対して斜めに切り込むものもある点、以下で示すDの加工が併用される場合がある (66、617、713) ことから、やはり特殊な加工のひとつと思われる。おそらく何かを差し込むといった機能的な面で付加された要素と考えら



(1:4)

図48 斗西遺跡出土の幣串形木器

れる。滋賀県斗西遺跡では同様のものを幣串形木器(図48)とし、割れ目に御幣紙などを差し込んだ可能性を指摘している(能登川町教育委員会1993)。

D 側面の加工

成形以外で側面に加工が加えられる例としては、以下のものがあげられる。

- 1 上部左右に1対か2対の切り込みをいれるもの(432、461、539~542、544、732~741、748、749、875)
- 2 上部左右に下方から数回切り込みをいれ、抉りのようになるもの(889~894)
- 3 上方から下方にかけ、左右に多数の切り込みを入れたもの(237~239)
- 4 上方から下方にかけ、複数対の浅い抉りを入れたもの(693~695)
- 5 上方から下方にかけ、多数の複雑な切り込みを入れたもの(742~747)

E 表面の状況

斎串の表面は割りっぱなしの状態、特に未調整のものが主である。これは木簡と大きく異なる点といえるが、以下のように表面に加工が加えられるものも認められる。

- 1 刀子等により削りがみられるもの(123、126、129~131、530、531、572、828、829、872、874、917)
- 2 蛇行線が刻印されているもの(492・493=PL78、826)

SQ以外では813(PL82)がある。また屋代木簡124号・125号には類似した墨書があり、同様の例は長野県石川条里遺跡の斎串にもみられる(長野県埋蔵文化財センター1997)。刻書、墨書の違いはあるが、共通するものとみてよいだろう。

- 3 中央部に穿孔があるもの(534、535)

以上のように、斎串は上端が圭頭状、下端が剣先状という基本的な形を保ちながら、そこに特別な加工が付け加えられる場合がある。加工の種類が様々である点と、全てに対して行われるわけではない点からみて、ある種の必要に応じて付加される要素と考えられる。また、SQの中で同一の加工がみられる点が注目される。その意味の解明が斎串という祭祀具の性格や役割を知る上で重要な課題となるだろう。

② 動物形

a 人形

短冊状の板の木口と木端を整形することによって、人を正面からみた形を作り出したものを主とする。目・鼻・口は刃物の切り込みによるものがほとんどで、1点だけ墨書のもののみみられる(15、PL72)。目・鼻・口の表現のないものについては、頭、肩、手、足の作り出しの状況から判断した。頭部の形(丸、圭頭、台形など)、肩の形状(撫で肩、怒り肩)などにバリエーションはあるが、切り落としあるいは切り折りによって足を作り出す点、側面を下方から切り込むことによって手を表現する点など共通部分がみられる。なお、同一SQ内の人形(310・311=SQ8043、459・460=SQ8021、724~727=SQ8018、757・758=SQ8016)には類似した形状が認められる。この点は前述の斎串と同様である。ただ以下のように全体的な傾向とやや異なる特徴を持つものがある。

A 足の作りがなく、剣先状になるもの

941(PL84)の1点のみであるが、屋代遺跡群においては最古の年代観が与えられるものである。顔の表現はないが、頭、肩および下方からの切り込みによる手の表現に近いものがみられたことから人形に入れた。下端から刃物を入れた痕跡がみられるが、他の人形のような足の作りは確認できない。

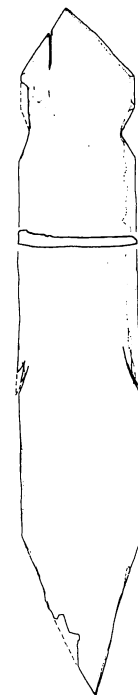


図49 神明原・元宮川遺跡出土の人形

手の切り込みを入れたあたりから両側を剣先状に削っている。中央にわずかに差込の痕跡がみられ、正面やや右よりの部分で縦に切り裂かれている。下端からの刃物の入りはあるはこの際のものかもしれない。全体的な印象が他の人形と違って異形といえる。同様の例は静岡県神明原・元宮川遺跡にもみられ（静岡県埋蔵文化財調査研究所1989）、古い段階での人形を知る上での資料となりそうだ（図49）。

B 正面や背面に故意と思われる切り込みや差込痕（傷）があるもの（242、379、459、460、941）

242は背面の頭部から腰にかけ、下方から浅く削ったような傷がほぼ等間隔で一列に並ぶ。379（PL76）は特に背面の腰の部分に交差した切り込みがみられる。459・460（PL78）は同じSQ8021の人形で正面の胸のほぼ同じ部分に浅い差込のあとがある。941も同様である。459・460の例からもわかるように偶然についた傷というより、何らかの目的をもって施されたものと思われ、人形を使用する際の一種の儀礼的な行為と受け取れる。

C 頭部木口に割目をつけたもの（249、973=PL85）

これは前述の齋串の特徴C-1と同様の加工であり、何かを差し込むために施されたものと思われる。

D 明確な腰の表現があるもの（190、724～726、883）

腰を作り出す例が少ない中で190は手の切り込みがなく、腰の部分で左右に三角の切り欠きが施されている。724～726（PL81）は同じSQ8018に属する。明確に腰が作り出され、手の切り込みもみられる。883（PL83）は最古の部類に入る人形である。手の切り込みはなく、両側部を抉り、腰が作り出されている。特に883と724～726は頭部の表現が類似している点で興味深い。

E 肩の表現をもたないもの（15～17、973）

15～17は3点とも頭部をほぼ台形状にし、足を作り出すが、肩の部分には何の加工もみられない。出土状況ではSQとしてのまとまりはないが、15だけに顔の墨書がみられるほかは同様の形状をもつ。あるいは製作者が同一なのかもしれない。

F 手の表現をもたないもの（1、2、190、380、397、444、466、467、552、570、757、758）

下方から切り込みを入れて手を表現する場合、欠損しやすいので詳細な観察が必要だが、以上のものには確実に切り込みを入れた痕跡がない。190の場合は腰の表現と思われる切り欠きが手の表現を兼ねるかどうかは不明である。

G 丸木の人形（443、PL77）

樹皮付きの丸木の股木の部分を足に利用し、目、鼻、口を削りにより表現している。頭部木口は山形に面取りされている。他の人形とは全く様子の異なるものといえる。このように丸木を人形にした古代の例としては平城宮6AAC区SE2600出土のものが1点あるが（『近畿古代編』）、股木を足として製作しておらず、形状に違いがある。股木を利用する点では、民俗例として松崎憲三氏が紹介している（松崎1985）近畿地方に限定して分布する「股木人形」に類似している（図50）。

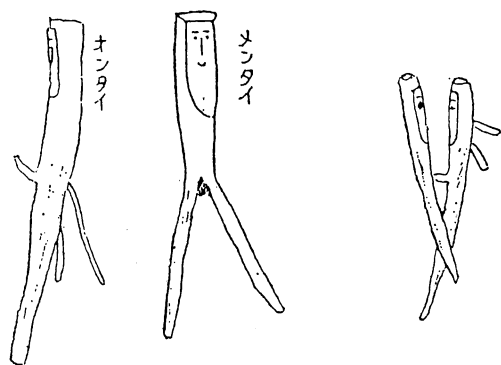


図50 滋賀県栗東町の股木人形

形状以外の特徴としては、人形は破損した状況で出土するケースが多いことがあげられる。木質遺物なので自然に破損する場合もあるだろうが、特に破断面の状況から、縦に割り裂かれたと思われるもの（121、185、380、444、554、570、941）、故意に割られたり、刃物で切られたと思われるもの（87、242、270、358、379、459、460、464、818）がみられる。これも人形の用法をうかがわせる一端となる。なお330（PL76）は平城宮で出土した組み合わせ人形の足（『近畿古

代編])と同じ形状をしている。

b 馬形

短冊状の板を加工し、側面からみた形状をもつ。馬形として報告される例は多いが客観的にみて馬を形作っていると即断できるものはほとんどない。よって屋代遺跡群においては鞍状の作り出しのあるものを優先的に馬形と捉え「A類」とし、鞍の作り出しはないが全体的な形状がA類に似ているものを「B類」とする。なお実測図は必要に応じて表裏を載せ、それ以外は表面の状況が荒れていない面を載せた。以下、分類ごとにその形状の特徴を示す。

A類 ① 細かな相違点はあるが、下顎部から胸部、腹部から尾部2カ所に削りや切り欠きを施す。後頭部に突き出しがある点が多くに共通する。ただし、突き出しは破損している場合が多い。表裏に目と思われ小孔を施したものや、口と思われる切り欠きのあるものも多い。おおよそこの形状を持つものが多数をしめる。しかし、823・824 (SQ8005)のように他と比較して雰囲気異なり、鞍の作り出しがなければ馬を形作っているとは思えないものもある。

② 下顎部から尾部にかけて削りが入らず平らなもの(143、201、211、353、400、702、935)。頭部が残存しているものには後頭部の突き出しがみられない。なお、143はやや異なる雰囲気をもつ。

③ 尾を下方から上方へ削り上げるもの(128、763、934)。

形状は大きくこの3種に分けることができる。

A類に該当する出土例は比較的少なく、長野県では箕輪大清水遺跡、石川条里遺跡に1点ずつみられる。県外では富山県じょうべのま遺跡、愛知県上品野遺跡、新潟県の場合遺跡などにみられ、山形県俵田遺跡では屋代遺跡群のSQに相当する出土状況で同形態の馬形が多数出土している(山形県教育委員会1984)。また、兵庫県では姫谷遺跡、小犬丸遺跡、砂入遺跡を始めとして鞍つきの類例が多い。さらに兵庫県出土の馬形には後頭部に突き出しをもつものも目立ち、屋代遺跡群と類似している点が注目される。

B類 形状の分類についてはA類に則すと以下ようになる。

①………74、377、471、501、502、653、705、761、762、844、942、943、1009

中でも74は鞍がない以外は全くA類の馬形と同様の形状をもつ。他のものも基本的に加工方法はA類と類似している。しかし後頭部の突き出しのないものが多い。

②………470、830 特に830はA類に類似した形状をもつ。

③………652、793 ただし652は破損部が多く全貌はわからない。

このように加工方法で分類すると一応のおさまりはつくが、客観的にみて本当に馬を形作ったものか疑問を感じるものが多い。特に761、793、942、943などは後述の蛇形に近い形状をもつ。第8章第3節で触れるように屋代遺跡群では確認できる最古の段階から、A類、B類ともに存在する。しかしA類の数が増加する第3水田対応層の段階ではB類はほぼ姿を消す点から、両者はその系統を異にする可能性も考えられる。

B類と同様に鞍の作り出しはないがその形状から馬形と報告されている例は多く、特に奈良県の平城宮をはじめとする近畿地方および静岡県で多数出土している。その中で静岡県伊場遺跡、梶子遺跡などで屋代のB類に酷似したものが出土している。

串の装着法 屋代遺跡群の馬形はA類、B類ともほとんどに串状のものを装着した痕跡があり、おそらく祭祀行為においてその場に立てるための役割を果たしたものと思われる。この串の装着方法は大きく以下のように分けられる。

1類………腹部に一本串を差し込むもので、多くはこれに該当する。特に20は串が装着された状況で出土している(PL72)。それ以外は腹部に残る差込の痕跡から判断でき、串の先端が残存しているものもある。

また馬形が、装着されていたと見られる串状品とともに出土している例(256~258=SQ8041、267・268=SQ8042、428・429=SQ8025、470・471=SQ8022、728=SQ8018、761~763=SQ8016、905~907=SQ8003)がある。同じ1類の中でも201、501、761には2カ所に差込痕がみられる。また905~907は先端を3つに分割した1本の串状品908に同時に装着されていた。

2類……表裏に2カ所ずつ差込痕があり、合計4本の串が装着されていたもの(111、145、173、203、208、502、705、806、823、824、830、1009)。破損はしているが160、285、543、652も同様と考えられる。特に705(SQ8011)は1本は不明だが串状品706~708が装着された状態で出土しており(PL81)、現在お盆の時に作られるナスの馬のような状態で立てられていたことがわかる。長野県石川条里遺跡、兵庫県砂入遺跡に同様の例が存在する。

特殊な加工 全体的な形状に関わるもの以外に特別な加工を施したものが認められる。

I 頭部表裏に一对の切り込みのあるもの(203、576、653、705、728、830)

II 頸部に多数の切り込みを施すもの(145、202、350、377、436、437、702)。なお、211は尾部であるが同様の切り込みが認められる。

III 頭部表裏に角状の差込が一对あるもの(201=PL74、202)。後述の鳥形の中にも同様のものがある。

以上の加工の示す意味は不明だが、造形上何らかの意味が付加されたものと思われる。

破損の状況 馬形は多くが破損して出土している。しかし破損の状況を見ると、特にA類は鞍を中心にしてその前後の頸部や尾部が割れているという共通点がある。中には830・943のように刃物で切断されたと思われるものもあり、故意に破損されたものと考えられる。ここにも馬形の用法の一端が窺える。

c 鳥形

短冊状の板を加工し、側面からみた様子を形作る。馬形同様の串の装着痕を持つものが多く、やはり祭祀の場に立てられていたことがわかる。外見上鳥を形作っていると判断しやすいものは以下の通りである。

23 表裏面中程に刃物で切り込みが入れられており、羽を閉じた様子を表しているようにみえる。串の装着は1類。なお、頭部木口に斎串同様の縦割りがみられ、薄板状のものがはさまっている(PL72)。

76 23同様に刃物の切り込みによる羽の表現がみられ、尾部にも認められる。裏面はかなり荒れているが、同様な痕跡がみられる。また、頭部に一对の切り込みは認められ、馬形と共通する要素がある。腹部が破損しているためはっきりしないが串の装着痕があり、1類に含められる。

355 同様の羽状の切り込みがみられる。小孔により目の表現が施されている。串の装着は1類である。

500 羽を表現する切り込みはないが、頭部先端の形状や尾の形状が鳥に酷似する。串の装着痕はない。以上の4点は羽を休めて留まる鳥の様子を形作ったものとみられる。

755・756(PL81)は前述の4点とは異なり水鳥風の印象を受ける。背の部分の逆台形状の切り欠きが特徴的で、時代はかなり遡るが弥生期の大阪府池上遺跡の鳥形に同様な切り込みをもつものがあり、金関恕氏は羽を装着するものとしている(金関1982)。あるいはこのような古い要素を残すものなのだろうか。755に串の装着痕はなく、756は2類である。

他のものについては積極的に鳥を形作ったと断定できる要素がなく、前述の馬形A類、B類とは様子の異なるものを鳥形として分類した。なお、串の装着痕があるものについては一覽表に馬形と同様の分類を付した。また、馬形と共通する特殊な加工があるものは以下の通りである。

I 頭部表裏に一对の切り込みのあるもの(76)

II 頸部に多数の切り込みを施すもの(248)

III 頭部表裏に角状の差込が一对あるもの(248・843)

d 蛇形

短冊状の板の先端木口を圭頭状にし、下端を剣先状に加工する点では齋串と同様の造形をベースとしている。これに加えて両側部交互に三角の切り欠きあるいは曲線的な削りを施しており、特に両側面交互を抉るように削るものは造形的に蛇を思わせる。板の木端を交互に削る加工方法は前述の馬形B類と共通する。同様の加工をもち齋串として報告されている例は7世紀後半の藤原宮や滋賀県湖西線関係遺跡（奈良国立文化財研究所1984）にあるが、いずれも切り欠きが2カ所と1カ所の交互となるものである。屋代遺跡群のように、両側面に3カ所以上の切り欠きが交互に連続的に施される例は今のところ把握できていない。この木製品が出土しているSQの内、8004、8013、8044は齋串が伴う。また、馬形A類や人形のああるSQにはこの木製品が伴わない傾向がある。以上のことから特殊な祭祀具として意識されていたと思われる、この1群を蛇形と分類した。なお平城京跡出土のものにも蛇形とされる例がある（久世康博1997）。

蛇形の形状は先にも触れたが、大別すると以下の通りになる。

A類 側部交互に三角の切り欠きが施されるもの

70、77、314、391～393、869・870、871、895～899、962

B類 側部を交互に緩やかな曲線状に削るもの

3、135、137、138、183、198～200、346～348、374、375、522～524、831、932

双方とも地面に置くと、その蛇行した様子から蛇を思わせ、馬形、鳥形のような串の装着痕はない。なお表裏面に数条の平行した斜線が確認できるものがある。これらの内522～524、897の下半部にみられる斜線は刃物などによる切り込みではなく、木目状の圧痕である（PL79）。SQ8004の出土状況からもわかるように蛇形は齋串と放射状に重ねられており、その際ついたものと考えられる。同様の圧痕は齋串の893・894にも確認できる。よって522～524は蛇形どうしが重ねられた結果ついたものと思われる。これに対し、391～393および897表面中程にある斜線は明らかに刃物で切り込まれたものである（PL83）。これについては蛇形に対する特殊な加工と受け取れる。871には表裏に数対の切り込みが施されている。

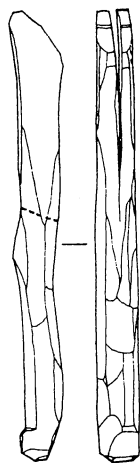
以上の齋串、動物形は、集中廃棄の状況で出土したSQに含まれる遺物であり、祭祀に関わって使用された祭祀具と判断できる。

③ 農工具形

農工具形に分類したものは出土数がそれぞれ1点のみで、齋串や動物形と異なり数多く製作されたものではないようだ。また、形状に不確かな点もある。

a 鎌形（403、PL76）

サワラ材を曲線的に削り、柄状に加工したもので、上端木口から刃物を入れて中程まで割り裂いている。これは刃を装着する部分を表すものと思われる。表裏面に整形した跡はみられない。平城京左京一条三坊 SD650出土の木製品に鎌形（図51）とされているものがある（『近畿古代編』）。



b 墨壺形（794、PL82）

サワラ材を削り抜き、箱形にしたもの。表面両側部に削りがあり、糸巻きの滑車をのせる部分を表す。木口片側に貫通した小孔があり、糸道を表すと思われる。各面を丁寧に整形している。小品であり、実用のものとは考えられない。古代の墨壺としては正倉院伝来のものと、平城宮6ABG区 SD3715、兵庫県栄根遺跡出土のものがある（『近畿古代編』）。いずれも糸巻きの滑車は墨壺の外につけられており、794とは形が異なる。

c 釘形（254、PL75）

サワラ材を削り出し、円頭丸釘の形にしている。実用の木釘と捉えることもできるが、1点のみ出土であり、使用の痕跡もみられないことから釘形とした。金属製品をつくる

図51 平城京跡
出土の鎌形

際の雛形としての報告例が奈良県飛鳥池遺跡、平城宮6ADF区SK1979、二条大路木簡溝などにある。これらはいずれも鉄鍛造用の雛形とみられ、断面は四角である。254は丸釘であることから、あるいは銅鑄造用の雛形かもしれないが即断はできない。

d 鋏柄形 (147、PL73)

カヤの枝を利用して加工したもの。形状が鋏膝柄に酷似する。鋏装着部に特別な加工はみられないが、下端部木口は錘状に削り加工されている。

e 犁形 (865、PL83)

イヌガヤの枝と幹の一部を利用して加工したもの。犁に似た形状をし、犁先状の表現もみられる。しかし、犁柱に関わるような加工は認められない。あるいは正倉院子日手辛鋤のようなものを模したもののか。

④ 武器形

a 刀形 (279・594、PL75・80)

把が付いた状態を抽象的に模したもので、鏢の表現はないが、把頭が作り出されている。刃と峰の区別もつけられている。594は上半部が欠損しているが、279は割れた状態で出土した。あるいは故意に割られたものか。

b 鎌形 (912、PL84)

割りっぱなしに近い状態で丁寧な作りではないが、有茎鎌に似た形状をもつ。下方からの対の切り込みは逆刺を表すものと思われる。

⑤ その他

a 舟形 (40、197、402、562、612、692、884)

板の片面を削り込み、丸木舟に似た形を作り出すもの。特に402、562、884は船首と船尾の区別がみられ、562の船首部分には水切り状の加工が施されている。また、197と612には船首と思われる部分に穿孔があり、引き綱を緊縛する穴を模したものと考えられる。40などは特に単純な加工であり、槽のミニチュアのようにも見受けられる。

b 琴形 (289、PL75)

尾部に弦をかける突起が作り出され、頭部に集弦孔がみられる。両側部が欠損しているため本来の突起の数は不明である。また、頭部中央の集弦孔の両脇に穿孔痕が認められる。左側は木端の状態が滑らかで、あるいは抉りかもしれなが、右側は欠損しておりあきらかに穿孔の痕跡と認められる。このことから、集弦孔は複数あったものと判断できる。なお、26号木簡は琴形に転用されたものと思われる。頭部、尾部双方に同数の突起が作り出されており、他に類例をみない。両端の並列する穿孔と中央やや上よりの縦に並ぶ穿孔は、琴形に転用した際のものと思われる(長野県埋蔵文化財センター1996)。

c 琴柱形

琴柱を実際に使用したと思われる琴本体が確認できていないため、琴柱形として分類した。形は金子裕之氏の分類(金子1980)のように、等脚台形の両斜辺を切り落とした六角形状のもの(A類 141、142、196、288、376、405、505)と等脚台形のもの(B類 91、445、446、506)にほぼ分けられる。ただA類には、斜辺の切り落としが垂直のもの、内側に向かい斜めになるものがある。また、406は他とは半円形で特異な形状であるが、弦受けの溝と思われる加工があることから琴柱形とした(PL77)。

d 陽物形 (1006、PL86)

芯持ちの枝部を利用し、幹側の部分を亀頭状に丸く削っている。出土地点は第4水田の畦畔水口付近であり、農耕儀礼との関連を示唆する。樹種はトウヒ属バラモミ節で、これ1点のみに認められる。あるいは特別に樹種を選定したのかもしれない。

2. 農工具

物の生産や加工に関わる道具類を農工具として一括分類した。

a 鎌柄 (47、363、408)

3点とも柄のみで刃は残存しない。47 (PL72) は屈曲した柄で、柄尻にすべり止めと思われる突起が施されている。刃の装着孔をはさんで上下に切り欠きがあり、これは刃を固定するための緊縛用の加工と思われる。上部は背面側にも切り欠きがある。363 (PL76) はほぼ直の柄である。363と同様に柄尻に突起があるが、刃を固定する緊縛用の切り欠きは装着孔の上のみに施されている。408は柄部が欠損している。装着孔の上下には特に切り欠きは認められない。

b 斧柄 (171、837)

柄のみで刃は残存しない。両者とも枝を柄に利用し、幹側を斧台に加工している。刃の装着部の状況から、袋状鉄斧をつけたものと考えられる。171 (PL74) は縦斧、837 (PL82) は横斧と捉えられる。

c 刀子柄 (407、507、508)

鉄の茎が残る柄が2点ある。刀身部が残らないため刀子と断定することはできないが、現段階ではここに入れておく。

407 (PL77) は柄頭木口から割り裂き、茎を挿入する。上部に緊縛用の切り欠き及び抉りが施されている。柄の形態としては鎌に似ている。茎が残存するが、出土時点では斜めになっている。黒色の付着物がみられ、刃の固定に利用したものと考えられる。

507 (PL78) は柄頭に茎孔をあけ、茎を挿入する。茎及び関からわずかに刀身部が残存する。柄尻に樺皮が巻きつけてある。

508 (PL78) は柄頭が欠損しているが、形状から刀子柄と思われる。全面に黒漆が塗られており、精製品の観がある。407に比べ後者2点はわずかに屈折している。

なお、これら以外に刀子などの工具の柄に類似した形状をもつものがある。

409 (PL77) は先端が2次的に切断されているが、下端をやや膨らませて削り柄尻状となる。中央部に穿孔があり、表面全体を丁寧に削り調整している。先端部木口には特に茎孔の痕跡は認められない。

584は断面楕円状に削り出した材の上端を水平にきり、下端を丸く削る。上下貫通する割目が施されており、何らかの刃物を挿着し柄として使用したものか。

662はやや屈曲させた刀子の柄に酷似し、表面全体も丁寧に削り調整された精製品だが、茎孔は確認できない。あるいは柄のみの未製品か。

d 鋏身 (219、220、511、993)

7世紀以降の鋏の分類が明瞭でないため、『近畿原始編』の分類に従うと、全点曲柄を緊縛して装着する鋏身と考えられる。219・511は曲柄平鋏C式に属し、軸部と刃部との境が明瞭である。

219 (PL75) は着柄軸と刃部がほぼ同じ長さである。軸頭と肩部の間に長さ10cmの突起があり、柄装着面には軸の中央に段が設けられている。よって柄側の装着面にも段があったことがわかる。刃部をU字状に削り込んであり、U字形の鉄製刃先が装着されていた、いわゆる「風呂鋏」である。

511 (PL78) は着柄軸の突起より上が欠損しており、軸頭の形状は不明である。肩は219に比べハの字状となる。刃部にU字状の削り込みはなく、先端部が表裏とも削られている。

993はかなり破損が激しいが、着柄軸の下に笠の痕跡が認められ、曲柄平鋏D式(ナスビ形)に属するものと思われる。軸頭は欠損しているが、裏面にわずかに段がついている。刃縁も破損のため形状がつかみにくい。出土したSX7035は湧水を起点とする導水型祭祀遺構であり、その中心部の水門脇から出土している点からみて、儀礼用の特殊なものである可能性もある。

220は着柄軸のみで刃部の状況は不明である。軸頭に隆起があり、ハの字状に開く突起が施されている。他3点の着柄軸と比較するとかなり大きい。

出土遺構および層位から時期別に順序づけると、993（第5水田対応層古段階）→511（第4水田対応層）→219・220（第3水田対応層）となる。

e 田下駄（822、998、999、1002、1003）

822（PL82）は半分が欠損しているが、中央部に柄穴があり、木口に柄が作り出されている。形状からみて、杵型田下駄の部材と考えられる。他は足板である。

998（PL86）は緒孔が3つあり、上下両端部に穿孔が施されている。孔の大きさから紐等で杵の部材にとりつけたものと考えられる。両側部中央を削り、くびれさせているのが特徴的である。

999（PL86）は下部の緒孔から下が欠損しているが、緒孔は3つである。上端両脇に2つの穿孔があり、同様に下端にもあったことが予想される。このように上下端に穿孔が2つ施されているものとしては、静岡県瀬名遺跡の輪カンジキ型田下駄として報告されているものの内、古墳時代後期以降から平安時代に属するものに類例がある（静岡県埋蔵文化財調査研究所1994）。ただし、瀬名遺跡の例は側部中央に最大幅があるのに対し、999はその部分が最小幅になる点が対称的である。

1002（PL86）も緒孔は3つあるが、側部に加工は施されず長方形を呈する。上下端が欠損しているが、上端ほぼ中央に穿孔がひとつ認められることから、下端にもあったことが予想される。やはり紐等で杵の部材にとりつけたものと思われる。

1003（PL86）は切り欠きを施し有頭状にしている。欠損のため緒孔が存在したかどうかは判断できない。瀬名遺跡には同様に有頭状で緒孔のない輪カンジキ田下駄が存在することから、それに類する可能性もある。表面に無数の刃物痕があり、転用して田下駄としたものと思われる。

822のみ屋代遺跡群⑥区SD7046の出土で1期後半（7世紀末）に属するが、他の足板4点は更埴条里遺跡の平安水田の出土で9世紀に属する。

f 木錘（222、447～449、580、582、673、703、975、976）

材のほぼ中央上部に穿孔し、紐を通したと思われるものが主である。この形態9点の内5点がコナラ属（コナラ節）で、クリが3点、アサダが1点であり、ある程度樹種を選定していたようである。582は芯持ち材の一端を削り込み有頭状にしている。その部分を結びに使った錘の一種と考えられる。

g 杵（415、669）

2点とも欠損しているが堅杵と思われる。415は搗き部先端の状況が不明だが、669（PL80）は滑らかに丸くなる。両方ともかなり小振りで、同じく⑥区で出土した臼状の石製品と対応するのかもしれない。

h 横槌（8、961、1000、1001）

8はモミ属の追柁目材から作り出している。打痕が認められることから横槌とした。敲打部は板材から作り出したため扁平で、打面は縦、横方向とも曲線的に仕上げられている。

961は柄の1部で縦方向にも割られている。柄の先端がグリップ状に削り出されているが、敲部がないため横槌と断定することはできない。

1000はコナラ属クヌギ節の芯持ち材を利用して作り出したもので、柄と敲打部の境が水平に削られ、明瞭に区別されている。敲打部には打痕が認められる。他と比べ大振りで、柄を両手で持って使用したものと思われる。

1001はカヤの芯持ち材で有頭棒状であるが、窪みを打痕と判断し、横槌として分類した。

i 網針（795、PL82）

漁業用の網を編む道具として民俗例にもあるようだ。古代の木製品としては、新潟県の場遺跡で1点報

告されているが(図52-1)、下半部のみで全体の形状は不明である(新潟市教育委員会1991)。また、宮城県里浜貝塚出土の縄文晩期の骨製完形品(図52-2)は、よく似た形状をもつ(潮見浩1988)。

795は針葉樹を使用した精製品である。これによって編まれた網が漁獲用のものかどうかは不明である。しかし、屋代遺跡群⑥区が千曲川に近接した地点であることは重要な要素である。また多量に出土している土錘や、後述のように浮子と思われる木製品の存在から漁業に関わる道具の可能性も考えられる。

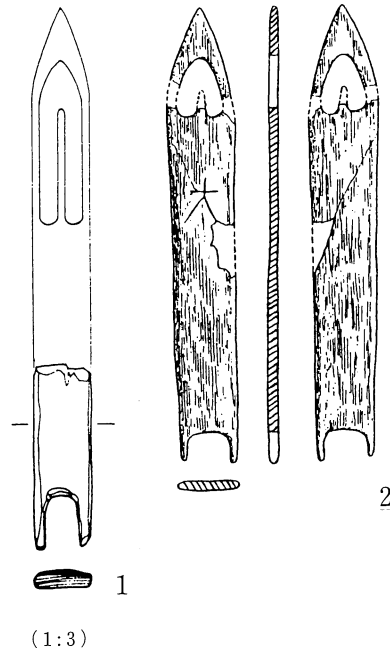


図52 網針類例

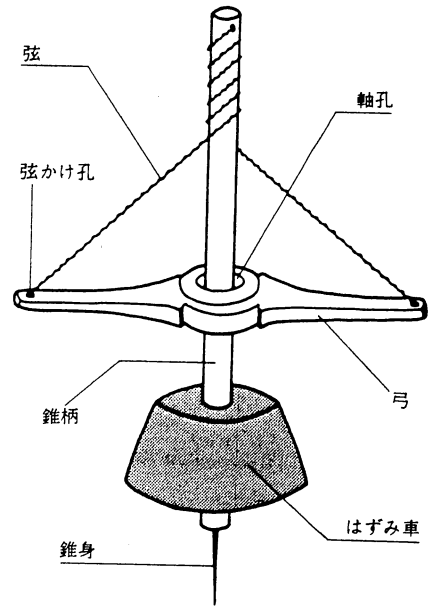


図53 舞錐概念図

j 舞錐(807、PL82)

神社などに現在でも残る発火具としての舞錐に形が似る。有頭状の棒が軸で、もう一方が弓にあたる。軸の頭部に緊縛して巻き付けた弦を弓の両頭部に結び使用したものか。軸が途中で2次的に切断されているため、その先の形状は不明である。舞錐の弓としては奈良県平城宮下層(4世紀後半~5世紀前半)、奈良県曾我遺跡(6世紀後半)、京都府石本遺跡(6世紀後半~7世紀初頭)に類例があり、また静岡県登呂遺跡にも同様のものがある(『近畿原始編』)。807はこれらと比較するとかなり小型であり、発火用のものとは考えにくい。あるいは片手で使用する穿孔用の道具かもしれない(図53)。ただし、明瞭な使用痕は確認できない。出土遺構であるSD8032はほかに前述の墨壺形、網針がいずれも単品で出土していることから、これらも含めてある種の儀礼用としての木形と考えることもできる。

3. 容器

① 曲物

側板がついているものおよび側板のみのものを曲物、側板がつけられていた痕跡をもつ板を曲物底板とする。なお、分類の段階では側板がつけられた痕跡のないものも底板としておく。

底板は円形、楕円形、長方形(隅丸を含む)に大別する。分類は側板との接合方法で行い、『近畿原始編』のA~Fの分類(図54)を使用する。なおそこに接合方法の分類として、木釘を用いるもの-1類、樺皮のみを用いるもの-2類、樺皮を差し込んだ孔に木栓を打ち込み隙間をふさぐもの-3類を付加する。更埴条里遺跡・屋代遺跡群では曲物底板とみられるものを含め約170点が出土しているが、A、B類に属するものはない。

a 円形底板

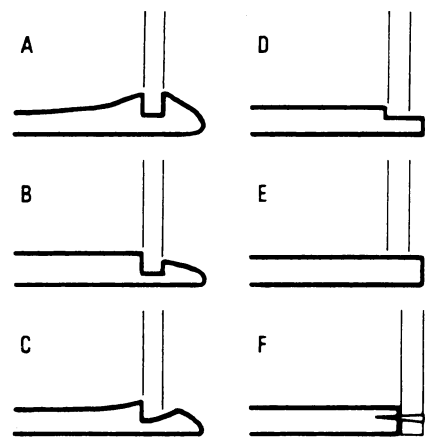


図54 側板接合法の分類

D、E、Fの3種類がある。D類の側板接合方法は1、2、3の3種類がみられる。

D-1類の226はわずかに段差がつけられており、側板に打ち込んだ木釘が残存している(PL74)。側板外側上方から斜めに打ち込んだものと思われる。同様の接合方法としては、静岡県川合遺跡の古墳時代後期の例があげられる(静岡県埋蔵文化財研究所1990)。226は8世紀前半に属する。

D-2、3類は基本的に樺皮で側板と接合するものであるが、D-3類は、樺皮で側板を結んだ隙間に木栓を打ち込む点でD-2類と異なる。D-2類の4点(30、31、609、988)は底板に施す穿孔が極めて小さい。特に30、31、998は樺皮1枚が挿入できるぎりぎりの範囲で切り込みによる穿孔がされているだけである。これに対しD-3類は底板下方から大きいものでは径5mmほどの穿孔が施される。木栓は側板の内側にあたる部分に打ち込まれるのが通例のようだが253、514、558のように、樺皮のみによって孔がふさがれた部分と木栓が打ち込まれた部分双方が存在する場合もある。

このように木栓が確認できるものとして奈良県和田廃寺の例(奈良国立文化財研究所1984)のほかは今のところ確認できない。しかし、中山正典氏が静岡県瀬名遺跡の曲物について指摘しているように(中山1994)樺皮や木栓が残存しない場合でも直径3~5mm程度の小孔が穿たれている場合は、この技法が使用されていた場合が多いのではないだろうか。これについては今後の報告を待ちたい。

底板に段差のないものとしてはE-1類とF-1類がある。なお、木釘による接合痕のない225、290、559も同様の形状をもつ。

E-1類の166は底板下方から木釘を打ち込んだ痕跡が1カ所認められる(PL74)。表面には木釘が貫通した部分にケビキ線が施されており、そこを目安に側板が設置されたものと思われる。

F-1類の特徴としては、特に中央部に穿孔のものが多い点があげられる(153、361、381、456、682、683、1008)。これらは穿孔のないものとは用途上異なる役割をもっていたと考えられる。

683は半分欠損しているが中央やや左寄りに穿孔があり、底板と同じサワラ材を削り出した部品が残存している(PL80)。あるいは欠損した側にも同様の位置に穿孔があり、部品は把手の役割をもっていたかもしれない。用途としては蓋が想定できる。

1008(PL86)は中央に径5cmほどの穿孔があり、その部分を中心に表裏が焦げている。この点から蒸し器(蒸籠)としての用途が想定できる。他の5点はいずれも中央部に径1cmほどの穿孔があるが、焦げた痕跡はみあたらない。蒸し器等に使用されなかったとすれば、穿孔がある以上底板には適さない。あるいは683のように蓋として使用されたものか。同様にD類の253、513にも中央部穿孔が認められる。なお、521も長方形であるが中央に穿孔があり、蓋などの用途が考えられる。

木釘による接合痕のないものの内、290、559は中央に穿孔がある。側板をもたない曲物の蓋あるいは曲物以外の容器の蓋としての可能性が指摘できる。なお、521は長方形で中央に穿孔がある。

以上の円形底板を分類別に直径で比較すると、D-2、2、3併用、E、F類は径12cm~20cmの中に入り、特に14cm~18cmに集中する傾向がある。D-3類もこの中に含まれるが、24cm~30cmの4点(291、359、413、667)が突出している。『木器集成図録-近畿古代編-』では主として円形底板のD、E類を蓋と捉えている。対応する直径をもつF類が存在する範囲内なら理解できるが、直径が突出して大きい4点に対応する直径のF類が出土していない。このことからD、E類全てを蓋と考えることには疑問がある。

b 楕円形底板

670以外は段差を持つ底板で、側板方向に緩やかな傾斜がつけられている。29、886はC-2類だが、886はかなりの大型品とみられ、大きめの樺皮を3重に巻き、強力に緊縛している。

223、596、852はC-3類に属する。29、223、596には長軸に把手状の張り出しがみられ、大型品の223、596は中央に小孔がある。あるいは補修などをした際の結合孔だろうか(PL74、80)。627は長軸左右側面

にわずかに段差がみられることから、把手状の張り出しが施されていた可能性がある。樺皮、木栓ともに残存しないことから接合法は不明である。

670 (PL80) は唯一段差をもたず、側面に木釘痕が残る F-1 類である。ほぼ中央部に小穿孔があるが、2 次的削り等が行われているため、当初からのものかは判断できない。小型品であり、側板が接合された状態は現在の「めんば」に似たものと思われる。

c 長方形底板 (32、71、561、685、851)

全て段差をもつ底板で32、71が D-2 類、561、685が D-3 類で851はわずかに側板方向に傾斜がかかるので C-3 類とした。

561 (PL79) は破損はしているがほぼ完形に近く、「折敷」とよばれる形態に属するものと思われる。

71は側板接合部に樺皮を挿入する切り込みによる穿孔と、丸い小孔がセットになって施されている。中央部には直径 2 cm ほどの穿孔の痕跡が認められる。

685 (PL81) は底板外周の形状から長方形としたが、段差部分は楕円形に近く、他に比べ小型である。

時期別の傾向 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古代の曲物を底板を中心に外観したが、時期的に細分してみると以下のような傾向がみられる。

- ・円形底板は D 類、F 類ともに 1 期前半 (7 世紀中頃~後半) には出現している。その割合については不明だが両者は 8 期前半 (9 世紀後半) まで共存している。これ以後基本的に D 類は姿を消し、F 類が主体となっていく。

- ・楕円形、長方形底板は 1 期前半から 6~7 期 (9 世紀前半) まで存在し、大小のサイズがある。

- ・円形底板の直径には、15~16cm を境とした変化がみられる。7 世紀後半から 8 世紀前半は 15~16cm 以上のものがほとんどで、20cm を超えるものは D 類に限られる。逆に 9 世紀代では、それ以後減少し姿を消していく D 類の直径は縮小化し、8 期以降は F 類に径 20cm を超えるものが登場する。

- ・円形底板の側板接合方法をみると、D-2・3 併用および D-3 類は 8 世紀前半以前に限られ、9 世紀代は D-2 類のみとなる。長方形、楕円形底板も 886 を除いて 2 類の接合方法は 9 世紀代に限られる。

8 世紀後半に属する資料がないことと、側板が残るものが少ないため明確なことは言えないが、曲物の法量と側板接合方法は、9 世紀に画期があるようだ。これについては白居直之氏が長野県内出土の曲物についての指摘に一致する (白居 1997)。屋代遺跡群の資料は 7 世紀後半代に円形曲物が存在する点でこれを補完することになる。

② 剝物 容器と考えられるものとしては、槽、皿、杯がある。

a 槽 (457、551、614、671、840、881)

サイズに大小のバリエーションがある。また、水口がつけられ、水門に転用されているもの (516、601)、杭に転用されているもの (981) がある。用途が特定しにくい容器であるが、551 (PL79) は SD7037 の祭祀具集中廃棄 SQ8042 (539~548) の近くで出土しており、他に遺物がないことから、これらの祭祀具を入れたものである可能性がある。また、840 (PL82) は棒状の把手がつく。おそらく両辺に 2 本ついていたものと考えられ、田舟と捉えることもできる。

第 4 水田対応層 (1 期末~2 期初頭) の 457、551 を下限とし、それ以降は認められない。

b 皿

ほとんどが 9 世紀代に属する第 2 水田対応層出土のもの (10、62、387、388、916) で、これらは非常に薄くつくられている。

388 (PL76) は底部に「赤」の字が刻書されているが、同じ字を書いた墨書土器が集落域から出土している点が注目される。第 3 水田対応層 (2 期) に属する 154 (PL73) も薄手だが破片であるため全容はわか

らない。第4水田対応層には厚手の皿(560)がみられる。

d 杯(864、PL83)

形状、法量ともに土器の杯に類似する。白木のままで、漆などを塗布した痕跡はない。

③ 挽物

高台のつく盤(9、PL72)は底部に爪痕が認められる。なお412は全容は不明だが皿と思われ、表裏に黒漆を塗った精製品である(PL77)。

④ 栓(299・300、PL75)

口径の小さい何らかの容器の栓として使用されたと思われるもの。両方とも紐を通し、容器に結びつけたと考えられる小孔があるが、299は長軸片側に2カ所あるのに対し、300は長軸両側に1カ所ずつである点が異なる。類似したものが平城宮で出土しているが(『近畿古代編』)、これには小孔がみられない。

⑤ 瓢箪容器

ぎぼし型のヒョウタンの中身を剝り抜いた後、軸部と萼部に孔をあけ柄を装着したものがある(515・563)。柄杓として機能していたものと考えられる(PL78・79)。他にも柄は残存しないが、同様に柄杓に加工されたと思われるヒョウタンが5点確認できる。

このようにヒョウタンを加工して作った柄杓は『延喜式』の神祇関係の式に祭料や解除料として記載されている「匏(ヒサコ・ナリヒサコ)」に該当するもので、祭祀行為の中で特に酒との関わりが深い可能性を以前指摘した(宮島1996)。この2点は1期末～2期初頭(第4水田対応層)に属するもので、現在のところ『延喜式』の時代よりかなり遡り、全国的にも古い例である。

910(PL84)はヒョウタンの軸部から下を水平に切り容器状にして、胴部に1カ所穿孔を施す。柄杓の場合は強度の問題から、穿孔は軸部と萼部に施すのが通例で、910の孔は柄を挿入するものではない。形状から考え「甕」のような役割をもっていた可能性がある。時期は1期前半(第5水田面古段階)に属する。

4. 紡織具

大きく分けて、糸巻きと織機に該当するものがある。しかし、織機の部品は断定が難しく、ここに載せたものは、類例と比較してその可能性が高いものとしておきたい。なお紡錘関係のものとしては、多量の紡錘車(鉄製、石製、土製、骨製)が出土している。

① 糸巻き

紡いだ糸を巻き取り纏にする道具としての杵(かせい)は、確実なものとして674(PL80)がある。支え木に相当する部分で、中央部の一回り厚く削り出した部分の内側が握りとなる。上下に杵木を装着し、工字状となるものである。なお、杵には大小2種あった可能性が指摘されていることから(上原1993)、類似する形状をもつ624も支え木としてあげておきたい。228(PL74)はやや2次の削りが認められるが、上部は支え木を装着する柄孔と思われ、目釘が残存する。654とともに杵の腕木と考えたい。

糸を巻き取る際に使用する糸かけとしては、293・583・615・616・625があげられる。いずれも1部が残るだけだが、腕木を挿入する孔が斜めにあけられている。

11(PL72)は十字状に組み合わされ、中央部の孔に軸が残る。形状は糸かけに似ているが小型であり、支え木を合わせる部分に段差がなくしっかりと接合ができない。よって実用品とは思われず、あるいは木形と捉えたほうがよいかもしれない。810・811も類似したものだが、穿孔は垂直に施されている。

糸かけから糸を巻き取る道具の糸巻としては、163・503がその横木に該当する。十字に組み合わせ中心の孔に軸棒を通すものと思われるが、163は全体が残ったとしても10cm前後とかなり小さい。また、503は厚さが0.45cmとかなり薄い(PL78)。両方とも実用品かどうか疑問が残る。156・227・458・677・880はいず

れも欠損したり、677のように2次的な加工を受けていて全容は不明だが、軸孔を中心に十字に組み合わせたものと考えられる。ここでは総かけの支え木もしくは糸巻の横木と捉えておきたい。

② 織機

屋代遺跡群出土木簡の中には布に関わる記載のあるものがみられる（長野県埋蔵文化財センター1996）。習書なども含むが、中に「布手」と記載された10号木簡がある。これを織布作業者を示す言葉とし、織布作業場あるいは作業の管理主体が付近に存在した可能性が指摘されている。また、人名、布、数量を記載するもの（59号木簡）の存在からみても、屋代遺跡群⑥区出土の木製品の中に織機が存在する可能性は高い。しかし、その断定は困難であることから、織機の部品と考えることが可能な形状をもつものをあげるにとどめたい。

371（PL76）は緯打具（刀杼）に似た形状をもつ。片側が欠損しているため全長は不明である。2期（8世紀前半）に属する。ほぼ同時期の例である大阪府上田部遺跡と静岡県伊場遺跡のものは管大杼で、緯越具を兼ねる。また、山形県鳴遺跡にも出土例があり、これも緯越具を兼ねるようである（竹内晶子1989）。以上の例は、持ち手部に371のような柄状の加工はみられない。なお、371には本来糸を打つ面と思われる図の上側が鋭利に加工されていない点と、糸が擦れた明瞭な痕跡は認められない点に問題が残る。

414、848は両端が有頭状となるもので、布巻具あるいは経糸巻具の可能性はある。有頭部を除いた最大幅部分の長さが414（PL77）は29cmで、848（PL83）は65cmを測る。令小尺に換算すると29cmはおおよそ1尺（29.7cm）となる。65cmはおおよそ2尺2寸となり、「養老賦役令」の調絹繩の「広2尺2寸」と同じである^{（註2）}。両者を布巻具と捉えると、布幅に規格性が窺われ興味深い。ただ848は414に比べ、表面が円滑でなく、布巻具にふさわしいものかは判断できない。あるいは経糸巻具かもしれない。

時期は414が1期末～2期初頭（第4水田対応層）に属する。848は1期後半（第5水田対応層）であり、7世紀末葉に属することから養老令より時代は遡る。

5. 服飾具

① 櫛

横櫛は5の肩部がやや丸みを帯びているほかは、ほぼ直角になる長方形のものが主体となる。その中で歯元が親歯までほぼ直線的なもの（691=PL81、982=PL85）と親歯に向かって曲線を描くもの（4・5・419・983=PL85）の相違がある。時期は598・691が1期（第5水田対応層）、419・915が1期末～2期（第4水田対応層）に属し、4・5・386・982・983が第2水田対応層以降の9世紀代に属する。9世紀代のものはそれ以前のものに比べ歯が非常に薄く削られている。

89（PL73）は縦櫛である。2期（第3水田対応層）に属するが、8世紀代の縦櫛は馬の毛を梳く櫛（馬櫛）である可能性が指摘されている（金子裕之1996）。

② 下駄

全て台と歯を一木で削り出す連歯下駄である。台がほぼ長方形のもの（117、149、510、808、809）と楕円形のもの（509、578、600）に大別できる。809（PL82）はつま先の緒孔が2カ所あり、左側を木で埋めて補修してある。以上のものは長さが23.8cm～28.5cmで指や踵の圧痕がついたり、歯がすり減るなど明瞭に使用の痕跡が認められる。これに対し6、7（PL72）は15.65cm、14cmと非常に小さい。特に7には使用の痕跡が認められず、緒孔も他に比べ非常に小さい。実用品かどうか疑問である。この小品2点は9世紀代だが、他は全て2期以前（8世紀前半以前）に属する。

6. 武器・馬具

① 弓 (155、564、971)

いずれも大部分が欠損しているが、弓弭が確認できる。白居直之氏の分類ではB形態に属する弓弭である(白居1997)。155(PL73)、564(PL79)は細目の弓で表面を丹念に削り調整している。971(PL85)はひと周り太く、弓弭も大きいことから、他の2点より大型の弓であった可能性が高い。破損部には刃物を入れた跡が認められ、故意に切断されたものと思われる。

なお、661(PL80)は全体の形状が弓に似ている。一端が柄状に加工されているのみで前述の弓弭の分類に該当する加工は認められない。しかし、2カ所の折れは両端をかなりの力で均等にしながら示す。あるいはソケット式の弓弭が装着されていたのかもしれない。ここでは弓状木製品としておく。樹種はサワラだが、石川条里遺跡にも弥生後期の弓にサワラのものがある。

② 鐙 (512、PL78)

壺鐙の形状をもつ。やや欠損しているが、壺部に向かって左側が平坦にされていることから、右足用と考えられる。木製鐙については永井宏幸氏の論考があり(永井1996)、6～8世紀を中心にみられる無花果型とされるものに形態が類似する。1期末～2期初頭(第4水田対応層)に属し、ほぼ時期的に一致する。榎田遺跡では古墳中期～後期の壺鐙が出土しており、これは三角錐型に属する形態をもつ。

7. 建築部材

組み合わせ部分に関わる加工が施された大型の部材をここに入れているが、用途は特定は難しい。

33(PL72)は山形に加工された板材で、表面は木目が強調され、丁寧に調整されている。底部には仕口状の加工が施される。両側部はわずかに水平になり、別な材と組み合わせる柄の役割をもっていたかもしれない。

50(PL72)は部分であるが、仕口状の段差がみられ、中に柄孔が施される角材ある。本来はかなり大型なものと思われるが、2次的に切断されている。

100(PL73)は木口一端に柄が作り出され、もう一端の側部は柄孔状に丸く抉られている。方形あるいは長方形に組み合わせられた部材と思われる。

168(PL74)は有頭状に加工され、169はややアールになった材の先端に柄孔が施されている。170は表裏に四角い柄孔がある。これらはSD7031に渡されていた橋と思われる杭列(SA7001)を構成するものである。しかし橋の部材として機能していたかどうかは断定できず、あるいは橋脚として転用されたものかもしれない。

172(PL74)は柄が作り出された板材で、柄部以外は裏面には段差が施され、薄手に作られている。柄は台形状で底部の最大幅は7cmある。破損が激しく全容は不明である。

372(PL76)は仕口状に溝が施される。この溝に直行する形でスリット状の浅い溝が入るが、木の芯部にあたることから、割材を作った際の自然の溝と思われる。

841(PL82)は垂木と考えられる。時期は1期前半(第5水田面対応層古段階)に属する。先端を抉って仕口が作られている。同じ⑥区古墳時代中期の遺構SX7038から垂木が出土しているが(長野県埋蔵文化財センター1998)、先端の加工が異なる。望月由佳子氏の分類による、瀬名遺跡古墳後期～奈良時代の垂木に類似する(望月1996)。

980は仕口状の加工がみられる角材だが、杭に転用されており全容はわからない。

984～987は井戸枠の部材である。984～986(PL85)は四隅の柱の内の3点で、987をはじめとする柄をもつ角材が横に接合され、その上下に側板がはめ込まれる仕組みとなる。

8. その他

① 独楽 (24、61、90、148)

芯持材を円錐状に加工したもので、表面を削り調整し、先端部に乳頭状の突起を作り出す。ただ、24は芯部をはずして加工している。また、148には先端に突起が認められず、樹種も広葉樹（カエデ属）である点で他のものと異なる。

② 火鑽板 (157、418、623)

157、623は長形状の板で、418は角材状のものを使用している。418は長さからみて、両木口が2次的に切断されている可能性もある（PL77）。3点ともに1期末～2期初頭（第4水田対応層）に属する。

③ 水門

導水型祭祀遺構に設置された状態で出土したものが2点ある。569はSD7038の水門で水口が1カ所施される。992はSX7035の水門で水口が2カ所ある（PL86）。いずれも湧水点から流出する水を一旦塞ぎ止め、水口から下方へ流す役割を果たしたものである。

このほかに前述の槽の中に含めた516・601も水門に転用されたもので、廃棄されてはいるが同様の役割を果たしていたものと考えられる（PL79、80）。

④ 木樋

SD7042に設置された木樋のほかに、小型の木樋が2点出土している。

599は箱形で丁寧な削り調整がみられる（PL80）。水門に転用された槽601とともに廃棄されており、セットで使用されたものと考えられる。

979は木目を利用して刳られたもので、一端の両側面を削り、わずか幅を狭くしている。特殊な遺構であるSD8045の出土で、この施設が機能していた際に使用されたものと思われる。

⑤ 木札状木製品

屋代遺跡群⑥区では短冊状の板が大量に出土した。ほとんどが1端または両端を欠損しているため、長さの傾向はつかみかねる。厚さは確認点数1,977点の内の約95%が1cm以内で、その内の約65%が0.5cm以内となる。幅は確認点数1,876点の内約52%が1.5～2.5cmに入る。

表裏面が無調整のもの割合が高いが、片面を削り調整してあるものも見受けられる。また、割合は少ないが両面に削り調整が認められるものもある。調整法としては①長軸方向に刃物を引いて削る。②長軸方向に短く刃物を引く。③双方を行う。のおおよそ3種が見受けられる。①の場合は断面が台形状または曲面状を呈するが、②および③の場合はほぼ長方形となる。木口が原形をとどめていると思われるものの多くが切断の状態で、中に切り折りのもの、端部に側面削りや平面削りを行うものも見られる。

形状は木簡学会の分類011型式（屋代木簡分類1001）に相当する。時期は2期（第3水田面）以前のものの割合が非常に高い。

ここで注目されるのが、屋代遺跡群の木製品の内の多くを、このような短冊状の板を素材とした木形や木簡が占めるという点である。そこで木簡126点および木形の内齋串に分類した1,991点と、この短冊状の板について、幅と厚さの分布を調べ、その割合を比較したものが図55である。

幅、厚さともにほぼ同じ分布を示すことがわかる。厳密にみると、木簡は齋串より幅の広いものの割合が高い傾向があり、5cmを超えるものも目立つ（特に文書木簡）。短冊状の板もその範囲まで分布している。両端が欠損するものには齋串等の破片が含まれる可能性はあるが、端部が残り、短冊状を呈する板の中には、木簡や木形のように大量に作られる木製品の素材が含まれる可能性が指摘できる。

これらの中で、表面に丁寧な削り調整を行うもの、上下端が切り落としや切り折りの状のもの、木口に側面削りや平面削りを施すもの、側面に切り欠きのみられるものを選抜し、木札状木製品として取り上げた。

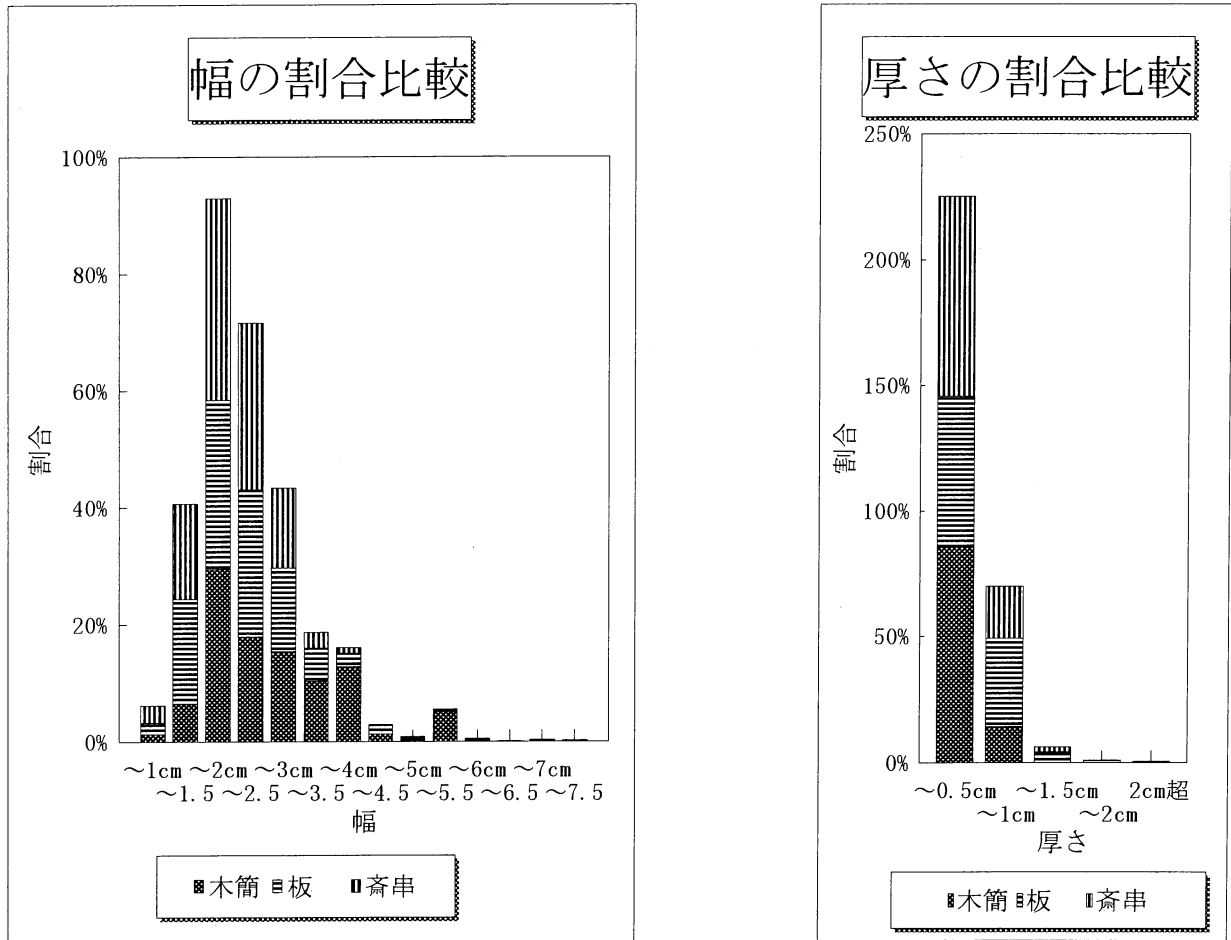


図55 木筒、短冊状の板、齋串の法量比較

114、151は一端が直頭に近く、もう一端は剣先状となる。114は直頭部に側面削りを、151は側面および平面削りを行い、やや丸みを帯びる。また151の表面は丁寧に削り調整されている。木筒学会の051型式に該当し、屋代木筒では51号、69号、86号（屋代分類2005）、64号、73号、75号、79号、91号（1005）が類似した形状をもつ。また、62号は2次的に転用されているが、木筒が別な木札状木製品として加工されたものと捉えることができる。全て114、151同様2期（第3水田対応層）に属する。

73、96、298、579、595、675は一端両側面に対になる切り欠きを施したものであり、木筒学会の分類では032または039型式に該当する。この内73は極めて小型である。また、595にはほぼ中央部に穿孔があり、中に軸が残存し、後述の穿孔板に似た特徴をもつ。屋代木筒の67号（1601）、72号（1005）、82号（1602）、83号（160Z）が同様の形状で、全て2期（第3水田対応層）に属する。

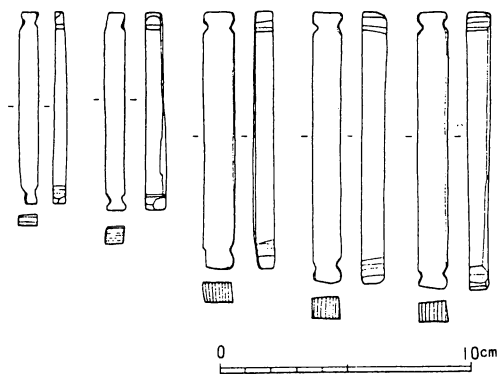


図56 的場遺跡出土の浮子

364、656、994～996は両端側面に対の切り欠きがあり、031型式に該当する。994～996は一括出土で、656は極めてこれらに形状が似る。新潟県的場遺跡の8～10世紀の木製品の中で浮子と報告されているもの（新潟市教育委員会1991）に酷似しており、漁業用の網につけられる浮子である可能性がある（図56）。民具例として刺網の浮子があるという（高島英之1992）

95、297、384も側面に一對の切り欠きがある。95は頭部が

圭頭状となる。297は下端が剣先状となり、表面が削り調整されている。これらは木簡学会の033型式に該当する。384は上下端が圭頭状となる。

以上のような、側面に切り欠きのある木製品は「付札状木製品」として報告されることが多い。これは左右の切り欠きの存在が付札木簡に類似することからつけられたものである。最近では岐阜県砂行遺跡の5世紀代の祭祀遺構からの出土が報告されており^(註3)、古くからその存在が確認できる。これをささらとする説もある(高島1992)。

⑥ 棒状木製品

短冊状の板と同じように大量に存在するのが、割材を削って棒状にした木製品である。断面が角状のものと丸状のものがあるが、丸状のもの占める割合が高い。最大径を測ると7割以上が1～2cmの範囲に入る。多くの場合端部が欠損しているため、全体の形状や長さがかめるものは少ない。しかし、短冊状の板のように木簡や木形等の素材となりうるものとは異なり、ある種の用途をもつ製品または部品として作られたものと考えられる。これらの内で端部が残存しているものの多くは、一方が太く、もう一方に向かって細く削っている。ここでは太い側を上端、細い側を下端と捉え、双方の形状を組み合わせで分類を試みた。

上端の分類

- 1類 有頭状にされているもの。
- 2類 木口が削られ、丸みを帯びている。
- 3類 木口を台形状に面取りしているもの。
- 4類 木口を圭頭状に尖らすもの。
- 5類 木口が切断された状態のもの(あるいは2次的な切断もあるか)。

下端の分類

- A類 剣先状に尖らすもの。
- B類 木口が削られ丸みを帯びるもの。
- C類 木口が切断された状態のもの(あるいは2次的な切断もあるか)。
- D類 途中で段差がつけられ、柄状になるもの。

角棒状の斎串 この中で特に4-A類は断面が角状となるものが主で、平面的な形状は斎串と同じである。特に22、230、373、832には切り込み等の特殊な加工が施され、SQで出土している斎串に通じる点がある。SQ8040に属する181も両端は欠損しているが、これらと同様のものと考えられる。

湾曲する棒状木製品 緩やかに湾曲するもの(99・424)は上端が3類である点で共通している。424は下端がD類となる完形品である(PL77)。おそらく重量がかかった結果湾曲したもので、99はそれによって折れたことが予想される。このような状態で使用されるものとしては、地機などにみられる綜統(経糸を引き上げる)を吊るす棒が考えられる。あるいは弓状木製品とした661もこのように使用されたものかもしれない。上端2類、3類や下端D類の内、折れによって一端が欠損しているもの(85・567など)は同様な製品の一部である可能性をもつ。

下端D類 427・566・607・801は下端D類であるが、断面が不整形である。232は上端が切断されており、5類に含められる。これらの中には紡錘車状のはずみ車を装着し、軸として使用したもの(火鑽杵、舞錘など)も存在するかもしれないが、明確にそれを示す資料はない。

糸擦れの痕跡 糸擦れ状の痕跡をもつものは、糸巻きや織機などとの関連が想定される。しかし形状からその用途が判断できるものはない。233・367・678は2-AおよびC類で、よく似た形状をもつ。366も上端は欠損しているが同様のものと思われる。ただ、678などは糸擦れの痕跡の位置からみて、転用された

ものと考えられる。同様の形状で糸擦れの痕跡がないもの（115、150、365）を含めある種の用途をもつ製品の1形態と考えられる。

有頭状のもの 上端1類となるものは有頭状木製品と呼ばれる。断面が円形になるものはなく、大きさや頭部の加工に相違がある。450・689・799は断面が扁平で、頭部の削り方も類似し、用途が共通している可能性が高い。他のものも含め紡織具との関連も考えられる。

棒状木製品の組み合わせ 棒状木製品の用途を考える上でSQ8033の一括出土遺物が一つの資料となりそうだ（797～804）。これは祭祀関係遺物の一括出土とは異なり、棒状木製品のみが集中して廃棄されていたものである。上端1類（799）、下端D類（801）、上端部表裏を削って扁平にしてあるもの（797）など各種の要素をもつものが含まれ、棒状木製品を使用する組み合わせと捉えることも可能である。頭部を扁平にするものは、914（PL84）も含めその部分を柄孔をもつ部材に装着して使用した可能性がある。

① 串状木製品

一端を鋭利に削り串状に加工したもので、断面が正方形や三角形のものは幅1cm未満、扁平な板状のものは幅1cm前後のものを主とする。用途特定の資料となったのは21で、馬形20の腹部に差し込まれた状態で出土した。また、SQ8011の706～708も705の馬形に差し込まれた状態で出土している。同様の例は静岡県神明原・元宮川遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所1984）にある。前述のように馬形、鳥形はほとんどに串状のものを差し込んだ痕跡があり、それに対応するのがこの串状木製品であると考えられる。それは馬形や鳥形が出土したSQの多く（8003、8005、8016、8018、8022、8025、8032、8041、8049）に串状木製品が共伴することからもわかる。

しかし、馬形や鳥形を伴わないSQに串状木製品が共伴する場合は別の用途をもつことになる。これを考える資料となるのがSQ8029である。串状木製品の536が後述する穿孔板537、538と重なって出土している。おそらく穿孔板2点と串状木製品1点がセットとなり機能していたと思われ、穿孔部に串状木製品を差し込んでいたことが想定される。このことから穿孔板を伴うSQ8022・8032・8044の串状木製品の中にも、同様の役割をもったものがあると考えられる。

ただ、馬形、鳥形、穿孔板が共伴しないSQにも串状木製品が含まれる場合があり、単体で出土した場合も含め、上記以外の用途も考えていく必要がある。

② 穿孔板

短冊状の板で中央に1カ所穿孔が施されているものをここに含め、前述の木札状木製品とは区別する。1期前半（第5水田対応層古段階）から存在するが（901）、1期末～2期（第4～3水田対応層）での出土量が最も多い。破片を含めると91点を数える。前述のように祭祀具集中廃棄SQの中にみられることから、祭祀具の組み合わせ中で役割を果たすものと考えられる。SQ8022での出土状況（図版182）をみると、2枚1組で十字状に重なっている。おそらくその状況で串状木製品が差し込まれていたのだろう。

SQ以外で出土したものでも、101、218は2枚が重なり、孔に軸が残存した状況で出土している（PL739）。164も1枚だが軸が残る。このことから穿孔板は2枚1組で、軸となる串状木製品を差し込むという形で使用されたことがわかる。ただ、657だけ穿孔が2カ所あり、一方のみに軸が残る。

出土量からみても、屋代遺跡群においてはかなり使用頻度の高いものであったことが窺えるが、他の遺跡ではほとんど例をみない。

③ 雑具

何らかの道具として利用されたと考えられるが、その用途が不明なものをこの中に含めた。この中で同形状のものが複数存在する場合がある。

118・119は楕円形状の板の長軸両端に並列して、主に2つの穿孔を施す。形状から82・382・383・850も

同じものと思われる。また、216は穿孔が1カ所ずつであるが同系統のものと考えたい。破片を含めると17点ほどが確認できる。1部第5水田対応層にも存在するが、ほとんどが第3水田対応層での出土である。大きさは、119のように長さが20cm弱で幅が3cm前後のものが多いようだ。類似するものとしては、福島県大森A遺跡の古墳時代後期の水田で出土した、浮子として報告されている木製品（福島県文化センター1991）がある（図57）。前述の浮子の可能性をもつ木札状木製品も含め今後検討していく必要があるだろう。

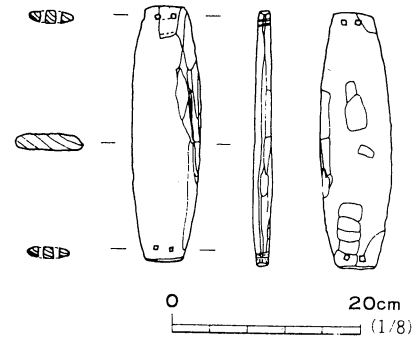


図57 大森A遺跡出土の浮子

120・602は内側に削り込んだ側が持ち手の部分で、反対のアーナルとなる側が使用面となる道具と思われる（PL73、80）。特に602はこの部分を鋭利に削る。しかし特に使用の痕跡は認められない。あるいは金属の部品をとりつけたのかもしれない。

235・519・819は杓子状の木製品である。235は最大幅部分の断面がかまぼこ状となり、柄状の部分の先端が鋭利に削られている。あるいはこの部分を使用したものかもしれない。519は柄状になる部分が欠損している。表裏が丹念に削り調整され、下半部両側に穿孔が施される。819は完形品であるが、他に比べ厚手で当て具あるいは叩き具のようにも受け取れる。

94・152・672は削り出した丸木の1側面にほぼ等間隔で切り欠きを施す。特に94・152は切り欠きが階段状となる点が共通する。何かに差し込んで固定する部材のようにもみえるが、94は柄尻状の突起がみられ、手にもつ道具とも考えられる。672は薦などの編み台が2次的に加工されたものかもしれない。

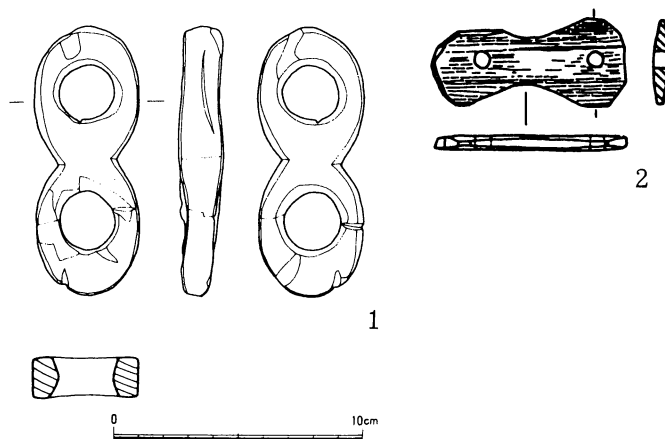


図58 自在形木製品

88・93は形状は異なるが並列して2カ所穿孔が施されている点が共通する。紐などを通して使用された可能性が考えられる。同様のものは各地にみられるが、図58-1は神明原・元宮川遺跡の例で、「自在形木製品」とし、綱を張る際に用いる「自在」を想定している（静岡県埋蔵文化財調査研究所1989）。2は長野県更埴市北稲付遺跡で出土した類似品である（更埴市教育委員会1984）。

その他に特殊な形状をもつものに触れる。404は側面一方をアーナルに削り、刀の刃のように薄くしており、鋸歯状の刻みを施す。

『近畿古代編』にも数点類似したものが紹介されている。この用途については籠子とする説（水野正好1984）、鋸の型とする説（伊藤実1993）、祭祀具とする説（中村友博1997）などがある。

416はサワラ材から削り出したものである。矢羽状に開く部分の片面には交差した溝状の彫り込みがある。棒状の部分は側面に、ほぼ等間隔で9カ所の小孔が施されている。これらはいずれも貫通していない。細い軸状のもの等が差し込まれていたのかもしれない（PL416）。

420・421は木針状の形をもつ。422は全容は不明だが小型の糸巻きのようなものか。165はドアの把手状を呈し、平坦な面は薄く滑らかに仕上げられている。

577は釣り鐘形で、縦方向に3本の溝が刻まれる。またそれに直交する形で上下に3カ所ずつ刻みが施される。紐などを緊縛して使用したものと考えられる（PL74）。838は籠状の木製品である。

⑩ 部材

柄や柄孔をもつもの、仕口状の加工があるもの、釘等を打ち込んだ小孔のあるものなどで、建築部材としては小型で、用途が不明なものをここに含めた。大きく板材、角材、削り出しの丸木材に分けることができる。

柄、柄孔のある角材 (221、229、251、252、385、568、581、626、663、664、687、888)

221は鋤などの柄尻部分に装着する把手が想定される。385は柄孔に棒状のものを装着して立てる台（たたりなど）が考えられる。229は柄部から先端にかけて斜めに削り、鳥の羽の様な形にした小型品である。部材というより飾りの一部のように見受けられる。251は馬鍬の刃と思われるが先端部が欠損しているため全容は不明である。888もこれと似た形状をもつ。252は角材状の部材の中で最も精製されたものである。柄孔以外に丸い小孔が欠損部を含め2カ所確認できる。626は片面が円形に調整され、裏面に柄孔が施される。あるいは糸巻きの梓木か。

柄、柄孔のある板材 (303、423、491、997、1004)

423は小型の精製品で、右端の木口に柄が作り出されている。欠損しているが、もう一端の同じ部位にも柄があったようだ。扉のような形状をしており、建築模型部材などが想起される（PL77）。997は木目を強調して調整された精製品である。机、椅子など調度品の部材かと思われる（PL85）。

仕口状の加工がある角材 452は両端がわずかに斜めに削られ、そこが仕口の部分となる。両端は側面から柄孔があげられている。911は小型品で、同一面両端に仕口がある。959は先端がわずかに有頭状となっている。

釘孔状の小孔がある板材 (27、255、295、362、451、453、520、565、638、1005)

27、255、451は片面をやや曲面的に調整し、断面形がかまぼこ状となる。小孔は側部一方のみに認められる点で共通している。27は斜めに穿孔され、1部木釘状のものが残存する。

295、520は両側部に小孔が列状に施される点で極めて類似している。同様の例は滋賀県下寺観音堂遺跡（『近畿古代編』）の小判形の板（7世紀後半～8世紀前葉）などがある（図59）。長さ、幅もほぼ同じであり、端部を曲線状に削るなど共通する点が多い。

362、453にも小孔が多数施される。453には木釘状のものが残る。

丸木状の部材 556は芯持ちの枝を湾曲させ把手状にしたもので、端部を削り柄孔が施されている。削りだし材の605は小孔が斜めに貫通する。また620は柄孔の痕跡が認められる。604は割材を加工し鏝状にしている。横槌のような道具にもみえるが、同じものを複数組み合わせる容器などの台として使用されたものかもしれない。

上にあげたものの中で、祭祀具集中廃棄であるSQに伴うものがある。SQ8022で出土した491は表面を削り調整した板材にほぼ正方形の孔を5カ所あけている。孔の配列が田下駄に似ているが1002と比べると孔の位

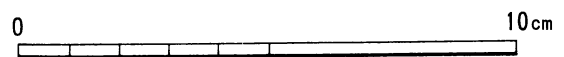
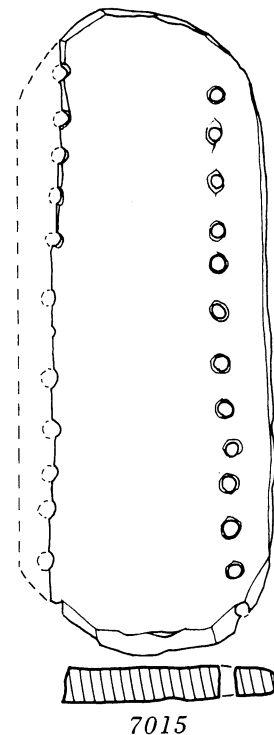


図59 下寺観音堂遺跡出土木製品

置が遠く、緒孔としては不適當である。孔の数は少ないが303と形状が似ている。

638は箱状となる製品の上板もしくは底板と思われる。片面がわずかに曲面状に調整されていることから、上板である可能性が高い。一端をU字状に削るのが特徴的である。3片に割られその内2点はSQ8007、8008に伴って出土している。祭祀終了後故意に分割し、廃棄したものと思われる。

SQ8016に伴う780は半裁状の削り出し材で両端部を斜めに削る。両側部に不均等ではあるが浅い切り欠きが並ぶ。

これらは祭祀において、斎串、馬形、人形などの木形とともに何らかの役割を果たす道具立てのひとつであったことがわかる。

⑪ 縄

PL86には1010としてSD7042で出土した縄と思われるものを示した。

2 屑 (PL87~98)

1で取り上げた木製品は、全て人の手によってその形に加工されたものである。視点を変えると、1本の木の中で最終的に必要とされた部分が、有用な形となって残ったものといえる。このことはそこに到達するあらゆる段階で、不必要な部分が除去されたことを示す。この除去されたものを屑と総称する。

屑は自然流路からも多量に出土したが、特に目立ったのは湧水溝である (SD7045=SD8032、SD7035、SD7030)。第2章第5節で示したように、湧水溝は埋没過程で集落側から多量の廃棄が行われ、部分的にそれらが堆積した廃棄物層が形成されている。ここには土器、木製品、木簡などが含まれているが、屑の大部分を構成しているのが木質の屑である。自然木の破片などもみられるが、板目、柱目状の断面をもつ材から削り出された屑が多い。出土した屑全点を持ち帰ることはできなかったが、このように大量に屑が含まれる屑については土ごとあげ、後に水洗によって選別を行った。

選別後、残存度の高い3,506点について計測、分類を試みた。この内長さや幅が捉えられるものを残し、現段階で加工作業の傾向が把握できそうなもの1,819点について一応の分類を行った。なお、木材選択に関わる資料となる樹種は各水田対応層別に最低200点を目途として行い、898点について結果を得た。

屑の報告は写真図版のみとし、遺構ごとになるべく樹種を網羅する形で33種分を掲載した。計測表についても掲載分のみ付した。これらを含め、全体から得られた資料については第8章4節で触れる。

(1) 屑の分類

加工作業は全て金属製の刃物によるものと考えられ、観察はこの道具の痕跡を残す部分を中心に行った。この結果大きく、割る・裂く・削る・切るという作業が捉えられた。ただ、この中で割る・裂くという作業によって生じる屑は道具使用の痕跡が残りにくく、残存度もつかみづらい。よってここでは削る・切るという作業によって生じた屑を中心に切り上げ、この2種の屑を「削屑」、「切屑」と総称し、それぞれを細分することとする。

① 削屑

材の表面(背面)に刃物をあて、不必要な部分を削り取る作業によって生じる屑である。この場合当然削り取る際に刃物をあてた痕跡は裏側(腹面)にみられる。この内、背面にも同様な刃物痕がみられ、側断面が平行四辺形状になるものがある。この場合背面の刃物痕は、その部位から下が削り取られた際のものである。おそらく刃物の1撃で削り取られたもので、このような削屑を1類とする。木製品516などにみられる加工痕の多くはこのような作業の結果と考えられる。

これに対し複数回(主に2回)の加撃によって生じたものを2類とする。腹面に1類同様の刃物痕を残

すが、もう一方がほぼ垂直に切断された状態のものと、斜めに刃物が打ち込まれ、側断面が逆台形状となるものが特に目立つ。前者を2-A類、後者を2-B類とする。

また、0.1cm以下をおよその基準とし、極端に薄いものを3類とした。脆弱であるため完形のものが少なく、全容はつかみにくい。ただ、木簡の削屑のような不整形なものとは異なり、幅が均一のものが目立つ。

図60は1類と2類の概念図である。写真図版では、1類は主として背面と側面、2類は刃物痕の残る腹面と側面を示した。3類は参考資料的に1面を選択し、側面を添えた。

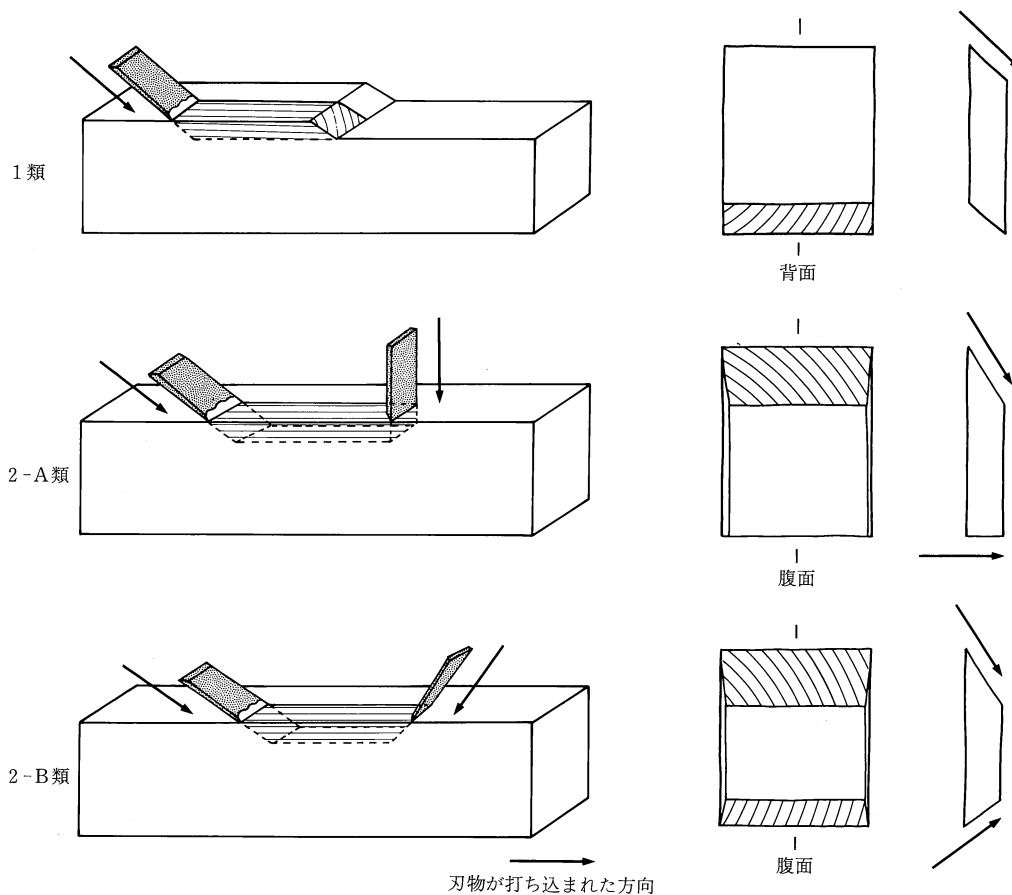


図60 削屑概念図

② 切屑

切断という作業によって生じた材の不用部分を切屑とする。この場合観察の対象となるのは切断面である木口である。切断面の状況は大きく3つに分けられる。平坦で滑らかなもの-A、刃物痕が残り複数回の加撃によって切断されたもの-B、刃物痕も明確でなく、非常に粗い面を呈するもの-Cとし、その組み合わせによって表す。

写真図版では1面を選択し、その上下に切断面である木口の状況を示した。

③ 材の精度の分類

削る、切るといった作業は、木が目的とする製品に到達するまでの様々な過程で行われ、削屑、切屑が発生する。よって屑だけではどのような過程の作業で生じたものかを判断するのは難しい。しかし、削屑の背面、切屑の表面はその作業段階での材の状況を反映している。その観察によって、より原木に近い段階か、かなり製材された段階なのかを判断することができる。これを材の精度として、5つに分類した。

A-刃物によって丹念に削り調整された痕跡を残すもの。B-調整痕は確認できないが、平滑にしあげ

られているもの。C—平坦ではあるが表面が粗く、割りっぱなしの状態のもの。D—表面が粗く、曲面を呈するもの。E—樹皮を残すもの—E。E→D→Cの順に材の精度が上がっていくが、BとAに関しては調整面をさらに磨く場合も考えられるので順位をつけることは難しい。

(2) 樹種からみた層と製品の関係について

本報告における層の樹種同定は、存在する樹種をできるだけ把握し、木製品の用材との比較をすることを主眼とした。そのため、各分類ごとの樹種の割合を把握することはできなかった。

各水田対応層出土の層について、その同定資料数200点に対する樹種数をグラフにしたものが図61である。第5水田対応層はあと若干樹種数が増加しそうではあるが、他については頭打ちとなり、ほぼ樹種数が網羅できたようである。この結果層については39の樹種の存在を確認できた。

表46では同定の結果得られた樹種について、①層・製品ともに認められるもの。②層のみ認められるもの。

③製品のみ認められるもの。④自然木のみ認められるものを各水田対応層別に示した。

①は材が搬入され、屋代遺跡群周辺で加工されたものである可能性を示す。カエデ属、ケヤキ、サワラ、モミ属の4種は全時期に存在し、製品供給のための主要な木材であったことがわかる。特にサワラは層の中でも圧倒的に量が多く、製品の種類も多い。また、アサダ、カヤ、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ節はこれに準じる、層の量、製品の種類や数は少ないが、用途に応じて選択されたものと考えられる。

各材がどのような段階で搬入されたかについては、削屑、切屑にみられる材の精度が資料となる。前述のように全点に対する同定を行っていないため明確な資料化はできていない。ただ、樹皮が残るEに該当するものがクリに1点認められるほかは全てD以上である。よって原木に近い状態からの加工はほとんどなく、ある程度素材となった状態で搬入されているものと思われる。

②はアワブキ属、エノキ属、キリ、クスノキ科、クマノミズキ、グミ属、コナラ属アカガシ亜属、サイカチ、サクラ属、チドリノキ、ツガ属、ニガキ、ニレ属、ニフトコ、バラ科ナシ亜科、マメ科、ムクノキ、ヤナギ属と多種にわたる。何らかの加工によって生じたものであるが、ほとんどが1点ないし数点の検出であるため、どのように利用されたものかは判断できない。ただ、エノキ属、サクラ属、チドリノキ、ヤナギ属の5種は複数の層位にみられ、比較的数も多い。材の精度もA～Dがみられることから、確認されていないが何らかの製品となっていた可能性があり、この場合は製品の搬出を視野に入れる必要もある。なお、ニガキは古墳中期の祭祀遺構SD7068に設置された木樋で使用されている（長野県埋蔵文化財センター1998）。このほかのものについては周辺の植生も含めて検討していく必要がある。

③はイヌガヤ（弓、鎌柄、犁を模造したと思われる木形）、エゴノキ属（横櫓）、スギ（槽）、トウヒ属バラモミ

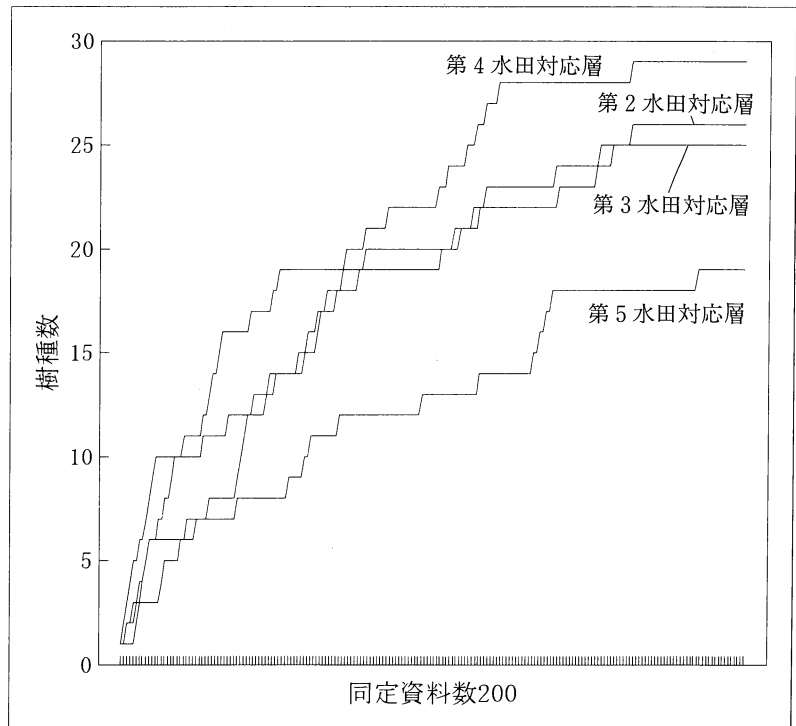


図61 同定資料数に対する樹種数の推移

表46 屋代遺跡群 木質遺物の樹種一覧

	第5水田対応層	第4水田対応層	第3水田対応層	第2水田対応層
アサキ			△	
アサキ	◎木鏟	○	◎鋸身、有頭状木製品	○
アサキ属			○	
イノキ	●横櫓	●横櫓		◎横櫓
イノキヤ	●弓、木形	●弓	●鎌柄、弓	
イノキ属				△
ウギ属			△	
ウツギ属			△	
エゴノキ属				●横櫓
エノキ属	○	○	○	○
オグミ	◎木槌	○	●杭	○
カエデ属	◎棒状木製品	◎杭、紡織具、棒状木製品	◎紡織具、独楽	◎杭
カワ		○	◎杭	
カハノキ属	●堅杵	●堅杵、鋸身		
ガマズミ属	△			
カヤ	◎斧柄、棒状木製品	○	◎木形、斧柄	◎独楽
キバ	△	●鎌柄		
キ		○		
クスノキ科	○		○	
クマシテ属イシテ節	△	○	●棒状木製品	
クマシテ属				○
グミ属				○
ク	◎部材、木鏟	◎木鏟	◎部材	
クキ	◎部材、棒状木製品	◎杭、槽、木槌、壺鍬	◎剝物皿	◎皿、盤
クホノキ属	○	◎水門、槽		
コナ属アガツ亜属		○		
コナ属コナ亜属クキ節	○	◎木鏟	○	◎横櫓
コナ属コナ亜属コナ節	◎木鏟	◎木鏟	◎木鏟	○
サイカ		○		
サウ属		○	○	○
サワ	◎木形他多数	◎木形他多数	◎木形他多数	◎木形他多数
スギ	●槽			
チドリノキ		○	○	○
ツカ属		○		○
つる植物	△			
トビ属ハナミ節		●陽物		
トナリ	●木槌	○	○	
トナリ属		◎柄?		
ニガキ			○	
ニレ属	○			
ニク	○			
ヌナ			○	
ハラ科サ亜科	○			○
ハノキ属ハノキ亜属		○		●
ヒノキ	○		●黍串	
マツ属複雑管亜属	○	◎棒状木製品		○
マノ科			○	
ムギノキ属		●削出し材	△	
モミ属	◎紡織具、木形、部材、水門	◎下駄、紡織具、木形、部材、棒状木製品	◎紡織具、杭、木札、部材、棒状木製品	◎横櫓
モミ	△			△
ヤギ属	○	○	○	○
ヤマノキ			△	
ヤマノキ	○	◎杭、棒状木製品	○	○

○屑のみ確認

●製品のみ確認

◎屑、製品ともに確認

△自然木のみ確認

節（陽物）がある。全点の樹種同定が行えていないので断定はできないが、周辺で加工されず製品が搬入された可能性がある。特に弓、犁形、陽物といった特殊なものがある点が興味深い。また、スギは古墳前期の石川条里遺跡でも少ない傾向を示しており、当時の長野盆地付近の植生を反映している可能性がある（能代修一・鈴木三男1997）。逆にイスノキの横櫓は当初搬入品と考えていたが、削屑（1011）の存在から材が持ち込まれていた可能性がでてきた。

④については当時の屋代遺跡群周辺の自然環境にも関わって、詳細は『総論編』で触れることとする。

(3) 屑の解説

削屑全体の法量から得られる傾向については第8章4節で考察することとし、ここでは写真図版を掲載したものを中心に記述を行う。

① 削屑1類

1類は背面と腹面の特定が難しい。判断の材料となるのがその削屑の発生に直接関わらない刃物痕（刃先痕、刃端痕など）の存在である。これらの刃物痕が認められる場合、その面が背面となる。刃先痕は、1019、1035、1039、1092、1125。刃端痕は1050、1070、1071、1082、1089、1093、1109、1120、1130に確認できる。これらの内ほとんどの材精度はC以下であり、このような刃物痕が残るのは比較的精度の低い材に対する粗めの削り作業と考えることができそうだ。

削屑の集中廃棄 1類の中で注目されるのは1114～1126である。これらはSD8032の44層で出土した一括廃棄の削屑である（SQ8006）。図版には完形で分類可能なものを掲載したが、これを含め64点の屑が認められた。内1115、1116の2点のみヒノキで、他は全点サワラである。ヒノキの2点の材精度がBであるのに対し、サワラは全てCである。このサワラの削屑62点について厚さの分布、長さと幅の相関関係をそれぞれグラフに示した（図62）。

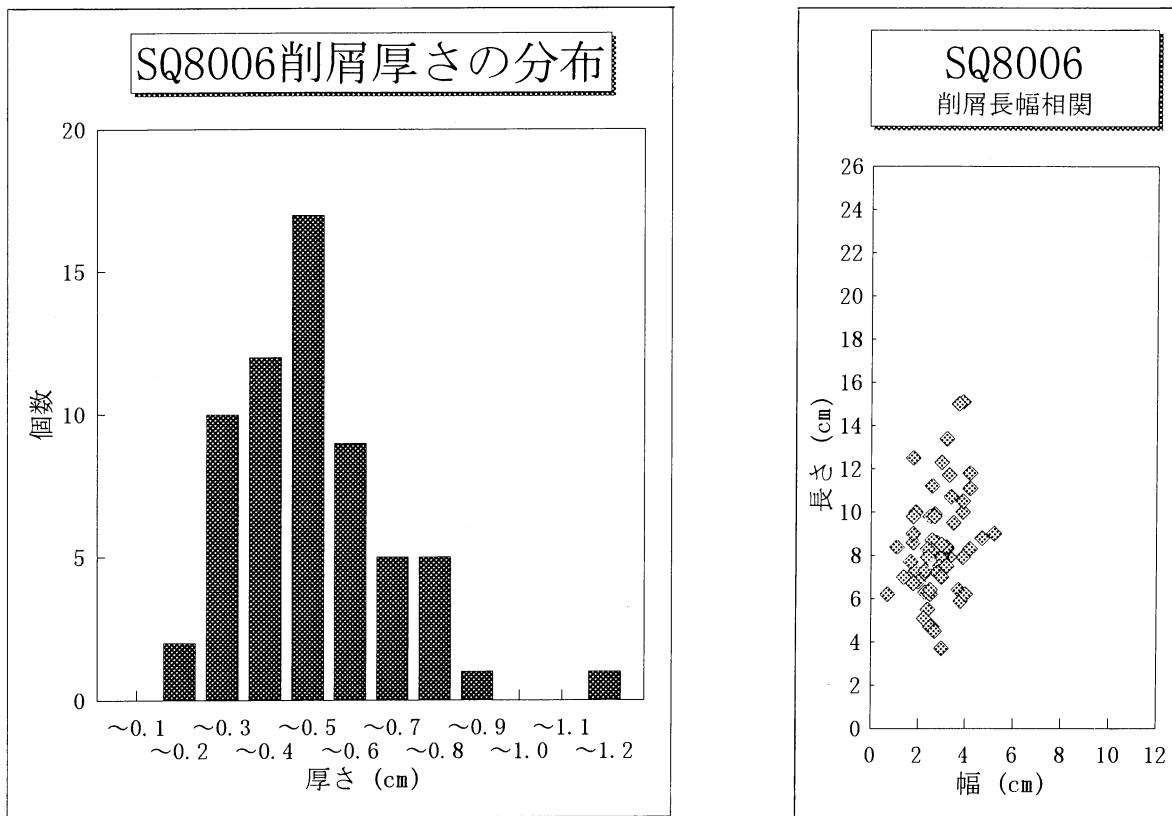


図62 SQ8006出土削屑の傾向

厚さは0.5cmあたりをピークとするが、その前後0.3cmほどのばらつきがある。幅はおおよそ2～4cmに集中する。長さは15cmを上限とするが、最低4cm以上の削りを行っている。出土状況を合わせて考えても、同じ材に対して行う一連の作業によって発生した削屑と考えられる。もし同一の道具による削りとする、幅から考えて4cmをやや超えるくらいの刃幅の手斧などが想定される。

背面が木裏となる削屑 1073（トネリコ属）、1093（トチノキ）、1130（サワラ）は木目から判断して、背面が木裏となる。このことは木裏が表面となっている材（半割材など）に対して加工が行われたことを示す。同様の削屑は若干2類も含めほかに、オニグルミ、カヤ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、モミ属、チドリノキ、エノキ属、ケヤキ、サクラ属、クリ、ヤナギ属にみられる。加工においてこのような削屑が生じる製品としては、剝物（槽）、木樋があり、オニグルミ、ケヤキ、サワラ、トチノキ、モミ属など共通する樹種の製品が確認されている。製品が確認されていないサクラ属、ヤナギ属などについても同様の加工が行われた可能性を示す。

② 削屑2類

2類の場合は刃物痕のある面が腹面となる。2-A類は、①一方から角度をつけて刃物を打ち込み、さらにその進行方向に対し垂直に打ち込みを行い剥離させる。②任意の場所に垂直に刃物を打ち込み、距離をおいてその場所に向かって角度をつけて打ち込み、剥離させる。といった作業が想定できる。

1014、1023、1036、1045、1056、1057、1063、1064、1065、1084、1091、1110、1111、1112、1132のように、垂直の打ち込みが、もう一端の角度をもつ打ち込みに対してほぼ平行に行われるものが多い。これに対し1041、1046、1075、1090、1148などのように垂直の打ち込みが斜めに入るものも認められる。両者の作業上の相違点については今後検討していく必要がある。

2-B類の典型としては1113がある。多くの場合1方向から複数回の打ち込みが行われている。

1012、1013、1042、1083には刃物痕が複数認められる。また2方向から打ち込む刃物の角度によって、非常に深く削り込むことが可能になる。1012は厚さ3cmを測る。

A類とB類について、検出した削屑の厚さの割合と長さ・幅の相関関係を比較したのが図63である。厚さは両者ともほぼ0.5cm～1cmをピークとするが、その前後で違う傾向を示す。A類は0.5cm以下のしめる割合が高く、逆にB類は1.5cm以上のしめる割合が高い。長さとの相関をみるとA類は長さ4cm以下、幅2cm以下の部分に非常に集中する傾向がみられる。これは第8章4節で触れるように1類とともにみられる第4水田対応層の削屑の特徴を示している。この点を除くとA類とB類の相関には際だった傾向の違いは認められない。このことから両者の違いとしては、特にA類は比較的薄く、B類は比較的厚く削り取る作業によるものであると捉えることができそうだ。

③ 削屑3類

1029と1030は厚さ0.25cm、0.3cmとやや厚手であるが、1066、1108は0.1cm以下であり、非常に薄い。欠損しやすいため、長さとの幅が原形をとどめているかは不明である。3類に分類したものの多くは0.1cm以

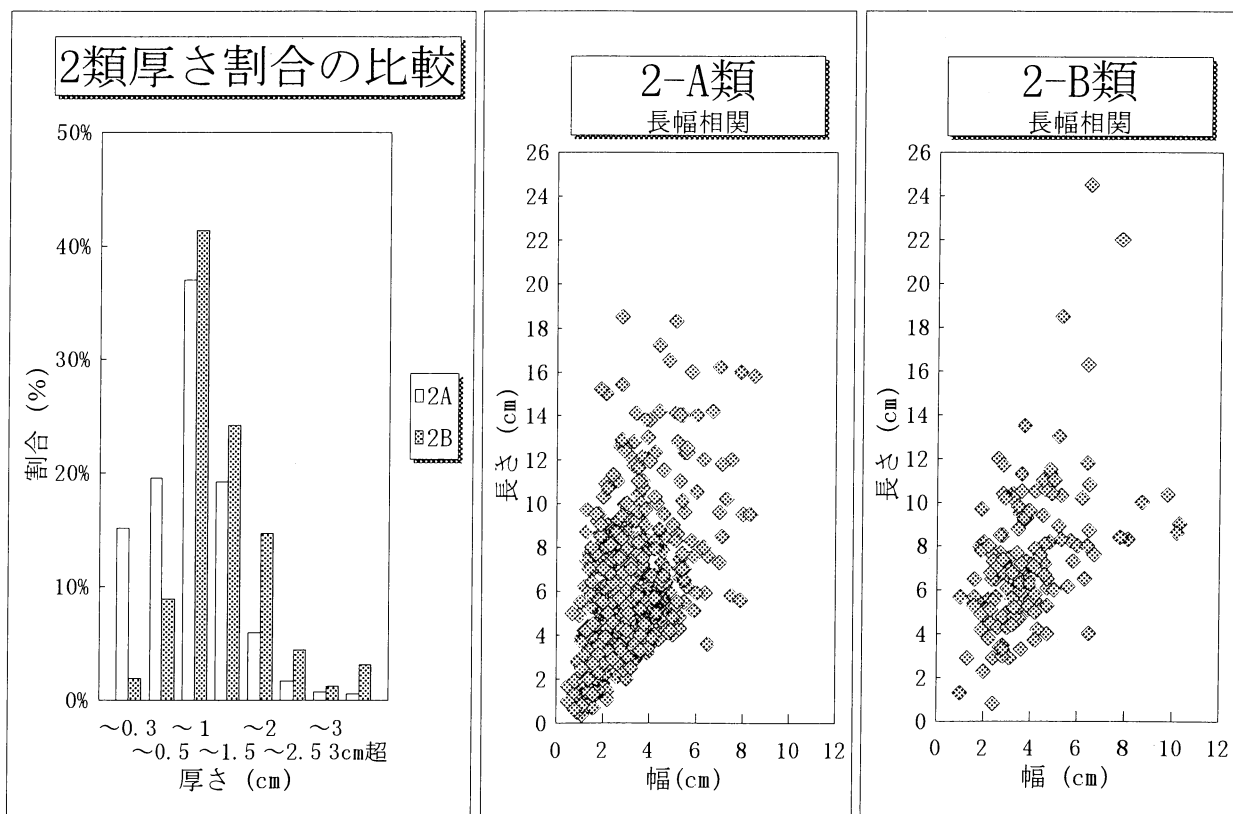


図63 削屑2-A類、2-B類の比較

下で計測ができないほど薄い。しかし比較的長く、中には15cmを超えるものもある。さらに幅は1cmを超えるものが目立ち、一定の幅を保って削られている。この点から、材の表面を薄く、長く削る作業によるものと考えられる。これについては、1・2類のように刃物を打ち込む削りとは異なり、刃物をあてて長く引くような方法が想定される。

④ 切屑

切断は、材の長さの調節、必要部分の切り出しといった目的に際し行われる作業と考えられる。切屑は①比較的精度の高い(A~C)角材、板材を切断したもの。②精度の低い(D)丸木材や割材を切断したものに分けることができる。

①の切屑は、切断面一方あるいは両方の状況がAとなる場合が多いのが特徴である(1017、1020、1021、1027、1037、1043、1048、1080、1088、1095、1101、1106、1127)。これらは切断の際に鋸を使用したことが予想される。樹種はサワラが目立ち、角材、板材といった状態で搬入されていた可能性を示唆する。なお1058はサワラの削り出し材であるが、曲線状に滑らかに切られており、糸鋸のような道具の使用を想起させる。

1043、1085、1102、1107、1144、1150は屑とするには大型であり、必要部分を切り出した、加工前のものである可能性がある。1043、1102、1150には削りによる窪みがみられる。あるいは材を運搬する際の必要上施されたものかもしれない。

②の切屑は切断面がB類およびC類となるものが主である。斧等で粗めに切断されたことが予想される。この内、1032(ヤナギ属)、1038、1140、1141(カエデ属)、1049(ヤナギ属)、1152(コナラ属コナラ亜属コナラ節)、1153(ヤマグワ)は大型で、やはり加工前のものである可能性もある。これらは、より原木に近い状態で材が入手されていることを示している。なお、1153はすり鉢状の窪みがあり、あるいは礎板として利用されていたのかもしれない。

切断面がB、C類の場合、使用された道具としては斧が想定される。この点について、1106に残る刃端痕は重要な資料となる。希な例であるが左右を別な削りで切られることなく残っているため、刃の形状をある程度推察することができる。刃幅は約4.1cm、刃先の形状はわずかに曲線状となるようだ。1095に残る刃端痕はやや切られている可能性があるが、1106とほぼ似た状況である。

⑤ 特殊な屑

1128・1129は祭祀遺物集中廃棄であるSQ8017で確認された。斎串の集中廃棄であるが、これらと折り重なる状態で出土した。双方とも短冊状の板材だが、V字状に切り抜かれた跡がみてとれる。形状としては斎串の下端部に類似しており、祭祀具が作り出された際の屑である可能性が高い。他にも板材の木端を削ったと思われる細長い屑も出土している。同様の例としては、山形県俵田遺跡のSM60祭祀遺構がある(山形県教育委員会1984)。人形、馬形、斎串の集中廃棄であるが人形の足を加工した際に切り出した股の部分が出土している。このように祭祀具とその加工に伴って生じた屑が同時に廃棄される場合があることは明らかであり、SQ8017で出土した屑もこれにあてはまるものと考えられる。

このことは、祭祀具製作とそれを使用する祭祀が時間的に近接することを示す。また、製作の場と祭祀の場が近接することを示す可能性もある。この点については今後さらに類例を確認し、屑が祭祀具とともに廃棄される意義を検討していく必要がある。

註

1. 以後文中でこの2書から引用する場合は 書名を省略し『近畿古代編』、『近畿原始編』と記す。
2. 令小尺は『律令』日本思想体系3 岩波書店の補注に従った。
3. 『砂行遺跡 現地説明会資料』岐阜県文化財保護センター1998に2点紹介されている。

参考文献

- 伊東 実 1993 「日本古代の鋸」『考古論集（潮見浩先生退官記念論文集）』
- 白居直之 1997 「第2章第6節 容器・食膳具」『石川条里遺跡 第3分冊』長野県埋蔵文化財センター
- 白居直之 1997 「第2章第4節 武具」『石川条里遺跡 第3分冊』長野県埋蔵文化財センター
- 金関 恕 1982 「神を招く鳥」『考古学論考（小林行雄博士古希記念論文集）』
- 金子裕之 1980 「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所学報第38冊 研究論集IV』
- 金子裕之 1996 『まじないの世界Ⅰ（縄文～古代）』日本の美術5 No.360
- 更埴市教育委員会 1984 『八幡遺跡群 北稲付遺跡』
- 潮見 浩 1988 『図解 技術の考古学』有斐閣選書
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第20集 大谷川IV』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990 『川合遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『瀬名遺跡Ⅲ 遺物編Ⅰ』
- 高島英之 1992 「いわゆる「付札状木製品」について」『研究紀要9』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 竹内晶子 1989 『弥生の布を織る 機織りの考古学』東京大学出版会
- 永井宏幸 1996 「古代の木製鏝について」『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『石川条里遺跡 第3分冊』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－弥生・古墳時代編－』
- 中村友博 1997 「刻み目棒異説」『宗教と考古学』
- 中山正典 1994 「第Ⅲ章第6節 容器」『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 奈良国立文化財研究所 1984 『木器集成図録－近畿古代編－』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録－近畿原始編－』
- 新潟県教育委員会 1991 『的場遺跡』
- 能登川町教育委員会 1993 『斗西遺跡（2次調査） 図版編2（木器）』
- 福島県文化センター 1991 「大森 A 遺跡」『相馬開発関連遺物調査報告Ⅱ』
- 松崎憲三 1984 「山の神祭りにおける木製祭祀具の研究 ー山の神信仰の展開ー」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』
- 水野正好 1984 「中世－まじないの世界」『中世の呪術資料』草戸千軒遺跡調査研究所
- 宮島義和 1996 「木製品の用途解明に向けて ー古代のひょうたん柄杓ー」『長野県埋蔵文化財センター紀要5』
- 宮島義和 1998 「遺跡出土の形（かた）に関する一考察」『人類誌集報1998 東京都立大学考古学報告3』
- 望月由佳子 1996 「第Ⅱ章第Ⅰ節6 垂木」『瀬名遺跡Ⅴ（遺物編Ⅱ）本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所

表47 更埴条里遺跡木製品一覧表

農工具 A, B区

図版 PL	報告 番号	名称	出土地点	層位	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
426 86	998	田下駄	第5層水田	V層	榎目	42.3	18.6	3	サワ	ワカンジキ型
427 86	999	田下駄	SC-01	V層	榎目	(31.6)	10.3	1.9	サワ	ワカンジキ型
427 86	1002	田下駄		V層	榎目	(41.8)	10.2	1.8	サワ	ワカンジキ型
427 86	1003	田下駄		V層	板目I	(25.0)	10	1.1	サワ	ワカンジキ型
427	1000	横槌		V層	芯持ち	62.5	11.8	10	クスノキ	
427	1001	横槌		Va層	芯持ち	40.6	5.3	4.05	カヤ	

容器 K区

図版 PL	報告 番号	名称	出土地点	層位	木目	計測 (cm)			樹種	形状の特徴
426	988	曲物	SK9930		榎目	外径16.2	内径 14.2	器高 7.0		円形D-2類
426 85	989	曲物	SK9930		榎目	径 15.2 器高 7.8				円形F-1類

服飾具 K区

図版 PL	報告 番号	名称	出土地点	層位	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
425 85	982	横櫛	SK9265			(8.9)	4	0.7	イヌキ	
425 85	983	横櫛	SK9300			(5.5)	4	0.7	イヌキ	

建築部材 K区

図版 PL	報告 番号	名称	出土地点	層位	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
425 85	984	井戸杵材	SK9930		板目I	84.8	13.3	12.1	サワ	
425 85	985	井戸杵材	SK9930		板目I	95.4	14.2	9.7	サワ	
425 85	986	井戸杵材	SK9930		芯持ち	93	14.1	11.2	モミ属	
425	987	井戸杵材	SK9930		追榎目	63.7	5.95	7	針葉樹	

その他 B, K区

図版 PL	報告 番号	名称	出土地点	層位	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
426 85	990	部材	SK9930		板目I	21.4	2.45	1.3	サワ	仕口状の加工がある角材
427 86	1004	部材		V層	斜め	(27.5)	(6.6)	2.7	サワ	柄孔のある板材
427 86	1005	部材		V層	板目II	(34.8)	(7.2)	1.1	サワ	釘孔状の小孔がある板材

表48-(1) 屋代遺跡群木製品一覧表

木形(齋串)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
369	25	齋串	SD7025=SD8027	SD8027	4層		板目I	9.45	0.9	4		
369	28	齋串		SD8027	4層		追榎目	20.7	2.1	0.4		
370	51	齋串	SD7026=SD8029	SD7026		SQ8052	榎目	21.1	2.2	0.4	サワ	
370	52	齋串		SD7026		SQ8052	追榎目	19	3.05	0.48		B-1
370	53	齋串		SD7026		SQ8052	榎目	(15.5)	2.1	0.3		B-1
370	54	齋串		SD7026		SQ8052	追榎目	(14.9)	2.33	0.4		C-1
370	55	齋串		SD7026		SQ8052	追榎目	(16.7)	2.8	0.4		C-1
370	56	齋串		SD7026		SQ8052	追榎目	(14.5)	2.3	0.6		C-1
371	64	齋串	SD7028	SD7028			板目I	33.2	2.5	0.4		
371	65	齋串	=SD8028 2層	SD7028			榎目	(13.3)	2.1	0.25		
371	66	齋串		SD7028			板目II	12.4	1.2	0.25		
371	67	齋串		SD7028			板目I	(10.45)	1.1	0.2		
372	79	齋串		SD8028	2層		榎目	46	2.7	0.5		
372	80	齋串		SD8028	2層		榎目	18.1	1.5	0.3		
373	102	齋串		SD7030	中層	SQ8037	追榎目	(15.9)	(1.9)	0.5		
373	103	齋串		SD7030	中層	SQ8037	追榎目	(14.5)	1.6	0.3		
373	104	齋串		SD7030	中層	SQ8037	追榎目	(19.1)	(2.6)	0.2		
373	105	齋串		SD7030	中層	SQ8037	追榎目	(10.5)	1.6	0.3		
373	106	齋串		SD7030	中層	SQ8037	追榎目	(10.4)	(1.8)	0.3		A-2
373	107	齋串		SD7030	中層	SQ8037	追榎目	27.3	(2.5)	0.4		A-2
374	122	齋串		SD7030	上層	SQ8036	追榎目	17.6	3.6	0.4		
374	123	齋串		SD7030	上層	SQ8036	榎目	33.2	2.2	0.5		A-2, E-1
374	124	齋串		SD7030	上層	SQ8036	榎目	(21.1)	2.3	0.4		A-2
374	125	齋串		SD7030	上層	SQ8036	榎目	19.7	2.1	0.5		
374	126	齋串		SD7030	上層	SQ8036	榎目	28.1	2.1	0.3		C-1, E-1
374	127	齋串		SD7030	上層	SQ8036	榎目	(16.0)	2.1	0.3		C-1
374	129	齋串		SD7030	上層	SQ8038	榎目	17.4	1.9	0.5		A-4, E-1
374	130	齋串		SD7030	上層	SQ8038	榎目	16.4	2	0.5		A-4, E-1
374	131	齋串		SD7030	上層	SQ8038	板目I	18.5	1.8	0.6		A-4, E-1
374	132	齋串		SD7030	上層	SQ8038	板目I	16.4	1.7	0.75		
374	146	齋串		SD7030			榎目	22.3	1.6	0.4		

表48- (5) 屋代遺跡群木製品一覧表

木形(斎串)

図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
419 83	892	斎串	SD7065	SD8044	下層	SQ8004	柎目	32.5	2.3	0.9		D-2
419 83	893	斎串	=SD7067	SD8044	下層	SQ8004	柎目	35	2.1	0.7		D-2、木目状圧痕有り
419 83	894	斎串	=SD8044 4, 5層	SD8044	下層	SQ8004	追柎目	34.6	2.5	0.8		D-2、木目状圧痕有り
420	902	斎串	=SD8049	SD8049		SQ8002	板目 I	(36.9)	1.8	0.8		A-4
420	903	斎串		SD8049		SQ8002	板目 I	(49.6)	2.3	0.45		A-4
420	904	斎串		SD8049		SQ8002	板目 I	51.9	2.4	0.7		A-4
421	917	斎串		SD8035	1層	SQ8049	板目 I	(36.3)	3.1	5.05	ヒノキ	E-1
421	918	斎串		SD8035	1層	SQ8049	板目 I	(19.6)	2.9	0.43		
421	919	斎串		SD8035	1層	SQ8049	追柎目	(11.9)	(2.34)	0.5		
422	929	斎串		SD8035			柎目	81	1.6	1.4		
422	933	斎串		SD8037			板目 II	43.8	2.05	0.6		
422	936	斎串		SD8039			斜め	(28.0)	4	0.7		
422	937	斎串		SD8039			斜め	(30.0)	1.8	0.6	モミ属	
422	939	斎串		SD8041	5層		板目 I	29.7	1.5	0.5		
422	940	斎串		SD8041	5層		斜め	19.3	2.2	0.6	ワラ	
423	944	斎串		SD8041	3~4層		柎目	16.3	1.6	0.64	ワラ	
423	945	斎串		SD8041	3~4層		追柎目	18	2.8	0.7		
423	946	斎串		SD8041	3層		柎目	(18.6)	2.3	0.4		
423	949	斎串		SD8041	2層		板目 II	12.3	2	0.2		
423	951	斎串		SD8041	1層	SQ8001	柎目	23.4	2	0.4		
423	952	斎串		SD8041	1層	SQ8001	柎目	23	2.2	0.4		
423	953	斎串		SD8041	1層	SQ8001	板目 I	(22.1)	1.9	0.3		
423	954	斎串		SD8041	1層	SQ8001	板目 I	22.5	1.6	0.35	ワラ	
423	955	斎串		SD8041	1層	SQ8001	板目 I	23.1	1.55	0.25	ワラ	
423	956	斎串		SD8041	1層	SQ8001	柎目	23.4	2	0.4		
423	957	斎串		SD8041	1層	SQ8001	柎目	22.1	1.9	0.3		
423	958	斎串		SD8041			板目 I	(17.9)	3.1	1	ワラ	
424	963	斎串		SD8043	3層下		斜め	(17.4)	1.7	0.85	ワラ	
424	964	斎串		SD8043	3層以下	SQ8015	追柎目	(25.9)	2.7	0.5		
424	965	斎串		SD8043	3層以下	SQ8015	斜め	(25.7)	2.7	0.4		
424	966	斎串		SD8043	3層以下	SQ8015	追柎目	(34.3)	2.5	0.5	モミ属	
424	967	斎串		SD8043	3層以下	SQ8015	斜め	(33.2)	2.8	0.6		
424	968	斎串		SD8043	3層以下	SQ8015	追柎目	(14.7)	2.5	0.3		
424	969	斎串		SD8043	3層以下	SQ8015	追柎目	(13.0)	2	0.25		
424	970	斎串		SD8043	2, 3層		柎目	26.3	3.2	0.4		
424	978	斎串		SD8043	1層		柎目	15.6	2.1	0.35		
426	991	斎串		SK7017			柎目	(8.8)	2.1	0.3		
427	1007	斎串			第5水田対応層		板目 I	32.2	4	0.5	ワラ	

木形(動物形)

図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
368	1	人形	SD7025=SD8027	SD7025			板目 I	(15.8)	(3.2)	0.4	ワラ	手の表現なし
368	2	人形		SD7025			柎目	(10.1)	1.6	0.3		手の表現なし
368 72	15	人形		SD8027	4層		柎目	15.3	2.4	0.32	ワラ	目・鼻・口が墨書で表現される、肩の表現なし
368	16	人形		SD8027	4層		柎目	15.9	2.7	0.12		肩の表現なし
368	17	人形		SD8027	4層		柎目	15	12.8	0.3		肩の表現なし
370	41	人形	SD7026=SD8029	SD7026			柎目	10	2.65	0.3		
370	42	人形		SD7026			斜め	8.35	1.4	0.3		
370	43	人形		SD7026			柎目	8	1.35	0.3		
371	57	人形		SD8029			柎目	11.5	3.7	0.25		
372	87	人形	SD7028=SD8028 2層	SD8028			追柎目	(6.35)	3	0.4		
373	108	人形		SD7030	中層		柎目	(14.5)	2.4	0.6		
374	121	人形		SD7030	上層	SQ8036	柎目	(12.2)	3.4	0.4		
374	139	人形		SD7030	上層		柎目	(10.5)	3	0.4		
374	140	人形		SD7030	上層		追柎目	(12.5)	2.5	0.6		
375	158	人形		SD7031			板目 I	(19.0)	3.9	0.6		
377	184	人形	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD7032			柎目	(6.3)	2.4	0.4		
377	185	人形		SD7032			柎目	(9.9)	3.7	0.4		
377	188	人形		SD7032			板目 I	25.8	3.4	0.5	ワラ	
377	189	人形		SD7032			追柎目	18.5	2.87	0.55		
377	190	人形		SD7032			柎目	(19.9)	3	0.5		手の切り込みがなく、左右三角の切り欠きで腰を表現
377	191	人形		SD7032			柎目	(15.5)	3.2	0.6		
377	192	人形		SD7032			板目 I	15.4	1.9	0.45		
377	193	人形		SD7032			柎目	(11.6)	3	0.3		
377	194	人形		SD7032			追柎目	(7.4)	3.2	0.9		
377	195	人形		SD7032			柎目	(8.6)	2.4	0.7		
380 75	236	人形		SD8028	5層	SQ8034	柎目	25.5	3.8	0.4	ワラ	
380 75	242	人形		SD8028	5層	SQ8035	追柎目	(19.2)	4.1	0.8		裏面に等間隔で一列に並ぶ浅く削った傷あり
381	249	人形		SD8028	5層		柎目	(15.4)	2.7	0.6		頭部木口を縦割りにする

表48- (6) 屋代遺跡群木製品一覧表

木形(動物形)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	S Q	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴	
382	75	269	SD7032= SD8028 3, 4, 5層	SD8028	4層	SQ8042	板目 I	(15.7)	3.1	0.75	サワ		
382	75	270		SD8028	4層	SQ8042	板目 I	(13.9)	2.4	0.55			
382	276	人形		SD8028	4層		追柱目	(9.7)	(2.0)	0.15			
382	277	人形		SD8028	4層		板目 I	(6.7)	1.9	0.45			
384	76	310		SD8028	3層	SQ8043	板目 II	(28.2)	3	0.35	サワ		
384	76	311		SD8028	3層	SQ8043	板目 II	28.6	3.3	0.4			
385	341	人形		SD8028	3層	SQ8048	追柱目	(12.8)	(2.4)	0.4			
386	76	356		SD8028	3層		板目 I	6.9	1.25	0.25			
386	357	人形		SD8028	3層		柱目	(8.3)	(1.6)	0.4			
386	358	人形		SD8028	3層		追柱目	29.8	2.8	0.3			
388	76	379		SD8028	3層		柱目	(10.4)	3	0.5		裏面に交差した切り込み	
388	380	人形		SD8028			板目 I	(14.2)	3	0.4		手の表現なし	
389	397	人形			SD7035			柱目	20.75	3.35	1.7		手の表現なし
391	77	430		SD7036=SD8038	SD7036		SQ8025	追柱目	30.4	4.1	0.7	サワ	
391	439	人形	SD7036			SQ8028	板目 I	(8.0)	3	0.6			
392	77	443	SD7036				芯持ち	27.15	6.7	3.4	クヌギ 節	丸木材の股木の人形	
392	444	人形	SD7036				板目 I	34.45	4.3	0.6	サワ	手の表現なし	
393	78	459	SD8038			SQ8021	追柱目	(24.7)	3.6	0.5		胸部に浅い差込痕あり	
393	78	460	SD8038			SQ8021	追柱目	(25.4)	3.15	0.3	サワ	胸部に浅い差込痕あり	
393	78	464	SD8038			SQ8022	柱目	(25.9)	2.3	0.51			
393	465	人形	SD8038			SQ8022	追柱目	(23.0)	(3.6)	0.38			
393	466	人形	SD8038			SQ8022	柱目	(14.0)	2.5	0.38		手の表現なし	
393	467	人形	SD8038			SQ8022	追柱目	(14.2)	(2.7)	0.4		手の表現なし	
395	504	人形	SD8038				柱目	(20.5)	2.4	0.7			
398	79	546			SD7037		SQ8032	追柱目	(16.8)	3.9	0.5		
399	552	人形			SD7038			柱目	13.55	2.9	0.35		手の表現なし
399	553	人形			SD7038			追柱目	13.3	3	0.4		
399	554	人形		SD7038			柱目	13.5	1.35	0.2			
399	79	555		SD7038			追柱目	(13.3)	4.2	0.9	サワ		
400	570	人形	SD7039=SD8040	SD7039			柱目	13.75	1.85	5		手の表現なし	
400	571	人形		SD8040		SQ8031	板目 I	(14.8)	(3.0)	0.8			
409	81	724	SD7045=SD8032	SD8032		SQ8018	板目 I	18.95	2.85	0.3		明確な腰の表現あり	
409	81	725		SD8032		SQ8018	板目 I	(18.3)	2.85	0.5	サワ	明確な腰の表現あり	
409	81	726		SD8032		SQ8018	板目 I	19	2.8	0.3		明確な腰の表現あり	
409	81	727		SD8032		SQ8018	板目 I	14.1	2.3	0.15			
411	81	757		SD8032	15, 16層	SQ8016	板目 I	(26.6)	3.2	0.6		手の表現なし	
411	81	758		SD8032	15, 16層	SQ8016	板目 I	(18.8)	3.05	0.5		手の表現なし	
411	759	人形		SD8032	15, 16層	SQ8016	柱目	(11.4)	(2.6)	0.3			
411	760	人形		SD8032	15, 16層	SQ8016	柱目	(9.7)	(2.2)	0.2			
414	818	人形		SD7046=SD8044 3層	SD7046			柱目	(10.6)	(3.3)	0.4		
419	83	883	SD7065=SD7067= SD8044 4, 5層=SD8049	SD7065			柱目	(21.8)	2.7	0.75	モミ属	両側部を挟り、腰を表現	
422	84	941		SD8041	4層		柱目	23.8	4	1	モミ属	足の表現がなく、下端が 剣先状となる	
424	85	973		SD8043	2, 3層		追柱目	(14.3)	2.5	0.8		頭部木口を縦割りにする	
424	977	人形		SD8043	1層		追柱目	(20.8)	4	0.5			
368	72	12	SD7025=SD8027	SD8027	4層	SQ8051	柱目	14.25	1.4	0.5		A①-1類	
368	72	13		SD8027	4層	SQ8051	柱目	13.3	1.6	0.4		A①-1類	
368	72	14		SD8027	4層	SQ8051	追柱目	14.4	1.8	0.6	サワ	A①-1類	
368	18	馬形		SD8027	4層		柱目	(22.7)	3	0.4		A①類	
369	19	馬形		SD8027	4層		柱目	9.9	2.3	1		A①-1類	
369	72	20		SD8027	4層		柱目	18.6	3.4	0.4		A①-1類	
369	34	馬形		SD8027	3~4層		追柱目	18	2.8	0.4		A①-1類	
369	35	馬形		SD8027	3~4層		斜め	(17.9)	2.8	0.25		A①類	
370	37	馬形		SD8027	1, 2層		追柱目	9.3	1.9	0.3	サワ	①-1類、鞍欠損か	
370	38	馬形		SD8027	1, 2層		柱目	15.6	2.7	0.3		A①類	
370	39	馬形		SD8027			追柱目	(19.9)	3.7	0.6		A①-1類	
370	44	馬形		SD7026=SD8029	SD7026			柱目	11.6	3.1	0.4		①-1類、鞍欠損か
370	45	馬形			SD7026			柱目	10.4	2	0.35		A①-1類
370	46	馬形			SD7026			柱目	5.85	2	0.25		A①類
371	58	馬形			SD8029			板目 II	(6.7)	1.75	0.55		①類
371	59	馬形		SD8029			柱目	(10.3)	2.5	0.4		A①-1類	
371	60	馬形	SD8029			柱目	(12.65)	2.5	0.5				
371	68	馬形	SD7028 =SD8028 2層	SD7028			板目 I	12.1	1.85	0.4		A①-1類	
371	69	馬形		SD7028			板目 I	9.25	3.05	1			
371	74	馬形		SD8028	2層		柱目	19.6	2.8	0.6		B①-1類	

表48- (8) 屋代遺跡群木製品一覧表

本形(動物形)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	S Q	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
398	543	馬形		SD7037		SQ8032	板目 I	25.3	3.2	0.6		A①-2類
400	576	馬形	SD7039=SD8040	SD8040			板目 I	(26.8)	1.9	0.5		A①-1類、胴部欠損
402	608	馬形		SD7043			追柱目	(15.05)	3.25	0.5		A①類
402	613	馬形		SD7050			柱目	(10.4)	2.4	0.3		A①類
404	652	馬形	SD7045=SD8032	SD7045			板目 I	(20.0)	4	0.7		B③-2類
404	653	馬形		SD7045			板目 I	26	3.9	0.6		B①-1-I類
407	702	馬形		SD8032	26層		柱目	18.6	1.7	0.6		A②-II類、串状木製品706~708が装着
408	81	馬形		SD8032	26層	SQ8011	柱目	36.2	4.9	0.9	サワ	B①-2-I類
408	714	馬形		SD8032	17~20層		追柱目	23.6	3.2	0.6		A①-1類
409	81	馬形		SD8032		SQ8018	板目 I	20.3	3.4	0.75	サワ	A①-1-I類
411	81	馬形		SD8032	15, 16層	SQ8016	板目 I	(29.8)	2.9	0.84		B①-1類、差込痕2カ所
411	81	馬形		SD8032	15, 16層	SQ8016	板目 II	(21.1)	2.79	0.6		B①-1類
411	81	馬形		SD8032	15, 16層	SQ8016	柱目	18.73	2.48	0.5		A③-1類
412	793	馬形		SD8032	15, 16層		追柱目	27.8	2.6	0.7		B③-1類
413	806	馬形		SD8032	15, 16層		柱目	23.8	6	1.2		A①-2類
414	82	馬形	SD7046	SD8044		SQ8005	斜め	30.9	5.7	1.2		A①-2類
414	824	馬形	=SD8044 3層	SD8044		SQ8005	追柱目	(23.7)	4.8	0.7	サワ	A①-2類
415	830	馬形		SD8044			追柱目	12.6	3.3	1.1		B②-2-I類
416	844	馬形	SD7048=SD7057= SD8044 1, 2層	SD7048			柱目	18.5	2.5	0.6		B①-1類
418	876	馬形		SD7056			追柱目	23.6	3.2	0.7		①類
420	83	馬形	SD7065	SD8049		SQ8003	板目 I	19.1	3.1	0.85	サワ	A①-1類
420	83	馬形	=SD7067	SD8049		SQ8003	板目 I	19.1	2.9	1.1		A①-1類、串状木製品908が装着
420	83	馬形	=SD8044 4, 5層	SD8049		SQ8003	板目 I	(11.2)	2.3	1		A①-1類、鞍欠損か、 串状木製品908が装着
421	909	馬形	=SD8049	SD8049			柱目	(14.4)	2.7	0.8		A①-1類、尾部欠損、 串状木製品908が装着
421	920	馬形		SD8035	1層	SQ8049	追柱目	(18.4)	(4.1)	0.8		①類
421	921	馬形		SD8035	1層	SQ8049	追柱目	(15.0)	(4.4)	0.95		A①-1類
421	84	馬形		SD8035	1層	SQ8050	追柱目	32.9	4.3	1		A①-1類
422	930	馬形		SD8035			板目 I	(13.5)	3.2	0.5		A①-1類
422	931	馬形		SD8035	1層		追柱目	(14.7)	(3.6)	0.6		A①類
422	84	馬形		SD8037			柱目	38	4.8	0.9		A③-1類
422	84	馬形		SD8037			板目 II	(25.8)	4.8	1	モミ属	A②類、頭部不明
423	84	馬形		SD8041	3~4層		板目 I	(38.5)	4.3	1.25	サワ	B①-1類
423	84	馬形		SD8041	3層		追柱目	30.7	2.6	0.8		B①-1類
424	972	馬形		SD8043	2層		板目 I	28.9	4.2	0.6	サワ	①類、鞍欠損か
427	86	馬形			第5水田 対応層		追柱目	29.5	3.7	0.6		B①-2類
369	72	鳥形	SD7025=SD8027	SD8027	4層		板目 I	(13.35)	3.3	0.8	サワ	1類、頭部木口を縦割りに にする、羽状の切り込み あり
371	73	鳥形	SD7028 =SD8028 2層	SD8028	2層		板目 I	25.6	3.5	0.7	サワ	1類、頭部表裏に一对の 切り込み、羽状の切り込 みあり
378	214	鳥形	SD7032=	SD7032			斜め	(34.5)	3.5	0.7		1類
381	248	鳥形	SD8028 3, 4, 5層	SD8028	5層		板目 II	16.1	4	1		1類-II, III
383	286	鳥形		SD8028	4層		柱目	16	1.8	0.8		1類
383	287	鳥形		SD8028	4層		柱目	(6.55)	2.3	0.4		
386	76	鳥形		SD8028	3層		板目 I	16.4	3.3	0.7	サワ	1類、小孔による目の表 現あり、羽状の切り込み あり
388	378	鳥形		SD8028			柱目	9.4	2.1	0.55		1類
389	399	鳥形		SD7035			追柱目	(24.5)	2.9	0.9	サワ	2類
389	401	鳥形		SD7035			柱目	11.1	1.7	0.4		
395	78	鳥形	SD7036=SD8038	SD8038			追柱目	(16.35)	3.1	0.5	サワ	
410	81	鳥形	SD7045=SD8032	SD8032	15, 16層	SQ8016	斜め	(19.2)	4.2	0.61		背に逆台形状の切り欠き
410	81	鳥形		SD8032	15, 16層	SQ8016	追柱目	20.7	4	0.8		2類、背に逆台形状の切 り欠きあり
414	817	鳥形	SD7046 =SD8044 3層	SD7046			斜め	(14.3)	3.7	0.6		
416	82	鳥形	SD7048=SD7057 =SD8044 1, 2層	SD7048			板目 II	33.25	4.4	1.6	サワ	1-III類
368	3	蛇形	SD7025=SD8027	SD7025			追柱目	(13.2)	2.6	0.3	サワ	B類
371	70	蛇形	SD7028	SD7028			板目 I	(19.1)	1.9	0.4	サワ	A類
371	77	蛇形	=SD8028 2層	SD8028	2層		斜め	(31.75)	3.4	0.65		A類
374	73	蛇形		SD7030		SQ8039	板目 I	47.8	3.8	0.55	サワ	B類
374	137	蛇形		SD7030		SQ8039	板目 I	(16.0)	2.5	0.3		B類
374	138	蛇形		SD7030		SQ8039	板目 I	(9.5)	2	0.3		B類
377	183	蛇形	SD7032=	SD7032			柱目	(16.4)	1.95	0.7		B類
377	198	蛇形	SD8028 3, 4, 5層	SD7032			柱目	(18.1)	2.1	0.7		B類
377	199	蛇形		SD7032			柱目	(28.3)	2.4	0.3		B類

表48- (9) 屋代遺跡群木製品一覧表

木形(動物形)

図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
377	200	蛇形	SD7032=	SD7032			斜め	(32.2)	2.4	0.5		B類
385	314	蛇形	SD8028 3, 4, 5層	SD8028	3層	SQ8044	柱目	47.7	2.7	0.5		A類
386	346	蛇形		SD8028	3層	SQ8045	追柱目	(58.5)	2.6	0.3		B類
386	347	蛇形		SD8028	3層	SQ8045	柱目	(42.4)	1.95	0.4		B類
386	348	蛇形		SD8028	3層	SQ8045	追柱目	(25.7)	2.3	0.4		B類
388	374	蛇形		SD8028			板目I	(36.8)	3.4	0.7		B類
388	375	蛇形		SD8028			柱目	33	1.97	0.4		B類
389 76	391	蛇形		SD7035		SQ8026	柱目	(44.5)	3.9	0.35		A類、斜線切り込み有り
389 76	392	蛇形		SD7035		SQ8026	柱目	(47.0)	3.8	0.4		A類、斜線切り込み有り
389 76	393	蛇形		SD7035		SQ8026	柱目	45.7	3.3	0.3		A類、斜線切り込み有り
397 79	522	蛇形	SD7036=SD8038	SD8038	1層	SQ8030	柱目	(20.5)	2.7	0.5		B類、木目状圧痕有り
397 79	523	蛇形		SD8038	1層	SQ8030	柱目	(20.2)	2.8	0.55		B類、木目状圧痕有り
397 79	524	蛇形		SD8038	1層	SQ8030	柱目	(10.8)	2.7	0.4		B類、木目状圧痕有り
414	816	蛇形	SD7046	SD7046			柱目	(15.9)	2.2	0.45		B類
415	831	蛇形	=SD8044 3層	SD8044	3層		柱目	(25.2)	2.1	0.88	サラ	B類
417	869	蛇形		SD7051		SQ8014	板目II	(51.1)	2.3	0.6	サラ	A類
417	870	蛇形		SD7051		SQ8014	板目I	(37.5)	1.5	0.5	サラ	A類
418 83	871	蛇形		SD7056		SQ8013	追柱目	(37.2)	2.6	0.6		A類、表裏複数対の切り込み
420 83	895	蛇形	SD7065	SD8044	下層	SQ8004	追柱目	52.5	3.8	0.5		A類
420 83	896	蛇形	=SD7067	SD8044	下層	SQ8004	追柱目	(48.5)	3.7	0.3		A類
420 83	897	蛇形	=SD8044 4, 5層	SD8044	下層	SQ8004	柱目	49	2.1	0.65		A類、切り込み斜線あり、木目状圧痕有り
420 83	898	蛇形	=SD8049	SD8044	下層	SQ8004	追柱目	(43.4)	2.25	0.6	サラ	A類
420 83	899	蛇形		SD8044	下層	SQ8004	柱目	(42.7)	2.3	0.4		A類
422	932	蛇形		SD8035	1層		追柱目	(30.5)	2.3	0.25		B類
424 85	962	蛇形		SD8043			追柱目	(49.8)	3.6	0.6	サラ	A類

木形(農工具形)

図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
389 76	403	鎌形		SD7035			板目I	13.6	3.8	1.9	サラ	
412 82	794	墨壺形	SD7045=SD8032	SD8032	14層		板目I	5.6	2.8	2.2	サラ	
381 75	254	釘形	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD8028	5層		削出し	10.5	1	1	針葉樹	円頭丸釘状を呈する
375 73	147	鋏柄形		SD7030			芯持ち	14.7	1.65	1.85	カヤ	
417 83	865	犁形		SD7051			芯もち	14.65	9	柄0.9	イヌカヤ	

木形(武器形)

図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
382 75	279	刀形	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD8028	4層		柱目	40.4	2.85	0.7	サラ	
401 80	594	刀形		SD7042			板目I	(16.5)	1.9	0.5		
421 84	912	鎌形		SD7070			板目I	14.6	1.6	0.5		

木形(その他)

図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
370	40	舟形	SD7025=SD8027	SD8027			板目II	11.7	2.1	0.8	サラ	
377 74	197	舟形	SD7032=	SD7032			柱目	(8.8)	5.2	1.1	サラ	穿孔有り
381 75	250	舟形	SD8028 3, 4, 5層	SD8028	5層		柱目	26.3	3.2	0.9	サラ	
389	402	舟形		SD7035			追柱目	10.5	1.98	1.3	サラ	船首と船尾の区別あり
399 79	562	舟形		SD7038			板目I	25.2	3	1.7	サラ	船首と船尾の区別あり
402	612	舟形		SD7050			柱目	(12.4)	3.1	1.3	サラ	穿孔あり
406	692	舟形	SD7045=SD8032	SD8032	39層下		板目II	(24.0)	3	2.7	モミ属	
419	884	舟形	SD7065=SD7067=SD8044 4, 5層=SD8049	SD7065			板目I	13.55	3	0.9	サラ	船首と船尾の区別あり
383 75	289	琴形	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD8028	4層		板目I	(41.5)	2.7	0.8	サラ	
372	91	琴柱形		SD7030	下層		板目I	4.5	1.6	0.6		B類
374 73	141	琴柱形		SD7030	下層		柱目	3.8	1.7	0.7	サラ	A類
374 73	142	琴柱形		SD7030			板目I	5.2	2.3	1	サラ	A類
377	196	琴柱形	SD7032=	SD7032			板目I	3.35	1.4	0.8		A類
383 75	288	琴柱形	SD8028 3, 4, 5層	SD8028	4層		斜め	4.4	1.8	0.85		A類
388	376	琴柱形		SD8028			柱目	(4.3)	(1.8)	0.7		A類
389	405	琴柱形		SD7035			板目I	3.8	2.2	0.7	針葉樹	A類
389 77	406	琴柱形		SD7035			板目I	2.8	1.6	0.54	サラ	半円形の特殊な形状
392	445	琴柱形	SD7036=SD8038	SD7036			板目I	3.8	1.8	0.8	サラ	B類
392	446	琴柱形		SD7036			斜め	(3.9)	1.4	0.9		B類
395	505	琴柱形		SD8038			板目II	3.7	2.2	0.8	サラ	A類
395	506	琴柱形		SD8038			板目I	3.5	1.5	0.8		B類

表48- (12) 屋代遺跡群木製品一覧表

紡織具												
図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	S Q	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
368	72	糸巻き (木形?)	SD7025=SD8027	SD7025			板目 I	31.25	2.95	0.6	サワ	
403	624	糸巻き・ 梓支え木	SD7044=SD7047・ SX7034	SD7047			削出し	26.6	2.3	0.95	モミ属	
406	80	糸巻き・ 梓支え木	SD7045=SD8032	SD8032	45層		削出し	83.1	3.1	2.9	サワ	
379	74	糸巻き・ 梓腕木	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD7032			削出し	(23.2)	2.1	1.9		
404	654	糸巻き・ 梓腕木	SD7045=SD8032	SD7045			削出し	(24.55)	2.3	2.1	モミ属	
375	163	糸巻き・ 横木		SD7031			柁目	(8.0)	2	0.5	サワ	
395	78	糸巻き・ 横木	SD7036=SD8038	SD8038			板目 II	15.1	2.9	0.45	サワ	
375	156	糸巻き・ 総かけ支え木		SD7030			柁目	(14.8)	3	1.4	サワ	
379	227	糸巻き・ 総かけ支え木	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD7032			柁目	(15.7)	2.7	1	サワ	
383	75	糸巻き・ 総かけ支え木		SD8028	4層		柁目	(38.4)	3.8	1.2	サワ	
393	458	糸巻き・ 総かけ支え木	SD7036=SD8038	SD7036			柁目	(15.5)	2.6	1.2	サワ	
400	583	糸巻き・ 総かけ支え木	SD7039=SD8040	SD8040			柁目	35.9	2.8	0.95	サワ	
402	615	糸巻き・ 総かけ支え木	SD7044=SD7047・ SX7034	SD7047			追柁目	(13.9)	3.6	1.2	サワ	
402	616	糸巻き・ 総かけ支え木		SD7047			柁目	(14.8)	1	1.4		
403	625	糸巻き・ 総かけ支え木		SD7044			追柁目	20.1	4	1.1		一端剣先状、穿孔有り、 転用
406	677	糸巻き・ 総かけ支え木	SD7045=SD8032	SD8032	45層		板目 I	(24.5)	(2.7)	0.9	モミ属	2 次的加工受ける
418	880	糸巻き・ 総かけ支え木		SD7051			柁目	(20.7)	2.7	1.16		
390	77	布巻き具		SD7035			板目 II	40.9	3.5	1.7	カエデ属	
416	83	布巻具・ 経糸巻具	SD7048=SD7057 =SD8044 1, 2層	SD7048			柁目	92	5.9	3.8	モミ属	
387	76	緯打具?	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD8028	3層		柁目	(47.4)	5.3	1	カエデ属	

服飾具												
図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	S Q	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
368	4	横櫛	SD7025=SD8027	SD7025			柁目	4.8	3.8	0.7	イヌキ	破片
368	5	横櫛		SD7025			柁目	4.3	3.4	0.4	エゴノキ	破片
388	386	横櫛	SD7033=SD7034	SD7033			柁目	4.3	3.2	0.9	イヌキ	
390	419	横櫛		SD7035			板目 I	6.9	5.8	1.1	散孔材	
401	598	横櫛		SD7042			柁目	5.7	3.6	1	イヌキ	
406	81	横櫛	SD7045=SD8032	SD8032	42層		柁目	9	4.6	1.1	散孔材	
421	84	横櫛		SD7070			板目	9.2	4.7	1.2	広葉樹	
372	73	竪櫛		SD7030	下層		板目 I	13.2	5.2	1.2	広葉樹	
368	72	下駄	SD7025=SD8027	SD7025			柁目	15.65	6.5	1.9	サワ	
368	72	下駄		SD7025			追柁目	14	7.1	4.8	サワ	
373	117	下駄		SD7030			柁目	23.8	(8.1)	2.6	サワ	
375	73	下駄		SD7030			追柁目	26.9	9.7	3	サワ	
396	78	下駄	SD7036=SD8038	SD8038			追柁目	25.3	10.7	3.74	サワ	
396	510	下駄		SD8038			追柁目	28.5	11.8	3	モミ属	
400	578	下駄	SD7039=SD8040	SD8040			追柁目	24.3	6.8	2.9	サワ	
401	600	下駄		SD7042			柁目	26.9	(7.5)	2.9	サワ	
413	808	下駄	SD7045=SD8032	SD8032			柁目	24	10.4	2.8		
413	82	下駄		SD7045			柁目	25.6	10.7	3.6	サワ	

武器・馬具												
図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	S Q	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
375	73	弓		SD7030			芯持ち	(10.7)	2	1.9	イヌキ	
399	79	弓		SD7038			芯持ち	(28.3)	1.7	1.6	イヌキ	
424	85	弓		SD8043	2層		芯もち	(32.1)	2.5	2.4	イヌキ	
405	80	弓状木製品	SD7045=SD8032	SD7045			削出し	126	2.2	0.1	サワ	
396	78	壺盤	SD7036=SD8038	SD8038			板目 II	21.8	14.8	8	ケヤ	

建築部材												
図版 PL	報告番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	S Q	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
415	82	建築部材 (垂木)	SD7046=SD8044 3層	SD8044			芯持ち	118.2		5.6		
370	72	建築部材	SD7026=SD8029	SD7026			板目 I	28.05	13.3	7.5		
376	74	建築部材		SA7001			追柁目	123.9	13.4	9.4	サワ	
376	169	建築部材		SD7031			板目 I	(120.0)	8.1	5	サワ	枘孔あり
387	76	建築部材	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD8028	3層		板目 I	(128.0)	14.2	10.3		
369	72	建築部材	SD7025=SD8027	SD8027	4層		板目 II	58.3	19.8	2.4	サワ	
372	73	建築部材		SD7030	下層		板目 I	(83.8)	13.9	5.6	モミ属	

表48- (13) 屋代遺跡群木製品一覧表

建築部材

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
376	170	建築部材		SA7001			芯持ち	(87.2)	15.5	11.8	ケヤ	
376 74	172	建築部材		SD7031			板目Ⅱ	(31.0)	(13.9)	5.4	モミ属	
425	980	建築部材		SD8045			板目Ⅰ	49	9.45	6.45	モミ属	杭に転用

その他(独楽)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
369	24	独楽	SD7025=SD8027	SD8027	4層		芯もち	(4.8)		2.3	針葉樹	
371 73	61	独楽	SD7026=SD8029	SD8029			芯もち	5.2	3.1	3.1	カヤ	
372 73	90	独楽		SD7030	下層		芯持ち	5.8	3.7	3.2	イカヅキ	
375	148	独楽		SD7030			芯もち	5.65		2.75	カヤ属	

その他(火鑽板)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
375 73	157	火鑽板		SD7030			板目Ⅰ	(34.8)	2.7	1		
390 77	418	火鑽板		SD7035			斜め	10.9	2.85	2.4	カワ	
403 80	623	火鑽板	SD7044=SD7047 SX7034	SD7047	上層		柱目	(24.1)	2.6	1.7	カワ	

その他(水門)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
397 79	516	水門	SD7036=SD8038	SD8038			板目Ⅱ	(76.8)	26.3	6.8	モミ属	槽転用
399	569	水門		SD7038			追柱目	125.4	30.1	6.1	カボナ属	
401 80	601	水門		SD7042			板目Ⅰ	129.8	30.8	10.5	モミ属	槽転用
426 86	992	水門		SX7035			追柱	121	31.3	5.6	モミ属	

その他(木樋)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
401 80	599	木樋		SD7042			斜め	(30.0)	(10.8)	5.5		
415	842	木樋	SD7046=SD8044 3層	SD8044			板目Ⅰ	(46.0)	14.5	1.7	カガミ	
425	979	木樋		SD8045			板目Ⅰ	36.2	10		ケヤ	

その他(木札状木製品)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
371	73	木札状木製品	SD7028=SD8028 2層	SD7028			追柱目	(5.7)	1.2	0.3		一端両側面に対する切り欠き
372	95	木札状木製品		SD7030	下層		板目Ⅰ	(20.4)	2.4	0.25		上端圭頭状、側面に一对の切り欠き
372	96	木札状木製品		SD7030	下層		柱目	(20.5)	3.7	0.8	モミ属	一端両側面に対する切り欠き
373	114	木札状木製品		SD7030	中層		板目	30.2	2.2	0.6		上端直頭、下端剣先状
375	151	木札状木製品		SD7030			柱目	32	3	0.75		上端直頭、下端剣先状
383	297	木札状木製品	SD7032=	SD8028	4層		板目Ⅰ	18.9	2.6	0.5	カワ	側面に一对の切り欠き、 下端が剣先状となる
383	298	木札状木製品	SD8028 3, 4, 5層	SD8028	4層		追柱目	18.2	2.9	0.5		一端両側面に対する切り欠き
385	331	木札状木製品		SD8028	3層	SQ8046	追柱目	(18.5)	(2.4)	0.55		
385	332	木札状木製品		SD8028	3層	SQ8046	追柱目	12.5	3.1	0.4		
387	364	木札状木製品		SD8028	3層		追柱目	31	3.4	1.5	モミ属	両端側面に対する切り欠き
388	384	木札状木製品		SD8028			板目Ⅱ	24.2	3.3	0.5	カワ	上下端圭頭状、一端側面 に対する切り欠きを施す
393	468	木札状木製品	SD7036=SD8038	SD8038		SQ8022	追柱目	(12.4)	(2.7)	0.7		
393	469	木札状木製品		SD8038		SQ8022	追柱目	(11.6)	(2.9)	0.7		
400	579	木札状木製品	SD7039=SD8040	SD8040			板目Ⅱ	(12.2)	2.7	0.7	カワ	一端両側面に対する切り欠き
401	595	木札状木製品		SD7042			追柱目	(14.6)	2.95	0.9	カワ	中央部に小孔、軸が残存
404	656	木札状木製品	SD7045=SD8032	SD7045			柱目	22.6	1.9	0.8	カワ	両端側面に対する切り欠き、 浮子か
405	665	木札状木製品		SD7045			柱目	14.6	1.5	0.6		
406	675	木札状木製品		SD8032	45層		板目Ⅱ	19.7	2	1.1		一端両側面に対する切り欠き
413	805	木札状木製品		SD8032	15, 16層		板目Ⅰ	(16.9)	4.1	0.9	カワ	
426 85	994	木札状木製品		SX7035			柱目	21.8	(2.0)	0.8		両端側面に対する切り欠き、 浮子か
426 85	995	木札状木製品		SX7035			板目Ⅰ	22.65	2.2	0.4		両端側面に対する切り欠き、 浮子か
426 85	996	木札状木製品		SX7035			斜め	23.2	2	1.1	カワ	両端側面に対する切り欠き、 浮子か

その他(棒状木製品)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
369	22	棒状木製品 (齋串)	SD7025=SD8027	SD8027	4層		追柱目	30.5	1.35	1.2		4-A類、側部交互に切り 込みが入る。
380	230	棒状木製品 (齋串)	SD7032=	SD7032			斜め	90.4	2.23	1.85	カワ	3-A類、上端部表裏対 の切り込みあり
388	373	棒状木製品 (齋串)	SD8028 3, 4, 5層	SD8028			追柱目	72.1	2.2	1.5		4-A類、上部表裏連続 の切り込みあり
415	832	棒状木製品 (齋串)	SD7046=SD8044 3層	SD8044			柱目	46.2	2.4	2.1		4-A類、表裏角部連続 の削りあり

表48- (14) 屋代遺跡群木製品一覧表

その他(棒状木製品)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
370	36	棒状木製品	SD7025=SD8027	SD8027	2層		柁目	54.7	2.3	1.4	針葉樹	1-A類
371	63	棒状木製品	SD7026=SD8029	SD8029			板目II	43.3	1.75	1.55		1-A類
371	72	棒状木製品	SD7028	SD7028			板目II	(33.3)	2.4	2.05		下端1類
372	83	棒状木製品	=SD8028 2層	SD8028	2層		板目I	40.4	1.7	1.6		2-B類
372	84	棒状木製品		SD8028	2層		削出し	35.7	1.37	1.3		2-B類
372	85	棒状木製品		SD8028	2層		削出し	(22.8)	1.7	1.55	サラ	下端D類
372	92	棒状木製品		SD7030	下層		柁目	36.6	1.8	1.15		4-A類
372	97	棒状木製品		SD7030	下層		削出し	(23.8)	2.5	2.1	クマジデ属 イシデ節	先端3類
372	98	棒状木製品		SD7030	下層		削出し	42.6	1.9	1.7		3-C類
372	99	棒状木製品		SD7030	下層		削出し	(93.0)	2.08	1.86	モミ属	先端3類
373	115	棒状木製品		SD7030	中層		削出し	19.4	1.3	1.2		2-A類
373	116	棒状木製品		SD7030	中層		削出し	16.3	1.35	1.1	サラ	3-B類
375	150	棒状木製品		SD7030			板目I	16.5	2	1.3		2-A類
377 74	181	棒状木製品	SD7032=	SD7032		SQ8040	柁目	(24.0)	2	1.6		表裏角部連続切り込み
380	231	棒状木製品	SD8028 3, 4, 5層	SD7032			柁目	(67.9)	1.9	1.45		下端部C類
380	232	棒状木製品		SD7032			削出し	24.9	1.5	1.4	モミ属	5-D類
380 75	233	棒状木製品		SD7032			削出し	24.7	2.57	2.5	サラ	2-A類、糸擦れ状の痕跡
383	294	棒状木製品		SD8028	4層		柁目	29.3	2.1	1.9		2-A類
387	365	棒状木製品		SD8028	3層		削出し	19	1.9	1.8	サラ	2-A類
387	366	棒状木製品		SD8028	3層		削出し	(21.8)	2.1	2		下端A類、糸擦れ状の痕跡
387	367	棒状木製品		SD8028	3層		削出し	25.1	1.6	1.3	モミ属	2-C類
387	369	棒状木製品		SD8028	3層		柁目	43.1	3.3	1.5	アサダ	1-A類、上部側面抉り
387	370	棒状木製品		SD8028	3層		追柁目	(43.5)	5.5	4.5	モミ属	1-C類
388	389	棒状木製品	SD7033=SD7034	SD7034			板目II	(20.2)	1.2	0.5		下端C類
388	390	棒状木製品		SD7034			柁目	(19.35)	1.5	1.4	サラ	上端1類
390 77	417	棒状木製品		SD7035	最下層		板目I	(27.9)	2.1	1.8		上端2類、糸擦れ状の痕跡あり、上部穿孔あり
391 77	424	棒状木製品		SD7035			削出し	58.1	1.5	1.4		3-D類
391	425	棒状木製品		SD7035			削出し	28.2	2.15	2		3-A類
391	426	棒状木製品		SD7035			削出し	(20.55)	1.4	1.1		下端D類
391 77	427	棒状木製品		SD7035			削出し	(30.2)	1.45	1		下端D類
392	450	棒状木製品	SD7036=SD8038	SD7036			追柁目	(32.8)	3.8	2.1		上端1類
393	463	棒状木製品		SD8038		SQ8021	板目I	(20.7)	1.3	0.8		
397	518	棒状木製品		SD8038			斜め	66.9	4.1	3		1-B類
399	566	棒状木製品		SD7038			板目I	17	1.3	0.7		5-D類
399	567	棒状木製品		SD7038			削出し	(40.0)	1.9	1.9	サラ	先端2類
400	588	棒状木製品	SD7039=SD8040	SD8040			柁目	(23.0)	1.5	1.3		下端A類
400	589	棒状木製品		SD8040			斜め	23.1	1.7	1.4		2-B類
402	606	棒状木製品		SD7042			削出し	14.1	1.1	0.8		2-A類
402	607	棒状木製品		SD7042			板目I	(25.1)	1.25	0.65		下端D類
403	621	棒状木製品	SD7044=SD7047 ・SX7034	SD7047	上層		追柁目	15.3	1.05	0.65		4-A類
403	637	棒状木製品	SD7045=SD8032	SD7045		SQ8008	追柁目	26.3	3.2	1.8		2-B類
406 80	678	棒状木製品		SD8032	45層		削出し	34.6	2.2	2.1	サラ	2-A類、糸擦れ状の痕跡
406	688	棒状木製品		SD8032	44層		追柁目	(20.2)	1.7	0.9		上端1類
406	689	棒状木製品		SD8032	44層		板目I	(39.8)	3	2		上端1類
406	690	棒状木製品		SD8032	44層		削出し	32.9	1.8	1.65	サラ	2-A類
411	779	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8016	柁目	39.4	2.7	1.8		2-B類
412	797	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	板目I	21.6	2.02	1.3		下端A類、上半部表裏扁平に削る
412	798	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	板目I	27.3	1.35	1.1	サラ	4-A類
412	799	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	追柁目	(29.4)	2.7	1.4	サラ	上端1類
412	800	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	柁目	(73.8)	2.65	2.1		上端2類
412	801	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	柁目	(38.1)	1.8	0.9		下端D類
413	802	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	追柁目	(114)	3.36	1.58		下端A類
413	803	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	板目I	106	2.8	2.4	サラ	5-A類
413	804	棒状木製品		SD8032	15, 16層	SQ8033	板目I	89.4	2.7	1		5-A類
414	821	棒状木製品	SD7046	SD7046			板目I	(48.2)	1.8	1.5		上端4類
415	839	棒状木製品	=SD8044 3層	SD8044	3層		削出し	15.4	1.8	1.3		1-A類
417	863	棒状木製品		SD7049			削出し	29.1	1.34	1.15	サラ	2-A類
417	866	棒状木製品		SD7051			削出し	(31.5)	2.25	1.6		上端2類
419	887	棒状木製品	SD7065=SD7067 =SD8044 4, 5層 =SD8049	SD7067			削出し	(23.2)	3.1	2.5		上端1類
421	913	棒状木製品		SD7070			板目I	(22.5)	1.8	1.5		上端2類
421 84	914	棒状木製品		SD7070			板目II	28	1.95	1.2		2-A類、上半部表裏平坦に削る

その他(串状木製品)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
369 72	21	串状木製品	SD7025=SD8027	SD8027	4層		斜め	28.3	0.5	0.3		馬形20に装着する
374	133	串状木製品		SD7030		SQ8038	板目I	(4.5)	1	0.2		
374	134	串状木製品		SD7030		SQ8038	板目I	(5.2)	0.95	0.3		
381	259	串状木製品	SD7032=	SD8028	4層	SQ8041	柁目	(12.8)	0.8	0.5		
381	260	串状木製品	SD8028 3, 4, 5層	SD8028	4層	SQ8041	板目I	4.3	0.5	0.4		
381	261	串状木製品		SD8028	4層	SQ8041	柁目	30.5	0.6	0.3		
382	271	串状木製品		SD8028	4層	SQ8042	板目I	(15.0)	0.7	0.6		有頭状

表48- (16) 屋代遺跡群木製品一覧表

その他(穿孔板)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
404	657	穿孔板	SD7045=SD8032	SD7045			板目 I	20.5	2.8	0.4	サテ	穿孔2カ所、一方に軸が残存する
404	659	穿孔板		SD7045			板目 I	6.2	0.9	0.7		
404	660	穿孔板		SD7045			板目 I	6.1	0.9	0.7		
415	836	穿孔板	SD7046=SD8044 3層	SD8044	3層		板目 II	45	3.6	0.5	モミ属	
420	901	穿孔板	SD7065=SD7067 =SD8044 4, 5層 =SD8049	SD8049		SQ8004	板目 I (28.2)	4.1	0.4		モミ属	
421	927	穿孔板		SD8035	1層	SQ8050	追証目	12.7	2.6	0.4	サテ	
421	928	穿孔板		SD8035	1層	SQ8050	追証目	(10.9)	2.9	0.23		
422	938	穿孔板		SD8039			板目 I	29	3.6	0.3	サテ	
423	948	穿孔板		SD8041	3層		証目	(12.9)	3.7	0.6	サテ	
423	960	穿孔板		SD8041			板目 II	(16.4)	3.4	0.5		

その他(雑具)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴	
372	82	雑具	SD7028=SD8028 2層	SD8028	2層		板目 II (8.15)	3.1	0.6			一端に並列穿孔、他端欠損、浮子か	
372 73	88	雑具		SD8028	1層		証目	4.5	8.9	1.4		V字状を呈する、中央部に並列穿孔あり	
372 73	93	雑具		SD7030	下層		板目 II	8.2	3.1	0.6			
372 73	94	雑具		SD7030	下層		板目 II	21.6	2.7	1.8	モミ属	1側面に階段状に切り欠く	
373 73	118	雑具		SD7030	中層		板目 I	24.7	6.4	1.3	サテ	長軸両端に並列して穿孔を施す、浮子か	
373 73	119	雑具		SD7030	中層		証目	18.8	3.2	0.4	サテ	長軸両端に並列して穿孔を施す、浮子か	
373 73	120	雑具		SD7030			板目 I	13.4	3.3	0.8	サテ		
375	152	雑具		SD7030			板目 I	16.9	2.2	1.6	サテ	1側面に階段状の切り欠き	
375 74	165	雑具		SD7031			板目 I	14.9	3.15	2.8	サテ	把手のような形状をもつ	
378	216	雑具	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD7032			証目	29.4	9.2	0.5	サテ	長軸両端に穿孔を施す	
380	234	雑具		SD7032			板目 II	3.7	3.4	0.5			
380 75	235	雑具		SD7032			追証目	12.6	2.7	0.9	サテ	杓子のような形状をもつ	
383	296	雑具		SD8028	4層		証目	20	1.8	0.8	サテ		
388	382	雑具		SD8028			証目 (10.3)	3.1	0.44			一端に並列穿孔、浮子か	
388	383	雑具		SD8028			追証目 (9.3)	2.8	0.6			一端に並列穿孔、浮子か	
389 76	404	雑具		SD7035			板目 II (16.7)	(1.9)	0.6			1側面に鋸歯状の刻み	
390 77	416	雑具		SD7035			板目 II	30.5	4.2	1.4	サテ	矢羽状を呈する、棒状部1側面に小孔が配列	
390 77	420	雑具		SD7035			証目 (13.2)	1.3	1.2			木針のような形状をもつ	
390	421	雑具		SD7035			追証目	8.1	1.15	0.85			木針のような形状をもつ
390	422	雑具		SD7035			斜め (9.75)	4.5	1.03		サテ		
397 79	517	雑具	SD7036=SD8038	SD8038			削出し	39.9	5.1	2.5	クスノ節		
397 79	519	雑具		SD8038			証目 (15.5)	4.3	0.7		サテ	杓子のような形状をもつ	
400 79	577	雑具	SD7039=SD8040	SD8040			斜め	18.2	5.9	5.2	サテ		
402 80	602	雑具		SD7042			板目 II	10.4	4.75	0.84	サテ		
405	672	雑具	SD7045=SD8032	SD8032	45層		証目 (28.0)	3.2	2.4		サテ	1側面に等間隔の切り欠き	
406	676	雑具		SD8032	45層		証目 (18.5)	3.1	1		サテ		
414 82	819	雑具	SD7046	SD7046			証目	15.7	3.9	2.25	ケヤ	杓子のような形状をもつ	
415	838	雑具	=SD8044 3層	SD8044	3層		証目 (14.0)	(4.0)	0.3			篋のような形状をもつ	
416	850	雑具	SD7048=SD7057 =SD8044 1, 2層	SD7057			証目 (13.8)	3	0.6		サテ	一端に並列穿孔、浮子か	
424 85	974	雑具		SD8043	2, 3層		追証目	18.8	5.1	2.3	サテ	楔のような形状をもつ	

その他(部材)

図版 PL	報告 番号	名称	⑥区遺構群	出土地点	層位	SQ	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
369	27	部材	SD7025=SD8027	SD8027	4層		証目	16.8	(6.8)	0.9		釘孔状の小孔のある板材、木釘状のものが残存
379	221	部材	SD7032=SD8028 3, 4, 5層	SD7032			証目 (17.9)	4	3			柄孔のある角材
379 74	229	部材		SD7032			証目	10	1.75	1.45	サテ	柄孔のある角材
381 75	251	部材		SD8028	5層		削出し (38.2)	4	2.8		サテ節	柄状の削りのある角材、馬鍔
381	252	部材		SD8028	5層		証目 (56.2)	5.8	3.8			柄孔のある角材
381	255	部材		SD8028	5層		追証目 (36.0)	4.7	1.2			釘孔状の小孔のある板材
383 75	295	部材		SD8028	4層		板目 I (19.6)	(5.9)	0.8		サテ	釘孔状の小孔が縦に配列
384	303	部材		SD8028	4層		斜め	32.2	9.7	1.6	サテ	柄孔のある板材
385 76	330	部材		SD8028	3層	SQ8044	証目	13.3	1.5	1.1	サテ	組み合わせ状人形足か
387	362	部材		SD8028	3層		板目 I	10.8	3.8	0.6	サテ	釘孔状の小孔がある板材
387	368	部材		SD8028	3層		削出し (21.3)	2.3	1.6			丸木状の部材
388	385	部材		SD8028			芯持ち	18.5	8.6	6.2	モミ属	柄孔のある角材
390 77	423	部材		SD7035			証目 (11.8)	4.15	0.5		サテ	柄のある板材、扉板(ミニチュア)のような形状
391	438	部材	SD7036=SD8038	SD7036		SQ8028	板目 I (9.8)	3	0.6			人形足か、全容不明
392 77	451	部材		SD7036			板目 I (75.0)	(8.3)	(0.8)		サテ	釘孔状の小孔がある板材

表49-(3) 屋代遺跡群削屑、切屑一覧表

写真 図版	報告 番号	名称	㊦区遺構群	出土地点	層位	木目	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材精度	分類	観察	樹種
94	1112	削屑	SD7045=SD8032	SD7045		板目Ⅰ	3.9	1.9	0.8	B	2A		アサダ
94	1113	削屑		SD7045		追榫目	10.6	4.6	1.7	C	2B		モミ属
94	1114	切屑		SD7045		板目Ⅱ	10.2	18.8	4.1	C	B-B		サワラ
95	1115	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅰ	8.8	1.5	0.5	B	1		ヒノキ
95	1116	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	斜め	8.4	2.2	0.5	B	1		ヒノキ
95	1117	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅱ	6.4	3.7	0.5	C	1		サワラ
95	1118	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	斜め	8.7	2.6	0.55	C	1		サワラ
95	1119	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅱ	8.8	4.7	0.5	C	1		サワラ
95	1120	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅱ	10	3.9	0.7	C	1	刃端痕を残す	サワラ
95	1121	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅰ	8.3	2.4	0.45	C	1		サワラ
95	1122	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	斜め	3.7	3	0.4	C	1		サワラ
95	1123	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	斜め	4.5	2.6	0.5	C	1		サワラ
95	1124	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅱ	7.3	2.9	0.8	C	1		サワラ
95	1125	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅱ	7.3	2.7	0.4	C	1	刃先痕	サワラ
95	1126	削屑		SD8032 (SQ8006)	44層	板目Ⅰ	6.8	1.7	0.9	C	1		サワラ
95	1127	切屑		SD8032	44層	追榫目	4.6	12.2	2.6	B	A-A	板材の切断	ケヤキ
95	1128	切屑		SD8032 (SQ8017)	15, 16層	板目Ⅱ	36.1	4.5	1.1	C		祭祀具残材か?	
95	1129	切屑		SD8032 (SQ8017)	15, 16層	榫目	25.4	2.3	0.6	C		祭祀具加工材片?	
95	1130	削屑		SD8032	15, 16層	板目Ⅱ	12.4	4.5	0.8	B	1	刃端痕を残す、木裏からの削り	サワラ
95	1131	削屑		SD7046= SD8044 3層	SD8044		追榫目	15.5	6.3	0.75	B	1	刃先痕を多数残す
96	1132	削屑	SD8044			榫目	3.3	3.3	0.5	B	2A		クスギ 節
96	1133	削屑	SD8044			斜め	7.9	3.6	1.9	B	1		ニトコ
96	1134	削屑	SD7051		板目Ⅱ	7.2	2.8	0.7	C	1		モミ属	
95	1135	切屑	SD7062・SX7037	SX7037		板目Ⅰ	14	14	9.8	C	B-C		トネリコ属
96	1136	削屑	SD7065=SD7067= SD8044 4, 5層 =SD8049	SD7065		板目Ⅰ	7.5	4.3	1.4	C	1	芯持ち材	ケヤキ
96	1137	削屑		SD7065		追榫目	6.8	2.7	0.35	A	1		モミ属
96	1138	削屑		SD7065		板目Ⅱ	14	3.7	0.7	D	1		モミ属
96	1139	削屑		SD8049		追榫目	5.3	5.1	0.5	C	2A		コナラ節
96	1140	切屑		SD8049		芯持ち	32.2	20	14.2	D	B-B		カエデ属
96	1141	切屑		SD8049		芯持ち	46		14.8	D	B-C		カエデ属
97	1142	削屑		SD7070		榫目	4.1	4	0.6	C	1		サワラ属
97	1143	切屑	SD7070		板目Ⅱ	18	0.9	3.4	D	B-B		アサダ	
97	1144	切屑	SD8039		榫目	40.5	15.5	3.3	A	B-C		ク	
97	1145	削屑	SD8041	5層	板目Ⅰ	7.7	3.1	0.8	B	1		ク	
97	1146	切屑	SD8041	5層	榫目	6.2	13	3.15	B	C-C	板材の切断	ケヤキ	
97	1147	切屑	SD8041		割1/2	19.3	12.4	8	D	C-C		ケヤキ	
98	1148	削屑	SD8043		榫目	12.3	5.6	1.7	C	2A		カキ	
98	1149	削屑	SD8043		板目Ⅱ	8	4.3	1.4	C	2A		カエデ属	
97	1150	切屑	SX7035		板材	49.5	14.5	4.6	C	B-B		サワラ	
98	1151	切屑		第4水田 対応層		榫目	26.2	12.1	6	C	B-C		モミ属
98	1152	切屑		第4水田 対応層		割1/3	50.5	13.5	8	D	C-C		コナラ節
98	1153	切屑		第4水田 対応層		芯持ち	37	21	17.3	D	C-C	炭化部あり、加工による窪み、あるいは礎板か	ヤマグリ

表50 屋代遺跡群⑥区自然木樹種一覧

層位	⑥区遺構群	出土地点	層	樹種	備考
第5水田対応層 古段階	SD7065=SD7067 =SD8044 4,5層=SD8049	SD8044	下層	ニトコ(2)	
		SD8049		クリ(2)、カエデ [°] 属、ケンホ [°] ナシ属	
	SD7045=SD8032	SD8032	44層	コナラ属コナラ亜属コナラ節	古段階～新段階
		SX7035		モミ	
第5水田対応層 新段階		SD7042		カヤ	
	SD7045=SD8032	SD7045		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
		SD8032	39層	広葉樹	
	SD7046=SD8044 3層	SD7046		コナラ属コナラ亜属コナラ節、カヤ	
		SD8044	3層	サワラ	
	SD7048=SD7057 =SD8044 1,2層	SD7057		コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節	
		SD7049		コナラ属コナラ亜属コナラ節、クヌギ [°] 節	
		SD7051		コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節、つる植物	
		SD7058		コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節	
	SD7062・SX7037	SD7062		カマス [°] 属	
		SX7037		クリ、ケヤキ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、カエデ [°] 属	
SD8039			キハダ [°]		
第4水田対応層		SA7002		ヤナギ [°] 属(2)	
		SD7035		コナラ属コナラ亜属コナラ節(2)	
	SD7036=SD8038	SD7036		サワラ属、コナラ属コナラ亜属コナラ節、サワラ、散孔材、樹皮	
		SD7037		コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節	
		SD7038		ヤナギ [°] 属、オニグルミ	
	SD7039=SD8040	SD8040		ハシバキ属ハシバキ亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ節、カヤ	
	SD7044=SD7047・SX7034	SX7034		コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節	
		遺構外		ヤナギ [°] 属、ケヤキ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クヌギ [°] 節、モミ属、散孔材	
第3水田対応層		SA8002		カヤ、ヤナギ [°] 属(2)	ヤナギ [°] 属は立木
		SD7030	中層	アオキ、クリ、コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節	
		SD7031		ウツギ [°] 属、コナラ属コナラ亜属コナラ節、ムラサキキバ [°] 属、ヤナギ [°] 属、ヤマウルシ	
	SD7032=SD8028 3,4,5層	SD7032		ウツギ [°] 属、カエデ [°] 属、カヤ、ケヤキ、モミ属、広葉樹	
		SD8028	3～5層	ウツギ [°] 属、ケヤキ、ヤナギ [°] 属、針葉樹	
SD8028		3層	クリ、ヤナギ [°] 属、広葉樹、樹皮		
	SD8028	5層	ウツギ [°] 属、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クヌギ [°] 節		
第3水田対応層 上層	SD7028=SD8028 2層	SD7028		ヤナギ [°] 属、散孔材	
		SD8028	2層	カヤ	
第2水田対応層		SA8001		広葉樹	立木
	SD7025=SD8027	SD7025		カエデ [°] 属、ヤナギ [°] 属	
		SD8027		クリ	
	SD7026=SD8029	SD7026		イボタビ [°] 属、カエデ [°] 属、コナラ属コナラ亜属クヌギ [°] 節、コナラ節、モミ、針葉樹、樹皮	
		SD8029		ヤナギ [°] 属	
	SD7043・SD7050	SD7050		ヤナギ [°] 属	
		SK8019		ヤナギ [°] 属	立木
SK8021			ヤナギ [°] 属	立木	

第8節 骨角器・加工痕のある骨

屋代遺跡群では特に⑥区において獣骨が多量に出土している。出土状況については第2章第5節で示したように、ウマ、ウシを主として各部位が一括で廃棄された状態を示す場合もある。これに加え、獣骨を何らかの製品状に加工したもの、製品としての形状はもたないが、明らかに道具による加工痕があるものが多くみられる。本節ではこのような骨角器および加工痕がみられる骨に関しての解説を行う。なお、骨角器は実測図版と写真を掲載したが、加工痕のある骨については写真図版のみ掲載した。

1 骨角器 (図版428・429、PL99)

(1) ト骨 (1、5、7～11、14～16、20、21、23) 13点が確認された。

形状 素材の獣骨の表面を剥離させ、内側に長方形の鑽を削る。全て神沢勇一氏によるト骨の分類の内、第V型式に該当する(神沢1976)。形状をみると、①剥離後に側面を削り、縦に細長い形にしたもの(1・5・7・8・10・11・20・21・23)と②やや不整形のもの(9・14・16)の違いがある。②の内9と14は鑽を削る前にその面を横方向に刃物で削った痕跡が明瞭にみられる。15は側面が欠損しているが①に属するものと思われる。

鑽の配列 両者には鑽の削り方にも相違点がある。①は8・11・21に顕著にみられるように、鑽が長軸方向に1列に並ぶ。欠損しているが、5・10・15・20・23も同様であったものと思われる。ただ、1は鑽のある面右側の欠損の状況から、配列については不明で、7は左側に偏る点で他とは若干異なる。

②は9・14が段違いで2列状に削られていたことがわかる。また、配列の方向も長軸に対して斜めになる点が特徴的である。9と14は同じSD8032の出土で両者は接合する(PL99)。よって鑽が削られたのが、分割される以前か以後かについて明確には判断できない。ただ、接合させた場合、鑽の配列の角度がほぼ一致する点から、鑽を削った跡に分割された可能性がある。16は欠損部が多く、2列であったかどうかはわからないが、右側ぎりぎりに側面のカーブに合わせて鑽を削っているのが特徴的である。

焼灼痕 鑽の内面にみられる小孔は焼灼によるものといわれる。ト占は主として鑽の裏側の面の状況によって行うと考えられる。鑽の内面は小孔が貫通している場合と、亀裂のみの場合、さらに小孔も亀裂も存在しない場合がある。亀裂もない部分には、わずかに特に傷がついているものもあるが、全く手が加えられた痕跡のみられない部分もある。

時期と出土状況 1のみ竪穴住居SB5090の出土で、1期に属する。他は⑥区の出土で第5水田対応層古段階および新段階下層の出土で、1期前半～1期後半に属する。以上のように屋代遺跡群のト骨は1期(7世紀代)にほぼ限られる。出土状況で特に注目されるのは、9・10・14で、それぞれ祭祀に関わると考えられるSD8032の湧水点から出土した(図版169)。11もP1周辺から出土している。さらに、前述のように9と14は接合することから、分割後それぞれP2とSX7036に入れられたことが分かる。他に7・8も出土地点は不明だが同じ湧水溝からの出土であり、5が出土したSD7042も木樋による導水型祭祀施設である。このことから屋代遺跡群でのト骨によるト占は、7世紀代の湧水に関わる祭祀行為と密接なつながりがあることがわかる。

V類に属するト骨は屋代遺跡群と同じ更埴市雨宮にある生仁遺跡でも4点出土している(更埴市教育委員会1969)。内2点は古墳時代と奈良～平安時代の住居跡から出土し、2点は古墳時代の祭祀遺構から出土している。

獣骨の種類 ト骨に使用されている種は不明のものが多いが、1・10・11はウシである。また不明分を含

め①に含まれるト骨は肋骨が使用されている。これに対し②は他の部位で、おそらく肩胛骨と思われる。形状や鑽の配列の相違はこのように使用する部位によって制約されたのか、あるいはあえて違う部位を選択して使い分けたのか注目される点である。

(2) 紡錘車 (2) 5期前後に属する住居SB6081から出土した。部分ではあるが、わずかに穿孔の痕跡があり、鹿角を利用した紡錘車状のものと考えられる。鹿角製紡錘車は5世紀代の例が丸子町鳥羽洞窟跡に3点みられる(永峯光一1982)。

(3) 篋 (4) 湧水溝SD7030中層の出土で2期に属する。先端にやや丸みをもたせ、鋭利に加工してある。もう一端には2カ所穿孔が施されている。表面全体が滑らかに仕上げられており、かなりの精製品といえる。篋状を呈するが、穿孔は垂飾のためのものかもしれない。種は不明だが、肋骨を使用している。

(4) 鏃 (24、25) 両者とも有茎鏃である。24は鏃身が円錐形を呈する。表面を滑らかに仕上げ、先端が特に丹念に削られている。茎先端に黒い付着物が認められ、矢柄に装着する際に塗布されたものと考えられる。SD8049の出土で、1期前半に属する。25は鏃身が長く扁平である。先端を鋭利に尖らせるとともに、両側面を削り、両刃の状態に加工してある。表裏ともに長軸方向に丁寧に削っている。茎に至る部分で両側面を対称的に抉っているため、関が明瞭ではない。鏃身と茎の境界部に黒い付着物が残存し、24と同じように矢柄に装着する際塗布されたものと考えられる。種はシカで、中手骨あるいは中足骨を利用しているようだ。⑥区自然堤防傾斜面の地山を立ち上がりとするSD8048を埋没させた砂層中からの出土である。SD8048最下層は古墳Ⅷ期新相に属するが(長野県埋蔵文化財センター1998)、それが埋没し、SD8041が形成される間の遺物であり、古墳Ⅷ期新相以降、古代1期前半以前(主として古代0期)に属するものと思われる。

(5) その他 3は薄く剝離させた短冊状のもので、1端を台形状に切り、もう1端もやや山形にカットされている。これに近い形状は木製品にもみられ、あるいは齋申のような祭祀的な道具の一種かもしれない。SD7030中層の出土で2期に属する。

6は断面が半円形を呈する。1端を剣先状に尖らせているがもう1端は欠損する。中程に小孔があるが、剣先部に向かって斜めに穿孔されている。あるいは柄などに装着するための孔か。SD7044の出土で第4水田対応層(1期末~2期初頭)に属する。

12は小型品で、1端が圭頭、もう1端が剣先状に加工され、齋申のような形状をもつ。1面のみ丁寧に調整され、断面形がややカマボコ状になる。中央に穿孔があり、その内面と特に未調整面に黒い付着物が残る。穿孔部に細い棒状のもの差し込んだようだが、未調整面にも付着物が残るため、別なものをそこに組み合わせて装着したのかもしれない。13は剝片の1端を剣先状に尖らす。欠損部も側面の削りの角度からみて同様の形状をしていたと考えられる。この2点はSD8032の最下層(45層)の湧水坑付近からの出土で、ト骨同様祭祀に関わるものである可能性が高い。

17は薄い剝片であるが、表面が平滑に仕上げられ、1端を曲線状に抉っている。18は種は不明だが、四肢骨をカットし、中程から斜めに切り落としている。19は特に欠損部はみあたらず、1端を串先状に尖らす。これらは湧水溝であるSD7062・SX7037の出土で、やはり湧水に関わる祭祀とつながりがありそうだ。時期は1期後半に属する。

22は小型品だが、1面を丁寧に削り調整し、1端を串先状に尖らす。ト骨20、21と同じSD7067の出土

で、1期前半に属する。

2 加工痕のある骨 (PL100)

ここに含むのは、獣骨を切断したり剥離させ、両端をカットするなど明瞭な加工の痕跡が残るものである。種のほとんどは不明であるが、27・31・46・49・51は鹿角をカットしたものである。また38・62もシカの骨である。34・37・44・59・69はウシであることが判明している。やや特殊なものとしては、小穿孔のある30と、表面を縦方向に削り調整した56があげられる。これらを含め形状に統一性はなく、製品と考えられるものは含まれない。

骨角器と比較すると住居跡出土のもの(26~33)が目立つが、自然堤防南端の⑤区に限られる^(註)。これら以外は⑥区での出土である。特にSD8032最下層の湧水坑付近で出土したものが多く(43~55)。この内45・46はSX7036、47・48はP5で確認され、ト骨同様湧水坑内に入れられていたことがわかる。62~65はSX7037、69はSX7035の出土でやはり湧水関連の遺構である。

なお、図92の3(標本番号05090)はウシの下顎骨であるが、貫通する小孔が認められる。ある種の儀礼にかかわるものである可能性が高い。

このように多量の加工痕のある骨の存在は、獣骨を素材にした製品の加工が盛んに行われていたことを示す。それは、骨角製品が多数出土していること、また⑥区を中心に大量の獣骨が出土していることから窺える。ただ、26~69の骨が加工途中の剥片であるのか、未製品を含むのか、あるいはそれ自体に何らかの用途があるのかなど、多くの疑問が残される。さらに不明部分は多いが、加工の加わった骨の中に現在の段階ではシカとウシはあるがウマが検出されていない。これは獣骨として出土するウマの割合が非常に高いことと相反する。生仁遺跡でも古墳時代の住居跡や祭祀遺構からト骨以外に多くの骨角製品(V類ト骨を含む)や剥片が出土している。その全てはシカであり、獣骨として出土しているウマは1点もみられない点で共通性がある。これについて中村由克氏は「ウマやイヌは食料とはされず、埋葬されたもの、あるいは儀礼に関係したもの」と推定している(中村1969)。ウマの骨は屋代遺跡群において7世紀代を中心に湧水坑に埋納されたり、祭祀遺物集中廃棄(SQ)に伴う場合が認められ、古代において儀礼上特別な対象であったことが窺える。これが骨の加工に際しての素材の選定にも影響しているのではないだろうか。

註 28が出土したSB5054は古墳7期の住居跡だが、『弥生・古墳時代編』に掲載できなかったため、本編に載せた。

引用・参考文献

- 神沢勇一 1976年 「弥生時代、古墳時代および奈良時代のト骨、ト甲について」『駿台史学』第38号
 更埴市教育委員会 1969年 『生仁-更埴市生仁遺跡第一次(昭和43年度)緊急発掘調査報告書-』
 永峯光一 1982年 「鳥羽山洞穴遺跡」『長野県史考古資料編 全一卷(二)主要遺跡(北東信)』長野県史刊行会
 長野県埋蔵文化財センター 1998年 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)-弥生・古墳時代編』
 中村由克 1969年 「IV 生仁遺跡出土の骨角器と動物遺体」『生仁-更埴市生仁遺跡第一次(昭和43年度)緊急発掘調査報告書-』

第6章 微化石と動・植物遺体の分析

第1節 IV・V層を対象とした動・植物相の復元

IV・V層を対象とし、7世紀前半～9世紀後半の自然環境復元、水田開発などの状況、および人々の生活に利用された動植物の大型遺体や微化石に関する分析を本章にまとめた。また、縄文時代～近世に至る全時期の概略については第1章3節、『古代1』を中心とした総合的な見解は第8章9節に掲載した。

分析のねらい 第1点は、自然環境復元のためのデータを得ることにある。古代では、更埴条里遺跡A地区の泥炭層、あるいは屋代遺跡群⑥区溝・旧河道内から豊富な資料が得られた。これらによって局地的な環境とともに、この地域一帯の自然環境復元を目指した。

第2点は、耕地の開発に関する点である。7世紀には旧河道内や一部の低地主体であった耕地開発が、9世紀後半には広域にわたる条里水田・畠の整備に至っている。耕地開発の実態と第1点にあげた自然環境との対応関係解明を第2の目的とした。また、馬鍬によると思われる耕作痕が水田面に多数見られており、牛馬の質と量も注目される。

第3点は、食材リスト作成である。微化石の分析をはじめ、種実、獣（魚）骨などの同定によって、ある程度の復元が可能であろう。特に、郡家、あるいは初期国府に関連する可能性が指摘されている屋代遺跡群で、一般的集落と異なる食材があるかどうかも焦点のひとつである。

第4点は、各種の物品製作のための原材料の復元である。屋代遺跡群出土木簡には、布生産が近隣で行われていた可能性を示す木簡（10号・59号木簡）が出土している。布の原料や布生産用具の材料の解明。また、多量に出土した祭祀具を中心とした木製品、建築材の材料、さらにはこれらの材料と周辺植生との異同なども分析の目的である。

分析の方法 限られた資料を活かすため、下記の分析を行った。依頼先と文責は各項に記した。実施した分析の材料は、植物珪酸体（プラント・オパール）、花粉、珪藻、種実、樹木、昆虫、人骨・獣骨である。紙数との関係上、各分析ともデータのすべてを掲載し切れていない。個別のデータについては、長野県埋蔵文化財センターで保管している。

また、各集落の竪穴住居跡のカマド内などから採取した土壌サンプルの水洗選別、あるいは、屋代遺跡群⑥区祭祀関連遺構の微化石分析などは現在も継続中である。特に前者では、溝とは異なった組成を示しているほか、魚骨なども採取されている。これらの成果は、『総論編』に盛り込む予定である。

第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）・花粉・珪藻分析

1 古代の環境と土地利用

パリノ・サーヴェイ株式会社

田中義文・辻本崇夫

はじめに

当社では、古代の環境復元を目的として、これまで屋代遺跡群・更埴条里遺跡全地区の基本土層IV層をはじめ、屋代遺跡群⑥区の旧河道、屋代遺跡群②・③区の水田と畠について、微化石分析（珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析）を実施してきた。ここでは、主に古代の地形と土地利用状況（水田と畠）の関係や、古植生について検討したい。なお、これまで蓄積された分析結果は膨大であるため、全てを提示することは紙数の関係上難しい。そのため、分析成果の提示は必要最小限度にとどめ、代表的なものを図64～69に示した。層位的変遷などの詳細については、『総論編』でまとめたいと考えている。

(1) 更埴条里遺跡の条里水田

更埴条里遺跡は後背湿地にあたり、K地区に向かって標高が高くなり、微高地化している。IV層の標高で比較すると、A・B地区で最も低く（上面で標高354m程度）、C地区から徐々に標高が高くなり、K地区で最も高い（標高355m）。IV層の珪藻化石群集をみると、好汚濁性種や好止水性種の増加、再堆積と思われる種群の減少がある。また、VI層より下位で、微高地において検出されていた陸生珪藻A群（陸生珪藻の中でも特に耐乾性の強いもの；伊藤・堀内 1991）が減少する傾向にある。このことから、IV層が堆積した時代には、遺跡全体が富栄養な沼沢地～湿地のような状態であったと考えられる。微高地部における陸生珪藻の低下は、湿地の拡大を示唆する。

IV層の堆積時期には、窪河原遺跡で河道が形成されており、河川作用が活発になったと考えられる。また、この時期は、古代まで続くと思われる冷涼・多雨な時期（「弥生の小海退」）にあたり、周辺にはモミ属やツガ属などの温帯針葉樹林が発達したと考えられる。このような状況から、このような微高地の湿潤化は、気候変化にともなう河川作用の活発化や降水量の増加が原因とみられる。この時期には、水田がK地区を除く微高地上まで展開しているが、水路の整備などのほかに、気候の湿潤化もその原因の一つになっている可能性がある。また、このような観点に立てば、標高が低いA地区では水位が上昇して泥炭地化し、V層水田が放棄されることになったと考えられる。

IV層の花粉分析結果をみると、A～F地区では花粉化石が検出されるが、G～K地区は花粉化石がほとんど検出されない。花粉化石は、好気的環境下で分解・消失することから、G地区より微高地側では好気的環境下にさらされていた時期があったと考えられる。一方、水生植物の分布に注目すると、H地区とI地区を境として、ヨシ属の植物珪酸体組成に差があり、低地側でヨシ属が多産する傾向にある。各化石の堆積過程（いわゆるタフオノミー）の違いなどによる差もあろうが、同じIV層の水田層でも微高地側と低地側では、環境（特に水域の分布）が異なっていたと考えられる。また、イネ属の植物珪酸体の検出状況を見る限り、最も標高が低いA地区とB地区は、他の調査区よりイネ属の割合が低くなっている。これは、環境条件による生産量の違いや、耕作期間や頻度などに起因している可能性がある。これについては、考古学的所見や時代変遷等も考慮しながら、今後さらに検討したい。

一方、水田層は過去の洪水堆積物を母材として形成されているため、比較的広範囲な環境条件を反映し

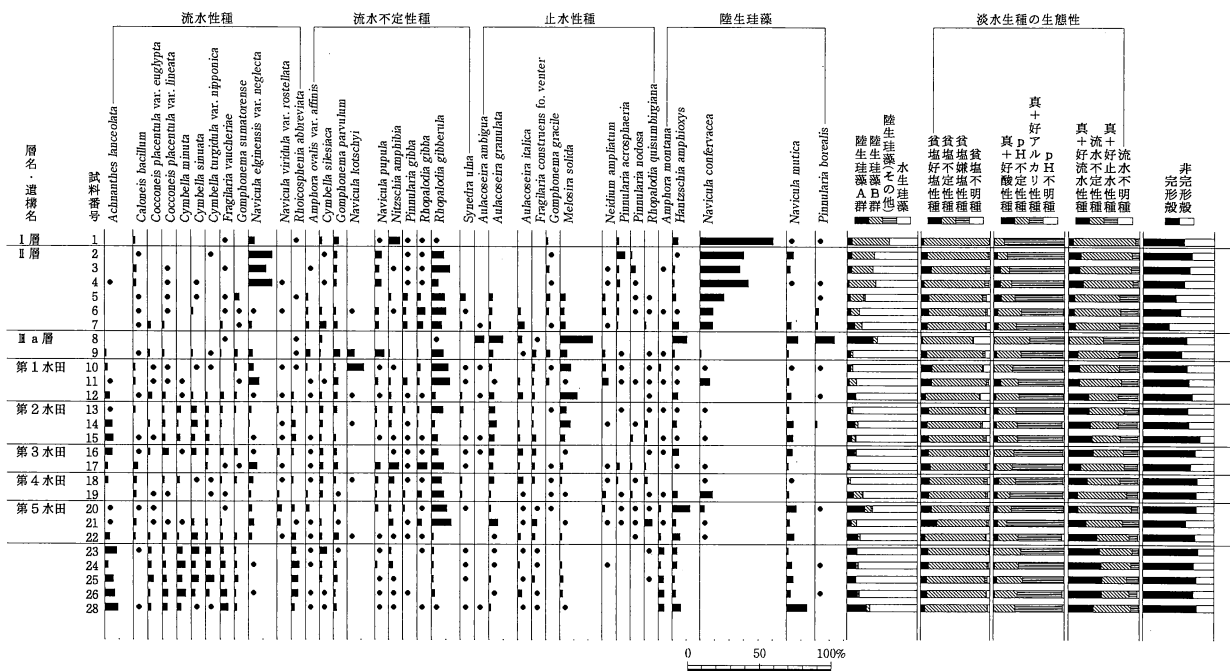


図64 屋代遺跡群⑥a区北壁の主要珪藻化石群集

海水—汽水—淡水生産産出率・各種産出率・完形穀産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

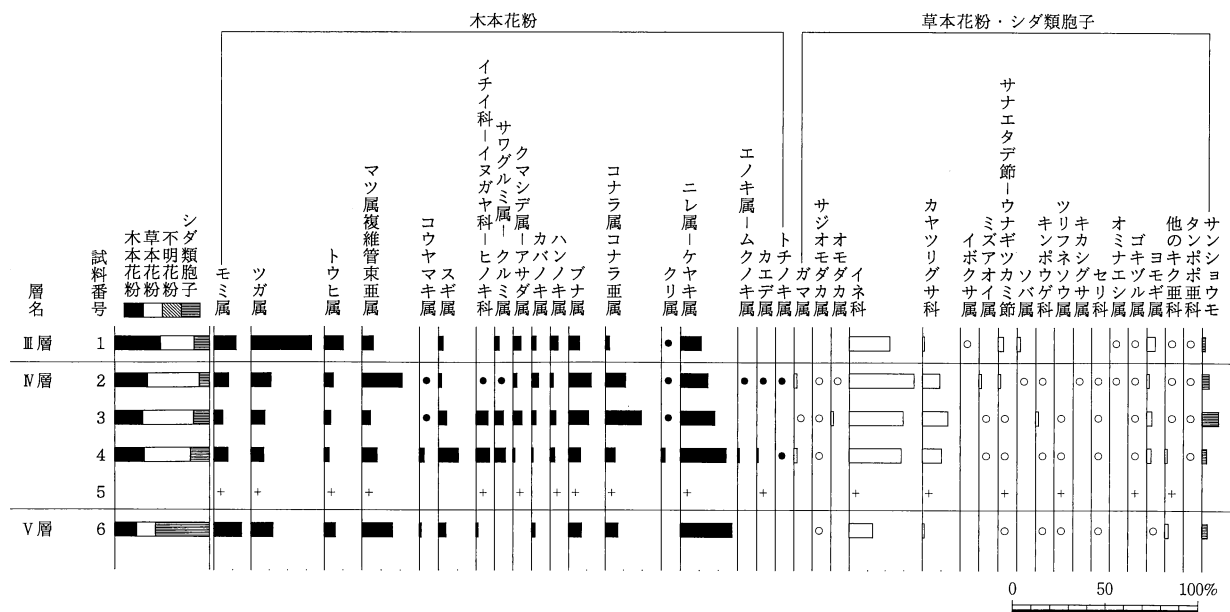


図65 更埴条里遺跡A地区西壁F地点の主要花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

ていることも考慮しなければならない。珪藻分析結果などで、種類数が多く、特徴的に多い種類もみられなかったのは、このような原因によると思われる。そのため、局地的な土地条件を反映しにくく、特に珪藻化石群集では調査地点間の変異が把握しにくかったのかもしれない。

(2) 更埴条里遺跡K地区を境とした土地利用状況の変化

更埴条里遺跡K地区は、五十里川を挟んで屋代遺跡群と接する。自然堤防I群に立地する屋代遺跡群は、現地表面で比較するとK地区と1m近くの標高差がある。またK地区よりも南側では標高が下がり、

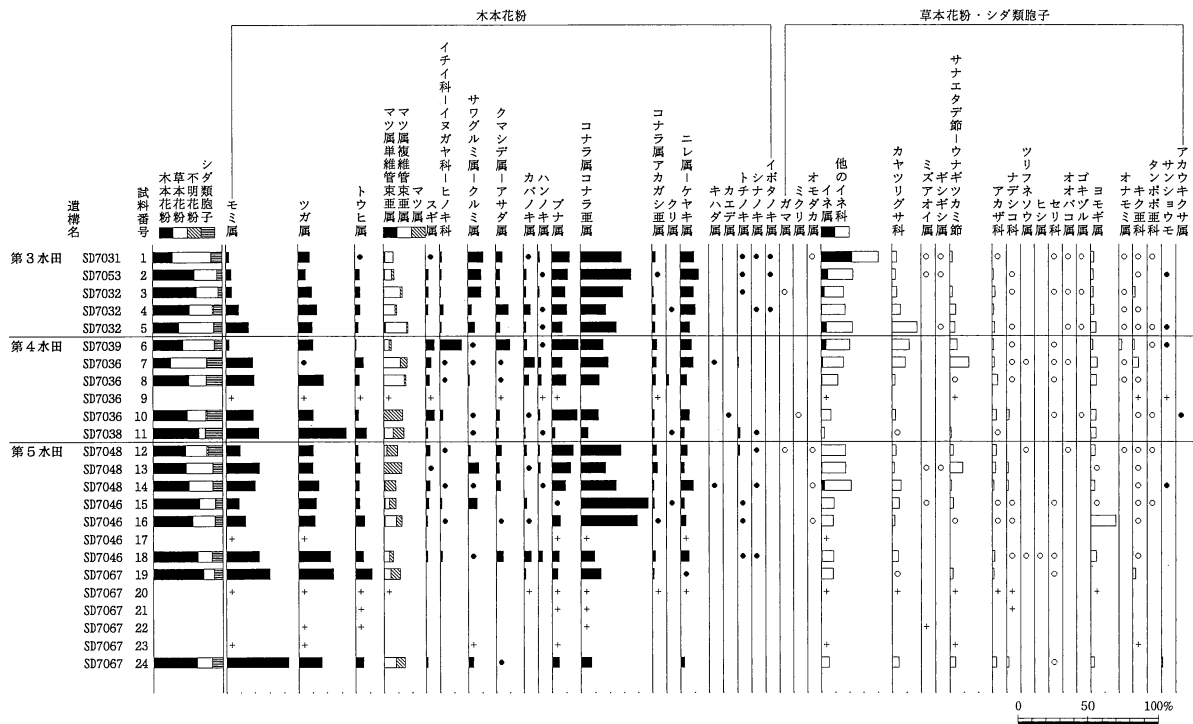


図66 屋代遺跡群⑥区旧河道内の主要花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満、+と木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

後背湿地になる。屋代遺跡群・更埴条里遺跡の土地利用状況を考える上で、K地区は境界部分にあたるため、特にその古環境について注目される。K地区の土地利用状況の変遷をみると、平安時代以前に水田として利用された形跡はなく、平安時代に集落が形成されている。また、隣接するJ地区とは平安時代の道路を隔てて区切られており、J地区側では水田域が分布している。一方、微化石分析結果をみると、花粉化石ではF地区とG地区、植物珪酸体ではH地区とI地区の間に差がみられ、それぞれ微高地側の方が乾燥していたことが示唆される。このように、古植生と水田域の分布とは必ずしも一致しないが、水路の開削などによって水が得られにくい自然堤防側にも、水田域を広げることが可能となったのであろう。なお、K地区の集落では、井戸内の微化石分析を実施したが、集落の局地的な植生を反映しておらず、壁面などから崩落した土壌中に含まれる微化石の組成を反映するものと判断された。

(3) 屋代遺跡群の条里水田

古代の屋代遺跡群の地形は、自然堤防I群上(①~⑤区)と千曲川の旧河道(⑥区)に分かれる。自然堤防I群では畠、水田などが確認されており、さらに高い場所には集落が分布する。また、千曲川の旧河道にあたる⑥区では、5枚の水田層が確認されているほか(第1水田~第5水田)、それぞれに対応した河道が検出されている。この河道内では、木製品をはじめとする多くの遺物が出土した。自然堤防上の水田に関しては、①a区、①b・c区、②i区、③a区で微化石分析を実施している。花粉化石は好気的環境下で分解されやすいため保存が悪かったが、植物珪酸体や珪藻化石は比較的多く検出された。植物珪酸体ではイネ属が高率に検出されるのが特徴で、多い試料では機動細胞珪酸体が80%を超えていた。この傾向は水田域ばかりでなく、畠や集落内の遺構でも同様であった。稲藁は、生活資材や保温材など用途が広く、畠や集落でも多用されていたらしい。珪藻分析は①区で行っているが、様々な生態性を持った珪藻化石が混在している。これは、自然堤防を構成している氾濫堆積物の影響とみられ、当時の堆積環境を反映してい

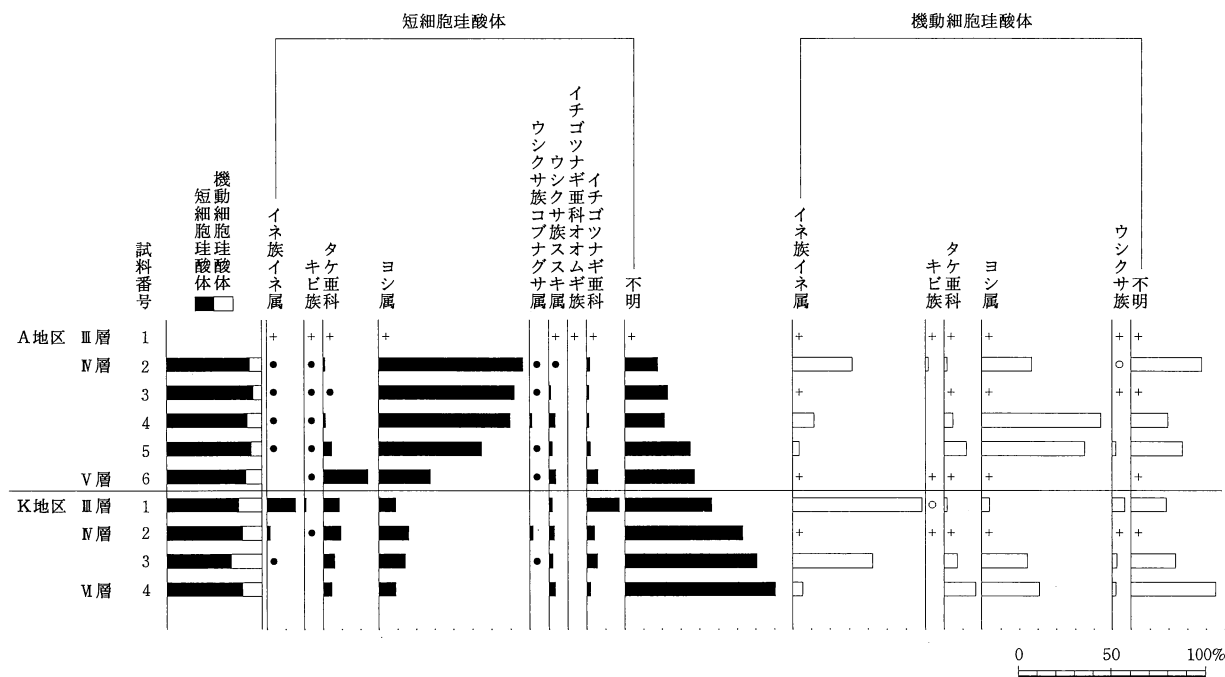


図67 更埴条里遺跡A地区西壁F地点・K地区トレンチ西壁中央の植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

ないと考えられる。しかし、水路脇の凹地で陸生珪藻が多産することや、各地点で陸生珪藻が混在していることを考慮すれば、当時の地表面は乾燥していた可能性が高い。なお、保存は悪いが、②i区井戸内(SK1204)から花粉化石が検出され、イネ科を中心とした草本主体の古植生が想定されている。このことから弥生時代には、カツラやケヤキなどの樹木が生育していたが、その後自然堤防上の林分が水田や集落などの開発によって失われ、イネ科草本を主体とする草地へと変化したことが示唆される。一方、⑥区の水田に関しては、旧河道とあわせて後述する。

(4) 屋代遺跡群②・③区の畝の状況

屋代遺跡群の畝跡では、平面的な試料採取を行い、主に植物珪酸体分析を行っている。その結果をみると、先述したように畝や集落内でもイネ属の植物珪酸体が多産した。風塵など表土の移動も考えられるが、稲藁は様々な用途で生活に利用されることから、保温用の敷藁などの用途で使われていた可能性

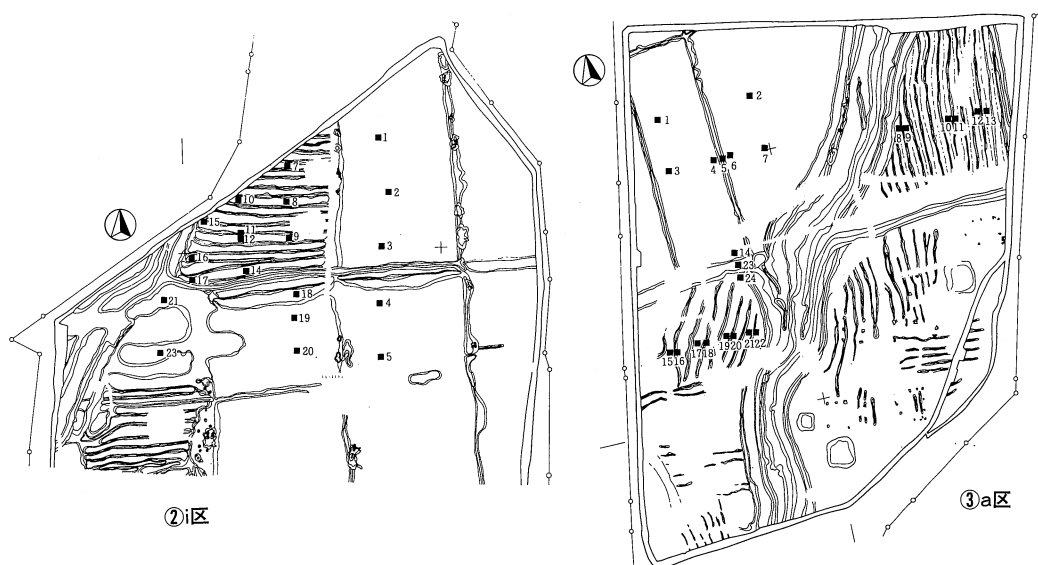


図68 屋代遺跡群②i区、③a区 IV-1層上面サンプル採取地点

がある。しかし、陸稲栽培や水田を畠に転用したなどの可能性もあり、今後の検討を要する。なお、畠は耕作による土壌の攪乱が大きく、好気的環境下にさらされるので、概して植物化石は残りにくい。このため栽培されていた作物に関する直接的な情報に乏しいが、炭化種実の種類や花粉化石群集からみると、ソバ、オオムギ、マメ類などが考えられる。また、アワやヒエなどの雑穀類に由来する可能性のある植物珪酸体が、畠から検出されている。アワはエノコログサ属に、ヒエはヒエ属に含まれるが、植物珪酸体の形

状から栽培種と野生種（イヌビエ、エノコログサなど）を区別することは難しい。そのため、栽培されていたかどうか断定できない。また、IV層ではオオムギ族の植物珪酸体が検出されている。いまのところ植物珪酸体の形状から、栽培種のオオムギと日本に自生する近縁種（カモジグサやスズメノチャヒキなど）との区別が難しい。このため、オオムギが畠で栽培されていたことが示唆されるが、断

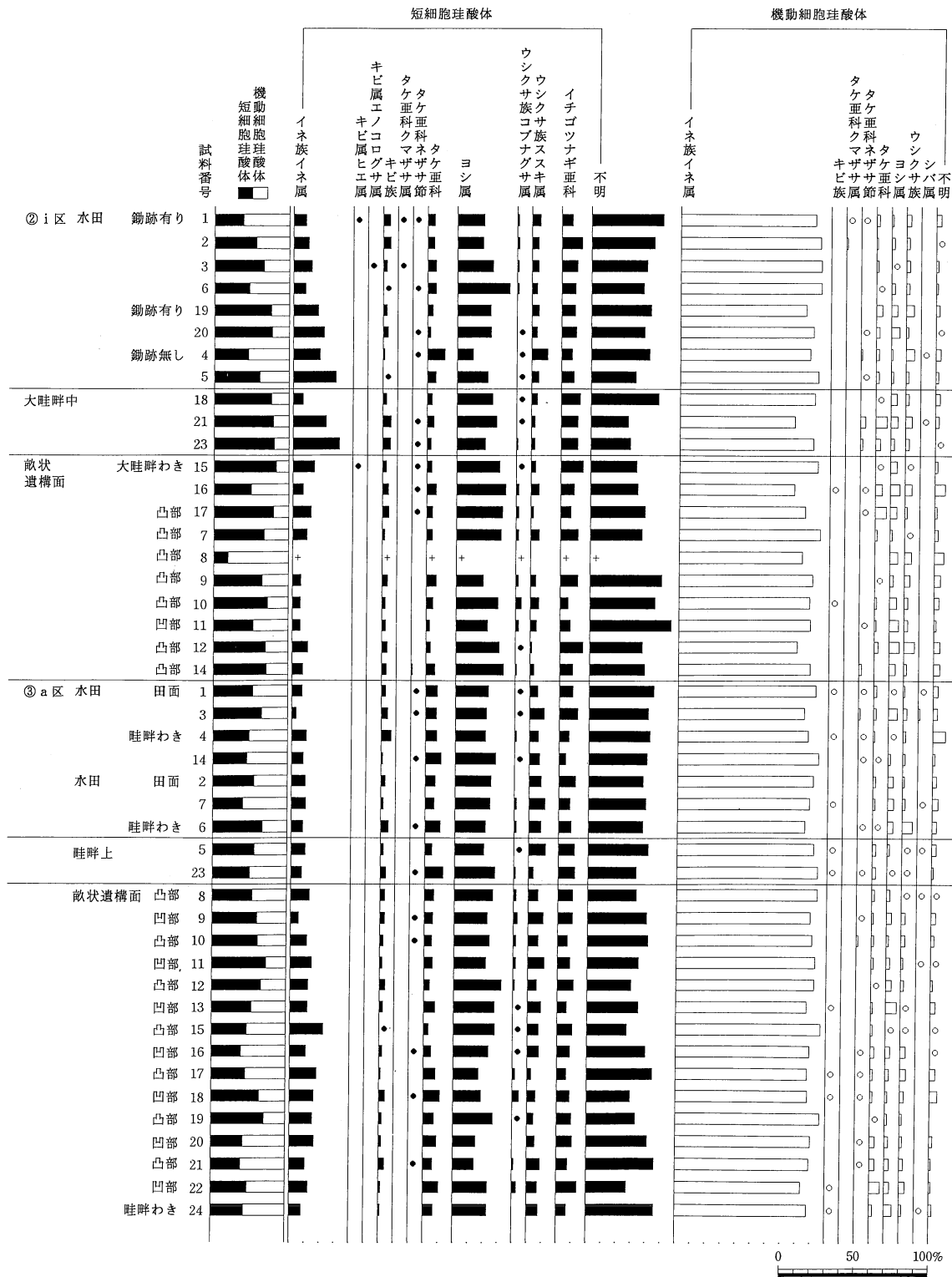


図69 屋代遺跡群② i区、③ a区（平安水田・畝状遺構面）の植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

定はできない。

(5) 屋代遺跡群⑥区水田（第1～5水田）

⑥区は千曲川旧河道にあたる。北壁では5面の水田が確認され、それぞれに対応する河道も西壁で検出されている。珪藻化石群集（図64）から、全体的に流水の影響が想定され、不安定な状況であったらしい。

そのうち、第1・4・5水田は塩類を多く含む富栄養な水域が推定されたのに対し、第2・3水田では、氾濫の影響を強く受け、碎屑物の流入が多かったことが推定されている。また、花粉化石群集では、第4・5水田でイネ科などの草本類が多く、水生植物も検出されるが、第1・2・3水田では花粉化石の検出数が少ない。さらに、植物珪酸体群集も、各水田層での検出個数が少ないが、第5水田ではやや多く、イネ属、ウシクサ族、ヨシ属などが検出されている。微化石の種類によって検出量に差があるが、これは堆積速度など堆積過程（タフォノミー）の違いによると思われる。これらのことから、旧千曲川の影響を直接受けている⑥区では、自然堤防I群上とは異なり堆積速度が速く、概して水田が廃絶するまでの耕作期間が短かったと思われる。

第1～5水田のうち、比較的長期にわたって耕作が行われていたと考えられるのは、第4・第5水田である。これらの水田は、花粉化石や植物珪酸体の検出数が多く、富栄養な水域が推定されており、このような水域で稲作が営まれ、オモダカ属、ミズアオイ属などが水田雑草として生育していた可能性がある。一方、第2・第3水田では、水田が形成されてから短時間で埋没したため、花粉化石や植物珪酸体の検出数が少なかったと考えられる。これらのことから、本地区では、洪水によって水田が埋没すると、その洪水層を母材として水田を更新することを繰り返していたらしい。その中でも、第4・第5水田は水域が比較的安定しており、水田の耕作期間は他と比べやや長かったことが示唆される。

(6) 屋代遺跡群⑥区旧河道

⑥区北壁で見られる旧河道の堆積層は、それぞれ第1～5水田に対比されている。旧河道では、花粉分析（図66）と植物珪酸体分析、および木製品の樹種同定を行っている。花粉分析結果をみると、木本類ではコナラ亜属を主とし、モミ属、ツガ属、マツ属、サワグルミークルミ属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属などが検出される。この時期、水田開発が自然堤防上まで及び、自然堤防上の高い場所には集落が形成された。当時の古植生は、弥生時代から大きな変化はなかったが、微高地上では開発が行われたため、草本主体の植生になったらしい。おそらく、自然堤防上の集落や水田の周辺ではタケ類やウシクサ属などからなる草地在り主体で、自然堤防や後背山地の林縁部ではサワグルミークルミ属、コナラ亜属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属などが生育していたと考えられる。また、水田域・低湿地・河道周辺には、ヨシ属をはじめ、オモダカ属、ミズアオイ属、ヒシ属などの水生植物が生育していたと考えられる。

一方、古代の花粉化石群集の変化として、モミ属・ツガ属など温帯針葉樹の増加が認められる。これは、「弥生の小海退」と呼ばれる一連の環境変化で、後背山地を中心にモミ属・ツガ属が増加した。なお、河道から検出された木製品でも、モミ属、サワラ、カヤなど温帯性の針葉樹が多く検出されている。木製品は、用途によって種類を選択する場合があるので、必ずしも周辺植生の利用に直接関係するとは言いえないが、ヤナギ属、アサダ、コナラ節、クヌギ節、クリ、ケヤキ、カエデ属など、河畔や林縁部を中心に生育する種類を用いた木製品も多く出土しており、花粉分析結果からみても、これらが周辺植生の利用の結果であることは明らかである。

2 更埴条里遺跡IV層・V層におけるプラント・オパール分析

—古代（条里水田と条里以前の水田）の稲作について—

株式会社 古環境研究所

松田隆二・脇元三郎

(1) 目的と方法

目的 更埴条里遺跡では、IV層において条里水田、V層において条里以前の水田が検出された。そこで、プラント・オパール分析をもとに、これらにおける稲作について検討を行った。

試料 試料は、IV層ではA地区～K地区の土層壁面の25点、A地区検出水田面の55点、J地区検出水田面の60点、K地区検出遺構面の29点の計169点、V層についてはA地区～C地区の土層壁面の5点、A地区検出水田面の49点の計54点、合計223点である。

方法 『弥生・古墳時代編』第4章第2節1に示した。なお、試料標本とプレパラートは、すべて株式会社古環境研究所に保管されている。

(2) 分析結果

同定・計数結果を表53、表54、図71に示す。機動細胞起源のプラント・オパールについて同定を行った結果、イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、サヤヌカグサ属、シバ属、ジュズダマ属、タケ亜科の各分類群が検出された。このうち、イネのプラント・オパールは全試料において検出され、IV層ではすべての調査区で非常に高い密度であり、V層でもA地区とB地区で高い密度である。その他の分類群ではヨシ属のプラント・オパールがA地区、B地区およびH地区で高い密度である。

(3) IV層期の稲作

IV層は、調査区全域に堆積しており、A地区～K地区の南部において条里型とされる水田跡が検出されている。土層壁面より採取された試料のプラント・オパール分析では、すべての地区においてイネが高い密度で検出されている。とくにB地区以北では、11,000個/g強～70,000個/g弱と極めて高い密度である。また、A地区、J地区さらにK地区では、IV層遺構検出面においてもそれぞれ55カ所、60カ所、29

表53 更埴条里遺跡IV層・V層におけるプラント・オパール分析結果 (単位 $\times 10^2$ 個/g)

分類群	調査区		A地区		B地区		C地区		D地区		E地区		F地区		G地区		H地区		I地区		J地区		K地区	
	試料	試料	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層	IV層	V層
イネ	89	75	133	60	117	9	210	131	500	375	680	315	354	243										
キビ族	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1									
ヨシ属	149	210	105	69	19	44	57	9	50	51	93	19	39	24										
ウシクサ族	1	13	0	0	0	9	0	0	20	10	30	19	17	11										
サヤヌカグサ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0										
シバ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1										
ジュズダマ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1										
タケ亜科	13	12	7	17	11	52	0	9	20	93	89	54	14	13										

表54 更埴条里遺跡IV層・V層（水田面・遺構面）におけるプラント・オパール分析結果 (単位 $\times 10^2$ 個/g)

分類群	調査区		A地区IV層水田面						A地区V層水田面						J地区IV層水田面						K地区IV層遺構面							
	南端部		中央～北側部		南端部		中央～北側部		南端部		中央～北側部		南端部		中央～北側部		南端部		中央～北側部		南端部		中央～北側部		南端部		中央～北側部	
	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	
イネ	49	76	25	98	197	33	56	104	30	78	192	8	354	621	76	256	378	83	228	391	64							
キビ族	1	9	0	1	9	0	1	9	0	0	0	0	2	19	0	1	9	0	1	10	0							
ヨシ属	82	182	9	164	654	49	226	697	76	207	547	44	39	94	9	28	56	7	19	46	8							
ウシクサ族	1	13	0	0	0	0	14	28	9	13	40	7	17	46	0	11	49	7	11	17	8							
サヤヌカグサ属	1	5	0	1	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
シバ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	1	10	0	1	10	0							
ジュズダマ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0	0	1	9	0							
タケ亜科	8	20	0	15	50	7	8	13	0	12	56	0	14	66	0	12	27	7	14	31	8							

カ所について分析を行った。その結果、各地区とも全試料よりイネが検出されている。密度の平均値はA地区で9,000個/g、J地区で35,000個/g強、K地区で24,000個/g強といずれも高い値である。その他の分類群では、ヨシ属が全域で検出され、とくにA地区～J地区では高い密

度である。以上のことから、IV層堆積時は本遺跡一帯は概ね湿地あるいはそれに近い環境であり、ほぼ全域で水田稲作が営まれていたと推定される。なお、周辺にはヨシ属が生育しており、ウシクサ族、サヤヌカグサ属、シバ属、ジュズダマ属、タケ亜科なども近傍に生育していたものと推定される。ま

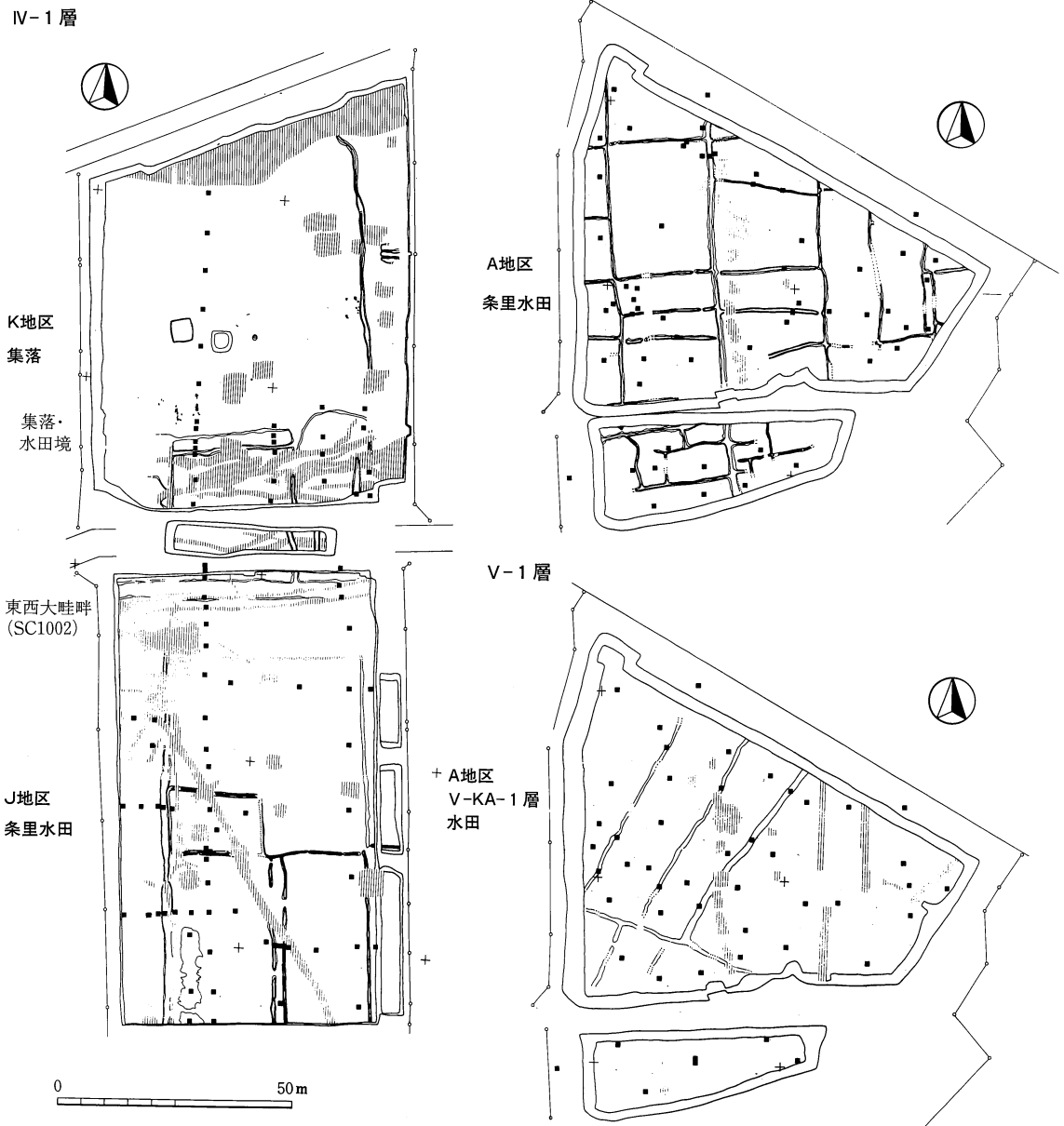


図70 更埴条里遺跡A・J・K地区IV-1層、A地区V-1層プラント・オパール分析、サンプル採取地点

た、キビ族（ヒエ属型）が部分的に認められるがいずれも低密度であることから、これらが栽培されていた可能性については積極的には支持できない。むしろ水田雑草と見るのが自然であろう。

遺構検出面におけるイネのプラント・オパールの検出状況を見ると、A地区では調査区南端の有明山の山裾側で密度が低くなる傾向が認められる。山裾の一帯では平均密度は4,900個/gであり、それ以外の地点の平均密度9,800個/gのおよそ半分となっている。このことの原因の一つとして、山裾側では他の部分に比べて稲作が行われた期間が短かったことが考えられる。なお、当該調査区では畦畔上からも試料が採取されており、これらからも水田面とほぼ同程度の密度でイネが検出されている。このことから、当時は畦の作り替えや畦塗りなどが行われていたことが想定される。J地区では、平均密度が35,400個/g、最大値は62,100個/g、最小値でも7,600個/gと全体に非常に高い値である。したがって、当該調査区で検出された水田では、長期にわたり極めて安定した稲作が営まれていたことが推察される。K地区では、水田跡とともに平安時代の集落跡が検出されている。ここでの密度の平均値は、水田跡とされる南側部分で25,000個/g強、集落域である中央～北側部分でも22,000個/g強といずれも非常に高い値である。このことから、K地区ではIV層堆積当時は南側の水田はもとより、中央～北側部分の集落域でも稲作が行われ

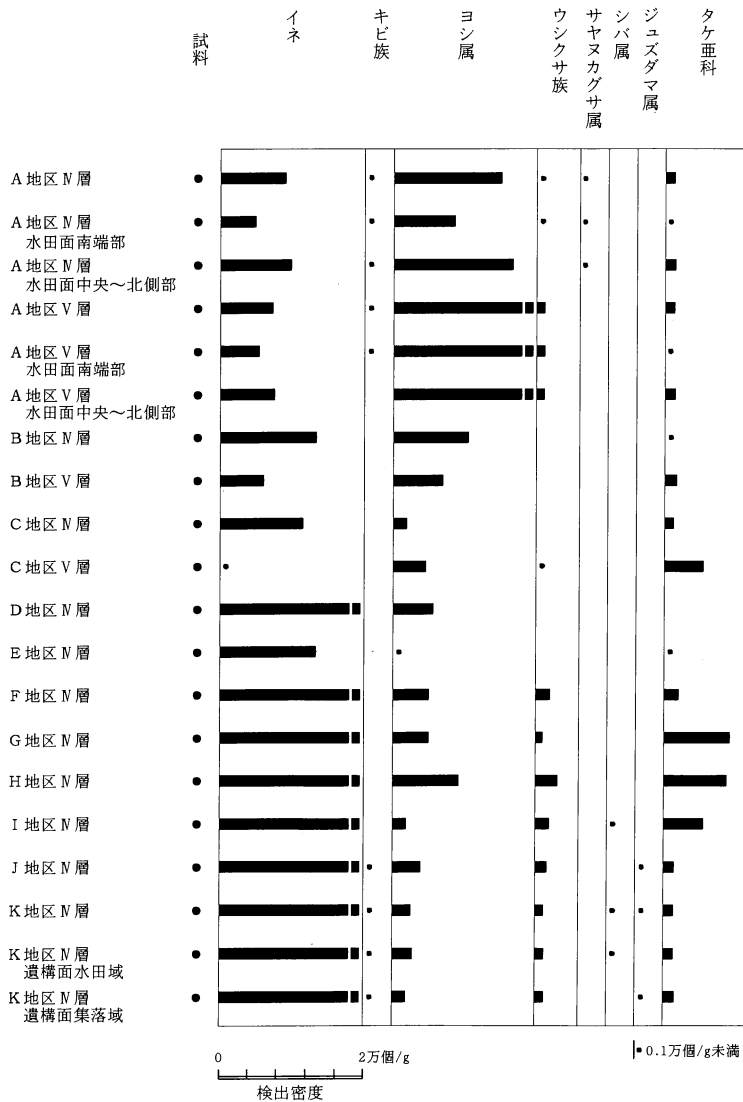


図71 IV層・V層におけるプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示

キビ族が認められるが極少量であることから、IV層と同様これらも雑草種と判断される。なお、周辺にはヨシ属が生育しておりウシクサ族やタケ亜科も近傍で見られたものと推定される。

遺構検出面におけるイネのプラント・オパールの検出状況は、調査区南端の山裾側で5,600個/g（その他では7,800個/g）とここでも若干密度が低くなる傾向が認められる。よって、IV層同様、山裾側では稲作が行われた期間が短かったことが推察される。

参考文献

杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追求のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20 p.81-92

藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p.15-29

藤原宏志 1979 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定—」『考古学と自然科学』12 p.29-41

藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17 p.73-85

ていた可能性が考えられる。なお、発掘調査では集落域からは水田跡は検出されていない。なお、この部分は微高地となっていることから、あるいは水田稲作とは異なる稲作すなわち畠稲作が行われていた可能性も考えられよう。

(4) V層期の稲作

V層は、A地区～C地区にのみ堆積し、A地区において水田跡が検出されている。土層壁面より採取された試料のプラント・オパール分析では、イネはA地区とB地区では比較的高い密度で検出されているが、C地区ではわずかな検出量をみるのみである。また、A地区の遺構検出面で採取された49試料を分析した結果、すべての試料からイネが検出された。密度は800～19,200個/gとばらつきが大きいものの、平均値は7,400個/gと高い値である。その他の分類群では、各地区ともヨシ属が高い密度である。これらのことから、V層堆積時は、A地区～C地区一帯は湿地的環境であり、A地区とB地区周辺において稲作が営まれていたものと推定される。ここでもキ

第3節 種 実

1 屋代遺跡群の古代の大型植物遺体群

国立歴史民俗博物館	辻 誠一郎
流通科学大学	南木 睦彦
国立歴史民俗博物館	住田 雅和
国立歴史民俗博物館	辻 圭子
多賀町教育委員会	福田 美和

はじめに

屋代遺跡群の北端部では7世紀前半から9世紀後半にかけての水田遺構、溝・水路、水辺の祭祀遺構が検出された。これらの遺構と直接関係する溝・水路内の埋積物からは木簡など古代社会史を解明する上で重要な遺物が多数出土するとともに、多量の動・植物遺体が産出した。これらのうち植物遺体には、食生活や祭祀と深いかかわりをもつと判断されるもの、および遺構とその周辺の植生を示すものが多数含まれていた。産した植物遺体のうちウリ科とくにヒョウタンについては藤下典之氏によって別途記述されているが、ヒョウタンの果実での産出個数や集中状態などの産状は、日本各地でこれまで知られる限りでは異例なものであるとされている。しかし、ヒョウタンに限らず、ここで対象とするモモの産状も異例であり、産出個数の多さだけでなく、産出の仕方と形状の変化には注目すべき点が見いだされた。ここでは、こうした事実に焦点を据えて、植物遺体群の性格を記述する。

ここで調査の対象としたのは、溝・水路遺構とその周辺の遺物包含層から発掘調査時に現地で取り上げられた植物遺体群、および遺物包含層から層位的に採取された水洗選別用の試料である。後者は、微小な種子・果実類の検出と層位的な産出状況の変化を検討するためのものである。

なお、産出層準と時期については、溝・水路遺構に近接する水田面の対比・編年にもとづいて設定された便宜的な時期設定に対応させて整理した。

検討された植物遺体群は基本的には長野県埋蔵文化財センターに保管されているが、一部は国立歴史民俗博物館にも標本として保管されている。

屋代遺跡群の大型植物遺体群は膨大な量と多様な内容を持つため、その検討は以下のように分担した。現地で採取された遺体と水洗選別で得られた遺体については南木睦彦・福田美和・住田雅和があたり、現地で採取された遺体のうちモモ核とオニグルミ核については辻圭子があたり、それぞれの結果を辻誠一郎がとりまとめた。

(1) 現地で採取された植物遺体群

A. 植物遺体群の内容

発掘調査時に現地で採取された植物遺体群には、2通りのものがある。一つは、モモの核とオニグルミの核である。これらは、植物遺体群のなかでは大きく目立つ上、馴染みが深いために容易に識別できるため個別に取り上げられることが多いものである。屋代遺跡群の調査では、溝・水路遺構でとりわけこれら2種が多産したため、とくに個別に取り上げられすべてに整理番号が付されて整理された。他は、おおむね肉眼で種子・果実であることが識別できるほどの大きさをもつもので、しばしばまとまりのある集団と

表55 屋代遺跡群の古代の現地採取大型植物遺体群

和名	学名	産出部位	試料番号																	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
<木本>																				
カヤ	<i>Torreya nucifera</i> (L.) Sieb. et Zucc.	種子															1			2
カヤ	<i>Torreya nucifera</i> (L.) Sieb. et Zucc.	葉																		
イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight) K. Koch.	種子												2						
モミ属	<i>Abies</i>	果苞																		
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> Koehne	毬果												2			1	1		
サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> (Sieb. et Zucc) Endl.	葉																		
オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核																		
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	果苞																		
ハンバミ属	<i>Corylus</i>	果実																1		
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果実																5		
ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.)Planchon	種子																		
ホオノキ	<i>Magnolia obovata</i> Thunb.	種子																		
クスノキ科	Lauraceae	種子																		
ナン亜科	Rosaceae subfam. Maloideae	種子																		
モモ	<i>Prunus persica</i> (L.) Batsch.	核																		
スモモ	<i>Prunus salicina</i> Lindl.	核				6	1	2												1
イヌザンショウ	<i>Zanthoxylum schinifolium</i> Sieb. et Zucc.	核																		
アブラギリ	<i>Aleiurites cordata</i> (Thunb.) R. Br. ex Steud.	種子																		
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	種子										1	2	3	2	1				
ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子																		
ノブドウ属	<i>Ampelopsis</i>	種子																		
クマミズキ	<i>Cornus brachypoda</i> C.A.Mey.	核																		
ニワトコ	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.)Blume ex Graebn.	種子																		
不明		広葉																1		
<草本>																				
オモダカ科	Alismataceae	種子																		
ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A.Br. et Bouche	果実																		
イネ科	Gramineae	穎																		
イネ科	Gramineae	炭化胚乳																		
イネ科A	GramineaeA	穎																		
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	粉							5											
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	炭化粉																		
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	炭化粉・胚乳																		
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	炭化胚乳																		
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	穎																		
アワ	<i>Setaria italica</i> (L.) Beauv.	穎																		
イヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli</i> (L.) Beauv.	穎																		
ヒエ近似種	cf. <i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabumo	炭化穎																		
カヤツリグサ属A	<i>Cyperus</i> A	果実																		
ホタルイ属	<i>Scirpus</i>	果実																		
ホタルイ属A	<i>Scirpus</i> A	果実																		
ウキヤガラ	<i>Scirpus yagara</i> Ohwi	果実																		
スゲ属	<i>Carex</i>	果実																		
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	種子																		
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	種子																		
コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i> Regel et Maack.	種子																		
エノキグサ属	<i>Acalypha</i>	種子																		
アサ	<i>Cannabis sativa</i> L.	果実												3	3	1	5			
アサ	<i>Cannabis sativa</i> L.	果被												1						
カナムグラ	<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	果実												1	1	3				
ミズ属	<i>Pilea</i>	果実																		
ギンギン属	<i>Rumex</i>	果実																		
ギンギン属	<i>Rumex</i>	果苞																		
タデ属	<i>Polygonum</i>	果実																		
サデクサ	<i>Polygonum maackianum</i> Regel.	果実																		
ミノバ	<i>Polygonum thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	果実																		
サナエタデ	<i>Polygonum scabrum</i> Moench.	果実																		
ヤナギタデ	<i>Polygonum hydropiper</i> L.	果実												4			3			
ボントクダ	<i>Polygonum pubescens</i> Blume	果実																4		
イヌタデ近似種	<i>Polygonum</i> cf. <i>longisetum</i> de Bruyn.	果実																		
アカザ属	<i>Chenopodium</i>	種子												1			3			
ヒユ属	<i>Amaranthus</i>	種子												2			7			
ナデシコ科	Caryophyllaceae	種子																		
アブラナ科	Cruciferae	種子																		
ヘビイチゴ属-オランダ	<i>Duchesnea-Fragaria-Potentilla</i>	核																		
イチゴ属-キジムシロ属																				
クサネム	<i>Aeschynomene indica</i> L.	果実																		
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子																		
ミズオトギリ	<i>Triadenum japonicum</i> (Blume) Makino	種子																		
セリ科	Umbelliferae	果実																		
イヌコウジュ属	<i>Mosla</i>	果実																		
シソ属	<i>Perilla</i>	果実																		
エゴマ	<i>Perilla frutescens</i> var. <i>japonica</i> Hara	果実																		
メナモミ	<i>Siegesbeckia pubescens</i> (Makino) Makino	果実																		
ウリ科	Cucurbitaceae	種子												1						
キカラスウリ	<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> (Miq.) Kitam.	種子												1						
モミジカラスウリ	<i>Trichosanthes multiloba</i> Miq.	種子																		
-キカラスウリ	- <i>T. kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> (Miq.) Kitam.																			
ズズメウリ	<i>Melothria japonica</i> (Thunb.)Maxim.	種子												1			1			
メロン	<i>Cucumis melo</i> L.	種子												1						
ヒョウタン	<i>Lagenaria leucantha</i> Rusby	種子																		
トウガン	<i>Benincasa hispida</i> (Thunb.) Cogn.	種子							7			2								
ナス	<i>Solanum melongena</i> L.	種子																		
ナス属	<i>Solanum</i>	種子																		
オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i> L.	果実																		
オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i> L.	偽果																1		
ペニバナ	<i>Carthamus tinctorius</i> L.	果実																		
ゴボウ近似種	cf. <i>Arctium lappa</i> L.	果実																		
不明		炭化果実																		
繊維塊																		1		

して検出できたものである。これらには種類によっては1個から千個のレベルに及ぶものまで多種多様である。ヒョウタンについては、モモとオニグルミと同じように個別に取り上げられ、整理されたが、別項で記述されているのでここでは扱わない。

モモとオニグルミは次項で詳述し、ここでは他の植物遺体群の性格を記述する。

表55は個別に取り上げられたモモとオニグルミを除く他の植物遺体群の種類と個数を示したものである。ただし、3試料についてはモモとオニグルミと一緒に整理されていたのでここに含めた。

産出個数および種組成からみて特異な遺体群は、水路内のSD7028から産したアサの果実を主体とするもので代表されるものである。SD7028から産したものは、特にアサの果実が大量であり、他にイネの粃・穎・炭化米、カナムグラの果実、ミゾソバやヤナギタデなどタデ属数種の果実、アカザ属の種子、ヒユ属の種子を随伴する。さらに少量ながら、ナスの種子、ゴボウ近似種の果実、ベニバナの果実、アブラナ科「ナタネ型」の種子、メロン（いわゆるメロン仲間）の種子といった栽培植物、エノコログサ属穎、イボクサ属種子、アブラナ科種子、オナモミ果実など堆積域あるいは周辺域の雑草・人里植物とされる多種の分類群が含まれる。アサの果実を産するその他の試料についても、種組成は類似性が高く、特にカナムグラ、ヤナギタデ、アカザ属は共通性が高い。このように現地で取り上げられた遺体群は、人為による選択が働いた可能性は否めないにしても、人の利用がかかわった生活残滓としての性格をもつものから、周辺域から自然の営力でもたらされた環境残滓としての性格をもつものが混合していると見ることができる。

遺体群の特徴種であるアサの果実は、さまざまな産出状況を示し、成熟した完形のものからその破片、未熟な完形のものから破片までである。個数としては計数されていないが、0.25mmの篩選別ではおびただしい破片が認められた。このような産出状況は圧縮をして絞った残滓であることを示唆しており、油資源の一つと考えられる。このような利用が考えられるものに、ベニバナやアブラギリがある。アブラギリはこの地域での自生は考えにくく、油利用植物として栽培されていた可能性が高いものである。

B. モモとオニグルミ

第5水田対応期古段階から第1水田対応期までの各時期でのモモ核とオニグルミ核の産出状況の変化を図72に示した。モモ核とオニグルミ核は目立つので、人為による大きな偏りは考えにくく、おおむね産出状況を示していると見ることができる。モモ核は完形で産する頻度がもっとも高いが、人為で半裁にされたものも比較的多い。オニグルミ核は半裁されたものやさらに小さな破片となっているものが多い。こうした産出の違いは人の利用を反映したものである。両者とも量的に圧倒するのは、9世紀後半の第2水田対応期においてである。

図73は対象にしたモモ核の概形と大きさを示したものである。屋代遺跡群から産したモモ核の形態と産出状況から、以下の点が指摘される。

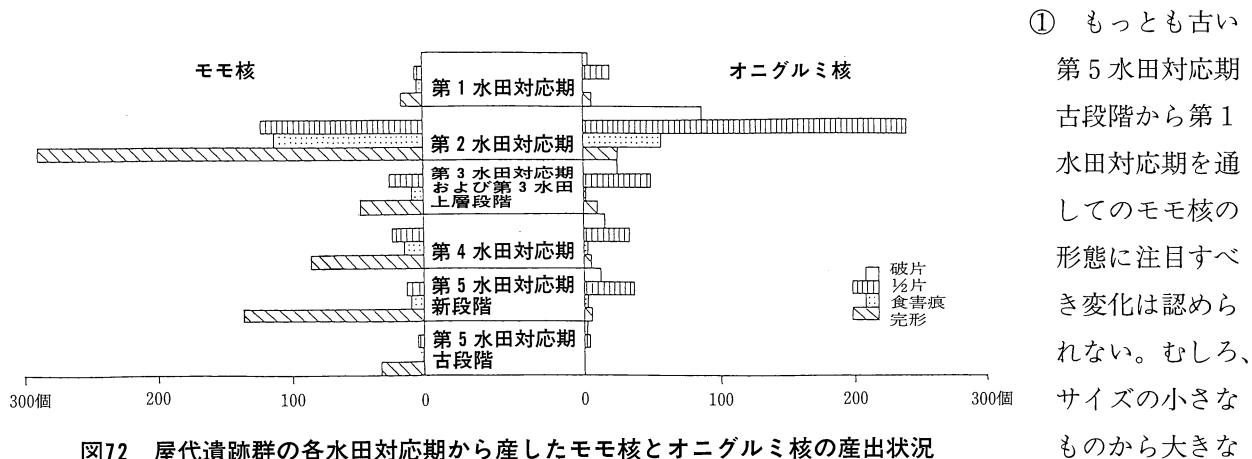


図72 屋代遺跡群の各水田対応期から産したモモ核とオニグルミ核の産出状況

ものまで、また、さまざまな彫紋をもったものがそれぞれの時期において認められる。すなわち、時期による偏りが認められない。

- ② モモ核のサイズは、小さなものから大きなものまで多様であるが、サイズ分布からも明らかなように集団としては常にまとまりがあり、連続的変異を見せる。このことは、複数の品種が存在したとしても、形態的には大きな隔たりをもつ特異な集団を含まないことを示唆している。
- ③ 以下の各時期について述べるように、屋代遺跡群で産したモモ核は、堆積単位ごとにまとまりのある集団として捉えられ、しかも火による加熱といった人為がかかわったものもある。このことは、モモ核集団の中には、食料としての利用だけでなく、祭祀などへの特殊な利用の対象であったことを示唆している。

モモ核の形態についてはいくつかのまとまった検討がなされてきた。小清水(1963)らは、弥生時代以降、コダイモモ→ノモモ→サイバイモモという栽培化に伴うサイズの大型化を指摘した。渡辺・粉川(1982)らは縄文時代以降の多くの事例にもとづいて、上記のような単純な図式にはならないことを指摘してきた。最近では平城京など古代のモモ核を扱った事例も増えてきたが、資料が増加するにつれ、さまざまな形態を持つものが混在し、一様な図式では説明できなくなってきたのが実情である。金原(1996)らは、モモ核をA~F類に分け栽培・渡来について検討を行った。またその後、モモの渡来が1回ではなく、時期を異にしてなされた可能性を指摘している。屋代遺跡群から産したモモ核集団は、1カ所において、古代を通して形態の多様性を示すものであり、複数の品種が継続的に持ち込まれるか栽培されていたことを示している。むしろ、ここで重要なことは、堆積単位あるいは廃棄単位ごとに形態を捉えるとともに、それら単位がいかなる人為によるものかを検討する必要があることを示している。その意味で、単純に統計処理をしたり、また、各地の資料を時代ごとに集約するだけでは、モモ核集団の持つ意味、とりわけ人とのかかわりを理解することはできないように思われる。

C. モモ、オニグルミの産出状況

それぞれの水田対応期における産出状況は以下の通りである。遺構、水田対応期、木簡については、長野県埋蔵文化財センター(1996)による。

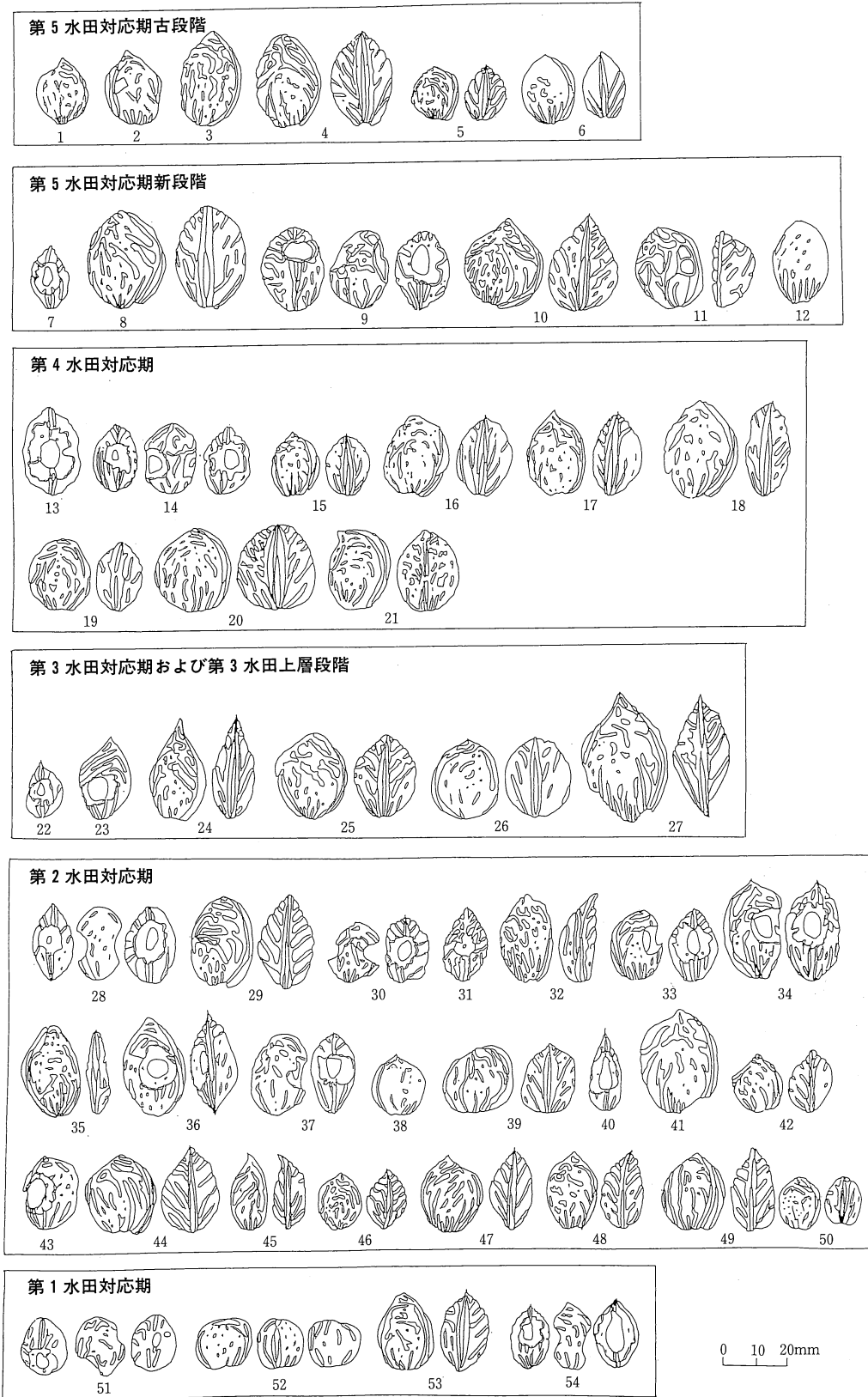
① 第5水田対応期古段階

古代1期前半がこの時期にあたる。SD7065からモモ核完形が20個、1/2片が1個、有食害痕が1個産した。平均の長さ22.4mm、幅21.2mm、厚さ16.6mm、彫紋の浅いものが多い(図73の1、No.274)。オニグルミ核1/2片が2個産した。SD8049からはモモ核完形4個が産した(図73の3~5、No.914・1288・1211)。No.1288はヒョウタンNo.28と一緒に産した。No.1288は長さ21.8mm、幅22.0mm、厚さ17.5mmで、少し焦げている。SX7036では、モモ核表面に粘性のある物質と青い鉱物質の付着が見られる。他にSD8044、SD7067からもモモ核とオニグルミ核が産した。第5水田対応期古段階を通して、モモ核の大きさは、長さ21.0~28.0mm、幅18.5~22.0mm、厚さ14.0~18.0mmである。

② 第5水田対応期新段階

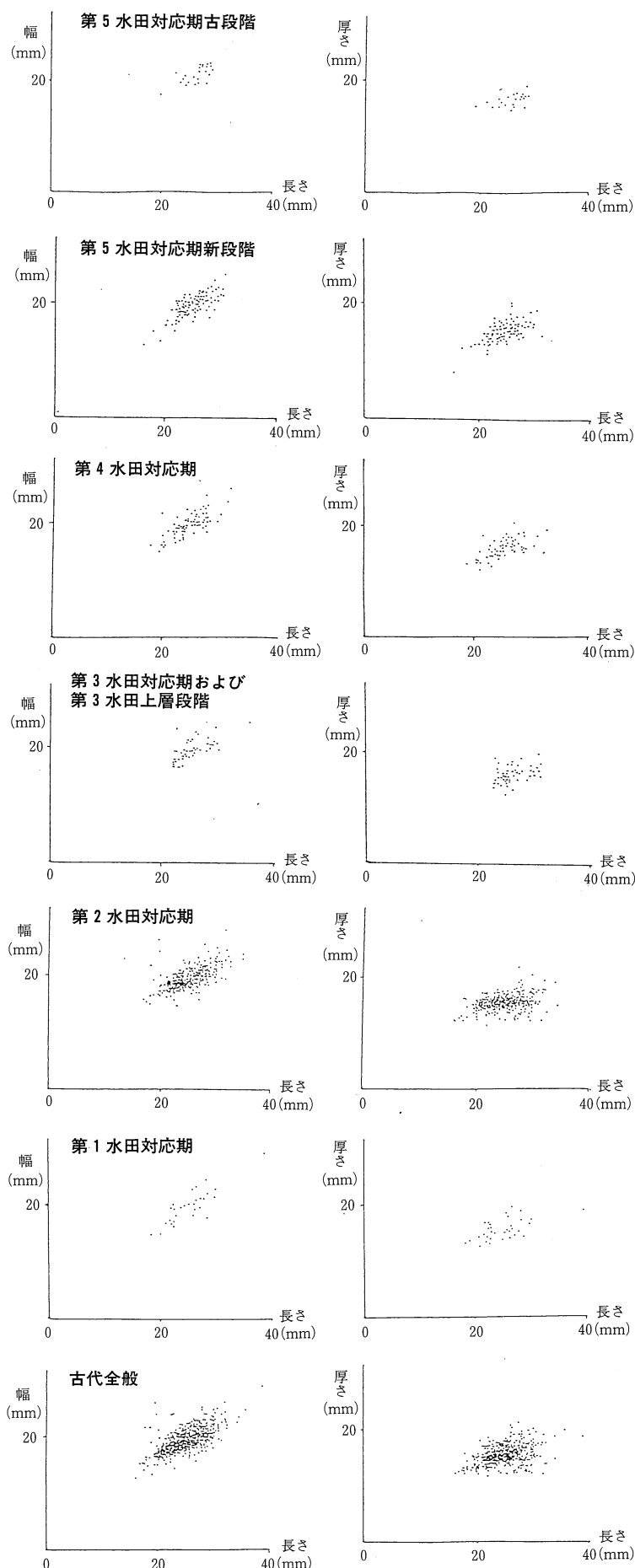
古代1期後半がその時期にあたる。引き続き湧水にかかわる祭祀が営まれていた時期である。

SD7058の最下部の砂層からモモ核2個(平均の長さ25.8mm、幅20.0mm、厚さ16.2mm)が産した。その上位でも、加熱を受けて焦げ、彫紋が似た丸く硬いモモ核が17個(平均の長さ22.9mm、幅20.0mm、厚さ16.1mm)が産した。核の概形が左右で異なるもの(図73の11、No.890)も産した。オニグルミ核は1/2片が1個、破片が5個産した。SD7062でも、加熱を受けて焦げ、似た彫紋のモモ核が15個(平均の長さ26.3mm、幅22.8mm、厚さ16.3mm)産した。オニグルミも1/2片が5個、破片2個が産した。オニグルミの先端部に加熱痕があり、火を使って割った可能性がある。食害痕はウサギによる食害痕と思われる。



- 1.SD7065 No.274
- 2.SD7065 No.277
- 3.SD8049 No.914
- 4.SD8049 No.1288
- 5.SD8049 No.1211
- 6.SX7036 No.927
- 7.SD7042 No.152
- 8.SX7037 No.700
- 9.SX7037 No.703
- 10.SD7051 No.767
- 11.SD7058 No.890
- 12.SX7037 No.931
- 13.SD8032 No.23
- 14.SD7035 No.476
- 15.SD7035 No.511
- 16.SD7035 No.513
- 17.SD7035 No.514
- 18.SD8040 No.917
- 19.SD8038 No.923
- 20.SD7047 No.1011
- 21.SD7047 No.1018
- 22.SD7031 No.17
- 23.SD8028 No.142
- 24.SD8025 No.1190
- 25.SD8025 No.1194
- 26.SD8025 No.1191
- 27.SD6120 No.925
- 28.SB7028 No.351
- 29.SD7028 No.554
- 30.SD8627 No.318
- 31.SD8027 No.319
- 32.SD8027 No.777
- 33.SD8027 No.782
- 34.SD8027 No.788
- 35.SD8027 No.795
- 36.SD8027 No.806
- 37.SD8027 No.820
- 38.SD8027 No.838
- 39.SD8027 No.1143
- 40.SD8027 No.327
- 41.SD8027 No.719
- 42.SD8027 No.733
- 43.SD8027 No.87
- 44.SD8027 No.1002
- 45.SD8027 No.1003
- 46.SD8027 No.575
- 47.SD8027 No.795
- 48.SD8027 No.579
- 49.SD8027 No.596
- 50.SD8027 No.1281
- 51.奈良平安盛土下 No.120
- 52.平安水田面 No.529
- 53.ST3002 No.1276
- 54.SD8034 No.172

図73 屋代遺跡群の各水田対応期から産したモモ核の概形（左）とサイズ分布（右）



この時期では、遺構ごとに概形が類似し、また加熱痕があるモモ核が産し、オニグルミ核についても加熱痕が認められるのが特徴である。このことは食用としてより祭祀とのかかわりを示唆する。

③ 第4 水田対応期

古代1期末から古代2期初めがこれにあたる。木簡が多数出土し、木製祭祀具の増加が見られる。SD7035では数度にわたって木屑の破棄が行われており、その間に木簡が3期にわたって廃棄されている。最下層の木簡には「布手」「三家人」「少穀」と記され、「戊戌」と記された上位の木簡包含層との間にモモ核を産する層が2層ある。28層の上位の層からは半裁され、彫紋の類似性が高いモモ核(平均の長さ22.4mm、幅17.7mm、厚さ14.6mm)が多く産した。29層からは大きさ・彫紋ともよく揃ったモモ核が産した。また加熱痕のあるオニグルミ1/2片も多数産した。SD7035の溝を埋積する堆積物から考えると、この付近にはかなり重要な遺構があったと思われる。

SD8038では、完形で丸く彫紋が類似するモモ核(平均の長さ21.7mm、幅19.6mm、厚さ16.3mm)が10個産した。また、完形の焦げたオニグルミ5個、その他破片も産した。SD7038では大きめのモモ核1/2片が3個、オニグルミ1/2片が1個産した。SD7047では、溝・小孔とも深く太い彫紋をもち、丸くて完形のモモ核14個(平均の長さ24.3mm、幅20.2mm、厚さ16.9mm)が産した。全体に加熱を受けたように焦げているものが産した(図73の20、No.1011)。オニグルミは1/2片が2個産している。SD8040遺構では、かなり加熱したものを含むモモ核が完形6個、1/2片が

3個、1/2片のオニグルミ核10個、破片4個が産した。SD7042 (SX7038) 遺構の木樋の下からは、彫紋が類似し、大きさのかなり揃ったモモ核 (平均の長さ24.2mm、幅19.4mm、厚さ14.9mm) が6個産した。これらのうち、熱の加えられた彫紋の似たモモ核 (平均の長さ23.3mm、幅19.0mm、厚さ14.9mm) が28個産した。また、層位関係が不明であるが、炭化したモモ核も産した。

このように、取り上げ単位ごとに形状・産出状況にまとまりが認められ、また、加熱痕が目立つという共通点がある。

④ 第3水田対応期および第3水田上層段階

古代2期から古代6期までがこれにあたる。木簡の出土数が一番多く、全体の60%を占め、祭祀具が大型になった。SD7031すなわち橋状遺構によってできた窪地の溝では、似た彫紋をもち、かつ加熱を受けたモモ核 (平均の長さ26.6mm、幅20.3mm、厚さ16.0mm) が19個産した。オニグルミ核も産した。SD7030は、第4水田対応期のSD7035とともに重要な溝で、木簡も多数出土している。SD7030の溝内堆積物は、SD7035に比ベシルトや砂質のもので埋積されている。湧水溝の最下層からは炭化したモモ核が産し、大きさも彫紋も似た (平均の長さ23.7mm、幅18.7mm) 1/2片のモモ核4個と、大きな (長さ29.6mm、幅24.2mm、厚さ17.8mm) のモモ核1個が産した。いずれも加熱を受けている。オニグルミ核も多数産した。SD7032の東西流路でもモモ核とオニグルミ核が産した。

⑤ 第2水田対応期

古代6期から7期に対応する。湿地帯であるSD8027 (SD7025) と東西流路のSD8029 (SD7026) の2地区に分けられる。SD8027では、今回得られた全モモ核の約50%が産したが、遺構との関わりが分かっていない。モモ核の形状は小さなものから大きなものまで加熱はほとんど受けておらず、また、彫紋も浅いものから深く太いものまで多様である。オニグルミ核も多量に産したが、この時期の核の食害痕はウサギではなくネズミのような小型獣によるものが圧倒的に多いという特徴がある。この時期は、地震や洪水などにより、水田面の形成あるいは維持が長期にわたって妨げられた。この時期の堆積物からは、その他の遺体としてトウガンやウリ科などの畑作物の産出が目立つ。

⑥ 第1水田対応期

奈良・平安面相当層とされる堆積物から加工したと思われるモモ核が2個産 (図73の51・52) した。全体の数は少ないが、この水田対応期では加熱したモモ核は産していない。

(2) 水洗選別で得られた植物遺体群

A. 試料と方法

水辺の祭祀遺構が検出された溝・水路遺構内の堆積物の大型植物遺体を検討するために、SD7035、SD7030、および西壁セクションの3ヵ所において試料を採取した。現地で採取した堆積物試料のうち、それぞれ100ccについて、0.25mmのふるいで水洗選別を行い、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定した。得られた大型植物遺体群は、分類群ごとにスクリーン管ビンに入れ、50%アルコールに浸して保存している。なお、同定にあたっては、特定の分類群に同定できなかった場合には複数の分類群をハイフンで結んで表示した。また、同一分類群の遺体であっても、形態的に区別でき、将来別の分類群として扱える可能性のあるものについては、例えばカヤツリグサ属 A、B というように分類群名にアルファベットを付けて表示することにした。

B. SD7035

計34試料について大型植物遺体の分析を行った。その結果、木本類15、草本類90の分類群 (分類群とタイプを含む) が同定された。同定した分類群と産出多数を表56に示した。

検出された大型植物遺体群は層位的に特徴的な変化を認められず、むしろ以下のような類似点が見いだされる。すなわち、草本類が種数・個数ともに卓越し、木本類の産出は乏しい。木本類は、低木または蔓性のブドウ属、サルナシ、マタタビの種子が大半を占め、高木としてはカヤ種子、モミ属葉、ヒノキ葉、ヤシャブシ亜属果実、ケヤキ種子、エノキ属種子が少量産したに過ぎない。卓越する草本類では、イネ粃が大半を占めるほど多産する。水田においては雑草としての性格をもつコナギも多産するが、イネ粃との相関は小さい。例えば試料14では1,955個のイネ粃が産出している一方で、コナギ種子は1個しか産していない。また、試料24ではイネ粃が142個しか産していないが、コナギ種子は78個が産している。

栽培など人為が強いかかわった可能性が高い植物として、アワ、ヒエ、アサ、エゴマ、ナス、メロン、ヒョウタン、ベニバナをあげることができる。ヒエ類は大半の試料から産し、とくに試料13・14・17・21・23からは多産する。アサの果実は全試料から産し、とくに試料14からは多産する。アワ類が試料32でしか産しないのを除けば、その他の分類群はおおむねふつうに産し、しばしば多産するといえよう。

その他の水生植物や湿地性植物の種数・個数はともに多い。湿地性のヘラオモダカなどオモダカ科種子・果実は多産こそしないが、34試料中32試料から産する。湿地性のカヤツリグサ科もふつうな植物で、カヤツリグサ属、ホタルイ属、スゲ属が目立つ。

土手や畦などやや乾いた条件下での草地の植物としては、複数のイネ科、サナエタデ、ポントクタデ、ヤナギタデを主とするタデ属とギシギシ属からなるタデ科植物、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科をあげることができる。イネ科はふつうな植物で、とくにイネ科 A、B、C、エノコログサ属、イヌビエは全試料から産する。その他もおおむねどの層位からも産し、相互に相関は示さないものの、試料によっては多量に産するものである。

C. SD7030

計18試料について大型植物遺体の分析を行った。その結果、木本類9、草本類74分類群（分類群とタイプを含む）が同定された。同定した分類群と産出個数を表57に示した。

SD7035の埋積物と同様に検出された大型植物遺体群は層位的に特徴的な変化を認められず、むしろ以下のような類似点が見いだされる。すなわち、草本類が種数・個数ともに卓越し、木本類の産出は乏しい。木本類は、クワ属、ニワトコといった低木および蔓性のサルナシ、マタタビの種子が大半を占める。高木としてはヒノキ葉、エノキ属種子、サンショウ属核が少量産したに過ぎない。卓越する草本類では、イネ粃が全般に多産する。水田雑草としての性格をもつコナギも多産する。

栽培など人為が強いかかわった可能性が高い植物として、アワ、ヒエ、アサ、エゴマ、ナス、メロン、ヒョウタン、ベニバナをあげることができる。アワ類が試料7でしか産しないのを除けば、その他の分類群はおおむねふつうに産する。

その他の水生植物や湿地性植物の種数・個数はともに多い。水生植物では、イトトリゲモを主としオオトリゲモ、サガミトリゲモを含むイバラモ属がふつうに産し、シャジクモ属もみられる。湿地性のヘラオモダカなどオモダカ科種子・果実は多産こそしないが、試料の約7割から産する。湿地性のカヤツリグサ科もふつうな植物であるが、産出数は少ない。

土手や畦などやや乾いた条件下での草地の植物としては、複数のイネ科、サナエタデ、ポントクタデ、ヤナギタデを主とするタデ属とギシギシ属からなるタデ科植物、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科、アブラナ科、カタバミ属をあげることができる。イネ科はふつうな植物で、イネ科 A、B、C、エノコログサ属、イヌビエが目立つが、量的にはさほど多くはならない。アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科はときとして多産する。

D. 西壁セクション

表57 屋代遺跡群SD7030の水洗選別大型植物遺体群

和名	学名	産出部位	分析試料																		
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
<木本>																					
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Sieb. et Zucc.) Endl.	葉																1			
エノキ属	<i>Celtis</i>	種子																			
クワ属	<i>Morus</i>	種子	1	1	1	1	4	1										4		2	
カシノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) Vent	種子																			1
バラ科	Rosaceae	種子																			
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	核																			
サルナシ	<i>Actinidia arguta</i> (Sieb. et Zucc.) Planchon ex Miquel	種子	1	1	1	1	1	1										1			
マタビ	<i>Actinidia polygama</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.	種子	1															1			
ニトコ	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.) Blume ex Graebn.	種子	1	1	1	1	1											4		1	
<草本>																					
シヤジクモ属	<i>Chara</i>	卵胞子	1	1	1	1	5	2	4									1			1
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	種子																			1
イトリゲモ	<i>Najas japonica</i> Nakai	種子	2	1	2	13	2	23	3	48	1	1	1	4	3	1	1	4		1	4
オオトリゲモ	<i>Najas oguraensis</i> Miki	種子	1															4		1	
サガミトリゲモ	<i>Najas indica</i> (Willd.) Cham.	種子																			1
ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A.Br. et Bouche	果実	1																		
オモダカ科	Alismataceae	種子	1	2	2	1	4											1		1	1
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	果実																			2
イネ科 A	Gramineae A	穎																			1
イネ科 B	Gramineae B	穎	1		13	1	1	3	2									1		3	3
イネ科 C	Gramineae C	穎																			1
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	穎	2	88	62	45	17	8	198	110	32		2	25	62	11	35	4	42	89	
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	穎	1	1	8	5					6	2		4	2	1	3	1	2	5	
アワ	<i>Setaria italica</i> (L.) Beauv.	穎										2									
ヒエ	<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno	穎	5	2	4						3	9	14	8		2	1	3	1	3	7
イヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli</i> (L.) Beauv.	穎	1									2						1	19	2	
カヤツリグサ属 A	Cyperus A	果実																			
カヤツリグサ属 B	Cyperus B	果実	1		3						4	1	1	1	5	3	1	1	2	5	
カヤツリグサ属 C	Cyperus C	果実				2		1			3	2	3		2	4	3		2	1	2
カヤツリグサ属 D	Cyperus D	果実									2		2					2		2	1
ホタルイ属 A	<i>Scirpus</i> A	果実	2								1										1
ホタルイ属 C	<i>Scirpus</i> C	果実																			1
テンツキ属 A	<i>Fimbristylis</i> A	果実	3	4	7	1	13	15	33					4	13	1	15	2	4	1	
ハリイ属	<i>Eleocharis</i>	果実																			
スゲ属 A	<i>Carex</i> A	果実	1															1	2	4	5
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	果実																			
コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i> Regel et Maack.	種子	2	1	18	5	40	21	43					5	6	8	5	4	2	16	
イゲサ属	<i>Juncus</i>	種子																			
アサ	<i>Cannabis sativa</i> L.	果実	2	4	11	5	3	11	16	10			1	7	10	7	12	10		5	
カナムグラ	<i>Humulus japonicus</i> Sieb et Zucc.	果実																			
イラクサ属	<i>Urtica</i>	果実	1																		3

ミズ属	<i>Pilea</i>	4	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2
カラムシ属	<i>Boehmeria</i>	2	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
キシギシ属	<i>Rumex</i>	3	2	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	1
タデ属	<i>Polygonum</i>	1	1	1	1	1	1	3	6	16	1	1	1	1	2
サナエタデ	<i>Polygonum scabrum</i> Moench.	1	1	1	1	1	1	3	16	1	1	1	1	1	1
ボントクダデ	<i>Polygonum pubescens</i> Bl.	1	1	1	1	1	1	6	16	1	1	1	1	1	1
ヤナギタデ	<i>Polygonum hydropiper</i> L.	1	1	1	1	1	1	2	7	7	6	2	2	2	6
イヌタデ近似種	<i>Polygonum cf. longisetum</i> de Bruyn.	1	1	1	1	1	1	3	7	7	7	8	8	2	2
アカザ属	<i>Chenopodium</i>	7	7	5	30	20	23	14	35	50	24	43	6	10	8
ヒユ属	<i>Amaranthus</i>	11	6	46	10	3	27	17	21	9	8	8	22	1	5
ナデシコ科	Caryophyllaceae	9	9	15	16	6	14	15	59	8	19	55	23	18	1
スベリヒユ	<i>Portulaca oleracea</i> L.	1	1	2	1	1	1	1	1	1	3	1	3	1	1
タカラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.	1	1	2	1	4	3	5	1	3	3	4	2	10	4
アブラナ科	Cruciferae	2	1	2	1	4	3	5	1	3	3	4	2	10	4
タネツケバナ属	<i>Cardamine</i>	3	1	1	3	1	4	2	1	1	1	1	1	1	3
ヘビイチゴ属-オランダ	<i>Duchesnea-Fragaria-Potentilla</i>	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1
イチゴ属-キシムシロ属	<i>Aeschynomene indica</i> L.	1	1	1	1	1	1	1	3	1	2	1	1	4	4
クサネム	<i>Oxalis</i>	1	1	3	1	6	4	2	1	3	4	3	2	2	4
カタバミ属	<i>Acalypha australis</i> L.	1	1	1	1	2	1	1	1	3	4	1	1	1	1
エノキダサ属	<i>Triadenum japonicum</i> (Bl.) Makino.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ミズオトギリ	<i>Hypericum</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
オトギリソウ属	Umbelliferae A	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
セリ科 A	Umbelliferae B	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
セリ科 B	<i>Hydrocotyle</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
チドナグサ属	<i>Tortilis japonica</i> (Houtt.) DC.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ヤブシラミ	<i>Nymphoides coreana</i> (Lev.) Hara	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ヒメシロアサザ	<i>Trigonotis</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
タビラコ属	<i>Lamium amplexicaule</i> L.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ホトケナギ	<i>Lycopus</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
シロネ属	<i>Perilla</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
シソ属	<i>Perilla frutescens</i> var. <i>japonica</i> Hara	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
エゴマ	<i>Solanum</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ナス属	<i>Solanum melongena</i> L.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ナス	<i>Veronica</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
クワガタンウ属	Rubiaceae	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
アカネ科	<i>Cucumis melo</i> var. <i>Conomon</i> Makino	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
メロン	<i>Lagenaria leucantha</i> Rusby	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ヒヨウタン	Compositae A	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
キク科 A	Compositae B	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
キク科 B	<i>Xanthium strumarium</i> L.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
オナモミ	<i>Siegesbeckia pubescens</i> (Makino) Makino	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
メナモミ	<i>Carthamus tinctorius</i> L.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ベニバナ		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表58 屋代遺跡群西壁セクションの水洗選別大型植物遺体群

和名	学名	分析試料(上)と遺構番号(下)																											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
<木本>																													
モミ属	<i>Abies</i>																												
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Sieb. et Zucc.) Endl.			1	15	7		6	64						3	5	16	1											
ヤナギ属	<i>Salix</i>																												
イヌシデ	<i>Carpinus tschonoskii</i> Maxim.																												
カバノキ属	<i>Betula</i>				1					2																			
ヤシヤブシ亜属	<i>Alnus</i> subgen. <i>Alnaster</i>																												
エノキ属	<i>Celtis</i>				1																								
クワ属	<i>Morus</i>							1																					
アジサイ属	<i>Hydrangea</i>			1																									
バラ科	Rosaceae																												
キイチゴ属	<i>Rubus</i>			1	1	1																							
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>				1																								
ブドウ属	<i>Vitis</i>																												
サルアブシ	<i>Acinidida arguta</i> (Sieb. et Zucc.) Planchon ex Miquel				2			2																					
マダタバ	<i>Actinidida polygamma</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.			1	1	1					2																		
タラノキ	<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seemann			1	1	1																							
ニワトコ	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.) Blume ex Graebn.				1	2	1																						
<草本>																													
シヤンクマモ属	<i>Chara</i>			17	2	2																							
フラスコモ属	<i>Nitella</i>																												
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>																												
オオトリガモ	<i>Najas ogroaensis</i> Miki																												
イトトリガモ	<i>Najas japonica</i> Nakai			2	3	7	6	2																					
サマガリガモ	<i>Najas indica</i> (Willd.) Cham.																												
オモダカ科	Alismataceae			3	2	5	1	1																					
ヘラオモダカ	<i>Alisma cantaliculatum</i> A.Br. et Bouche																												
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>																												
イネ科 A	Gramineae A																												
イネ科 B	Gramineae B																												
イネ科 C	Gramineae C																												
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.			2	5	5	10	1																					
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.																												
エノコログサ属	<i>Setaria</i>																												
エノコログサ属	<i>Setaria</i>																												
アワ	<i>Setaria italica</i> (L.) Beauv.																												
アワ	<i>Setaria italica</i> (L.) Beauv.																												
ヒエ	<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno																												
ヒエ	<i>Echinochloa crus-galli</i> (L.) Beauv.																												
カヤツグサ科	Cyperaceae																												
カヤツグサ属 A	<i>Cyperus</i> A			1	18	4	60	26																					
カヤツグサ属 B	<i>Cyperus</i> B																												
カヤツグサ属 C	<i>Cyperus</i> C																												
カヤツグサ属 D	<i>Cyperus</i> D																												
カヤツグサ属 E	<i>Cyperus</i> E																												
カヤツグサ属 F	<i>Cyperus</i> F																												
ホタルイ属 A	<i>Scirpus</i> A																												
ホタルイ属 B	<i>Scirpus</i> B																												
ホタルイ属 C	<i>Scirpus</i> C																												
ハリイ属	<i>Fimbristylis</i> A																												
スゲ属	<i>Eleocharis</i>																												
イボクサ属	<i>Anellema</i>																												

コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i> Regel et Maack.	14	3	11	6	7	14	2	38	34	34	5	26	84	61	4
イグサ属	<i>Juncus</i>	1	4	5	1							1				2
イグサ属近似種	<i>cf. Juncus</i>	2	30	9	3		1	4	1	4	1	3	5			2
エノキグサ属	<i>Acalypha</i>															
アサ	<i>Cannabis sativa</i> L.	2	3	3	4	1	5	10	5	2	19	1	3	7		
カナメグサ	<i>Humulus japonicus</i> Sieb et Zucc.	1	1	1	1	3	17	1	1	3	4				1	11
イラクサ属	<i>Urtica</i>	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	11	2
ミズ属	<i>Pilea</i>												1			5
カラムシ属	<i>Boehmeria</i>	2	9	5	8	9	15	2	2	3	4	1	1	8	2	2
ギンギン属	<i>Rumex</i>	10	9	5	8	9	15	2	2	3	4	1	1	8	2	1
タデ属	<i>Polygonum</i>															18
サデクサ	<i>Polygonum maackianum</i> Regel.															2
ミンソバ	<i>Polygonum thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1				1
サナエタデ	<i>Polygonum scorbrum</i> Moench.	1	1	1	1	1	1	1	1	2						2
ボンノカタデ	<i>Polygonum pubescens</i> Bl.	6	3	19	20	23	4	2	24	1	1	2	5	3	24	2
ヤナギタデ	<i>Polygonum hydropiper</i> L.														12	61
イヌタデ近似種	<i>Polygonum cf. longisetum</i> de Bruijn.	14	12	13	6	3	3	2	2	4	1	4	8	5	8	16
アカザ属	<i>Chenopodium</i>	2	1	1	1	1	1	2	3	5	2	7	5	5	4	3
ヒユ属	<i>Amaranthus</i>															2
ザクロウ属	<i>Mollugo</i>															1
スベリヒユ	<i>Portulaca oleracea</i> L.	15	23	40	18	7	10	5	29	61	13	9	8	6	15	4
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	12	2	2	1						1			17	32
タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.														5	17
アブラナ科	Cruciferae														2	3
タネツケバナ属	<i>Cardamine</i>	3	15	2	1	1	9	7	8	2	3	1	1	1	1	2
ヘビイチゴ属	<i>Duchesnea-Fragaria-Potentilla</i>	1	5	1	2	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	5
イチゴ属	<i>Fragaria</i>															1
クサネム	<i>Aeschynomene indica</i> L.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	1	1	1	3											2
ソリアネソウ属	<i>Impatiens</i>															1
ミズオトギリ	<i>Triadenium japonicum</i> (Bl.) Makino															5
オトギリソウ属	<i>Hypericum</i>															1
スミレ属	<i>Viola</i>															1
ウド	<i>Aralia cordata</i> Thunb.	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
セリ科 A	Umbelliferae A															2
セリ科 B	Umbelliferae B															2
チトメタヂ属	<i>Hydrocotyle</i>	1	7	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ヤブジラミ	<i>Tortilis japonica</i> (Houtt.) DC.															2
ヒメシロアサザ	<i>Nymphoides coreana</i> (Lev.) Hara															1
タビラコ属	<i>Trigonotis</i>	3	1	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	5	1
ホトケアザ	<i>Lamium amplexicaule</i> L.															2
イヌコウジュ属	<i>Mosla</i>	1														1
シロネ属	<i>Lycopus</i>															1
トウバナ属	<i>Clinopodium</i>															2
シソ属	<i>Perilla</i>															1
エゴマ	<i>Perilla frutescens</i> var. <i>japonica</i> Hara															1
ナス	<i>Solanum</i>	2	1	2	1	2	1	2	2	3	3	1	1	4	2	3
クワガタウ属	<i>Solanum melongena</i> L.															1
アカネ科	Rubiaceae															1
ゴキズル	<i>Actinostemma lobatum</i> (Maxim.) Maxim.															1
クワン	<i>Cucumis melo</i> L.															1
ヒヨウダン	<i>Lagenaria leucantha</i> Rusby	1														1
キク科 A	Compositae A															1
キク科 B	Compositae B															1
キノ科 D	Compositae D															1
オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i> L.															1
メナモミ	<i>Siegesbeckia pubescens</i> (Makino) Makino	2	3	2	2	2	11	3	1	1	4	1	3	1	8	1
ペニバナ	<i>Carthamus tinctorius</i> L.															2

同定した分類群と産出個数を表58に示した。すでに記述した前2遺構と同様に、全般に種組成や産出量に類似性が高く、やはり草本類が卓越するのが特徴である。木本類では、ヒノキ葉がときとして多産するが、キイチゴ属、ブドウ属、サルナシ、マタタビ、タラノキ、ニワトコといった低木や蔓性植物は少数であり、高木としてもヒノキ葉のほかにモミ属葉やイヌシデ果実などを少量産したに過ぎない。草本類では、イネ籾とコナギが目立ち、両者はある程度の相関をもって産する。

栽培など人為が強いかかわった可能性が高い植物として、アワ、ヒエ、アサ、エゴマ、ナス、メロン、ヒョウタンをあげることができる。アワ類が試料27でしか産しないのを除けば、その他の分類群はおおむねふつうに産する。

その他の水生植物や湿地性植物の種数・個数はともに多い。水生植物では、イトトリゲモを主としオオトリゲモ、サガミトリゲモを含むイバラモ属がふつうに産する。湿地性のヘラオモダカなどオモダカ科種子・果実は約5割の試料から産する。カヤツリグサ科もふつうな植物であるが、産出数は少ない。

土手や畦などやや乾いた条件下での草地の植物としては、複数のイネ科、サナエタデ、ポントクタデ、ヤナギタデを主とするタデ属とギシギシ属からなるタデ科植物、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科、アブラナ科、カタバミ属をあげることができる。イネ科もふつうな植物で、イネ科A、B、C、エノコログサ属、イヌビエが目立つが、量的にはさほど多くはならない。アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科はときとして多産する。

(3) 注目すべき植物群の記載

A. イネ (図76-1)

多数産したのは未炭化の籾であるが、炭化した籾や胚乳も少数産した。未炭化の籾はほとんどが非常に小さな破片であった。炭化した胚乳で計測ができたものでは、長さ4.5mm、幅2.8mmであった。

B. エノコログサ属 (図76-2・3)

穎が産した。主として大きさの違いによって次の3つのタイプに分けられる。

エノコログサ属 A 側面観の概形は楕円形、長さは3.1~4mm、先端は尖り、基部はやや平坦で、左右に外穎が少し膨らむ。偏平で、壁は薄い。表面には細かな畝状の突起が縦方向に並び、その両側には円形の細かな構造が規則正しく配列する。光沢があり、色は淡褐色。

エノコログサ属 B 側面観は卵形、長さは2~3mm、2.7mm程度のものが多い。先端は平坦、横断面は片凸レンズ型である。内穎の表面は円形または楕円形の突起が規則正しく配列し、下部は円形に隆起する。外穎の表面は畝状の突起が横方向にくねくねと走るが、互いに接することはない。その間をほぼ等間隔に縦方向の構造が埋める。壁は比較的厚く、表面には半透明の光沢のある薄膜が残ることがある。この薄膜は比較的厚く、まとまって剥離する性質がある。

エノコログサ属 C 側面観は卵形、長さ約2.8mm。先端は尖り、基部はやや突出する。横断面は片凸レンズ型。内穎の表面は、概形は円形であるがやや不定型の突起が規則的に配列する。内穎の下部は円形にやや隆起する。外穎の表面は、下部は円形の突起が規則的に配列する。この突起は上部にいくにつれ小さくなり、上部では消滅する。それに伴って突起列の間の溝が太くなる。壁は比較的厚く、表面は透明の薄膜が覆う。色はくすんだ淡褐色。

C. イヌビエ (図76-5・6)

穎が産した。側面観は先端の尖った長楕円、基部はやや突出する。ふつう長さ2~2.5mm、時々3.7mmほどのとびぬけて大きなものが混じる(図76-6)。壁は薄く、表面には基部から先端に伸びる線状の構造が見える。光沢があり、色は淡褐色ないし褐色。

D. ヒ エ (図76-4)

穎の破片が産した。一般に穎の側面観は卵形であるが、本遺跡から産したほとんどは小さな破片であった。長さは3mm強、幅は2mm強。内穎の基部末端部が半円状にやや隆起し、そのすぐ上部では平坦となる。表面は平滑で、縦方向の線状の構造が透けて見える。光沢があり、色は褐色。

E. イグサ属 (図76-8)

種子が産した。概形は棒状。側面観は長楕円形・長卵形、長さ0.4~0.6mm、先端・基部とも尖る。表面は横長の楕円形の構造が縦に連なる。壁は軟質で薄く、半透明の淡褐色かまれに褐色を呈する。基部は褐色、先端も褐色となるが、褐色の部分が小さいか無い場合も多い。まれに全体が細く、先端がクレーター状に窪み、中心が細く尖るものもある。

イグサ属近似種としたものは、概形はズンぐりとした棒状、側面観はややいびつな長卵形、長さ0.2mm。表面を縦長の楕円形の構造が規則的に発達する。先端は一方に幾分歪む。色は淡黄褐色、先端は褐色。全体を厚い寒天質に覆われる場合がある。

F. コナギ (図76-7)

種子が産した。側面観は長楕円形、まれに卵形、長さは0.9~1.1mm。一般的な概形は葉巻状であるが、遺体ではひしゃげて扁平となって産出することが多い。先端はやや尖るが、産したものの多くは先端部がきれいに脱離している。基部から先端に8本程度の明瞭な細い畝状突起が発達する。その間を細かな構造が横方向に走る。壁は薄く、半透明な淡褐色、まれに褐色を呈する。

G. ア サ (図76-9)

果実を産した。側面観は卵形ないし広卵形、長さ3~4mm、基部は平坦である。横断面は楕円形だが、長軸の両端が薄くなり突出する傾向がある。果皮が残存することも多く、その場合果皮は茶褐色、果実は黒褐色を呈する。未熟果は表面が平滑で、茶褐色を呈する。果皮を伴わない。

H. カナムグラ (図76-10)

果実が産した。概形は算盤玉状。側面観は円形に近い広卵形、長さ約3.5mm、周囲は明瞭な稜となる。表面はフェルト質で黒色を呈するが、未熟果は平滑で灰褐色を呈する。基部には心形の構造があり、白色を呈する。しばしば果皮が残存したものが見られた。果皮は片面に8本ほどの稜が基部から先端にまで伸び、くすんだ褐色を呈する。

I. アカザ属 (図76-11)

種子を産した。概形は算盤玉状。側面観は基部の横が直線状となるいびつな円形、長さ約0.8mm。基部はやや窪み、この窪みから浅いV字谷が側面の中心部まで伸びる。側面には長楕円形の低い突起が放射状に発達する。遺体として産出するアカザ属の種子は、壁がやや軟質なものが多いが、本遺跡では硬質なものが多い。

J. ヒユ属 (図76-12・13)

種子を産した。概形は算盤玉状。側面観は円形、長さ1.0~1.1mm、基部はやや窪む。横断面は凸レンズ型。表面は細かな円状の網目紋様を呈する。壁は皮質で光沢があり、やや赤味がかかった黒色を呈する。一般にヒユ属の壁は硬質で、弾力がなく割れやすいが、本遺跡から産した遺体はやや弾力をもっている。

炭化したヒユ属の種子は、小型で直径0.7mm弱である。側面の中心部の円状の部分と縁辺部では表面の構造が異なる。中心部は打ち出し鍋状の網目紋様、光沢があり黒色を呈するが、縁辺部は不明瞭な網目で、光沢のない黒色を呈する。

K. スペリヒユ (図76-14)

種子を産した。概形は算盤玉状。側面観は基部の横が直線状になるいびつな円形で、長さ0.8mm程度。

基部はやや窪み、この窪みから浅いV字谷が側面の中心部まで伸びる。側面には長楕円形の畝状突起が中心から放射状に発達する。縁に細長い突起が密生する。

L. ナデシコ科 (図76-15)

種子を産した。側面観は倒卵形、長さ0.5~1mm、基部は対称軸の下端からずれる。基部から中心部に向かって広く浅く窪むことが多い。中心部はいびつな星状の網目が表面を覆い、縁辺に行くにつれ隆起し、半球状の突起となる。色は赤茶褐色ないし赤黒褐色を呈する。

M. アブラナ科 (図76-16・17)

種子を産した。2つのタイプが識別された。ここでは便宜的に「ナタネ型」「野菜型」と呼ぶ。

「**ナタネ型**」 概形は球状。側面観は短い楕円形。横断面は円形。表面は大きくゆるやかな畝状突起による円状の網目紋様が発達し、より微細な小穴がこの網目紋様の表面に発達する。色は赤褐色。

「**野菜型**」 概形は球状。側面観は短楕円形。横断面は短楕円形。表面は畝状突起による網目紋様が発達するが、畝状突起自体の幅も変化し、網目の形も不規則である。色は赤褐色。

N. シソ属 (図76-18)

果実が産した。側面観は長さ約1.4mmの倒卵形、横断面は短楕円形。基部は唇状に突出する。表面はクレター状の窪みとそれぞれの窪みの境界をなす稜からなる大きな多角形状の網目紋様を呈する。色は黄褐色。

O. エゴマ (図76-19)

果実の破片が産出した。側面観は倒卵形、横断面は短楕円形。完全体なら長さ1.7mm以上が予測される。基部は唇状に突出する。表面は畝状の突起からなる多角形状の網目紋様を呈する。色は赤褐色。

P. ナス (図76-20)

種子を産した。側面観はいびつな広倒卵形、長さ3.4~3.7mm、基部は中心軸の下端からずれており、やや窪む。壁はやや軟質、表面は星状の網目紋様で、赤黄褐色を呈する。

Q. ナス属

種子を産した。側面観はいびつな楕円形から倒卵形、長さ1.4~1.7mm、基部は中心軸の下端からずれており、やや窪む。壁は硬質、表面は円状の網目紋様を呈する。色は淡黄褐色。

R. メナモミ (図76-21)

果実を産した。側面観の概形は長卵形。長卵形の側面はほぼ直線となり、全体が側面方向にやや反り返る。長さ2.8~3.0mm、幅1.0~1.5mm。先端は平坦。横断面は丸みを帯びた菱形で、4稜型となる。基部から先端に細い畝状突起が多数走る。その間の表面は、小さな粒状の突起がおおむね横方向に連なる。壁は硬く、やや弾力がある。色は赤黒褐色。

S. ベニバナ (図76-22)

果実を産した。側面観の概形は卵形だが、左右非対称で一方へ反り返ることが多い。長さ5.5~7.0mm、6.5mm程度が多い。先端は斜めに平坦となり、稜をなす場合が多いが、ときとして平坦面となる。横断面は短い楕円形。中央に緩い稜が基部から先端近くまで走る。色は褐色から灰褐色。

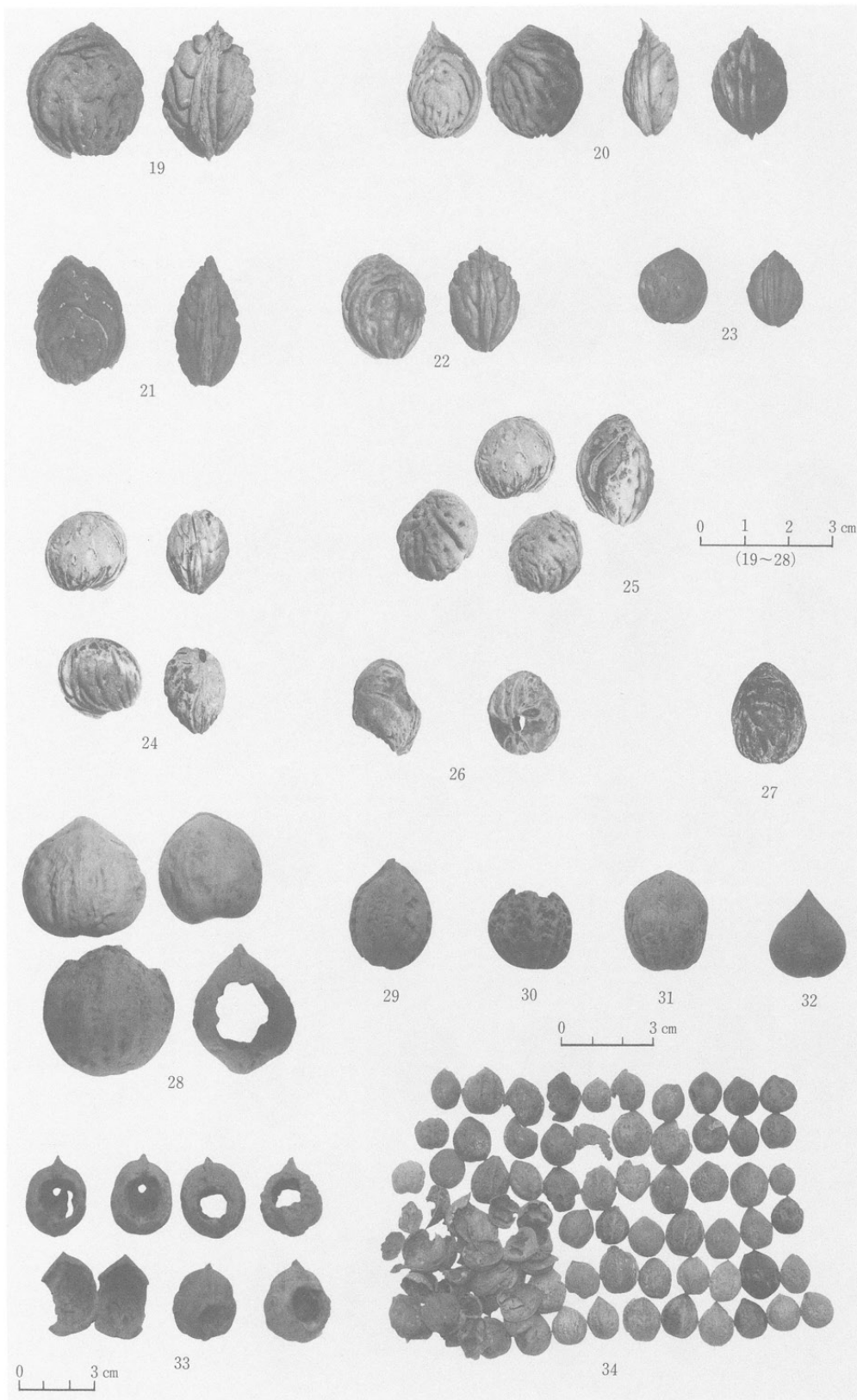
引用文献

- 小清水卓二 1963 「古代日本の住居跡から出土する桃について」『近畿古文化論攷』p.559-569 檀原考古学研究所編 吉川弘文館
金原正明 1996 「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナル』409 p.15-19
渡辺 誠・粉川昭平 1982 「菜畑遺跡の大型種子」『菜畑遺跡』p.467-473 唐津市教育委員会
長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』



- モモ核 (1~18)
1. SX7036 No. 927
 2. SD8049 No. 1288
 3. SD7042 No. 434
 4. 第5水田上砂層 No. 928
 5. SD7047 No. 1011
 6. 第4水田面 No. 371
 7. SD7042 No. 433~438
木樋下
 8. SD7058 No. 567~571
水門周辺、底部砂層
 9. SD6120 No. 925
 10. SD8028 No. 143
 11. SD8028 No. 144
 12. SD8025 No. 1194
 13. SD7030 No. 470・471
 14. SD8027 No. 89
 15. SD8027 No. 96
 16. SD8027 No. 84
 17. SD8027 No. 788
 18. SD8027 No. 795

図74 屋代遺跡群のモモ核とオニグルミ核 1



モモ核(19~27)、
オニグルミ(28~31、33、34)
ヒメグルミ(32)
19.SD8027 No.775
20.SD8027 No.1002, 1003
21.SD8027 No.860
22.SD8027 No.865
23.SD8027 No.1281
24.平安水田面 No.529
25.平安水田面 No.529~532
26.奈良・平安面盛土下 No.120
27.ST3002 No.1276
28.SD8032 No.132~135
29.SD8025 No.381
30.SD8025 No.385
31.SB5005 No.786
32.SX7037 No.765
33.SD8027 No.632~638
34.SD8027 No.428~561

図76 大型植物遺体
1.イネ 現地採取 No.113
2.エノコログサ属B SD7035 4層
3.エノコログサ属C SD7035 4層
4.ヒエ SD7035 4層
5.イヌビエ SD7035 14層
6.イヌビエ SD7035 14層
7.コナギ SD7035 2層
8.イグサ属 SD7035 No.17
9.アサ SD7035 No.17
10.カナムグラ 現地採取 No.100
11.アカザ属 SD7035 2層
12.ヒユ属 SD7035 2層
13.ヒユ属 SD7035 2層(炭化)
14.スベリヒユ SD7035 2層
15.ナデシコ科 SD7035 2層
16.アブラナ科 現地採取
No.10(野菜型)
17.アブラナ科 現地採取
No.24(ナタネ型)
18.シソ属 SD7035 4層
19.エゴマ 現地採取 No.94
20.ナス SD7035 No.23
21.メナモミ SD7035 No.28
22.ベニバナ SD7035 No.17

図75 屋代遺跡群のモモ核とオニグルミ核 2

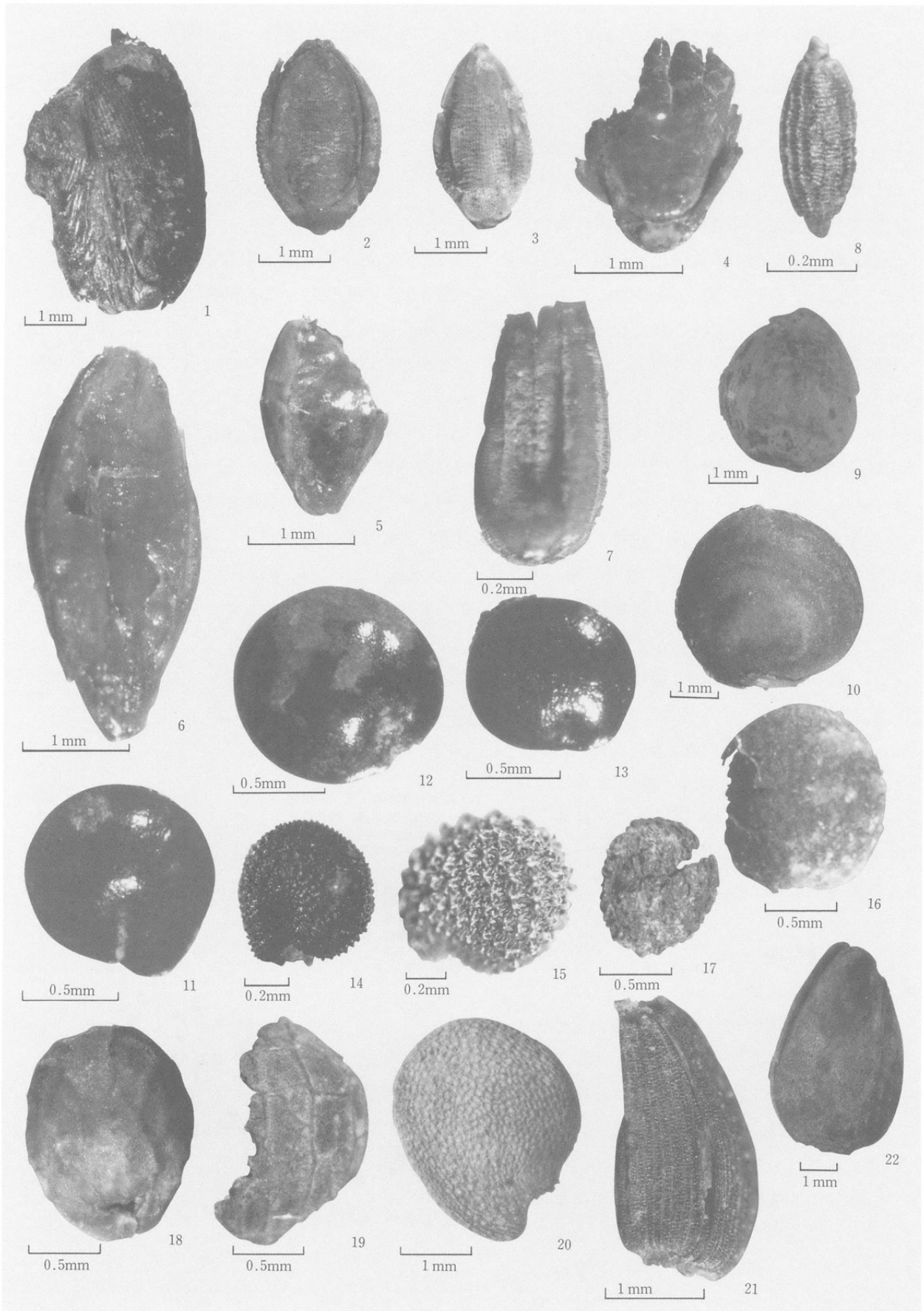


図76 屋代遺跡群のモモ・クルミ類以外の大型植物遺体

2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したウリ科の栽培植物

元大阪府立大学農学部

藤下 典之

はじめに

1998年10月現在、筆者の手許にある情報は、ヒョウタン仲間の158遺跡(図77)、メロン仲間の137遺跡、トウガンの12遺跡からの遺体出土記録がある。各植物ともその過半数を越える遺跡からの遺体を観察・計測してきた。メロン仲間の系統発生(ルーツ探索に近い仕事)を生涯研究の主な課題にしてきた筆者にとっては、印刷中も含めて41編の報文がまとまり、専門とする農学や生物学的な手法によるだけの研究では独断と偏見に陥ってしまうところを、考古学的研究の成果がどれほど軌道修正に役だったことかと、追想しきりの昨今である。

本州の内陸部に位置し、山岳地帯の多い長野県下でのウリ科植物の遺体の出土実績は、篠ノ井・恒川・塩田城・石川条里の4遺跡と少なく、考古学的成果は余り期待していなかった。それが、「長野でもものすごい数のヒョウタンが出土している」との伝聞は数年前から聞いていたが、1998年の1月、県埋文センターから依頼を受け、上田整理棟で現物と初対面、その月末に主要な資料の送付を受けた。観察・計測が気になる中で、定年後の研究課題「現生花粉の多様性と系統発生」と、2001年に開館予定の「メロンの博物館」の建設事業への参画とで、脱稿が遅れ、最新情報の涉猟や考察が不十分なままのものになった点ご容赦願いたい。

観察・計測は従来の方法と変わることなく、アルコール漬けの種子を室内でゆっくり乾燥させた後、正常(成熟完形)種子、非受精または未成熟によるシイナ(中身の子葉と幼根が不発達の種子)、奇形種子、部分欠損種子(計測不能)、破片に分けた。正常種子の中から100粒を無作為抽出し、0.1mmまで読みとれる目盛りつきのルーペで長さや幅を計測した。

(1) 出土遺体数

A. ヒョウタン仲間

いままでに県下でヒョウタン仲間の遺体出土があったのは篠ノ井遺跡群(弥生~古墳)からの種子112粒と多数の果皮片、および石川条里遺跡(平安)からの種子1粒しかないようである。屋代遺跡群では自然流路・溝(SD)の31遺構と井戸(SK)の5遺構から87資料、更埴条里遺跡では井戸の3遺構の4資料合わせて91資料が取り上げられた。これらをセンターでの類別に、写真照合による補正を加えてから、果皮の完欠の状態や種子伴出の有無などを組み合わせてまとめたのが表59である。果皮の一部が欠損した

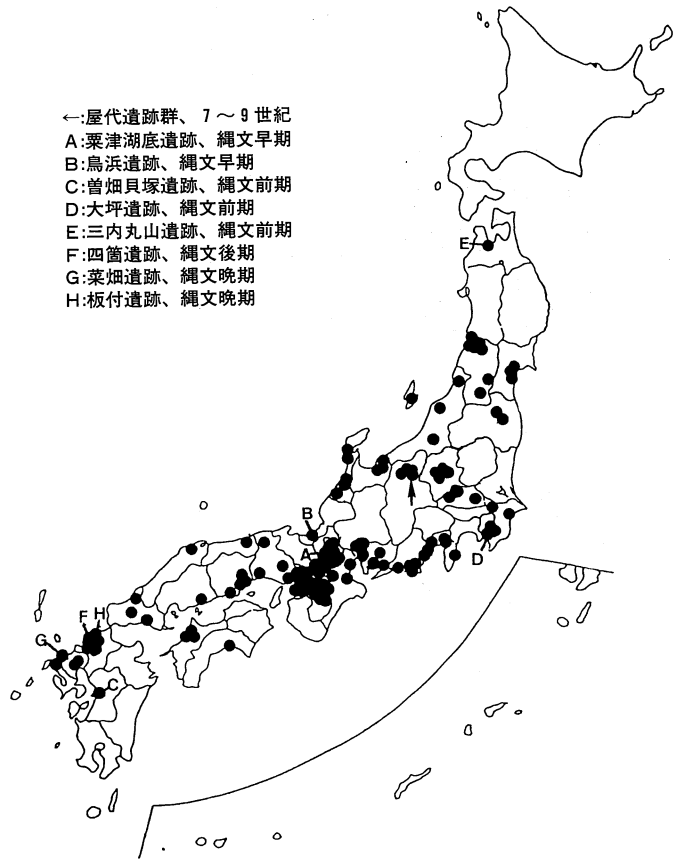


図77 ヒョウタン仲間の種子出土遺跡の分布 (1998.10現在)

完形果でないものでも、写真から花おち（花弁や芯の着いていた痕、果底の部分）または果梗痕（ツルの着いていた部分）が残っていたため、1個の果実（1個体）の部分と判定できたものが87資料中に11果（個）、ほぼ完形状態のものが17果（個）、屋代遺跡群からは最も少なくみても合計28果（個）も出土していたことになる。ひとつの遺跡から複数の果実が出土した例も10余りある

表59 屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の取り上げ資料数および遺構区分

数	部分	果皮のみ			種子を伴った果皮		種子のみ	合計
		完形 ²⁾	部分 ²⁾	破片 ²⁾	破片	完形		
資料(H・1~91) ¹⁾		8	22	37	1	9	10	87
果実(個体) ³⁾		8	7	4	0	9	-	28
半切果皮		1/8	0	0	0	0	-	1/28
穿孔果皮		0	1/7	1/4	0	0	-	2/28
柄杓加工		0	2/7	1/4	0	1/9	-	4/28
祭祀遺構出土		7	2	1	0	3	-	13/28
自然流路出土		1	3	2	0	4	-	10/28
上記以外出土 ⁴⁾		0	2	1	1	2	-	5/28

1) H・1~91(内85~88は更埴条里遺跡のもので本表には含まない)

2) 県埋文センターの記録を現物と写真から一部修正した

3) 果梗つけね、花おちの遺存から別個体であることが確認できたもの

4) 井戸や遺構の性格不明のもの

が、ほとんどが1桁の数果で、筆者が知る限りでは南郷大東遺跡（5世紀・奈良、1994年11月当時）の10果が最多であるだけに、屋代遺跡群の異例な出土数は驚き以外のなものでもなかった。

種子を伴った部分欠損果の1個と完形果の9個、合わせて10資料に対して、種子のみ出土は10資料で件数からみる限りにおいてはほぼ同じであった。しかし、筆者の既往の調査での、種子件数に対する果皮の割合が極めて低い事実とは対称的であった。屋代遺跡群では果皮の出土が種子に比べて異常に多かったことになる。種子を伴わない果皮のみの出土が19果もあったのは、その内の6果に半切、穿孔、柄杓加工が施されていたことからみて、残り13果も果実から種子を抜き取った加工前の状態にあったものと推定できよう。

B. メロン仲間

SD8041から正常種子113粒とその破片19片が出土した。113粒は現生のマクワ一果実あたりの種子数と対比するとおおよそその1/3~1/4程度で、かなりの種子がどこかの過程で捨てられたか、流失したのであろう。ヒョウタン仲間の遺体が多かったのに比べ、メロン仲間の種子は淋しいくらいに少なかった。

県下での種子出土は篠ノ井遺跡群（古墳）の4粒、恒川遺跡（奈良~平安）の9粒、塩田城跡（中世）の101粒で、他府県の出土件数や粒数と比較すると極めて少なく、古代この地方ではメロン仲間はあまり利用されていなかったのかもしれない。

C. トウガン

種子が溝の3遺構から4資料（正常種子3粒と部分欠損の1粒）出土している。今までの全国での出土例をみると、弥生中期の菜畑遺跡から、江戸期の一橋遺跡に至る11遺跡と少ない。出土種子数も現生の果実あたりの粒数に比べると非常に少なく、最も多いもので佐堂遺跡（平安期）の69粒（藤下1984-a）、鳥羽離宮跡（鎌倉期）の24粒、平安京（9世紀）の16粒、一橋遺跡（江戸期）の15粒が続く以外は、1~4粒のみである。利用法（貯蔵性の高い野菜で夏から冬まで日持ちすることから冬瓜、それがトウガンとなる）や、現今の栽培や需要の多い地域（中国、東南アジア、中近東）からすれば、全国各地で多数出土しても不思議でない。にもかかわらず出土種子数が少ないのは、大粒で中身（子葉・幼根）が充実しているため、現今のスイカやカボチャの種子のようにナッツがわりに食べていたからかもしれない。

(2) 出土種子の特性

A. ヒョウタン仲間

1資料あたり200粒前後の種子が取り上げられていた、H・9、H・14、H・25、H・34、H・39、H・86の種子（図78）について、無作為抽出した正常種子の100粒を計測した（表60）。上記6資料ごとの種子の大きさ（長さ×幅）の広がり（変異）をみたのが図79である。広がり（重なり）程度から、平均長9.8mmのH・9が小

型、10.4と10.8mmのH・14、H・25が中の小型、11.9と11.7mmのH・34、H・39が中の大型、13.7mmあったH・86が大型の4型に大別できよう。小型のH・9、中の大型のH・34、大型のH・86をひとつのグラフに横に並べてみると(図79最下段)、相互の変異の重なりは僅かで、少なくともこの3資料の種子は遺伝的に大きさの違う個体(植物)からのものと思われる。H・9とH・25は両方とも完形果からの種子であることから、一果実内での種子の大きさが広がり(変異幅)を知ることができる。この2資料の変異幅からすると、他の果皮を伴わない計測した4資料の種子も、それぞれ一個体(果実)に由来したものとみてよいだ

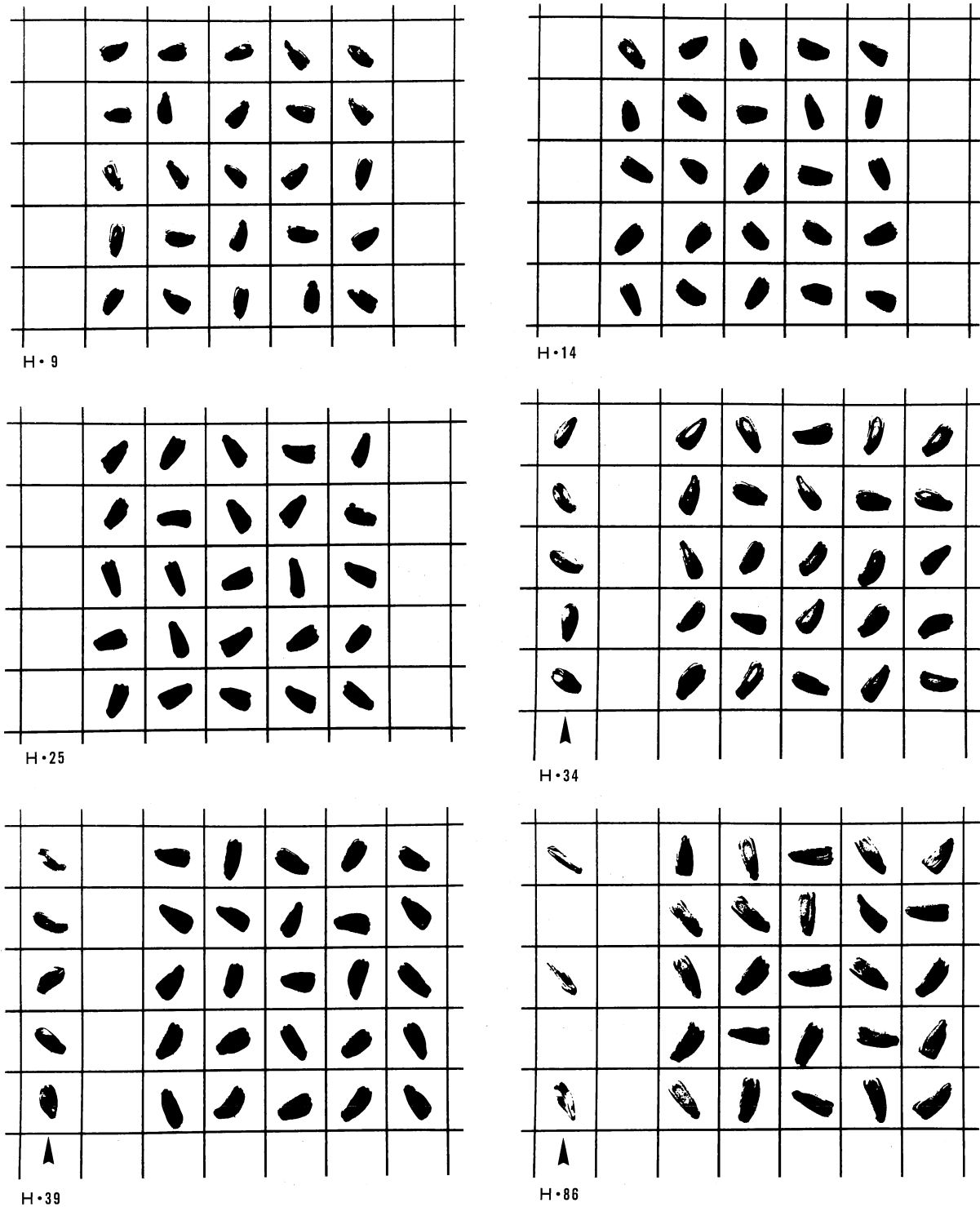


図78 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間(ユウガオ属)の種子

方眼の一辺の長さは2cm、矢印は奇形種子、台帳番号H・86は更埴条里遺跡

表60 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したウリ科栽培植物の種子特性

台帳番号	出土遺跡、地区	出土遺構	採取年月日	推定年代(世紀)	出土種子数					計測種子			図・写真番号	
					正常	しいな	奇形	部分欠損	合計	数	平均長(mm)	平均幅(mm)		長さ/幅
ヒョウタン仲間														
H・9	屋代遺跡群⑥区	SD7032	940711	8C 前半	195	1	7	10*	203	100	9.80	4.82	1.62	78.79
H・14	屋代遺跡群⑥区	SD7042	940922	7C 末	219	0	3	0	222	100	10.42	5.03	2.07	78.79
H・25	屋代遺跡群⑥区	SD8032	941125	7C 後半～7C 末	111	13	0	79*	124	100	10.87	4.74	2.29	78.79
H・34	屋代遺跡群⑥区	SD7033	940630	9C 前半	173	2	5	2*	180	100	11.94	5.42	2.20	78.79
H・39	屋代遺跡群⑥区	SD7033	940630	9C 前半	172	0	8	10*	190	100	11.71	5.42	2.16	78.79
H・86	更埴条里 K 地区	SK9388	94, ...	平安後半～中世	185	1	3	2*	189	100	13.75	5.75	2.39	78.79
メロン仲間														
M・1	屋代遺跡群⑥区	SD8041	940902	7C 初頭～7C 後半	111	2	0	19*	113	100	7.20	3.43	2.10	81.82
トウガン														
T・5	屋代遺跡群⑥区	SD8028	—	7C 末～8C 初頭	0	0	0	1	1	計測不能			81	
T・6	屋代遺跡群⑥区	SD7043	941007	9C	1	0	0	0	1	1	12.2	7.5	1.63	81
T・7	屋代遺跡群⑥区	SD7043	941024	9C	1	0	0	0	1	1	12.9	8.6	1.50	81
T・35	屋代遺跡群⑥区	SD7035	940826	9C	1	0	0	0	1	1	13.0	7.4	1.76	81

*破片(種子数合計には含まない) 計測した資料のみを示す

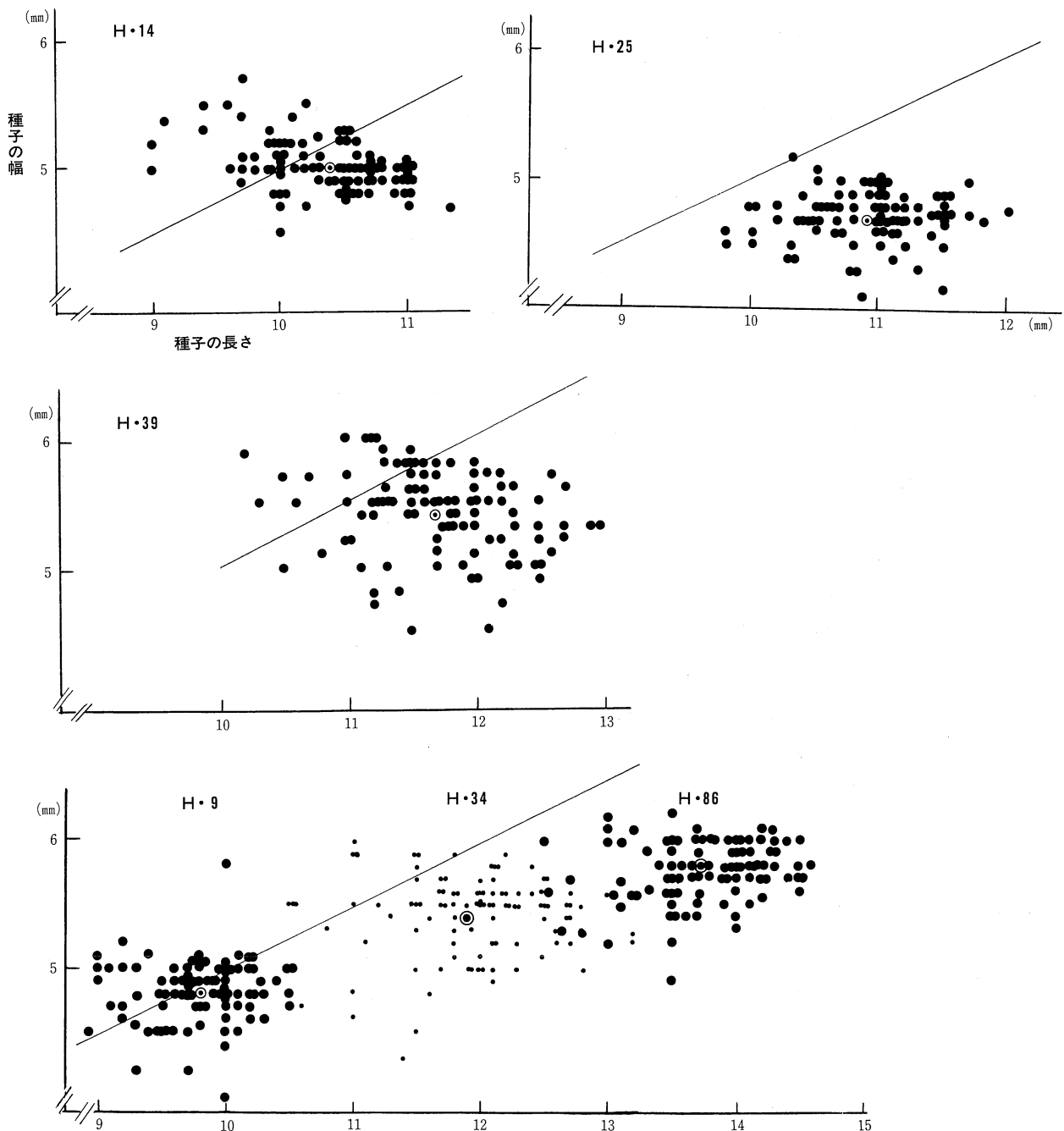


図79 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の種子の大きさ変異

◎遺跡ごとの平均値 H・86のみ更埴条里遺跡

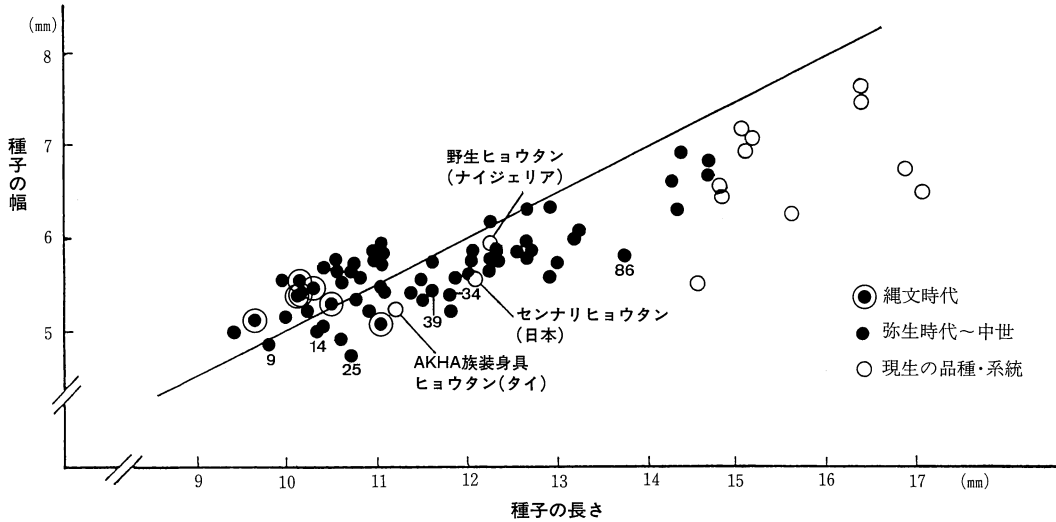


図80 出土遺跡別および現生のヒョウタン仲間の種子の大きさ

9～39は屋代遺跡群（7世紀後半～9世紀前半）、86の更埴条里遺跡（平安後半～中世）

ろう。これら6資料の種子の大きさをみる限りでは、屋代遺跡群からは種子の大きさが違う遺伝的に3系統のヒョウタン仲間が出土したことになる。飛び抜けて大型のH・86の種子は更埴条里遺跡（平安後期～中世）の井戸からのものであり、他の5資

料とは遺跡の場所（立地）も時代も違うことによる別系統のものではあるまいか。先に筆者は宮の前遺跡の報告書で（藤下1993-a）、時代の変遷と種子の大きさとの関係をまとめ、縄文から江戸時代にいたる間に種子が少しずつ大型化していたことを述べた。

屋代遺跡群の5資料（H・9～H・39）と更埴条里遺跡の1資料（H・86）ごとの種子の平均長・平均幅を、筆者が調べてきた50粒以上の出土のあった各遺跡や、現生のヒョウタン仲間14品種・系統別のそれらとを、ひとつの図にまとめたのが図80である。屋代遺跡群と更埴条里遺跡から出土した6資料個々の種子の大きさの違いがよくわかる。H・9、H・14、H・25の種子の大きさは縄文早期（粟津湖底、鳥浜遺跡）から前期（曾畑貝塚、大坪遺跡）、後期（四箇遺跡）を経て、縄文晩期（菜畑遺跡）から出土した小型種子に符合した。一方、H・86の種子は他遺跡からの出土種子の中の最大、あるいは現生の栽培種子に近い大型種子であった。H・34とH・39は出土種子の中では中位で、現生の中では果実の最も小さいタイのAKHA族の装身具用のヒョウタン、ナイジェリアの野生ヒョウタン（中尾佐助教授採集）および小果多産のセンナリヒョウタンに近いものであった。7～9世紀のこの地域では、種子の大きさに関して遺伝的に雑ばくなものも含めて、いろいろなヒョウタン仲間が栽培されていたものと推測できた。屋代遺跡群中の7～8世紀の遺構から出土した資料中に縄文期の種子と同じような小型種子があったのは、内陸部に位置するこの地域へのヒョウタン仲間の持ち込み（渡来・伝播）が遅れたことを示しているのかもしれない。

図79・80・82の中で座標を斜めに横切る直線は長さ／幅＝2を示し、直線の下側にある長さ／幅が2.0より大きい種子は細身、直線の上側にある2.0より小さい種子は太身を示す。ヒョウタン仲間では一般的に大型種子は細身、小型種子は太身となるが、屋代遺跡群の出土種子は大小に拘わらず細身側という特性めいたものがあつた。

B. メロン仲間

SD8041から出土したM・1の種子は、長さや幅の変異が小さく（図81・82）、それは現生のマクワやシロウリの一果実内の種子の変異幅とよく符合していたことから（藤下1977・1980・1988・1993-b）、一果実（果実）に由来する種子と言えよう。メロン仲間の種子も弥生時代のものは明らかに小さく（図83）、屋代遺跡群の種子はメロン仲間の内のマクワ、シロウリに符号した。

C. トウガン

計測できたのは3粒のみで（図81右図）、長さは12.2～13.0mm、幅は7.4～8.6mmで（表60）、先述したよう

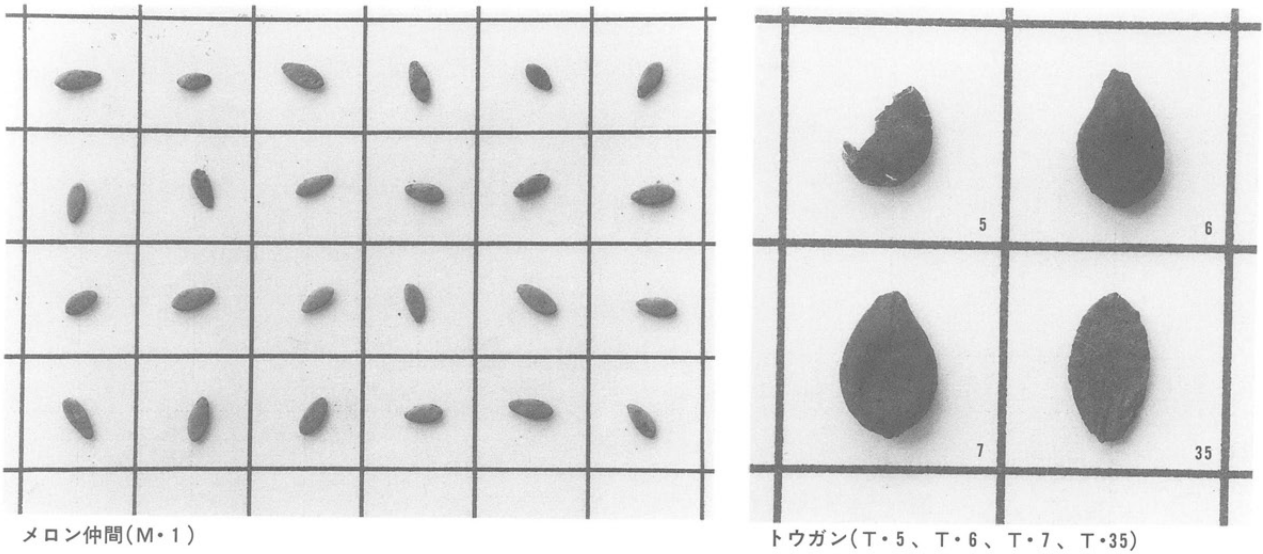


図81 屋代遺跡群から出土したメロン仲間（キュウリ属）とトウガンの種子

に他遺跡でも出土種子数が少ないため比較は難しい。既往のものでは佐堂遺跡（平安）の69粒が平均長10.6mm、平均幅6.2mm、鳥羽離宮跡（鎌倉）の24粒が9.4mmと5.5mm、一橋遺跡（江戸）の15粒が10.8mmと6.7mm、新保遺跡（弥生）の3粒が10.3mmと5.7mm、境田遺跡（平安）の3粒が9.9mmと5.4mmであった。これらと比べると屋代遺跡群のトウガン種子は若干大きいことになるが、出土記録以上には多言できない。

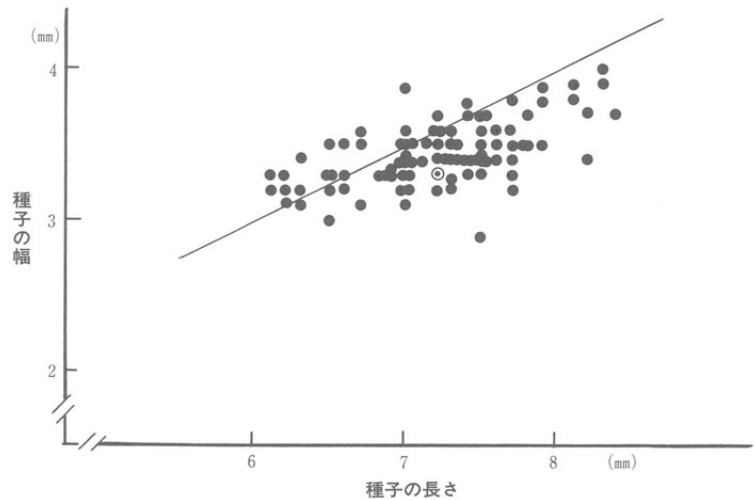


図82 屋代遺跡群（SD8041）から出土したメロン仲間（M-1）の種子の大きさ変異 ●は平均値

(3) ヒョウタン仲間の出土果皮（果実）の特性

屋代遺跡群出土のウリ科植物の遺体で、既往の他遺跡の発掘調査の成果と著しく違っていたのは、果皮に部分的な欠損があっても、一果実（果実）と推定可能な果皮が28資料（28果実）も取り上げられたことである。その内の17資料が完全無欠な原形への復元は無理でも、利用時の果形を充分推測できるものであった。

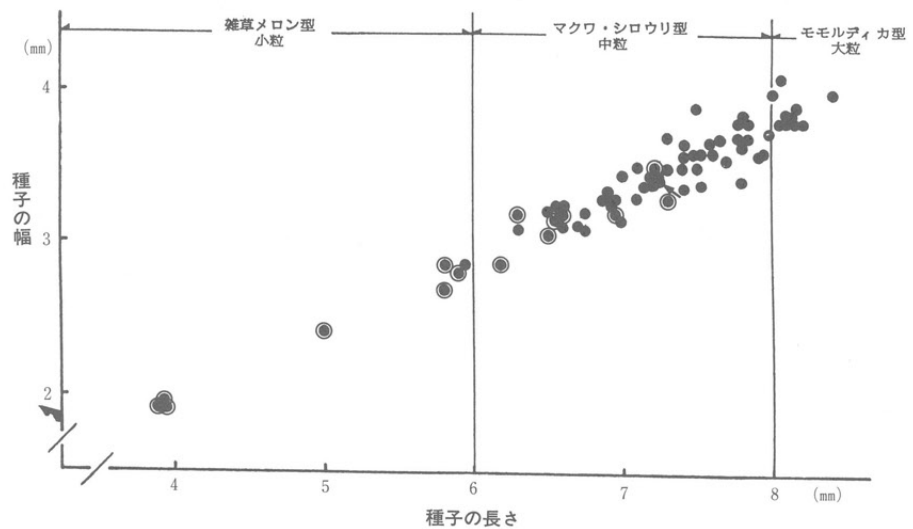
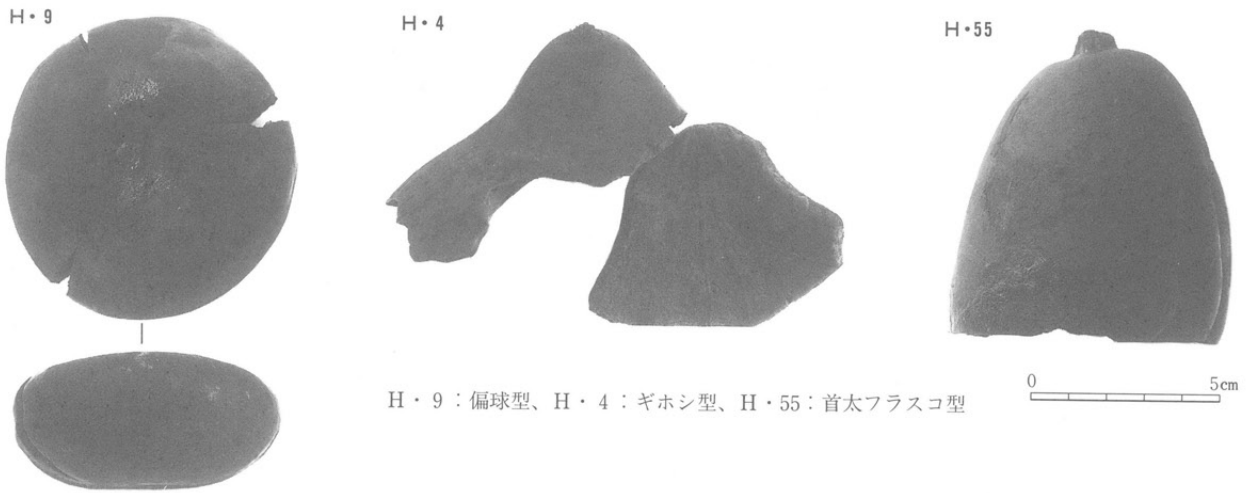


図83 出土遺跡別に見たメロン仲間の種子の大きさ
←屋代遺跡群 ●弥生時代 ●古墳～江戸時代



H・9：偏球型、H・4：ギボシ型、H・55：首太フラスコ型

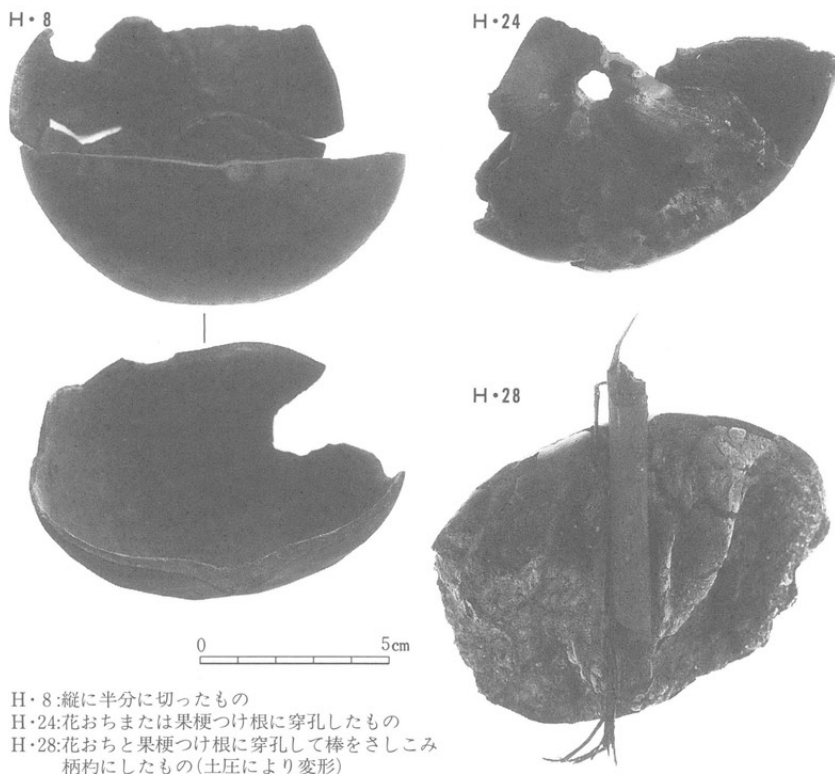
(撮影: 県埋蔵文化財センター)

図84 屋代遺跡から出土したヒョウタン仲間の果実の形

それらは出土遺体と写真から果形（藤下1993-c）が球型のもの1、偏球型が8、偏球型からギボシ型の間が5、ギボシ型が2、首太フラスコ型が1に大別された。既往の22遺跡から出土した28個の完形果の中で、まだ1果しか確認されていない古留遺跡（江戸期、奈良）の、果実の腰の部分がかびれたいわゆるヒョウタン型のもは（藤下1982）、7～9世紀の屋代遺跡群の出土遺体中にもなかった。出土完形果の大きさは縦横径とも7～12cmで10cm程度のものが最も多かった。果実の形や大きさがわかると、その利用目的や方法が推測しやすいが、幸いにも屋代遺跡群の果皮には加工痕の残るものが多く、縦の半切が1果、果梗痕や花おち痕の穿孔が2果、ふたつの穿孔に棒を差し込んだ柄杓が4果確かめられた。種子を伴わない完形果に近い状態で取り上げられた物は、加工前の種子抜き（取り出し）後の果実であろう。半切（裁、割）すれば柄をつけなくてもそのまま柄杓になる江上AおよびB遺跡（藤下1984-b）から出土したようなフラスコ型の果実はなかったから、大部分のものは花おちと果梗痕に穿孔して棒を差し込む柄杓としての利用

が主だったものと考えられる。同様の利用方法を目的に加工したとみられるヒョウタンは西川津遺跡（弥生前期、松江市）、和爾・森本遺跡（6世紀、奈良市）、長原遺跡（飛鳥、東大阪市）、平城宮（9世紀、奈良市）、二之宮千足遺跡（10世紀、前橋市）などから出土している。

動植物の出土遺構の種類や性格は、それらの利用目的（食用、容器、祭祀用具、楽器など）や遺存条件を考えていく上で大きな役割をもっている。屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の果皮28個分の内、12個が祭祀遺構の6基から、



H・8: 縦に半分に切ったもの
H・24: 花おちまたは果梗つけ根に穿孔したもの
H・28: 花おちと果梗つけ根に穿孔して棒をさしこみ柄杓にしたもの（土圧により変形）

図85 屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の果実の加工

11個が自然流路の7本から、残りの5個が井戸や性格不詳の場所からのものである。溝と井戸は一般に水分が豊かで酸素給源が乏しいほかに、祭祀儀礼の場としても古代から近年まで重要な意味をもっていたので、ヒョウタン仲間の遺体が残りやすく、全国各地の遺跡でそれが確かめられる。呪術性をもつヒョウタン仲間では水との関わりが一層強い。宮島義和は屋代遺跡群のヒョウタンは、人形、舟形、斎串などの木製祭祀具を伴出し、祭祀儀礼との結びつきは疑いないものとし(宮島1996)、ヒョウタン仲間が「この地でどのように使われたのか」の解明が祭祀儀礼の様式や遺跡の性格を明らかにしていく上で重要であろうと述べている。内陸部に位置する7～9世紀の屋代遺跡群から、異例中の異例ともいえるほどの28個以上のヒョウタン仲間の果実が出土した事実を直視したい。

引用・参考文献

- 藤下典之 1977 「草戸千軒町遺跡および尾道中世遺跡より出土した *Cucumis melo* の種子について」『草戸千軒町遺跡調査研究年報1975』 p.55～62
- 藤下典之 1980 「池上遺跡から出土した *Cucumis melo* の種子について」『池上・四ツ池遺跡発掘調査報告』第6分冊 p.105～124
- 藤下典之 1982 「本邦各地の遺跡から出土したヒョウタン仲間の遺体について」『近畿作物・育種談話会報』27 p.40～50
- 藤下典之 1984-a 「佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体について」『佐堂遺跡(その1)』 p.93～98
- 藤下典之 1984-b 「江上 A および B 遺跡から出土したヒョウタン仲間とメロン仲間の遺体について」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品(本文)・総括編—』 p.107～117
- 藤下典之 1988 「鹿田遺跡から出土したメロン仲間の種子、特に雑草メロン型の小粒種子について」『鹿田遺跡 I』 p.443～451
- 藤下典之 1992 「出土種子からみた古代日本のメロン仲間—その種類、渡来、伝播、利用について—」『考古学ジャーナル』354 p.7～13
- 藤下典之 1993-a 「宮の前遺跡と高岸遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子と果皮」『能登川埋蔵文化財調査報告書』第29集 p.77～81
- 藤下典之 1993-b 「佐助ヶ谷遺跡より出土したメロン仲間の種子」『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』 p.437～443
- 藤下典之 1993-c 「斗西遺跡より出土したヒョウタン仲間の遺体」『斗西遺跡(2次調査)』 p.281～289
- 宮島義和 1996 「木製品の用途解明に向けて—古代のひょうたん柄杓—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』5 p.27～34

3 竪穴住居跡から出土した炭化種実

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦・辻本崇夫

調査目的 屋代遺跡群・更埴条里遺跡では、平安時代竪穴住居跡のカマドの覆土を中心に、炭化種実が多数検出されている。それらの種類を知り、当時の食料をはじめとする植物資源の利用状況に関する情報を得るのが、今回の調査目的である。試料とした種実遺体は、発掘調査時に直接採取されたものもあるが、大部分はウォーターフローテーションによって採取されたものである。

結果 今回確認した種類を、竪穴住居別に示す(表61)。**表61 炭化種実同定結果**

検出された種実の種類は、イネ、オオムギ、マメ類、タデ属、アカザ科―ヒユ科である。このうち、タデ属とアカザ科―ヒユ科には、炭化が認められない。これらは、カマドの機能時のものではなく、遺構が廃絶された後に混入した可能性が高く、後代のものと思われる。

遺構名	種類
SB 111	イネ, オオムギ, タデ属, アカザ科―ヒユ科
SB9015	マメ類 (『古代2編』)
SB 112	イネ
SB 113	イネ
SB 116	イネ
SB 120	イネ
SB 121	イネ
SB5004	イネ

栽培植物 炭化種実として検出された3種類(イネ、オオムギ、マメ類)は、いずれも栽培のため渡来した種類である。検出された部位は、いずれも可食部分(胚乳・子葉)であることから、当時食用として利用されていたものの一部がカマド内に入り、炭化したものと考えられる。このほか、古代の栽培植物に関しては、小諸市竹花遺跡でイネ、モモ、スモモなどが検出されている(パリノ・サーヴェイ株式会社 1994a)。これらの種類は、古墳時代以降、全国各地の遺跡で多数の検出例があり、広く栽培されていたと考えられている(南木 1991)。また、屋代遺跡群・更埴条里遺跡では、古代の水田層から多量のイネの植物珪酸体が検出されている。さらに、IV層では、オオムギ族の植物珪酸体が検出される。現在のところ、植物珪酸体の形状からは、栽培されたオオムギと日本に自生する近縁種(カモジグサやスズメノチャヒキなど)の区別が難しい。このため断定はできないが、オオムギ族植物珪酸体の検出から、オオムギが畝で栽培されていたことが示唆される。

炭化米 炭化米は、県内でもいくつかの出土例がある。多量に検出された例としては、竹花遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社 1994b)や鋳物師屋遺跡(氏原 1988)のものがあり、その大きさに関して検討を行っている。これらの例と本遺跡出土の炭化米を、佐藤(1988)の分類を参考にして比較すると、いずれも短粒で極小～小の範疇に入るものが多く、サイズは類似する。炭化米の形状は、火熱を受けた時や、その後の経年変化による変形・萎縮などの影響があり、一概には比較できないが、現在栽培されていたものに比べると、やや小型で丸みを帯びている。

引用文献

- 南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究 生産と流通』 p.165～174 雄山閣
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1994a 「過去の植物利用について」『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』 p.613～624 小諸市教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1994b 「竹花遺跡第40号住居址出土炭化米の同定・計測結果報告」『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』 p.613～624 小諸市教育委員会
- 佐藤敏也 1988 「弥生のイネ」『弥生文化の研究 2 生業』 p.97～111 雄山閣
- 氏原暉男 1988 「鋳物師屋遺跡出土の炭化米について」『鋳物師屋』 p.113～115 小諸市教育委員会

第4節 木製品・自然木、炭化材の樹種

1 屋代遺跡群⑥区出土木製品・自然木および更埴条里遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦・辻本崇夫

(1) 同定の目的と方法

試料と目的 試料は、屋代遺跡群⑥区の第2水田対応層～第5水田対応層から出土した木製品、および更埴条里遺跡から出土した木製品や自然木など1617点である。これらの樹種を明らかにし、古代の用材に関する情報を得ることを目的とする。

樹種同定の方法 剃刀の刃を用いて、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。同定結果は、木器の観察表中に記載し、別に用途別の集計表を作成した。

(2) 樹種同定結果の概要

主な木製品の樹種同定結果は、木器の観察表とともに表62に示した。本来であれば、全ての樹種同定結果を表記すべきであるが、点数が多く、紙数の関係上全ての結果を掲載することができない。今後、『総論編』等の場を借りて、公開したい。

樹種同定を行った試料には、保存状態の悪いものも多く、樹種の同定に至らない場合もあった。それらの試料については、観察できた範囲で結果を記し、木材組織がほとんど観察できなかった場合には不明とした。その他の試料は、針葉樹11種類（カラマツまたはトウヒ属・マツ属複雑管束亜属・モミ属・ツガ属・トウヒ属バラモミ節・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・イヌガヤ・カヤ）、広葉樹46種類（オニグルミ・ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・カバノキ属・アサダ・クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ・ニレ属・ヤマグワ・クスノキ科・カツラ・イスノキ・ウツギ属・モモ・サクラ属・バラ科ナシ亜科・サイカチ・マメ科・キハダ・ニガキ・ヤマウルシ・ヌルデ・チドリノキ・カエデ属・トチノキ・アワブキ属・ケンボナシ属・グミ属・クマノミズキ類・アオキ・ウコギ属・エゴノキ属・トネリコ属・イボタノキ属・ムラサキシキブ属・キリ・ニワトコ・ガマズミ属・つる植物）に同定された。各種類の解剖学的記載については、『総論編』に報告する予定であり、本稿では割愛することにしたい。

(3) 木製品の用途と樹種の関係

木製品は、様々な用途が想定されており、合計46種類に分類された。これらの木製品の遺跡別・用途別の種類構成を、表62に示す。本来であれば、層位別・時期別に示すべきであるが、層位別・時期別にすると表が長大になること、層位別の種類構成の変化がほとんど認められないことなどから、今回は層位を一括して、用途別に一覧した。

紡績具・木形の用材 これを見ると、いずれの用途でも針葉樹材が比較的多く、特に紡績具と木形では、出土した木器の多くがサワラである。このことから、本遺跡群ではサワラが多く用いられ、特に紡績具と木形では選択的な利用が行われた可能性もある。また、屋代遺跡群と更埴条里遺跡で出土した木製品の樹

種構成は、いずれも良く類似しており、大きな差異は認められない。石川条里遺跡から出土した木製品の樹種同定結果では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、モミ属が減少するとともにサワラが増加することが報告されている（能城・鈴木1997）。本遺跡におけるサワラ材の大量使用も、そうしたサワラ材の使用の増加を示す結果といえる。

農工具の用材 農工具では、舞錐や柄状木製品にサワラやモミ属を中心とした針葉樹材が多く認められる。一方、堅杵、鋏身、木錘では、カバノキ属、アサダ、コナラ節などの落葉広葉樹材が多い。同様の結果は、長野市石川条里遺跡でも認められている（能城・鈴木1997）。鋏身や堅杵には、これまで各地で行われた調査でも堅い材質を有する広葉樹材が多く用いられている（島地・伊東 1988）。堅い材質を有する木材が多いのは、材質を考慮した用材が行われ、使用時の打撃に耐えるだけの強度を有する木材が選択されたためと考えられる。したがって、本遺跡でもそれぞれの用途に適した材質や、加工性を有する木材を選択していたことがうかがえる。ところで、鋏・鋤にはアカガシ亜属が多く利用されていることが知られており、とくに西日本では出土したほとんどがアカガシ亜属であることから、選択的な利用が指摘されている。一方、群馬県新保遺跡などで出土した鋏・鋤などには、アカガシ亜属と共にクヌギ節、コナラ節、カバノキ属などが認められ（鈴木・能城 1982・1986；バリノ・サーヴェイ株式会社 1993）、今回と類似した用材が見られる。この背景には、アカガシ亜属の自生が少なかった地域で、代用としてクヌギ節、コナラ節、カバノキ属などの落葉広葉樹材が利用された可能性が指摘されている（山田 1986；高橋 1996）。本遺跡では、アカガシ亜属は層に1点認められたのみであり、花粉分析の結果などを考慮しても、周辺では生育していなかったと考えられる。そのため、アカガシ亜属の代用として、カバノキ属やアサダなどが利用されたと考えられる。

その他の用材 容器では、曲物、栓、槽にサワラが多く認められる一方で、皿と盤にはケヤキが認められる。この2種類以外にはほとんど種類が認められないことから、用途による木材の使い分けが指摘できる。同様の結果は、服飾具の下駄と横櫛、武具・馬具の弓などでも見ることができる。このうち、容器の曲物（サワラ）と皿（ケヤキ）、服飾具の横櫛（イスノキ）、武具・馬具の弓（イヌガヤ）は、いずれも各地で行われた同様の用途の樹種同定結果（島地・伊東 1988；伊東 1990）とも一致している。とくに横櫛に認められたイスノキは、櫛の材としてツゲ（柘植）に次ぐ良材とされるが、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、現在の長野県内では生育していない。これまで各地で行われた調査例でも、現在イスノキが生育していない地域でイスノキの材が出土した例があるが、そのほとんどが櫛として出土したものである。したがって、過去においてイスノキは、櫛の材として多く利用され、それらの櫛が製品としてイスノキの生育していない地域まで搬入されていたことが推定される。本遺跡においても、主として西日本地域から櫛が搬入された可能性があるが、後述するように層にもイスノキが認められることから、一部は木材として搬入され、遺跡内で加工された可能性もある。

屑の樹種構成 屑は、木製品などを加工した際に発生した木屑などと考えられており、加工法によって割屑、切屑、削屑などに分類され、削屑が最も多い。サワラが最も多く、屑の全試料の1/3弱を占め、他にはモミ属、カヤ、ケヤキなどが多い。加工法による種類構成の差異は、あまり認められないが、割屑にサワラが少ない結果は、サワラ製品の加工法が関連している可能性もあり、注目される。

屑には、今回確認された全種類数の半分以上を越える30種類以上が確認されており、様々な木材が本遺跡で加工されていたことがうかがえる。屑と製品の双方に認められたものについては、遺跡内で加工された可能性が高い。しかし、屑に認められたにもかかわらず、木製品に認められなかった種類も多い。この中には、アカガシ亜属やイスノキなど、本地域に生育していなかったと考えられる種類もあり、外部から木材が搬入された可能性がある。また、キリは木材を利用するために栽培される種類であり、長野市石川条里遺跡では、栽培樹木として出土している（能城・鈴木 1997）。本遺跡周辺でも、栽培されていた可能性があ

る。一方、木製品に認められたが、屑に認められなかった種類も少数ではあるが存在する。このうち、イヌガヤは出土した全点が弓、カバノキ属は全点が農工具の鋏身と堅杵であり、いずれも選択的な用材が推定される製品である。また、これらの種類は、自然木にも認められず、周辺に生育していたか否かも不明である。そのため、これらの製品については、別の場所で製作されたものが本遺跡に持ち込まれ、使用された後に廃棄された可能性がある。

自然木の樹種 自然木には、ヤナギ属、クヌギ節、コナラ節を中心に20種類以上が認められた。いずれも花粉分析結果と大きな矛盾はなく、これらの落葉広葉樹を中心とする種類が、流路沿いなどを中心に生育していたと考えられる。また、自然木に認められた種類の多くは、木製品あるいは屑に認められており、周辺に生育していた樹木を利用して木製品が製作された可能性がある。また、自然木の中にはモモが2点認められた。モモは、大陸より渡来した栽培植物であり、その起源は縄文時代前期まで遡れるとされる(粉川 1988)。本遺跡では、古墳時代の板材や種実遺体にもモモが認められており、継続して周辺地域で栽培されていたことが推定される。

2 屋代遺跡群⑤区出土炭化材の樹種および灰状物質の材質

炭化材試料 試料は、住居跡などから出土した炭化材16点(試料番号4~19)である。各試料の詳細は、同定結果とともに、表63に記した。

灰状物質 試料は、住居跡(SB5004)の床面直上から出土した、壁や屋根に由来すると考えられる繊維質の灰状物質1点(試料番号20)である。

炭化材同定の方法 木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

表63 炭化材樹種同定結果

番号	仮地区	大地区	中地区	遺構番号	遺構内層位	時代・時期	用途など	樹種
1	1g	VIII		SK 470	埋土中	9世紀後半		コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	1g	VIII		SK 535	埋土中	9世紀後半		クリ
3	1f	VII	T7	SB 52	1層	9世紀後半		クマシデ属イヌシデ節
4	5b	I		SB5133	カマド内	8世紀前半		ムラサキシキブ属
5	5b	I		SB5013	床下	9世紀前半		イネ科タケ亜科
6	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木?	ケンボナシ属
7	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	屋根材?	イネ科タケ亜科
8	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
9	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
10	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木?	ケンボナシ属
11	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
12	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	屋根・壁?	ケンボナシ属
13	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ムラサキシキブ属
14	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
15	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
16	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	屋根・壁?	広葉樹(環孔材)
17	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
18	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属
19	5b	I		SB5004	床面直上層	7世紀末	垂木・壁芯?	ケンボナシ属

灰像分析の方法 試料から灰状物質

を分離しプレパラートに封入して、400倍の光学顕微鏡下で観察した。

炭化材同定の結果 樹種同定結果を、

表63に示す。試料番号16は保存が悪

いたために樹種の同定に至らず、広葉

樹(環孔材)とした。その他の炭化

材は、広葉樹5種類(クマシデ属イヌ

シデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ク

リ・ケンボナシ属・ムラサキシキブ属)と

イネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などについては、『総論編』において写真図版とともに報告する予定である。

灰像分析結果 灰状物質には、ススキ属の葉部に形成される短細胞列に類似した組織片、および特徴的な植物珪酸体を含まない不明組織片が観察できた。

住居構築材の用材 SB5004から出土した炭化材は、その出土状況から住居構築材と考えられており、部位についても推定されている。この結果を見ると、屋根材にタケ亜科が認められた以外は、部位による用材の差異は認められない。住居構築材は、ケンボナシ属を主とし、他にムラサキシキブ属と種類不明の環孔材が1点認められる。長野県では、佐久盆地周辺地域において、古代の住居構築材の樹種同定を行った例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社 1988a・1988b・1989a・1989b・1994a・1994b・1995)。それらの結果を見ると、基本的には落葉広葉樹のクヌギ節やコナラ節が多く、今回の結果とは用材が異なる。このような違い

が生じた背景には、遺跡周辺の植生の違い、住居の構造や用途の違いなどが考えられるが、詳細は不明である。また、試料番号7の屋根材にタケ亜科が認められたことから、屋根を葺いた材料にタケ亜科が混じていたことが推定される。また、灰像分析の結果ではススキ属に類似した植物が確認でき、この植物がタケ亜科とともに屋根を葺く材料、あるいは壁や床などに利用された可能性がある。

燃料材の用材 住居構築材以外では、屋代遺跡群①区の鍛冶関連建物跡（ST 7ほか）に付属していたと見られる土坑SK470とSK535から、クヌギ節とクリが認められた。これらは、小鍛冶の燃料材であった可能性がある。住居構築材とやや種類が異なるが、2点のみの同定であり、用途や時期による用材の差を示すものかどうか、今のところ不明である。さらに資料を蓄積し、詳細を明らかにしたい。

引用文献

- 伊東隆夫 1991 「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II」『木材研究・資料』26 p.91-189 京都大学木材研究所
- 粉川昭平 1988 「穀物以外の植物食」『弥生文化の研究2 生業』 p.112-115 雄山閣
- 能城修一・鈴木三男 1997 「石川条里遺跡出土木製品の樹種」『石川条里遺跡第3分冊』 p.68-138 (財)長野県埋蔵文化財センター
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1988a 「鋳物師屋遺跡出土炭化材同定」『鋳物師屋遺跡群鋳物師屋』 p.116-117 小諸市教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1988b 「十二遺跡出土炭化材の樹種同定」『鋳物師屋遺跡群十二遺跡』 p.393-399 御代田町教育委員会
- パ・サーヴェイ株式会社 1989a 「広畑遺跡出土炭化材の樹種同定」『広畑遺跡』 p.35-40 御代田町教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1989b 「根岸遺跡出土炭化材の樹種同定」『鋳物師屋遺跡群 根岸遺跡』 p.291-293御代田町教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1993 「萩原団地遺跡出土農具・杭の樹種」『萩原団地遺跡』 p.110-117 山武考古学研究所
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1994a 「過去の植物利用について」『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原 一長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書一』 p.613-624, 小諸市教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1994b 「大塚原遺跡における平安時代の住居構築材」『大塚原遺跡群大塚原(第二次)』 p.81-84小諸市教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社1995 「第1号住居址出土の炭化材の樹種」『三子塚遺跡群十石坂上遺跡』 p.12-13小諸市教育委員会
- 島地 謙・伊東隆夫編 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 p.296, 雄山閣
- 鈴木三男・能城修一 1982 「日高遺跡出土木材の樹種」『新保遺跡』 p.372-388 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 鈴木三男・能城修一 1986 「新保遺跡出土加工材の樹種」『新保遺跡I 弥生・古墳時代大溝編<本文編>』 p.71-95 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 高橋 敦 1996 「群馬県から出土した鋏・鋤の用材」『群馬考古学手帳』6 p.117-127, 群馬県土器観会
- 山田昌久 1986 「くわとすきの来た道」『新保遺跡I 弥生・古墳時代大溝編<本文編>』 p.168-188 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

*表62は、長野県埋蔵文化財センターが作成する木器観察表に樹種同定結果を組み込んで報告することとし、漏れた試料等については、別途報告する機会を作りたい。

第5節 屋代遺跡群⑥区出土の昆虫遺体

興水 太伸

1 昆虫遺体発掘の概要

長野県は全般に標高が高いうえ、山岳が多いので河川は一般に急流域が多い。また湖沼や湿地はあっても、それが遺跡と関連しての存在は極めて稀である。このことから今回の発掘調査において、昆虫遺体を調査できたことは、考古学上は無論、昆虫学への寄与にも資することができた貴重な調査であった。

長野盆地は、千曲川が長年月、土砂を運搬し堆積した沖積平地であるため、地下水は全般に高い。屋代遺跡群は、この長野盆地の一端に位置している。遺跡は埋没した千曲川の旧河道を含んでいるなどで、調査対象として昆虫遺体も加わることになった。しかし調査全体が、調査時間や調査人員などの点で制約もあり、細密な調査を進めることは不可能であった。そこで古代の自然流路や溝など、設定ポイントを重点に調査を進めた。以下に、この経過、方法、結果などを要約し記す。

2 昆虫遺体の採取

遺体採取は、遺跡の発掘面で目についたものを、その周辺包蔵土を含め小ブロックに切り取り、これを水湿ガーゼで保護し、タッパーウェアに収納保管した。

採取者は、発掘援助の作業員が主で、担当職員は他の作業との兼任で作業を進めた。そのため比較的大形の遺体や、輝色のあるもの、時に反射光によったものなど、目に付き易い遺体に片寄る傾向はまぬがれなかったが、結果的にはランダムな採取となり、重大欠陥を及ぼす採取ではなかった。しかし、痕跡様のものや、微細なものは、採取されなかった。

従って、採取遺体のほとんどは甲虫類で、他は少数のカメムシ類と不明の昆虫類がこれに加わる結果であった。

3 昆虫遺体の保存状態と処理

採取した昆虫遺体包蔵土のブロックを、ペトリ皿内の水にひたし、それを検鏡しつつ、絵画用面相筆で水洗いし遺体を取り出した。

ひとつのブロック内に2個以上の遺体片があった場合、相互の関連を見極め、同一個体の片でないものは別の個体とした。遺体は、一個体分ごとに小形スクリービンに納め、現世昆虫保存液として用いるFAA液（アルコール70%68、ホルマリン30、サクサン2の各容積混合液）により液漬保存した。

各遺体の遺存部位は、甲虫類では前翅部、カメムシ類は前胸背板部が最も多かった。次に腹面部及び肘節部分を除く肢部で、肢部は節が連続してはいても、水洗中にほとんどが分離した。前胸部や頭部の遺存は少なかった。稀に後翅の遺存もあったが翅脈部のみが多く翅の存在を示すにすぎなかった。

遺体の各部位は、脚節を除き完全形の保存は極少で、ほとんどは欠損部があった。特に帯・点状紋の部分では全ての個体が、腐食・消滅していた。

ほとんどの遺体の体内部には、植物の細根が進入し、体内の消化・消滅の促進がうかがえた。

4 種の同定

調査した遺構の年代は、7世紀前半から9世紀後半であり、この年代の昆虫は、現世昆虫と相違ないことから、種の分類・同定は現世昆虫のそれと同じ扱いとし整理した。

同定にあたり、一見して判別決定できるもの以外は、全て現世昆虫との細部にいたる比較検討によって種の決定をした。

細片は、別の同種完形個体の同部位に合わせ、完形を推定復元し、これによって種の決定を試みた。しかし、オサムシ科のように多種を含む類は、確信のもてる段階に止めた。

5 考察

遺跡の年代が約300年間にわたるので、考察は細分してすべきであるが、各世紀（時代）ごとの昆虫遺体数が少ないので、不本意ながら遺跡全体の約3世紀にわたる間を総括して考察した。

同定した結果、種の全ては分布域が主に低地性のもので、特異なものはなかった。従って、人の生活域と重なるか、その周縁域に生息分布していた、昆虫類で言う普通種とみてよい。

同定結果の集計は、表64のように、昆虫の生活様式の近似種別にまとめてみたが、遺構の性格から水生甲虫が多く、次に草地、山林周縁の種の順となる。また、当時の自然景観が如何に緑あふれ、生息昆虫にとって好環境にあったと推測される。

(1) 検体の種群別考察

水生甲虫類 水生甲虫類は、一生の大半を水に依存するので、種類ごとに生活に適する水環境を選択し来集生息する。ゲンゴロウやミズスマシ・ガムシは、止水域を好む。ゲンゴロウやミズスマシは、肉食性であるため、そこには餌になる水中や水面の小動物が生息することを条件にする。ガムシは雑食性のため、そこに動物・植物質の餌を必要とする。また、生育の過程での蛹化は、湿性粘土質の土中を好む。これらの必要条件を全て整えたのが、屋代遺跡群⑥区流路であったのであろう。ここに、水生昆虫が集結する結果となり、50%に及ぶ水生甲虫遺体の存在をみたことは、当然とも考える。

現在、日本の水生甲虫類、特にゲンゴロウ、ミズスマシは激減の一途で、保護甲虫になっているが、1940年代以前は、当遺構と同様の所が、水田の普通であった。それに、検体の中にゲンゴロウが、石または硬い路面上で、踏みつぶされたような圧死をし、これが板状に乾燥して後、埋没したとみられるものが一体あったことを拡大推測するにつけ、当時の生息数を容易に推測できる。

クロゲンゴロウは、群発生することで、たまたまそれとの一致も考えられるが、長野盆地の他の遺跡からの出土状況でも同傾向がみられることで、当時の広域分布状況が推察され、その分布状況の変遷を知ることができる。なお遺体の確認はなかったが、トンボ類などの発生も相当あったろうと推察される。

食植甲虫類 コガネムシのうち、食植生コガネムシ類の幼虫は、開けた草原、芝生地、耕地などの土中にあって、植物根を餌に育つ。成虫は地上で植物葉を餌にするので、害虫扱いをされるものが多い。食害植物は種によって異なり、ヒメコガネやコガネムシは、ブドウ、サクラ、クリ、ナラなどの葉を好む。マメコガネは、農作物の大豆、クヌギ、クズを好むことで、水田の近くにはこれらの植物が繁茂していたと想像される。つる性のブドウやクズは、主に山林周縁の日当たりの良い所に自生し、高木にからみ、やぶを形成する。やぶの前の草むらや草原、畑地などには、コガネムシと同様な生活様式をもったコメツキムシが生活していた。ツノアオカメムシも樹木依存の昆虫とし林縁生活をしていた。

山林内の諸木は、存分に成育し大樹となり、部分的に枯れたり、折れて朽ちたりし、それらのクヌギや

ナラの腐朽木には、クワガタムシ類が生育していた。

食糞性甲虫類 この類は主に人及び動物の糞を好んで餌とし、またその臭いをたよりに、かなりの遠方からも集まる習性がある。糞のほか動物の死体、動物質の腐ったもの、ハエのウジ、キノコなども好むものがある。ヒラタシデムシ・エンマムシ類も、食糞性コガネムシと共通性をもっている。

これらの食糞性甲虫類は、野外にあっては、風に運ばれる臭いをつてに徘徊生活しているが、人の生活があると、その生活域に定生活し、豊富にある糞尿、動物性腐物などで多数の繁殖を繰り返す。

オサムシ類 オサムシ類は一般に、石下や腐木下、落葉下などの物陰で、小動物を餌にし生活している。大形のオオオサムシは、やや湿性地で丈の高い草むらの地面に、ゴミムシ類は畑地や丈の低いまばらに生えた草むらの地面に、ミズギワゴミムシ類は、比較的湿性のある水辺の草むらなどで生活している。

これらの条件をそなえた環境は、人の生活域や、耕作地周辺に多くあり、検体のオサムシの全てがこの範囲で見られる種である。

オオゴミムシは、有機物の多い畑地に多く見られることで、畑地のあったことが推測される。比較的多数のゴミムシが検出されたのは、これら甲虫類の生活を支えるに足る、木の葉や小枝などの集積場のようなところが、あちこちに散在していたのではなかろうか。

表64 屋代遺跡群採取の昆虫遺体同定結果一覧 Sp.: 類・種の略

類別・食性	総称名	種名(和名)	検体計	(小計) 全体比%	生活概要		
水生甲虫類	食肉性	ゲンゴロウ	クロゲンゴロウ	40	(115) 50%	水中・水面生活 (越冬期土中)	
		ゲンゴロウ	ゲンゴロウ	27			
		ミズスマシ	オオミズスマシ	1			
	雑食性	ガムシ	ガムシ	45			
ガムシ		コガムシ	2				
コクワガタムシ類	食肉性	クワガタムシ	コクワガタ	1	(36) 16%	植物体依存生活 (幼虫・腐朽木・土中成虫・植物)	
			クワガタムシ Sp.	1			
		コメツキムシ	クシコメツキ	1			
			コメツキムシ Sp.	1			
	食植性	食植性コガネムシ	ヒメコガネ	ヒメコガネ			13
				マメコガネ			7
				コガネムシ			4
				クロコガネ			2
				クロコガネ Sp.			3
				アオハナムグリ			1
				ドウガネアブイ			1
				コガネムシ Sp.			1
				食肉・食糞性			食糞性(糞虫)コガネムシ
エンマコガネ Sp.	2						
マグソコガネ	2						
センチコガネ	2						
オオヒラタシデムシ	6						
シデムシ・エ類	食肉・食糞性	オオモモトシデムシ	オオモモトシデムシ	2	(20) 9%	糞中・糞玉・土中など動物の糞・腐物などに依存生活	
			エンマムシ	1			
		エンマムシ Sp.	1				
オサムシ類	食肉・雑食性	オサムシ	アオオサムシ	12	(48) 21%	主に土中物(か)なご地表主に動物質・小動物に依存	
			オサムシ Sp.	2			
		ゴミ(ゴミムシ)	オオマルガタゴミムシ	オオマルガタゴミムシ			2
				ムラサキオオゴミムシ			2
				マルガタゴミムシ			1
				アオゴミムシ			1
				ミズギワゴミムシ			2
				ナガゴミムシ Sp.			6
		シ(ゴモクムシ)	ゴモクムシ Sp.	ゴモクムシ Sp.			6
				ゴモクムシ Sp.			2
				マメゴモクムシ			1
半翅類	食肉	カメムシ	ツノアオカメムシ	3	(11)	植物依存	
-	-	-	甲虫 Sp.	7			
-	-	-	昆虫 Sp.	1			記入略

※・検体総固体230匹分 ・同定種名数30種
・種名判定固体200匹分 ・種名判定不可固体30匹分

第6節 貝類・魚骨

すべて屋代遺跡群⑥区で検出された溝および東西流路内で見つかり（図86）、各時期に対応する層から出土している。特に古代2期のSD8028、3・5層で多量に見つかりしている。また、この層位では、貝が原型をとどめず白色化したブロックとして層相を特徴づけるほどの量になっている。

貝の残存状態は悪く、処理に手間取ったため同定は行っていない。巻き貝と二枚貝が確認されている。

魚骨はSD7030から不明種が1点見つかったにすぎない。また、現在、竪穴住居跡のカマド内土壌サンプルの水洗選別中である。ここから検出された例も含め、同定結果は『総論編』に掲載したい。

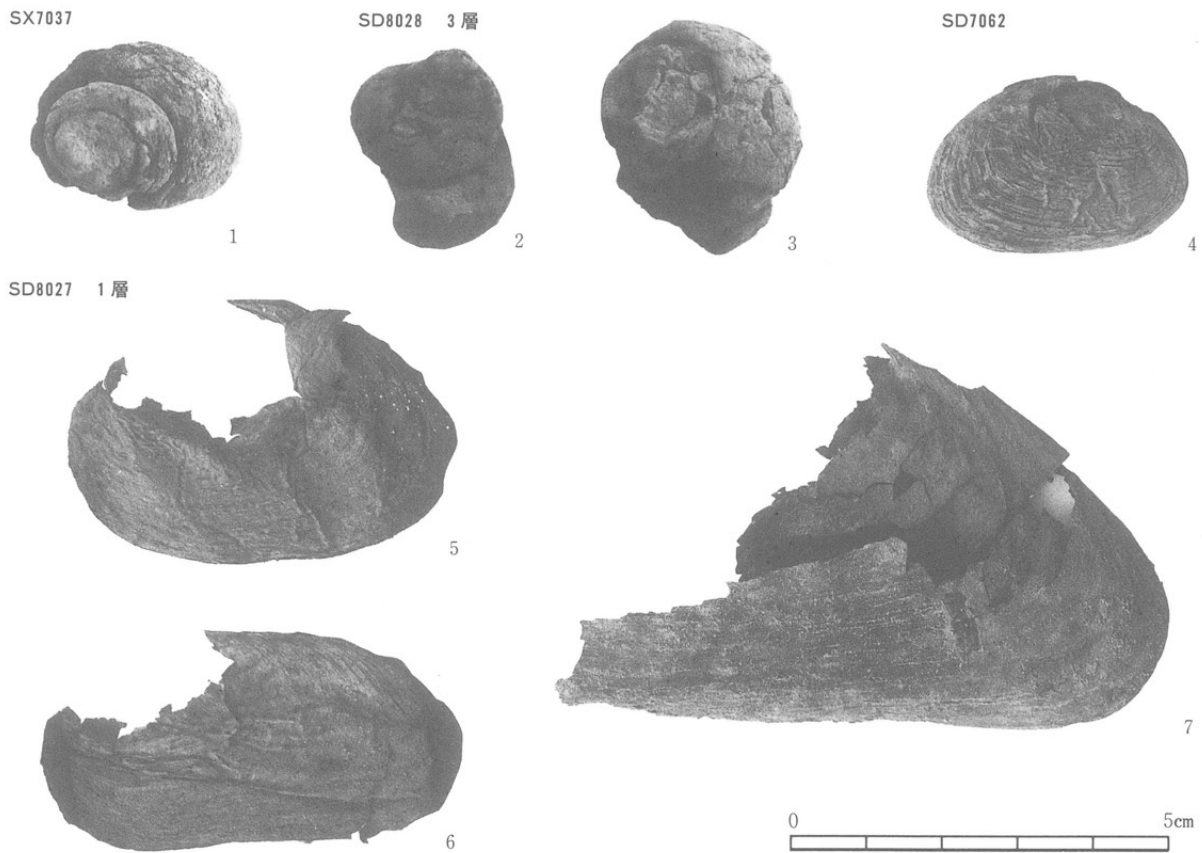


図86 屋代遺跡群⑥区出土の貝類

第7節 上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体

京都大学霊長類研究所 茂原信生
獨協医科大学第1解剖学教室 櫻井秀雄
獨協医科大学 今野 渉

はじめに

上信越自動車道屋代遺跡群(BYS)は長野県更埴市にある遺跡で、平成3年から6年にかけて上信越自動車道の建設工事に伴って、長野県埋蔵文化財センターによって発掘・調査された。この遺跡は縄文時代から江戸時代に至るまでの層を含んだ複合遺跡である。弥生・古墳時代の遺物に関してはすでに報告書が刊行されている。今回報告するのは出土した遺物のうちの、古代のものである。なお、2点だけヒトの歯が出土している。

動物骨の計測に関しては、Driesch (1976) にしたがいが、イヌの計測は主に斎藤 (1963) にしたがった。また、ウマおよびウシに関する諸データは西中川 (1991) を利用した。

1 出土脊椎動物骨のリスト (表73、表74^(註))

出土した脊椎動物は哺乳類と鳥類である。ここで出土した哺乳類は遺跡から一般的に出土するものである。哺乳類は3目5科5種である。

哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ (あるいはブタ) *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

2 脊椎動物遺存体の出土状況と特徴

脊椎動物骨の保存状態は一般的に非常によい。これはこの遺跡が低湿地的な出土状況を示すからである。したがって、ピビアナイト(藍鉄鉱)が付着しているものが多く、表面の剝離や脱落はみられる。

同定された点数は、ヒトの2点を除いて1,188点である。いくつかの歯が連なって出土しているものは1点と数えている。最も多いのがウマの621点(52.3%)、ついでウシが437点(36.8%)、さらにニホンジカ

が74点 (6.2%)、イノシシあるいはブタが31点 (2.6%)、イヌが23点 (1.9%)、トリの一種とサカナの一種が各1点 (0.2%) と続き、これらに混じってヒトが2点出土している。

出土した重量は、イヌが222 g (0.2%)、イノシシが656 g (0.6%)、ウシが44,335 g (40.6%)、ウマが62,014 g (57.1%)、ニホンジカが1,545 g (1.4%)、ヒト以外の脊椎動物 (サカナとトリ) が3 g (0.003%) で、ヒトの2点を除いた重量の合計が109,162 g (約109kg) であった。重量ではウマが最も多く、ついでウシとなり、この2種で全体の約98%を占めている。大型獣であるから重量が多いのは当然としても、出土点数でも圧倒的にウシとウマが多い。

3 種別の考察

(1) 出土したヒト

住居址 (SB5068) と土坑 (SK5023) から、それぞれ歯が1点ずつ出土している。SB5068から出土したものは下顎左の第2大臼歯と考えられるものである。頬側の一部が欠けている。頬側の咬頭がやや咬耗しており、少なくともこの歯が萌出する一般的な年齢である12歳よりは年齢は高いが詳細は不明である。遠心の隣接面に隣接面摩耗がみられる。性別も不明である。一方、SK5023から出土した歯は、咬耗のない上顎左の第1乳臼歯である。したがって、この歯の萌出する前あるいは萌出直後の個体であり、新生児程度の年齢と考えられる。性別は不明である。

これらの歯の形態からは時代を思わせる特徴はうかがえない。年齢の違いから少なくとも2個体の存在が知られる。

(2) 出土した脊椎動物骨

A. イヌ

イヌは23点が出土している。これが同定された点数の中で占める割合は1.9%である。

頭蓋骨は頭頂部の一部が出土している。

頭頂骨・後頭骨の間の縫合はまだ癒合しておらず、比較的若い個体と推測される。矢状稜はブレグマ付近で左右が合しており、頭蓋冠の全長にわたって稜を形成している。ただし、この稜は高くないが、年齢が比較的若いためである可能性がある。外後頭隆起はやや発達している。脳頭蓋長 (ナジオン-イニオン) は89.7mmである。この大きさは現生シバイヌの脳頭蓋長 (オス: 86.1mm、メス: 80.8mm) よりやや大きめであり、一般的な縄文時代犬よりは大きめである。あえていえば、弥生時代犬や中世犬のオスの大きさに最も近いと言える。

下顎骨は3点が出土している。これらも比較的大きく頑丈である。このうちSD7042から出土しているものは下顎骨の先端部は失われているものの比較的良く保存されている。この歯の摩耗は顕著で年齢は高い。咬筋窩は非常に深い。

下顎体厚は厚く13.2mmで、縄文時代犬のオスの11.0mmを大幅に上回る。この値は江戸時代の洋犬と考えられる仙台坂のイヌ (13.9mm) よりやや薄いものかなり厚い下顎骨である。下顎体高は29.2mmで仙台坂犬を上回っている。他の項目 (下顎枝高52.3mm、下顎第1大臼歯遠心径20.3mm) もかなり大きい。この下顎骨は最大長を現生のイヌと比較して推定すると最大でも140mm程度であるからさほど大きなものではない。したがってこの下顎体の厚さは並外れていると言える。

SD8028、SD8049から出土している下顎骨は、下顎の先端部と下顎枝が失われている。これらも頑丈で下顎体は厚く、SD8049の下顎骨の下顎体厚は外側の表面がやや脱落しているにもかかわらず第1大臼歯部での下顎体厚は15.0mmあり、上記のイヌよりさらに頑丈で仙台坂犬を大きく上回る厚さである。今まで

報告されている日本在来犬のうちでは最も厚い下顎体を持つイヌである。

長谷部の型区分では中小級犬に属すが、そのうちでも大きい部類に属するものである。

第1頸椎は最大幅が推定で72.6mmあり、この大きさは縄文時代犬の田柄貝塚犬のオスの平均値(68.1mm)よりも大きく、江戸時代の西新橋遺跡から出土したイヌとほぼ同大である。現生犬の秋田犬(87.6mm)よりはるかに小さい。

このような特徴を考えあわせると、この遺跡のイヌは大きさはさほどではないが非常に頑丈な咀嚼器官を持っていたということになる。

寛骨以外の下肢骨は出土していない。出土した骨には完形のものではなく、環椎一例をのぞいてすべて破損して出土している。寛骨には解体痕が観察される。解体痕は縄文時代のイヌではほとんど観察されなかったもので、この時代のイヌの利用の一端をうかがわせるものとして興味深い。

B. ニホンジカ

ニホンジカはほぼ全身にわたって出土しているが、四肢長骨の出土が少なく、足根骨などの単骨や指骨の出土量が多い。踵骨や距骨は小さくて頑丈なので残りやすいことが理由であろう。また、一般の古代遺跡で多く出土する角も出土しているがその量は少ない。ニホンジカでは焼骨が何点かみられる。解体痕は上腕骨や足根骨などに多くみられる。

出土部位の重量で見た比率(表65)を、現生ニホンジカの骨格における比率と比較すると椎骨の出土が非常に少ない。下肢骨の比率がかなり高いことがうかがえる。椎骨が少ないのは保存されにくいためだけではなく解体された場所が異なるなどの理由が考えられる。

C. イノシシあるいはブタ

イノシシとブタとを形態的に区別するのは、全身がそろっていても難しい。したがって、古代遺跡から出土した骨片化したものでは区別ができないのが普通である。したがって、イノシシとしたものはブタの可能性もある。時代が新しくなるにつれてその可能性が高まることになるので、今回のように古代の遺物を扱う場合はイノシシとしているが、ブタの可能性もあることをお断りしておく。

イノシシの出土は同定されたものの中で点数では2.6%にすぎない。縄文時代はイノシシとシカで90%を超える比率であったことに比べるとその低い利用率は特筆に値する。下顎骨以外の頭蓋骨片は全く出土していない。骨格全体にまんべんなく出土しているといえるがそもそも出土数が少ないので偏りがみられるのはやむを得ない。出土の点数では上腕骨の比率が比較的高い。椎骨が1点しか出土していないのは、残りにくいことを割り引いても人為が加わっている可能性が示唆される。これは先のニホンジカの場合と全く同様の傾向である。

手根骨や膝蓋骨などのような単骨以外に完形のものも出土していない。また、上腕骨・脛骨に解体痕が観察される。また、一部に焼かれた骨(手根骨、大腿骨、指骨)がみられる。さらに、食肉類によると思わ

表65 屋代遺跡群出土のニホンジカとイノシシ(あるいはブタ)の出土重量の概略と比較資料

(単位はグラム。比較資料は茂原・本郷・網谷;1992による)

	椎骨	頭蓋骨	下顎骨	肩甲骨	上腕骨	挽骨・尺骨	中手骨	手根骨	寛骨	大腿骨	脛骨	足根骨	中足骨	指骨	膝蓋骨	胸骨	合計重量
現生ニホンジカ	735	425	140	128	190	156	86	22	134	228	240	76	116	95	12	35	2818
(%)	26.1	15.1	5.0	4.5	6.7	5.5	3.1	0.8	4.8	8.1	8.5	2.7	4.1	3.4	0.4	1.2	
屋代遺跡出土シカ	6	420	130	15	95	41	49	0	0	16	221	185	276	26	0	0	1480
(%)	0.4	28.4	8.8	1.0	6.4	2.8	3.3	0.0	0.0	1.1	14.9	12.5	18.6	1.8	0.0	0.0	

	椎骨	頭蓋骨	下顎骨	肩甲骨	上腕骨	挽骨・尺骨	中手骨	手根骨	寛骨	大腿骨	脛骨	足根骨	中足骨	指骨	膝蓋骨	胸骨	腓骨	合計重量
現生イノシシ	407	382	244	114	180	134	40	22	122	176	130	54	42	58	12	14	12	2143
(%)	19.0	17.8	11.4	5.3	8.4	6.3	1.9	1.0	5.7	8.2	6.1	3.7	2.0	2.7	0.6	0.7	0.6	
屋代遺跡出土イノシシ	11	0	241	20	194	0	3	0	16	80	56	21	0	0	7	0	0	649
(%)	1.7	0.0	37.1	3.1	29.9	0.0	0.5	0.0	2.5	12.3	8.6	3.2	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	

表66 屋代遺跡群出土のウシおよびウマの骨重量と比較資料

(単位はグラム。比較資料は獨協医科大学標本)

	椎骨	頭蓋骨	下顎骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨・尺骨	中手骨	寛骨	大腿骨	脛骨	距骨+踵骨	中足骨	指骨	合計重量
現生ウシの骨重量	3235	1898	1234	944	1500	1236	528	1450	2060	1350	314	640	170	16559
(%)	19.5	11.5	7.5	5.7	9.1	7.5	3.2	8.8	12.4	8.2	1.9	3.9	1.0	
屋代遺跡出土のウシの重量	598	2488	5080	3868	6984	5381	2766	2090	4600	6028	880	1767	282	42812
(%)	1.4	5.8	11.9	9.0	16.3	12.6	6.5	4.9	10.7	14.1	2.1	4.1	0.7	

	椎骨	頭蓋骨	下顎骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨・尺骨	中手骨	寛骨	大腿骨	脛骨	距骨+踵骨	中足骨	指骨	合計重量
現生ウマの骨重量	1388	1532	1219	320	472	532	198	504	668	552	156	320	124	7985
(%)	17.4	19.2	15.3	4.0	5.9	6.7	2.5	6.3	8.4	6.9	2.0	4.0	1.6	
屋代遺跡出土のウマの重量	607	8553	12595	1732	4187	5237	2285	2035	7311	8421	1687	4884	1445	60979
(%)	1.0	14.0	20.7	2.8	6.9	8.6	3.7	3.3	12.0	13.8	2.8	8.0	2.4	

れる咬痕が肩甲骨と上腕骨にみられる。

出土した重量比率で各部位の偏りを調べると(表65)、椎骨がイノシシの全体量の0.7%とすくない。現生のイノシシの骨格では椎骨の重量は全体の19%にも達している。また、先にも述べたが頭蓋骨が出土していないのは顕著な特徴である。頭蓋骨の重量は現生のものでは全体の17.8%を占めるからである。やはり、上腕骨や大腿骨など残りやすい部分が多い。

D. ウシ

ウシの出土量はウマに次いでいる。頭蓋骨は完形のものはない。下顎骨は比較的良く残っている。遊離歯が151本出土している。

ウシの出土重量を部位別に見ると(表66)、やはり椎骨の出土の少なさが目に付く。現生のウシでは全量の約20%を占める椎骨が、屋代遺跡から出土した場合ではわずか1.4%にすぎない。頭蓋骨も同様に現生のものの半分に低下している。逆に四肢の長骨の割合が高くなるが、上肢と下肢で比較すると上肢の方の比率が高い。これは先のニホンジカの場合と逆の現象である。

四肢骨の大きさは、西中川(1991)の報告している口之島ウシや見島ウシとほぼ同大である(表70)。

E. ウマ

点数では最も多く出土している。遊離歯が227本出土している。長骨は破損してはいるものの、原型に近いものが多く、骨髓食をうかがわせるような細片化したものは少ない。足根骨に解体痕が多く見られる。

ウマの出土部位別重量の比率を見ると(表66)、ウシや他の哺乳類と同様に椎骨の比率が現生のものに比べて非常に低い。頭蓋骨ではウシで見られたほどの低下は見られない。やはり四肢の長骨の比率が高くなる。全体には壊れやすい部分の比率は下がっているが、その中でも極端に低下する部位があるのは興味深い。

林田ら(1957)が報告している体高の推定式を用いて屋代遺跡から出土しているウマの

表67 屋代遺跡群から出土したウシの主な四肢骨の計測値

単位はmm、略号はDriesch(1976)にしたがっている。()内は推定値。

標本番号	左右	骨名	最大長				箱番号
			GL	GLC	Bp	Bd	
18350	右	上腕骨				90	214
26517	左	上腕骨		289		96	222
10193	右	橈骨	278				100
13249	右	橈骨			86		140
22431	右	橈骨	222		79	73	
23450	左	橈骨	280		79	72	
26514	左	橈骨	302		97	85	222
08149	右	橈骨			85		121
04078	右	中手骨	202		64	63	105
08148	右	中手骨	198		60	62	128
11219-32632	右	中手骨	207		62	64	131
18359	左	中手骨			56		143
20399	左	中手骨	205		68	68	
26512	右	中手骨	208		67	68	221
32626	左	中手骨			54		155
32627	右	中手骨	207		61	63	162
27531	右	大腿骨		350			207
23457	右	脛骨	344		98	64	207
15293	左	脛骨	323		85	60	154
20383	右	脛骨	325			62	221
26509	右	脛骨	370			70	223
05084	左	中足骨	218		48		114
09174	右	中足骨	222		55	60	131
19365	右	中足骨			54		106
23459	左	中足骨	239		58	61	218

表68 屋代遺跡群から出土したウマの主な四肢骨の計測値

単位はmm、略号はDriesch(1976)にしたがっている。()内は推定値。

標本番号	左右	骨名	林田の方法				推定体高(cm)	
			最大長 GL	近位端幅 GLC	遠位端幅 Bp	Bd箱番号		
18349	右	橈骨			64	61	214	
15292	右	橈骨	324		74	68	0	132.1
17332	左	橈骨	305			65	140	122.8
18349	右	橈骨	311		65	61	214	125.9
11213	右	中手骨	208		46	45	0	127.0
16317	左	中手骨	226		48	50	0	138.0
17340	左	中手骨	221		46	44	158	135.1
32636	右	中手骨	209			40	206	127.6
16313	左	大腿骨				91	154	
24477	左	大腿骨				90	223	
26515	右	大腿骨		321			223	
05081	右	脛骨	331		86	65	105	129.8
12237	右	脛骨				68	135	
15295	左	脛骨	341		93	72	154	134.7
16303	左	脛骨	327		74	64	140	127.8
16314	右	脛骨				71	153	
20389	右	脛骨	330		70	62	232	129.3
21410	右	脛骨			90		233	
22426	右	脛骨				67	208	
25488	右	脛骨				67	206	
26516	右	脛骨	324		83	70	221	126.2
35686	左	脛骨				64	221	
36713	右	脛骨				68	160	
06113	左	中足骨	271		48	48	1	134.4
07135	左	中足骨	245		45	43	188	121.8
09173	右	中足骨				43	130	
13250	左	中足骨	253			41	140	125.7
16313	右	中足骨	267		51	45	153	132.5
16315	左	中足骨	264		48	45	153	131.0
18343	左	中足骨	228		49	49	142	113.6
19376	左	中足骨	274		49	52	160	135.8
22421	左	中足骨	257		50	43	206	127.6
25485	右	中足骨	266		50		206	132.0
30593	左	中足骨	259		47		232	128.6

体高を計算すると、ほとんどが体高120cmから135cmの範囲にあり、トカラウマ、済州島ウマなどの小型馬ではなく中型馬に属している(表68)。木曾ウマや御崎ウマと同等の大きさである。

4 動物遺存体の時代別

出土状況

すべての出土遺物の時代がわかっているわけではないので、多少不正確ではあるが、時代の判明している1,080点ほどの遺物について各時代別の出土点数の比率を検討してみる(表69)。

A. 7世紀初頭から後半

総点数は140点である。この時代はウマの出土点数が圧倒的に多く、約72%を占めている。

B. 7世紀後半～末

319点が出土している。イヌが他の時代に比べて11点と多く出土している。イノシシが15点、ウシが83点、ウマが189点、ニホンジカが21点出土している。やはりウマの出土点数

が圧倒的に多く、ウシの約2倍の点数が出土している。

C. 7世紀末～8世紀初頭

この時代は総点数が115点である。イヌ、イノシシは出土していない。ウシが55点、ウマが48点でほぼ同数の出土数になっている。ニホンジカが12点出土している。

D. 8世紀前半

他の種類に比べてウシとウマが圧倒的に多く出土しており、ウシが65点、ウマが59点で、先の時代とほぼ同じ傾向を示している。

E. 8世紀～9世紀

この時代は総点数が24と少なく、偏りが強調されるが、ウマの比率が高くなっている。

F. 9世紀前半～中頃

ウシが197点、ウマが128点でウシの比率がウマの1.5倍を超えている。

以上のように、この遺跡から出土したものを時代別に観察すると、7世紀後半にはウマの出土量が圧倒的に多く、ウシや他の動物を圧倒している。この傾向が時代が新しくなるにつれて変化し、次第にウマの出土点数が減少してくる。9世紀中頃になるとウシの方が圧倒的に多い点数を出土している。この傾向が何を示しているのかが興味ある。単純に考えるとウマの利用からウシの利用へと変化してきた可能性を考

表69 屋代遺跡群から出土の哺乳動物骨の出土点数の時代的推移

(時代の区分は考古学の区分にしたがっている)

	イヌ	(%)	イノシシ	(%)	ウシ	(%)	ウマ	(%)	ニホンジカ	(%)	出土点数合計
7世紀初頭～後半	3	2.1	3	2.1	21	15.0	101	72.1	12	8.6	140
7世紀後半～末	11	3.4	15	4.7	83	26.0	189	59.2	21	6.6	319
7世紀末～8世紀初頭	0	0.0	0	0.0	55	47.8	48	41.7	12	10.4	115
8世紀前半	4	2.9	3	2.2	65	47.1	59	42.8	7	5.1	138
8世紀～9世紀	1	4.2	1	4.2	3	12.5	16	66.7	3	12.5	24
9世紀前半～中頃	3	0.9	4	1.2	197	57.3	128	37.2	12	3.5	344
	22	2.0	26	2.4	424	39.3	541	50.1	67	6.2	1080

えさせる。この問題については文献的な調査やさらに詳しい個体別の調査などが必要となろうが、歴史的な傾向を示すものとして注目される。

なお、点数だけの考察で危険性はあるが、保存の状態が比較的よくて小さな破片とはなっていないことなどを考えあわせるとさほど間違った結論にはならないと思う。

5 出土脊椎動物の全体的特徴

一般の縄文時代の遺跡からは出土していないウマとウシが圧倒的に多く出土しており、縄文遺跡では圧倒的であったシカとイノシシが点数で全体の8.8%にすぎない。これは、農耕の拡大による狩猟の役割の減少とともに、弥生時代あるいはそれより後に日本に導入されたウマとウシに頼る割合が格段と伸展したことを示している。

6 まとめ

屋代遺跡群から出土した脊椎動物は完全にウシとウマを主体とする出土の様相を示している。このような様相は、弥生時代から平安時代の遺跡である長野県の篠ノ井遺跡（櫻井・茂原 1996）でも見られている。縄文時代のシカとイノシシを中心とした北村遺跡などの動物層（櫻井・茂原 1997）とは全く異なっている。今後の調査を待つ必要はあるが、弥生時代以降の長野県の遺跡での一般的な傾向であろうと推測される。また、両者の比率が時代を追うにしたがってウマからウシへとかわっていく様相がうかがえる。農耕の初期から家畜がどのように変遷していったかという事実を示唆するものとして興味深い。

イヌは大きくても中級程度であるが、下顎骨の頑丈さは顕著で、報告されているどのイヌよりも下顎骨が頑丈である。

貴重な資料を観察する機会を与えて下さった長野県埋蔵文化財センターの方々には厚く感謝いたします。とくに、広瀬昭弘氏、この遺跡の報告を担当された寺内隆夫氏、宮島義和氏には資料の整理や出土状況などの多くの情報を与えていただいた。心から感謝いたします。

表70 ウシ在来種の四肢骨計測値（西中川1991）単位cm

		口ノ島牛		見島牛		黒毛和牛	
		♂	♀	♂	♀	♂	♀
上腕骨	最大長	30.65	28.02	32.78	27.49	35.32	30.99
	近位端幅	10.43	8.60	11.80	8.84	13.18	10.67
	遠位端幅	8.76	7.72	9.57	7.33	11.01	9.04
橈骨	最大長	28.38	26.73	29.60	25.77	32.04	29.12
	近位端幅	8.42	7.51	9.27	7.29	10.51	8.79
	遠位端幅	7.52	6.68	8.74	6.50	9.55	7.81
中手骨	最大長	18.95	19.05	19.91	19.22	21.68	21.28
	近位端幅	6.18	5.45	6.95	5.45	7.68	6.44
	遠位端幅	6.07	5.35	6.94	5.65	7.15	6.16
大腿骨	最大長	37.48	34.72	39.34	34.09	44.11	38.97
	近位端幅	13.07	31.97	13.84	10.89	15.83	13.39
	遠位端幅	9.68	8.69	10.87	8.93	12.16	10.46
脛骨	最大長	33.68	31.85	35.56	32.04	39.38	35.78
	近位端幅	9.99	9.08	11.43	9.07	12.44	10.90
	遠位端幅	6.36	5.83	6.95	5.69	7.91	7.30
中足骨	最大長	21.38	21.20	22.39	22.39	24.21	23.97
	近位端幅	5.01	4.57	5.74	4.51	6.43	5.55
	遠位端幅	5.71	5.12	6.31	5.17	6.53	5.82

註 表74 屋代遺跡群出土脊椎動物骨種別一

表71 ウマ在来種の四肢骨計測値 (西中川1991) 単位cm

		トカラウマ		御崎馬		木曾馬	
		♂	♀	♂	♀	♀	♀
橈骨	最大長	29.86	29.65	32.59	33.29	0	33.60
	近位端幅	7.11	6.92	7.98	7.89	8.58	8.08
	遠位端幅	6.34	6.34	7.29	7.24	8.02	7.77
中手骨	最大長	19.94	19.90	21.51	22.13	0	22.46
	近位端幅	4.36	4.22	5.03	4.94	5.22	5.08
	遠位端幅	4.26	4.11	4.66	4.60	5.17	4.93
大腿骨	最大長	34.73	34.89	38.18	38.35	38.20	40.15
	近位端幅	9.52	9.69	10.99	10.84	0.00	11.56
	遠位端幅	7.85	7.76	8.86	8.85	9.60	9.35
脛骨	最大長	31.10	31.52	34.02	34.25	0	35.83
	近位端幅	7.98	7.99	9.32	9.07	10.20	9.69
	遠位端幅	6.04	6.05	7.26	7.23	7.86	7.58
中足骨	最大長	23.80	23.87	25.46	26.45	0	29.96
	近位端幅	4.18	4.12	4.87	4.91	5.28	5.13
	遠位端幅	4.30	4.13	4.74	4.76	5.10	5.01

表72 他の遺跡から出土したウシとウマの計測値 (西中川1991) 単位cm

種	骨	遺跡	時代	最大長	近位端幅	遠位端幅
ウシ	上腕骨	土井ヶ浜遺跡	弥生または江戸	27.82	8.85	7.74
ウシ	橈骨	土井ヶ浜遺跡	弥生または江戸	25.70	7.48	6.79
ウシ	橈骨	須和田遺跡	奈良	27.00	8.62	7.70
ウシ	橈骨	千葉地東遺跡	中世	26.12	7.64	6.78
ウシ	中手骨	原ノ辻遺跡	弥生	18.06	5.07	5.26
ウシ	中手骨	藤原京跡	奈良	19.15	6.06	6.00
ウシ	中手骨	平安京跡	平安	19.37	6.37	6.58
ウシ	大腿骨	土井ヶ浜遺跡	弥生または江戸	30.81	10.54	8.47
ウシ	脛骨	土井ヶ浜遺跡	弥生または江戸	31.17	8.81	5.94
ウシ	中足骨	大谷川遺跡	古墳~平安	21.41	4.37	6.00
ウシ	中足骨	池畑遺跡	奈良~平安	22.30	4.27	5.12
ウマ	上腕骨	余山貝塚	弥生	25.00	7.75	6.60
ウマ	上腕骨	千葉地東遺跡	中世	25.70	8.02	7.02
ウマ	橈骨	広田遺跡	弥生	30.10	7.45	6.50
ウマ	橈骨	須和田遺跡	奈良	30.20	7.06	6.74
ウマ	橈骨	鎌倉材木座	鎌倉末	31.94	7.76	7.00
ウマ	中手骨	須和田遺跡	奈良	21.20	4.66	4.70
ウマ	中手骨	鬼虎川遺跡	中世	21.93	4.70	4.75

版(東京60) p.1-138

櫻井秀雄・茂原信生 1993 「北村遺跡出土の哺乳動物遺存体」『北村遺跡』 p.403-443

櫻井秀雄・茂原信生 1997 「篠ノ井遺跡群出土の動物遺存体」『篠ノ井遺跡群 成果と課題編』 p.246-274

茂原信生・本郷一美・綱谷克彦 1992 「鳥浜貝塚出土(1985年調査)の哺乳類遺存体」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集 p.329

-358-

写真の説明

図87~98中の写真に添付されている図のシャドー部は写真のおおよその部位を示しています。左右を特定できない骨の参照図は、左右と関係ありません。写真番号に★印のあるもの、また参照図の縮尺は図版の縮尺と一致しません。

覧は膨大な量にのぼるため掲載していない。

これらのデータについては長野県埋蔵文化財センターと茂原信生の所で、ウィンドウズ用ファイルとして保管しています。必要な方には実費でさしあげますので、御連絡下さい。

参考文献

Driesch, A. von den 1976 「A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites」『Peabody Mus. Bull』1 p.1-137

林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』No.6 p.146-156

西中川駿 1991 『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究。平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書一』 p.197

斎藤弘吉 1963 『犬科動物骨格計測法』私家

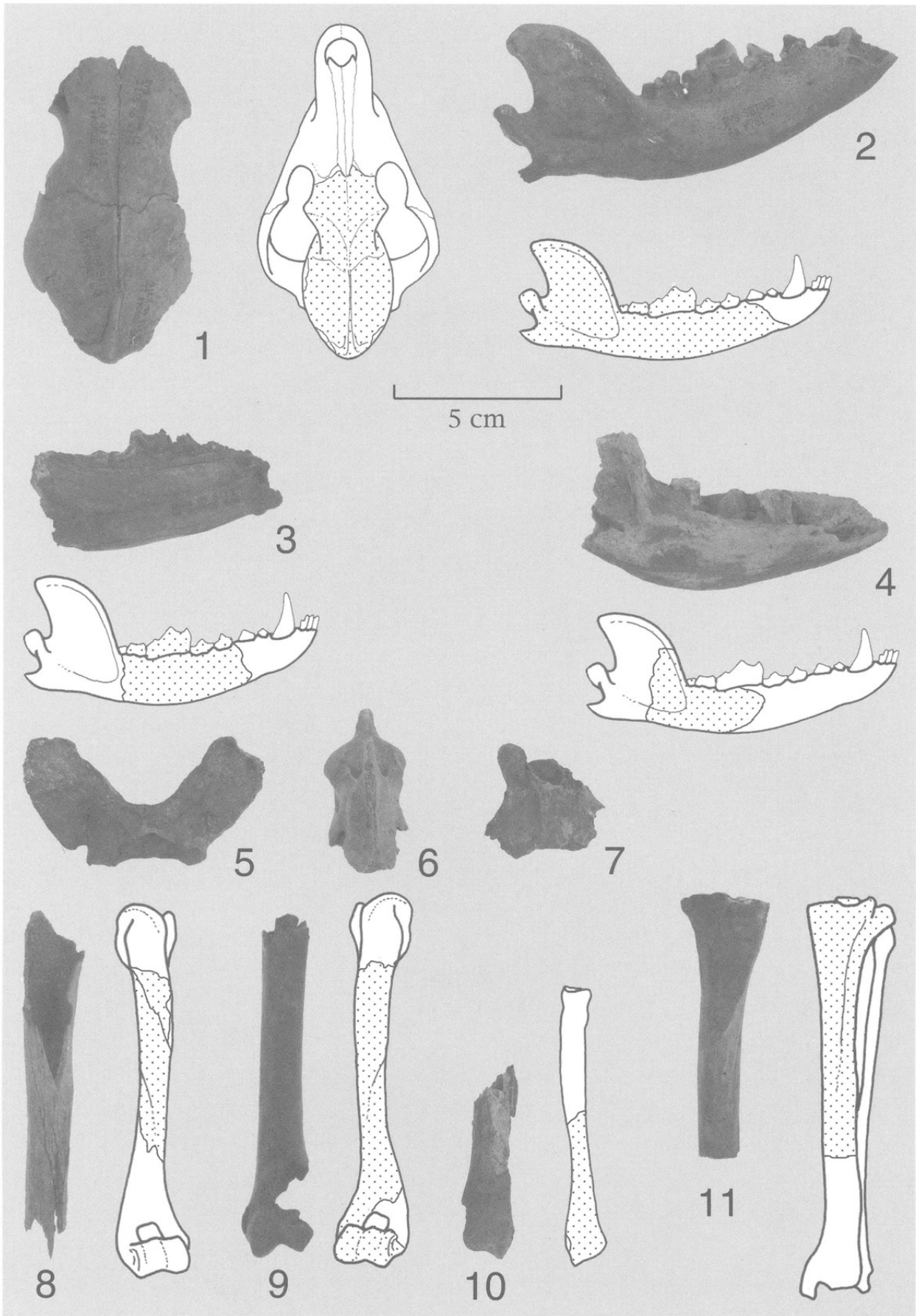


図87 屋代遺跡群出土のイヌ

1：頭蓋骨 2・3・4：右下顎骨 5：環椎 6：軸椎 7：頸椎 8：右上腕骨 9：左上腕骨 10：右橈骨 11：左頸骨

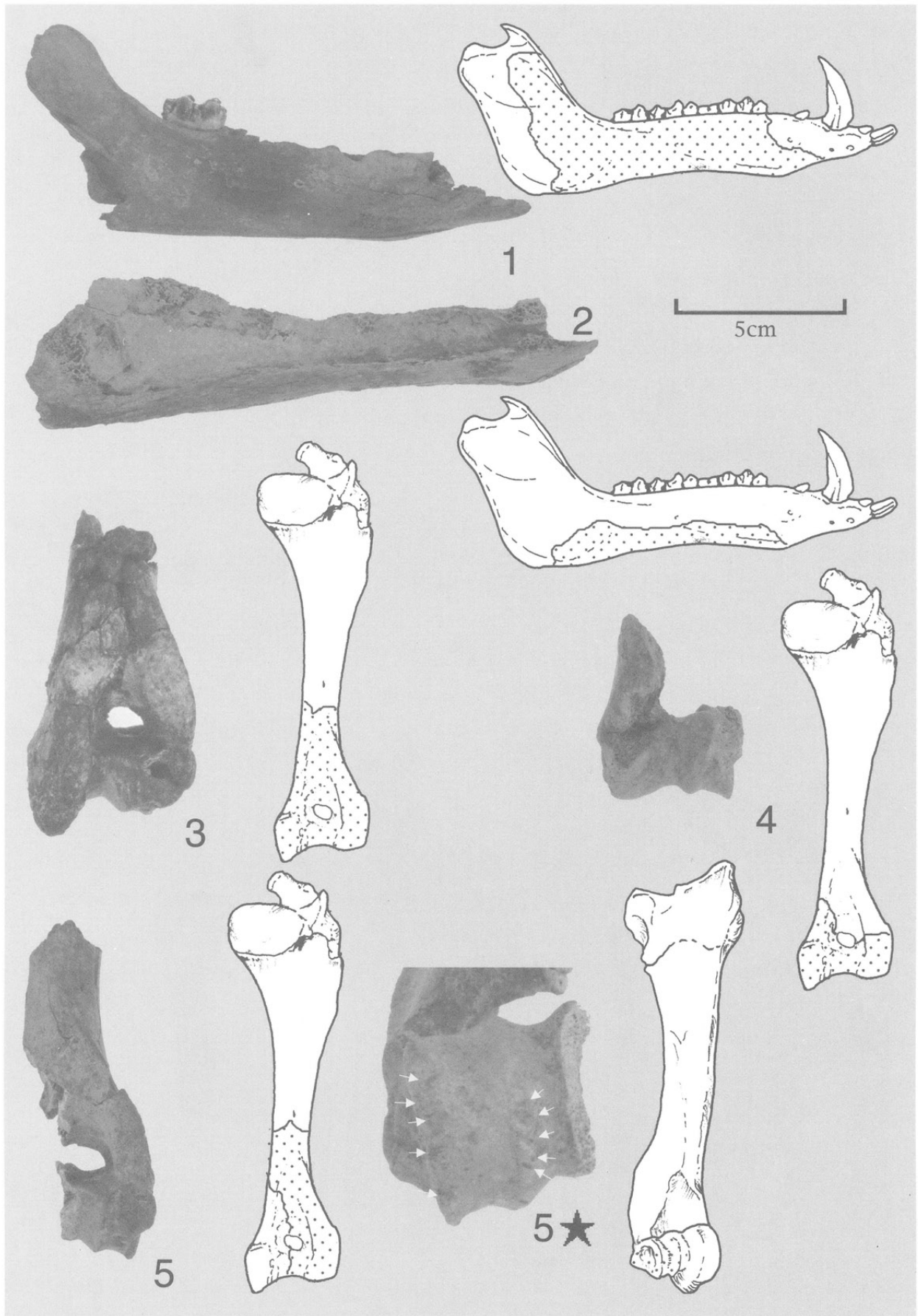


図88 屋代遺跡群出土のイノシシ 1

1・2：右下顎骨 3～5：右上腕骨 5★：右上腕骨の咬痕

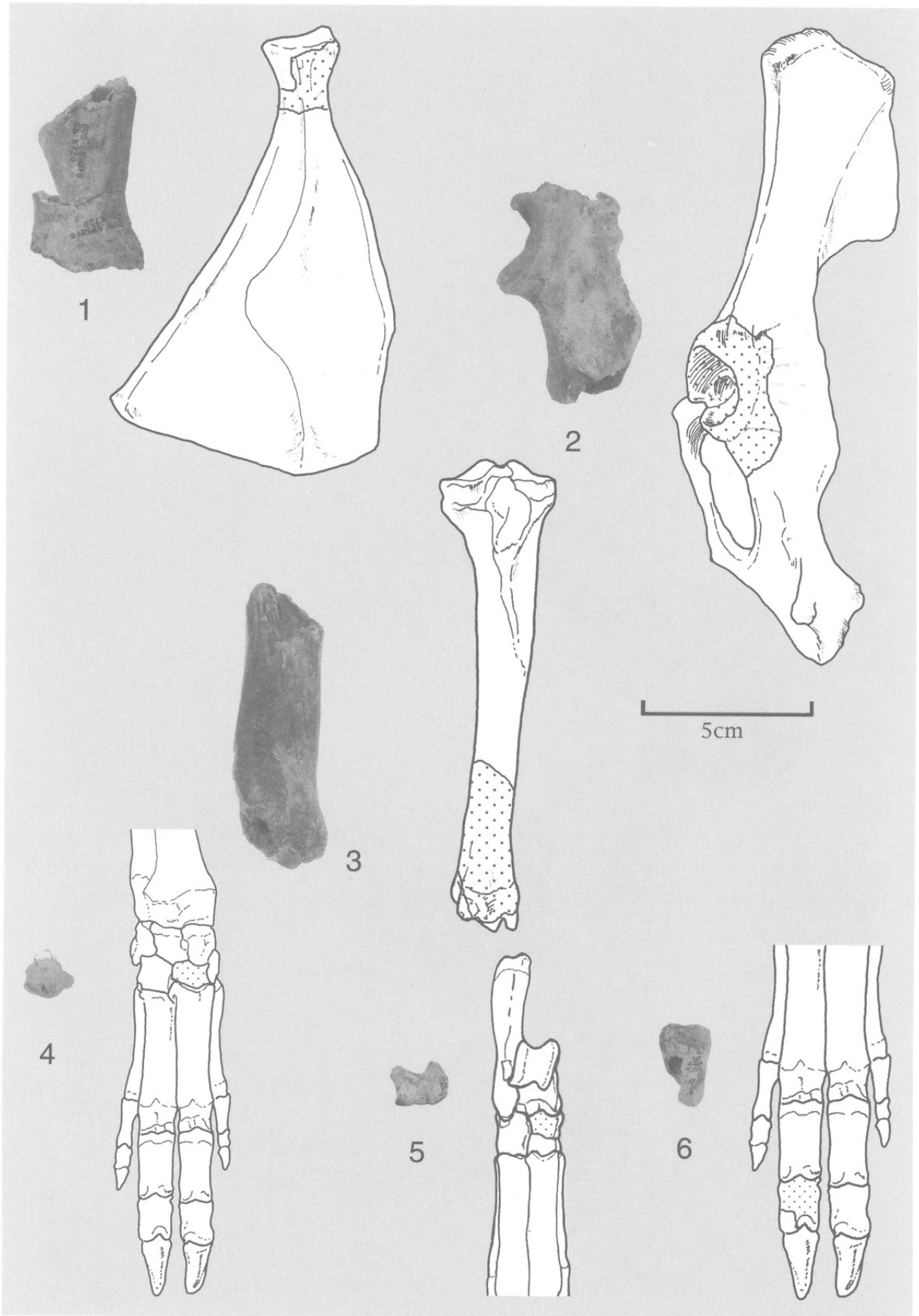


図89 屋代遺跡群出土のイノシシ 2

1：左骨甲骨 2：右寛骨 3：右頸骨 4：右第3手根骨 5：右中心足根骨 6：中節骨

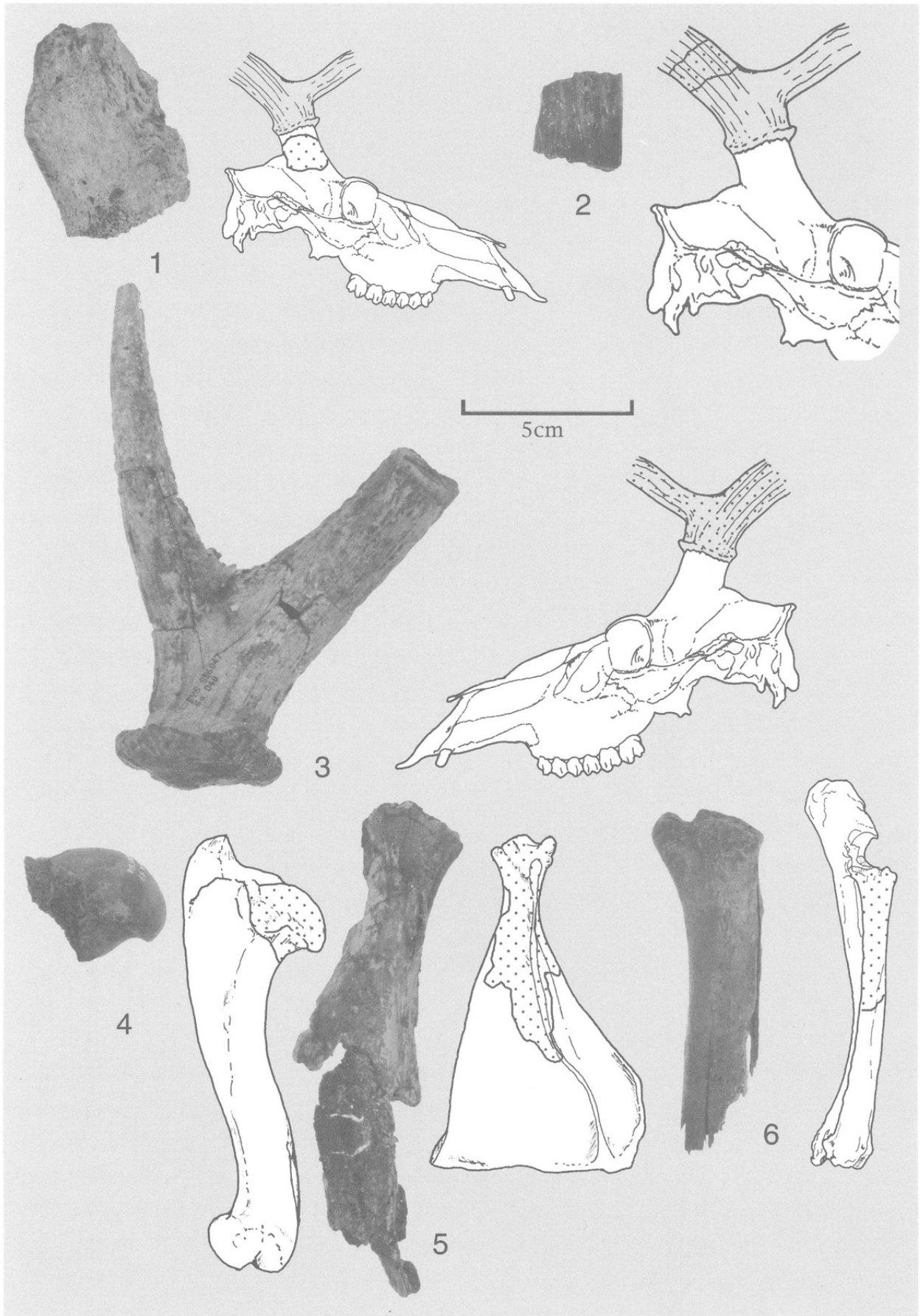


図90 屋代遺跡群出土のニホンジカ 1

1: 右角 2: 角片 3: 左角 4: 右上腕骨 5: 左肩甲骨 6: 右橈骨

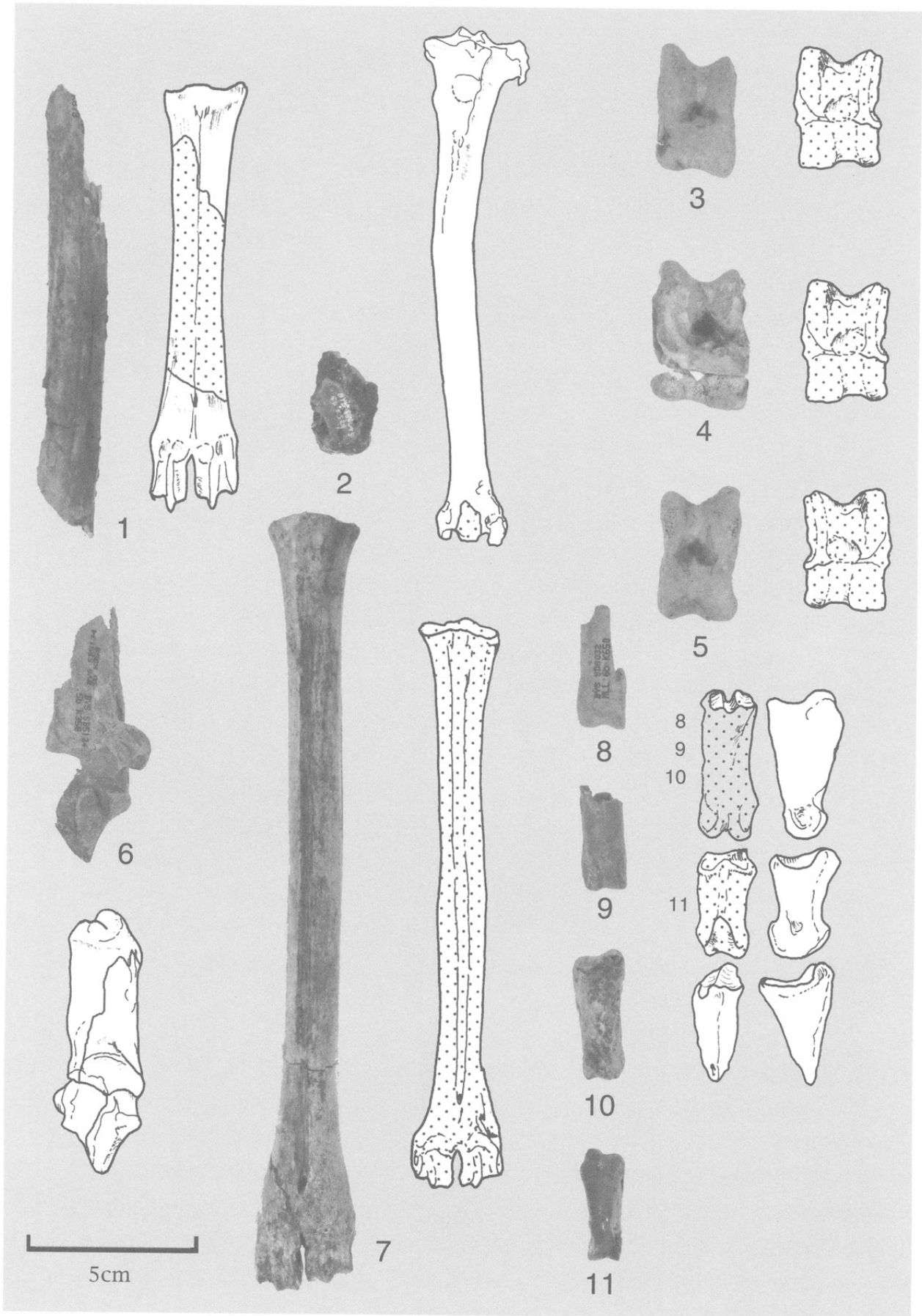


図91 屋代遺跡群出土のニホンジカ 2

1：左中手骨 2：左頸骨 3・4：右距骨 6：右踵骨 7：右中足骨 8～10：基節骨 11：中節骨

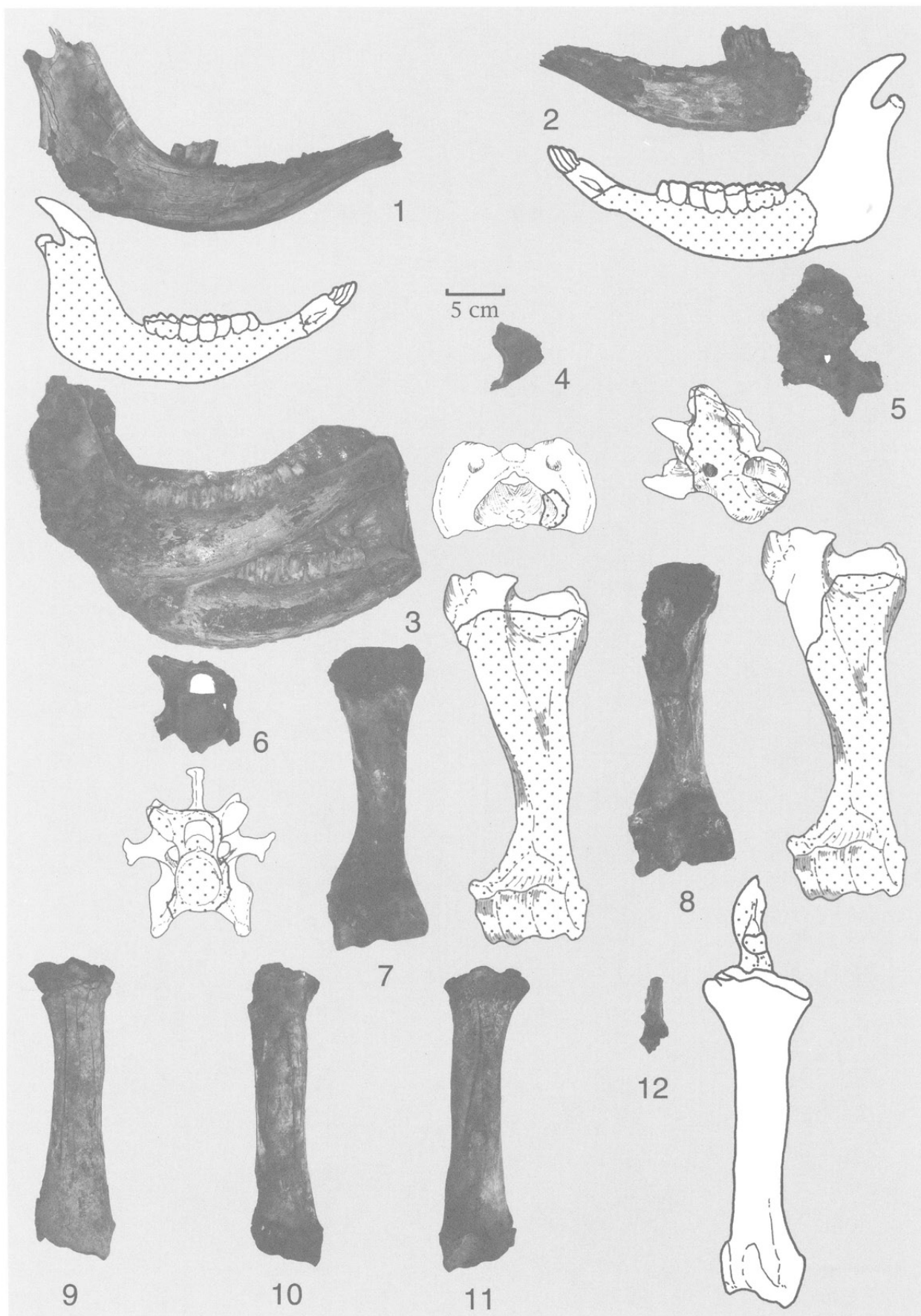


図92 屋代遺跡群出土のウシ 1

1：右下顎骨 2：左下顎骨 3：左右下顎骨 4：環椎 5：軸椎 6：頸椎 7・8：右上腕骨
9・10：右橈骨 11：左橈骨 12：右尺骨

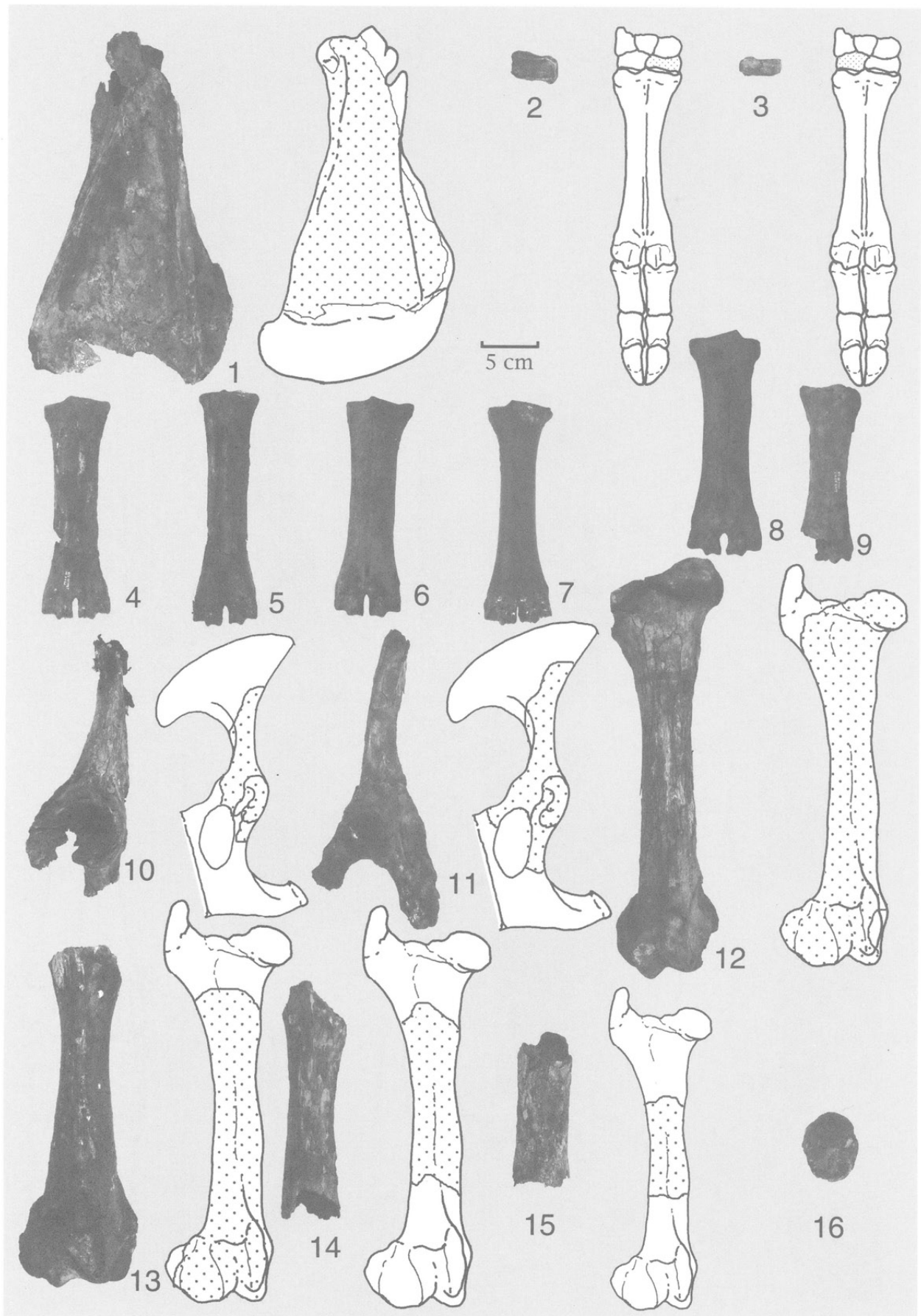


図93 屋代遺跡群出土のウシ 2

1 : 左肩甲骨 2 : 右第IV手根骨 3 : 右II+III手根骨 4~7 : 右中手骨
8・9 : 左中手骨 10・11 : 左寛骨 12~15 : 右大腿骨 16 : 膝蓋骨

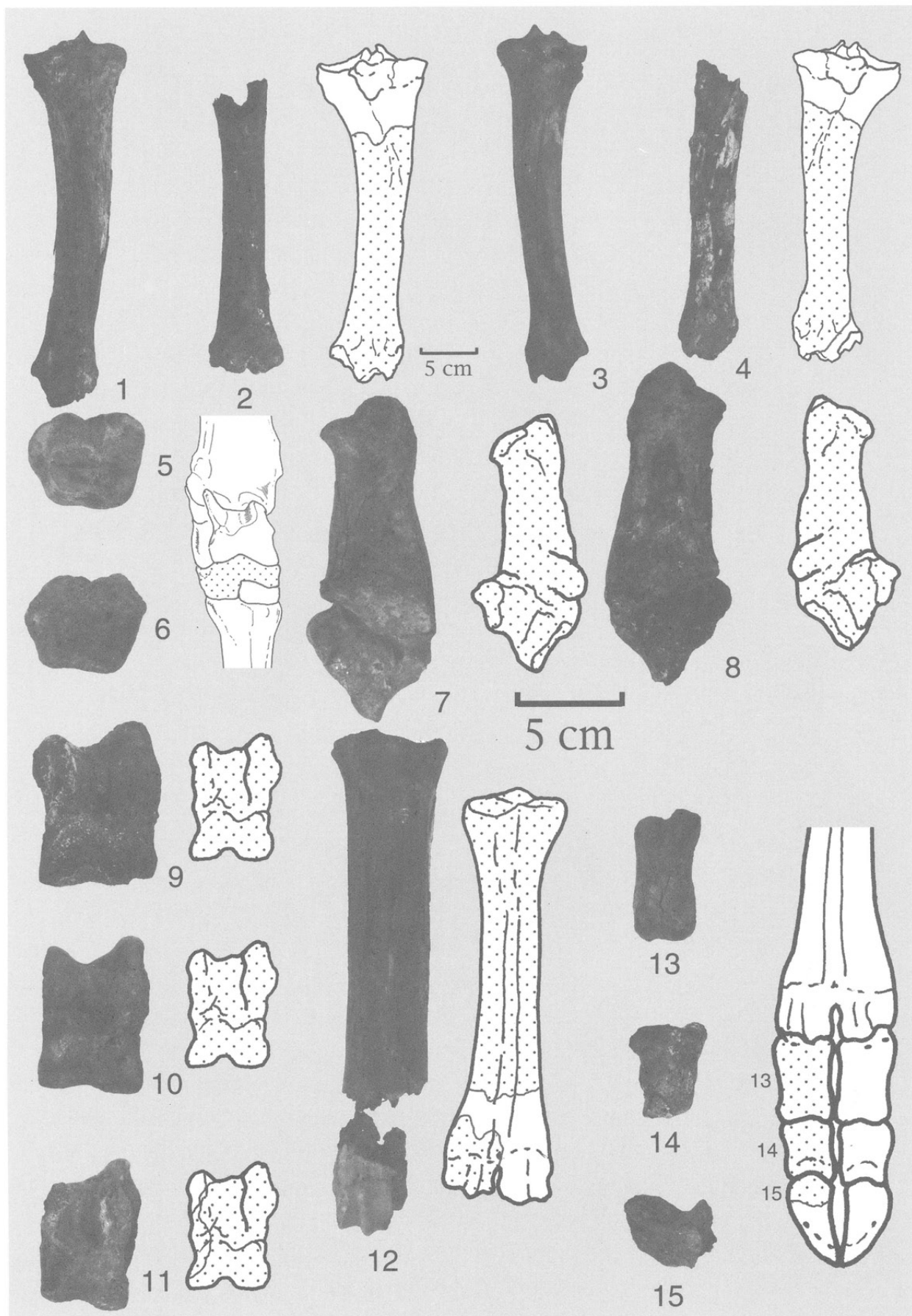


図94 屋代遺跡群出土のウシ 3

1・2：右頸骨 3・4：左頸骨 5・6：右C+IV足根骨 7：右踵骨 8：左踵骨
9～11：左距骨 12：右中足骨 13：基節骨 14：中節骨 15：末節骨

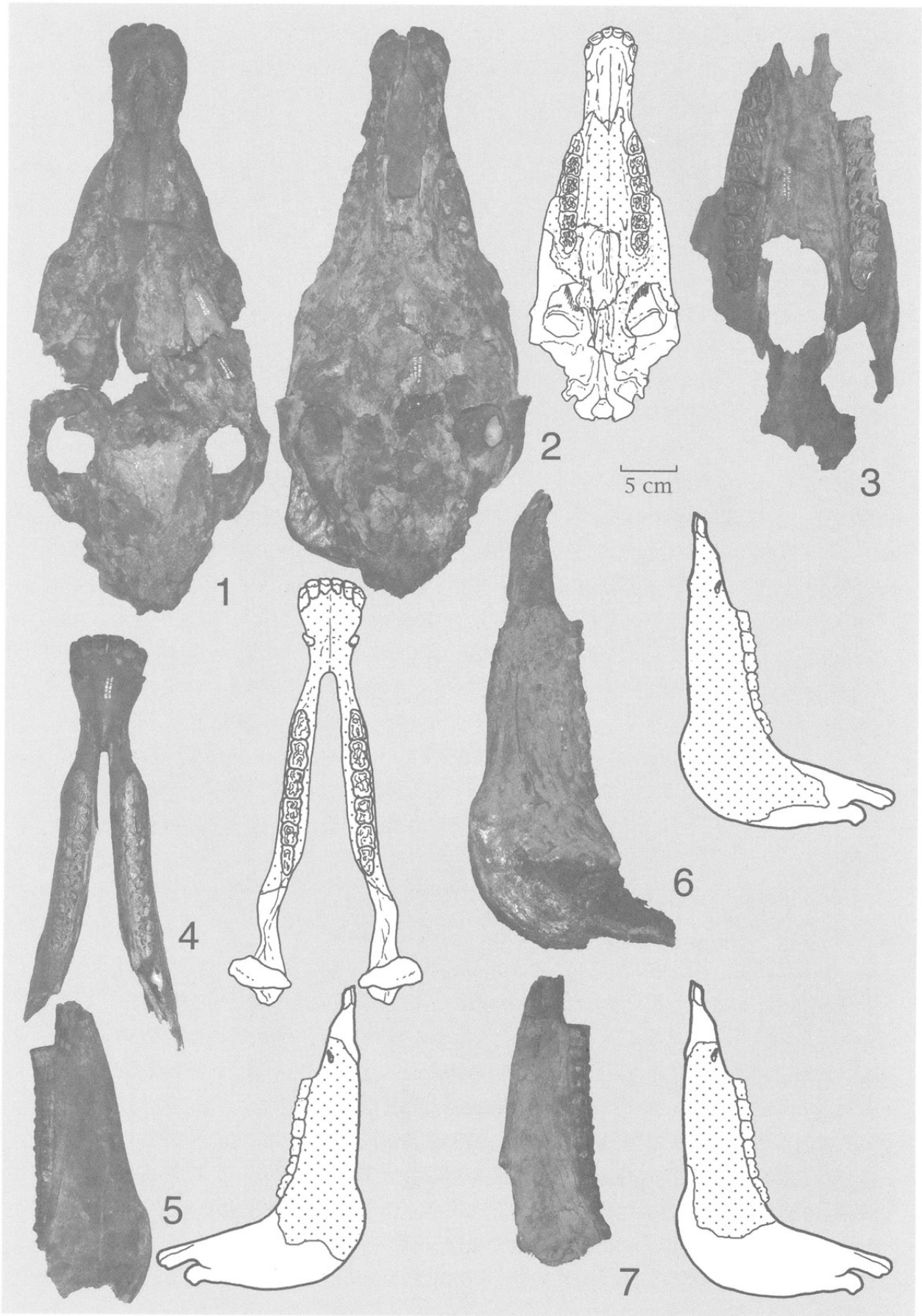


図95 屋代遺跡群出土のウマ 1

1・2：頭蓋骨 3：上顎骨 4：左右下顎骨 5：右下顎骨 6・7：左下顎骨